

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

—長野市内 その7—

こたき
小滝遺跡

きたのわき
北之脇遺跡

まえやまだ
前山田遺跡

1999

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書 9

—長野市内 その7—

こ たき
小滝遺跡

きたの わき
北之脇遺跡

まえやま だ
前山田遺跡

1999

日本道路公団
長野県教育委員会
長野県埋蔵文化財センター

序

長野県は本州の中央に位置し、古来より日本海側と太平洋側を結ぶ、あるいは本州の東西をむすぶ陸路が交差する十字路でありました。こうした歴史的な立地環境のなかで新たな高速交通網として上信越自動車道、中央自動車道長野線の建設計画が策定され、昭和62年には善光寺平においても工事が着手され、既に供用されております。長野県埋蔵文化財センターではこれらの高速道路建設にかかわる遺跡の発掘調査を実施し、その整理作業を継続してまいりましたが、この度、長野市内の小滝・北之脇・前山田遺跡の調査成果を報告書として刊行する運びとなりました。

長野市松代町大室の小滝遺跡は著名な大室古墳群にほど近い霞城の麓にあり、長野市若穂の北之脇遺跡・前山田遺跡は南北朝や戦国時代の古文書にでてくる春山城の麓にあります。これら3遺跡はいずれも山際の緩斜面に立地し、背後の山には山城を控えた類似した環境にあります。しかも調査でみつかった遺構も戦国時代前後のものが多く共通点もあり、こうした立地環境や遺跡内容の類似からまとめて今回の報告書で報告することとしたものです。戦国時代ころには戦争に備えて山城の麓に根小屋という形態の屋敷地が出現するとされていますが、こうした様相を考えるうえで、あるいは当地域ではあまり詳しく知られていなかった中世のようすを知るうえでさまざまな資料を提供できたものと思われまふ。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、本報告書の刊行に至るまでに深いご理解とご協力をいただいた日本道路公団、担当の各建設局および各工事事務所、長野市、長野市教育委員会の方々、発掘・整理作業に従事協力された多くの方々、長野県教育委員会文化財保護課の皆様に対し心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成11年3月31日

長野県埋蔵文化財センター

所長 佐久間 鉄四郎

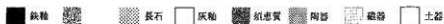
例言・凡例

1. 本書は上信越自動車道に関わる、長野県長野市小滝・北之脇・前山田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査・整理概要は『助長野県埋蔵文化財センター年報』6 (1990)、7 (1991)、9 (1992)、14 (1998)、15 (1999)、現地説明会・速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
3. 本書に使用した地図は日本道路公団作成の上信越自動車道路線平面図(1:1000)、長野市基本図(1:2500、1:10000)を使用した。
4. 本報告書の執筆・編集は市川 隆之が行い、その他の作業分担は本文中に記してある。
5. 遺構番号は調査時のものを基本として整理時に修正を加えている。個々の遺構番号の変更については本書内の遺構の項でそれぞれ述べている。
6. 航空写真は例バスコに撮影委託したものを使用している。
7. 自然科学分析は駒古環境研究所・駒バリノ・サーヴェイ・駒川鉄テクノ・リサーチ・駒第四紀研究所に依頼し、それぞれ玉稿を賜った。また、骨の鑑定では京都大学豊長類研究所 茂原信生教授に御指導いただいた。
8. 発掘調査及び報告書の作成にあたり、次の諸氏に御指導いただいた。(敬称略、順不同)
笹本 正浩、坂井 秀弥、服部 敬史、小山 丈夫
9. 本書で報告した各遺跡の記録類・出土遺物は長野県立歴史館に保管する予定である。
10. 遺構・遺物の縮尺は各図に記したが、概略以下の通りである。
竪穴・掘立柱・礎石建物跡 1:80 石列・築石遺構 1:60 土坑 1:40
焼物 1:4 金属・小型石製品 1:2 大型石製品 1:6 木製品 1:4
大型木製品 1:8 - 1:16
11. 本書で用いたスクリーントーンは以下のように用いている。

遺構



焼物



本文目次

序

例言・凡例

目次

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過と調査・整理方法	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査体制	1
3. 調査方法	2
4. 整理方法	5
第2節 遺跡の位置	6

第2章 小滝遺跡

第1節 調査と遺跡の概要	9
1. 遺跡の概要	9
2. 調査と整理の概要	9
(1) 調査概要 (2) 整理作業 (3) 調査の方法	
3. 地形環境と基本土層	13
(1) 地形環境 (2) 各地区の基本土層 (3) 地形形成過程	
4. 歴史的環境	23
第2節 遺構	33
1. 縄文時代～古代以前の遺構	33
(1) 縄文面－A区Ⅳ面 (2) 時期不明－A区Ⅲ面 (3) 時期不明－A区Ⅱ面	
2. 古代の遺構	36
3. 中世以後の遺構	38
(1) A区の遺構 ア、礎石建物跡 イ、掘立柱建物跡 ウ、竪穴建物跡 エ、井戸跡 オ、石列・石垣・集石遺構 カ、土坑 キ、溝跡 ク、焼土跡 ケ、水田跡	
(2) B区の遺構 ア、集石遺構 イ、水田跡	
(3) C区の遺構 ア、掘立柱建物跡 イ、竪穴建物跡 ウ、柵列跡 エ、墓跡 オ、土坑 カ、溝跡 キ、性格不明遺構	
(4) D区の遺構 ア、土坑 イ、水田跡	
第3節 出土遺物	108
1. 縄文時代の遺物	108
2. 弥生時代の遺物	108
3. 古墳時代の遺物	108
4. 古代の遺物	108
(1) 焼物 ①出土焼物の概略 ②遺構・地点別出土焼物	
(2) 石製品	

5. 中世以後の遺物	109
(1) 焼物	①出土焼物種の概観
	ア、在地産土器 イ、輸入陶磁器 ウ、古瀬戸・大塚製品 エ、珠洲製品 オ、常滑 カ、唐津 キ、肥前産陶器 ク、伊万里 ク、瀬戸美濃本・新楽焼 ケ、近世以後の在地産土器・陶器、産地不明陶器
	②地点・遺構別出土焼物の概況
	ア、礎石・竪穴建物跡出土焼物 イ、土坑・柱穴跡出土焼物 ウ、集石・石列遺構出土焼物 エ、溝跡出土焼物 オ、焼土跡、性格不明遺構出土焼物 カ、検出面、出土地点不明焼物
	(2) 土製品
	ア、土錘 イ、土製円盤
	(3) 石製品
	ア、茶臼 イ、粉引臼 ウ、石鉢 エ、凹石類 オ、五輪塔
	(4) 金属製品

第4節 小結	122
1. 縄文時代～古墳時代	122
2. 古代	122
3. 中世 (1) 検出遺構について (2) 遺跡の変遷	123

第3章 北之越遺跡

第1節 調査と遺跡の概要	183
1. 遺跡の概要	183
2. 調査と整理の概要 (1) 調査整理概要 (2) 調査の方法	183
3. 地形環境と基本土層 (1) 現地形 (2) 基本土層 (3) 地形形成過程	186
4. 歴史的環境	191
第2節 遺構	196
1. 弥生時代の遺構	ア、溝跡 イ、ピット群 ウ、土坑 エ、遺物集中
2. 古墳時代の遺構	ア、遺物集中
3. 中世以後の遺構	ア、掘立柱建物跡 イ、棚列跡 ウ、土坑 エ、溝跡 オ、焼土跡 カ、畑跡 キ、集石遺構 ク、その他の遺構 キ、山斜面の小テラス群
第3節 出土遺物	235
1. 縄文時代の遺物	235
2. 弥生時代の遺物 (1) 弥生時代中期の遺物 (2) 弥生時代後期の遺物	235
3. 古墳時代の遺物	236
4. 中世以後の遺物	236
(1) 焼物	①出土焼物の概略
	ア、在地産土器 イ、輸入陶磁器 ウ、古瀬戸・大塚製品 エ、珠洲 オ、産地不明陶器 カ、唐津 キ、伊万里 ク、瀬戸美濃本楽焼
	②遺構・地点別出土焼物
	ア、土坑出土焼物 イ、溝跡出土焼物 ウ、その他の遺構出土焼物

エ、検出面出土焼物 オ、出土地点不明焼物

- (2) 土製品 ア、土製円盤 イ、羽口 ウ、土壁
- (3) 石製品 ア、茶臼 イ、粉引臼 ウ、石鉢 エ、五輪塔 オ、砥石
- (4) 金属製品 ア、鉄製品 イ、銅製品 ウ、銭貨 エ、鍛冶関連遺物
- (5) 木製品 ア、生活具 イ、建築材

第4節 小結	251
1. 弥生時代	251
2. 中世 (1) 検出された遺構 (2) 遺跡の構造	253

第4章 前山田遺跡

第1節 遺跡と調査の概要	305
1. 遺跡の概要	305
2. 調査の概要 (1) 調査と整地の経過 (2) 調査方法 (3) 調査区の呼称	305
3. 現地形と基本土層 (1) 現地形 (2) 基本土層 (3) 地形形成過程	309
4. 歴史的環境	314
第2節 遺構	326
1. 古代の遺構	326
2. 中世以後の遺構	326
(1) テラス部の遺構 ア、礎石建物跡 イ、土坑 ウ、石列・石垣・集石遺構 エ、溝跡	
(2) 平地部の遺構	
①平地部1面の遺構 ア、暗渠 イ、石組遺構	
②平地部2面・2面下層の遺構 ア、礎石建物跡 イ、掘立柱建物跡 ウ、石列 エ、枕列 オ、土坑 カ、集石遺構 キ、溝跡 ク、遺物集中 ケ、道跡・遺状遺構	
第3節 出土遺物	381
1. 古代以前の遺物	381
2. 中世から近世の遺物	381
(1) 焼物	
①出土焼物種の概観 ア、在地産土器 イ、輸入陶磁器 ウ、古瀬戸・大窯製品 エ、常滑 オ、信楽 カ、珠洲 キ、産地不明須恵質陶器 ク、瀬戸美濃本業焼 ケ、越中瀬戸 コ、唐津・肥前産陶器 サ、伊万里 シ、京焼系陶器 ス、萩焼 セ、瀬戸美濃新業焼 ソ、在地産陶器	
②遺構・地点別出土焼物 ア、礎石建物出土焼物 イ、土坑出土焼物 ウ、石列出土焼物 エ、集石・遺物集中他土焼物 オ、テラス部土焼物 カ、平地部1面土焼物 キ、平地部2面土焼物 ク、平地部2面下層出土焼物 ケ、平地部検出面不明焼物 コ、参道部出土焼物 サ、試掘調査採取焼物	
(2) 土製品 ア、土製円盤 イ、土壁	
(3) 石製品 ア、茶臼 イ、粉引臼 ウ、石鉢 エ、搗き臼 オ、石塔 カ、砥石 キ、硯 ク、碁石 ケ、その他の石製品	

(4) 金属製品 ア、鉄製品 イ、銅製品 ウ、銭貨 エ、金属加工関連遺物	
(5) 木製品 ア、容器類 イ、農工具 ウ、服飾具 エ、調度品・建築材 オ、加工木 カ、杭・柱	
第4節 小結	411
1. 検出遺構	411
2. 遺跡の変遷	416
第5章 成果と課題	
1. 3遺跡の存続時期	493
2. 検出された遺構と遺跡構造の比較	504
3. 出土焼物の比較	508
4. まとめ	510
第6章 結語	
付章 科学分析	519
第1節 北之脇遺跡出土木製品の産出樹種 (パレオ・ラボ) 植田 弥生	519
第2節 前山田遺跡出土木製品の産出樹種 (パレオ・ラボ) 植田 弥生	527
第3節 小滝遺跡に置けるプラント・オパール分析と珪藻分析 (パリオ・サーヴェイ株式会社)	538
第4節 北之脇遺跡周辺の弥生時代後期以降の古環境変遷 (古環境研究所)	547
第5節 前山田・北之脇遺跡出土鉄塊・鉄滓・附着滓の分析・調査 (川鉄テクノロジー株式会社分析・評価センター埋蔵文化財調査研究室) 岡原 正明・伊藤 俊治	567
第6節 胎土分析 (第4紀地質研究所) 井上 巖	578

挿 図 目 次

第1章 序章

第1図 グリッド設定模式図

第2図 周辺遺跡

第2章 小滝遺跡

第3図 作業風景

第4図 現地説明会

第5図 小滝遺跡周辺

第6図 小滝遺跡調査範囲とグリッド配置

第7図 小滝遺跡の地形と基本土層

第8図 A区土層1

第9図 A区土層2

第10図 竃城

第11図 竃城石垣(突出部)

第12図 竃城石垣(正面)

第13図 全体図

第14図 A区第Ⅲ面全体図と検出遺構

第15図 A区第Ⅱ面全体図と検出遺構

第16図 A区古代竃穴住居跡

第17図 ST01

第18図 ST03

第19図 ST08

第20図 ST09・SA04

第21図 ST10

第22図 ST16・17

第23図 ST18・19

第24図 ST02

第25図 SX01

第26図 SK1087

第27図 SH20・24・25、SA01・02

第28図 SH102

第29図 SH04・09その1

第30図 SH04・09その2、SH13

第31図 SH03・10~12

第32図 SH114~16・32

第33図 SH22・S F01、SK348・349

第34図 SA03、SH28・30

第35図 A区SK

第36図 A区土坑・溝跡分布

第37図 B区の遺構

第38図 ST04・05

第39図 ST06・07

第40図 ST11・12

第41図 ST13

第42図 ST14・15

第43図 ST20~22

第44図 S B04・05

第45図 SA05

第46図 SH18・21

第47図 C区墓跡1

第48図 C区墓跡2、C区土坑・墓跡分布

第49図 C区土坑規模グラフ

第50図 C区土坑1

第51図 C区土坑2

第52図 C区土坑3

第53図 C区土坑4

第54図 C区土坑5

第55図 C区溝跡分布

第56図 SX04

第57図 D区の遺構

第58図 カワラケ・内耳鍋法量グラフ

第59図 内耳鍋分類

第60図 カワラケ分類

第61図 小滝遺跡A区建物跡規模グラフ

第62図 小滝遺跡C区建物跡規模グラフ

第63図 玄照寺跡SX01

第64図 遺跡周囲の地籍図

第65図 C区建物・溝跡主軸方位

第66図 C区土坑主軸方位

第67図 C区の遺構変遷

第68図 A区建物跡主軸方位

第69図 A区の遺構変遷

第70図 小滝遺跡の変遷

第71図 焼物1

第72図 焼物 2
第73図 焼物 3
第74図 焼物 4
第75図 焼物 5
第76図 焼物 6
第77図 焼物 7
第78図 焼物 8
第79図 焼物 9
第80図 石製品 1
第81図 石製品 2
第82図 石製品 3・土製品
第83図 金属製品
第84図 遺構分布 1 (A区 I 面上部)
第85図 遺構分布 2 (A区 I 面上部)
第86図 遺構分布 3・4 (A区 I 面上部)
第87図 遺構分布 5 (A区 I 面上部)
第88図 遺構分布 6 (A区 I 面上部)
第89図 遺構分布 7 (A区 I 面上部)
第90図 遺構分布 1 (A区 I 面下部)
第91図 遺構分布 2 (A区 I 面下部)
第92図 遺構分布 3 (B区・A区 I 面下部)
第93図 遺構分布 4 (A区 I 面下部)
第94図 遺構分布 5 (A区 I 面下部)
第95図 遺構分布 6 (A区 I 面下部)
第96図 遺構分布 7 (A区 I 面下部)
第97図 遺構分布 8 (A区 I 面下部)
第98図 遺構分布 9 (A区 I 面下部)
第99図 遺構分布 10 (A区 I 面下部)
第100図 遺構分布 11 (C区)
第101図 遺構分布 12 (C区)
第102図 遺構分布 13 (C区)
第103図 遺構分布 14 (B・C区)
第104図 遺構分布 15 (C区)
第105図 遺構分布 16 (C区)
第106図 遺構分布 17 (C区)
第107図 遺構分布 18 (C区)
第108図 遺構分布 19 (C区)
第109図 遺構分布 20 (C区)
第110図 遺構分布 21 (C区)
第111図 遺構分布 22 (C区)

第112図 遺構分布 23 (C区)
第113図 遺構分布 24 (C区)
第114図 遺構分布 25 (C区)
第115図 遺構分布 26 (C区)
第116図 遺構分布 27 (C区)

第3章北之脇遺跡

第117図 作業風景
第118図 3面切り回し前
第119図 3面切り回し後
第120図 北之脇遺跡の調査範囲とグリッド配置
第121図 北之脇遺跡の地形と基本土層
第122図 緩斜面部・平地部断面図
第123図 北之脇遺跡全体図
第124図 弥生時代の土坑・溝跡
第125図 弥生時代のピット状遺構
第126図 弥生・古墳時代の遺物集中
第127図 ST02
第128図 ST03
第129図 ST04・05
第130図 ST06
第131図 ST01・07・08
第132図 ST09～12
第133図 ST13、SA01～03
第134図 中世以後の土坑 1
第135図 中世以後の土坑 2
第136図 中世以後の土坑 3
第137図 中世以後の土坑 4
第138図 中世以後の溝跡
第139図 中世以後の焼土跡
第140図 SX01グリッド別土器重量グラフ
第141図 SX01グリッド別土器出土重量分布
第142図 山斜面の小テラス群
第143図 内耳分類
第144図 カワラケ・内耳編法量グラフ
第145図 カワラケ分類
第146図 柱材断面規模グラフ
第147図 掘立柱建物跡規模・主軸方位グラフ
第148図 字「北之脇」地籍図と調査位置
第149図 中世の遺跡構造想定図

- 第150図 焼物 1
 第151図 焼物 2
 第152図 焼物 3
 第153図 焼物 4
 第154図 焼物 5
 第155図 焼物 6
 第156図 焼物 7
 第157図 焼物 8
 第158図 焼物 9
 第159図 焼物10
 第160図 焼物11
 第161図 石製品 1
 第162図 石製品 2
 第163図 石製品 3
 第164図 石製品 4・金属製品
 第165図 木製品 1
 第166図 木製品 2
 第167図 木製品 3
 第168図 木製品 4
 第169図 木製品 5
 第170図 木製品 6
 第171図 3面遺構分布 1
 第172図 3面遺構分布 2
 第173図 3面遺構分布 3
 第174図 3面遺構分布 4
 第175図 3面遺構分布 5・6
 第176図 1面遺構分布 1
 第177図 1面遺構分布 2
 第178図 1面遺構分布 3
 第179図 1面遺構分布 4
 第180図 1面遺構分布 5
 第181図 1面遺構分布 6
 第182図 1面遺構分布 7
 第183図 1面遺構分布 8
 第184図 1面遺構分布 9
 第185図 1面遺構分布10
 第186図 1面遺構分布11
 第187図 1面遺構分布12
 第188図 1面遺構分布13
 第189図 1面遺構分布14
 第190図 1面遺構分布15
 第191図 1面遺構分布16
 第192図 1面遺構分布17
 第193図 1面遺構分布18
 第194図 1面遺構分布19
- 第4章 前山田遺跡**
- 第195図 前山田・北之脇遺跡周辺図
 第196図 作業風景
 第197図 表土掘削状況
 第198図 前山田遺跡グリッド配置図
 第199図 前山田遺跡基本土層
 第200図 テラス I～平地 1 断面図
 第201図 テラス II 断面図
 第202図 観音寺遠景
 第203図 観音寺本堂
 第204図 現観音寺本堂平面図
 第205図 春山城
 第206図 周辺居館跡その1 字「森」
 第207図 周辺居館跡その2 字「中組」・「根守」
 部分
 第208図 遺跡周辺の地籍図 字「菱田」部分
 第209図 前山田遺跡全体図
 第210図 ST01
 第211図 ST13
 第212図 ST14
 第213図 検出遺構と現観音寺庫裏跡の位置関係
 第214図 ST15
 第215図 ST15礎石断面
 第216図 ST17
 第217図 テラス部土坑 1
 第218図 テラス部土坑 2
 第219図 テラス部石列・石垣立面
 第220図 SH44立面
 第221図 平地部 1面の遺構
 第222図 ST02
 第223図 ST03・04 (A・B)
 第224図 ST06・19
 第225図 ST08
 第226図 ST12

第227図	ST05・18	第267図	金属製品 2
第228図	ST20	第268図	金属製品 3
第229図	ST09・21・10	第269図	木製品 1
第230図	ST11	第270図	木製品 2
第231図	SA02・03	第271図	木製品 3
第232図	平地部杭・柱分布状況	第272図	木製品 4
第233図	柱・杭形態別出土分布	第273図	木製品 5
第234図	平地部土坑	第274図	木製品 6
第235図	平地部集石遺構分布と断面	第275図	木製品 7
第236図	SQ02・04・05・06・08	第276図	木製品 8
第237図	SQ07・10木質卯物・遺物集中分布	第277図	木製品 9
第238図	内耳分類	第278図	木製品10
第239図	内耳鍋法量グラフ	第279図	木製品11
第240図	カワラケ法量グラフ	第280図	木製品12
第241図	カワラケ分類	第281図	木製品13
第242図	杭・柱断面規模グラフ	第282図	木製品14
第243図	平地部遺構主軸方位・建物跡規模グラフ	第283図	木製品15
第244図	前山田遺跡の区画施設	第284図	木製品16
第245図	平地部の遺構変遷	第285図	木製品17
第246図	テラス部の遺構変遷	第286図	木製品18
第247図	前山田遺跡の変遷	第287図	木製品19
第248図	焼物 1	第288図	木製品20
第249図	焼物 2	第289図	木製品21
第250図	焼物 3	第290図	木製品22
第251図	焼物 4	第291図	木製品23
第252図	焼物 5	第292図	遺構分布 1
第253図	焼物 6	第293図	遺構分布 2
第254図	焼物 7	第294図	遺構分布 3
第255図	焼物 8	第295図	遺構分布 4
第256図	焼物 9	第296図	遺構分布 5
第257図	焼物10	第297図	遺構分布 6
第258図	焼物11	第298図	遺構分布 7
第259図	石製品 1	第299図	遺構分布 8
第260図	石製品 2	第300図	遺構分布 9
第261図	石製品 3	第301図	遺構分布10
第262図	石製品 4	第302図	遺構分布11
第263図	石製品 5	第303図	遺構分布12
第264図	石製品 6	第304図	遺構分布13
第265図	石製品 7・土製品・金属加工関係遺物 1	第305図	遺構分布14
第266図	金属加工関係遺物 2・金属製品 1	第306図	遺構分布15

- 第307図 遺構分布16
 第308図 遺構分布17
 第309図 遺構分布18
 第310図 遺構分布19
 第311図 遺構分布20

第5章 成果と課題

- 第312図 浅鍋形内耳鍋
 第313図 県内の内耳鍋出土例
 第314図 内耳鍋口縁部形態別破片数グラフ
 第315図 底状柱列をもつ掘立柱建物跡の類別
 第316図 各遺跡の出土焼物組成グラフ
 第317図 金井城跡の屋敷割

付章 科学分析

第1節 北之脇遺跡出土木製品の産出樹種

- 図版1 北之脇遺跡出土木製品の樹種(1)
 図版2 北之脇遺跡出土木製品の樹種(2)
 図版3 北之脇遺跡出土木製品の樹種(3)
 図版4 北之脇遺跡出土木製品の樹種(4)
 表1 北之脇遺跡出土木製品の樹種同定一覧
 表2 北之脇遺跡出土木製品の器種・用途別の使用樹種

第2節 前山田遺跡出土木製品の樹種同定

- 図版1 前山田遺跡出土木製品の樹種(1)
 図版2 前山田遺跡出土木製品の樹種(2)
 図版3 前山田遺跡出土木製品の樹種(3)
 図版4 前山田遺跡出土木製品の樹種(4)
 図版5 前山田遺跡出土木製品の樹種(5)
 図版6 前山田遺跡出土木製品の樹種(6)
 表1 前山田遺跡出土木製品の樹種同定一覧
 表2 前山田遺跡出土木製品の器種・用途別の使用樹種

第3節 小滝遺跡におけるプラント・オパール分析と珪藻分析

- 第1図 小滝遺跡地点Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの土層柱状図
 第2図 小滝遺跡から検出されたプラント・オパールの顕微鏡写真
 第3図 イネのプラント・オパールの検出状況
 第4図 おもな植物の推定生産量と変遷

- 第5図 地点Ⅰの主要産出珪藻化石の変遷
 第6図 地点Ⅱの主要産出珪藻化石の変遷
 第7図 地点Ⅲの主要産出珪藻化石の変遷

図版 主要産出珪藻化石顕微鏡写真

- 表1 プラント・オパール分析結果
 表2 地点Ⅰにおける珪藻化石産出表
 表3 地点Ⅱにおける珪藻化石産出表
 表4 地点Ⅲにおける珪藻化石産出表

第4節 北之脇遺跡周辺の弥生時代後期以降の古環境変遷

- 第1図 北之脇遺跡のサンプル採取地点と土層
 第2図 P1・P2地点の主要珪藻化石群の層位的変化
 第3図 P2地点の花粉化石群集の層位的変化
 第4図 P1・P2地点の植物珪酸体組成の層位的変化

第5図 地点Ⅱの主要産出珪藻化石

第6図 地点Ⅲの主要産出珪藻化石

- 図版1 珪藻化石(1)
 図版2 珪藻化石(2)
 図版3 花粉化石(1)
 図版4 花粉化石(2)
 図版5 植物珪酸体
 表1 珪藻の生態性
 表2 珪藻分析結果
 表3 花粉分析結果
 表4 イネ属同定結果
 表5 植物珪酸体分析結果

第5節 前山田遺跡・北之脇遺跡出土鉄塊・鉄滓・付着滓の分析・調査

- 第1図 蛍光X線スペクトル図と分析結果1
 第2図 蛍光X線スペクトル図と分析結果2
 第3図 蛍光X線スペクトル図と分析結果3
 第4図 外観写真
 第5図 光学顕微鏡による撮影
 第6図 前山田遺跡出土鉄塊E PMA測定結果
 表1 調査項目
 表2 前山田遺跡出土鉄塊化学成分分析結果
 表3 付着滓の化学成分

第6節 胎土分析

第1図 化学分析結果

第2図 三角・菱形ダイアグラム

表1 胎土性状表

表2 化学分析表

表3 タイプ分類一覧表

第1章 序章

第1節 調査に至る経過と調査・整理方法

1. 調査に至る経過

本報告に収録する小滝・北之脇・前山田遺跡はいずれも上信越自動車道建設に伴って発掘調査されたものである。高速自動車道建設に関わる発掘調査は「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱に関する覚書」に準じて行われているが、これは工事に先立って発掘が必要となった場合に公団は県教育委員会に調査を委託することとしたものである。長野県の場合では昭和57年に岡谷市から始まる中央自動車道長野線工事に合わせて埋文センターが設立され、係る発掘調査を公団と県教育委員会が委託契約を結んだ後に県教育委員会が(財)長野県埋蔵文財センターへ再委託する方式が取られてきている。本遺跡の調査もこれに準じている。また、本遺跡の調査が実施された段階では、契約以前の遺跡の把握は、長野県教育委員会が路線内で実施する試掘調査等の予備調査によっていた。本報告書に掲載する3遺跡は未周知の遺跡であったが、こうした試掘調査によって新たに存在が判明したものである。

(財)長野県埋蔵文財センターの高速自動車道建設にかかわる調査は昭和57年度に岡谷市で開始されて以来、高速道工事と共に北へ拡大し、昭和62年度に長野調査事務所を設置して翌63年度には本格的な善光寺平の発掘調査に着手した。善光寺平では沖積地の発掘が多く、しかも水田から集落遺跡まで多様な遺跡が含まれることから延調査面積は膨大なものとなり、本報告に収録した遺跡の調査も善光寺平の発掘調査がピークに達した平成元年から平成4年にかけて実施されたものである。しかし、上信越自動車道の長野インター以北については当面の間片側1車線の開通とされていたため、小滝・前山田遺跡は平成元年・2年には本線2車線分と側道部分を対象とし、残る部分は平成4年度に2次調査として実施されることになった。北之脇遺跡のみは地形的に分割調査が難しいとみられたために1次調査ですべて発掘されている。なお、上信越自動車道に関連して調査された長野市内の千曲川右岸の遺跡は松原遺跡・川田条里遺跡・春山B遺跡・榎田遺跡など大規模遺跡が連続するなかで、本報告で扱う小滝・北之脇・前山田遺跡はその狭間に位置する小規模な遺跡で、いずれも中世を中心とする。このような共通性から3遺跡をまとめて報告することとしたものである。善光寺平では弥生・古墳時代・古代の遺跡が目立つなかで、あまり実態が把握できていない中世遺跡の様相が知られる良好な資料が得られたものと思われる。

2. 調査体制

上記に述べたように小滝・北之脇・前山田遺跡の発掘調査から本報告の刊行までには長い期間を経ており、その間に当センターの体制も大きく変化している。時期をおって調査・整理体制を述べる。

平成元年度～1989(小滝遺跡1次調査)

事務局長兼総務部長	半田 順計	長野調査事務所所長	塚原 隆明
総務部長事務代理	永田 伸男	庶務部長	半田 順計
主任	柳沢 洋良	庶務部長補佐	松本 忠己

調査部長	笹沢 浩	調査課長	白田 武正
技術参与	佐藤 今雄	調査研究員 (小滝遺跡1次)	池田 哲・内山 美彦 武居 公明・市川 隆之

平成2年度-1990 (北之脇遺跡・前山田遺跡1次調査)

事務局長	塚原 隆明	長野調査事務所所長	峯村 忠司
総務部長	塚田 次夫	庶務部長	塚田 次夫 (兼)
調査部長	小林 秀夫	庶務部長補佐	松本 忠己 (兼)
技術参与	佐藤 今雄	調査課長	白田 武正
総務部長補佐	松本 忠己	調査研究員 (北之脇遺跡)	池田 哲・内山 美彦 武居 公明・市川 隆之 (前山田遺跡1次) 福島 厚利・西山 克己 本田 真

平成4年度-1992 (前山田遺跡2次・小滝遺跡2次調査)

事務局長	峯村 忠司	長野調査事務所所長	岡田 正彦
参事	樋口 昇一	庶務課長	山崎 今朝寛 (兼)
総務部長	神林 幹生	庶務部長	羽生田 博之 (兼)
総務部長補佐	山崎 今朝寛	調査課長	百瀬 長秀
総務係長	羽生田 博之	調査研究員 (前山田遺跡2次)	本田 真・吉江 英夫 (小滝遺跡2次) 本田 真・吉江 英夫
調査部長	小林 秀夫		
技術参与	佐藤 今雄		

平成9年度-1997 (整理作業)

事務局長	青木 久	長野調査事務所所長	小林 秀夫
総務部長	山崎 悦雄	庶務課長	外谷 功 (兼)
総務部長補佐	外谷 功	庶務部長	田中 勝男 (兼)
総務係長	田中 勝男	調査課長	百瀬 長秀
調査部長	小林 秀夫	調査研究員	白田 広之 (保存処理) 市川 隆之 (遺物実測・遺構整理等)

平成10年度-1998 (整理作業)-(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターに改編

所長	佐久間 鉄四郎	調査課長	土屋 積
副所長	山崎 悦男	調査研究員	
管理部長補佐	宮島 孝明		西島 力 (写真焼付・遺物写真撮影)
調査部長	小林 秀夫		徳永 哲秀 (土器復元) 市川 隆之 (遺物実測・遺構整理・編集等)

3. 調査方法

(財)長野県埋蔵文化財センター(現(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター 以下埋文センターと略す)では調査・整理の簡便化と統一性を図るために共通する調査方法を内部で取り決めている。本報告に収録する遺跡の調査もこれに準じているが、ここではこの調査方法について記述するこ

とする。なお、個別遺跡の調査方法は各遺跡のところで後述する。

(1) 遺跡・遺構記号

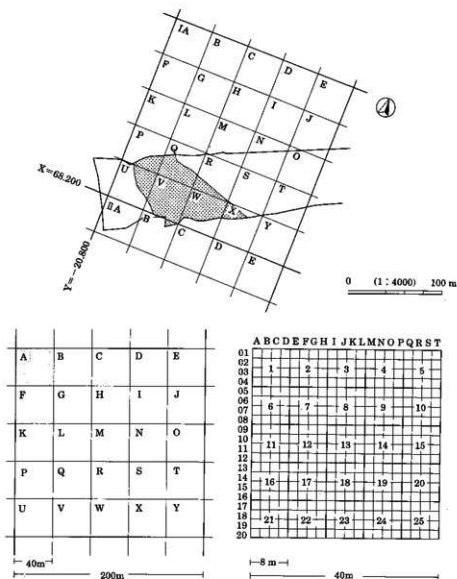
遺跡・遺構名は遺物注記や記録類記載の簡便化を図るため、アルファベットの組み合わせで表記している。遺跡名については全県下を地区毎に区切ってアルファベットA・B・C〜で呼称するなかで長野市・更埴市周辺に該当するBを頭に冠し、遺跡名をローマ字表記とした小滝—「KOTAKI」、北之脇—「KITANOWAKI」、前山田—「MAEYAMADA」のなかの2文字を組み合わせで遺跡名を略している。これを遺跡記号と呼んでいるが、小滝遺跡は「BKT」、北之脇遺跡は「BKN」、前山田遺跡は「BMY」となり、各遺跡の調査記録類及び遺物の注記にこの遺跡記号を用いている。遺構名については遺構種類ごとに頭にSを冠する遺構記号が設定されており、これにアラビア数字を組み合わせて個別遺構を指し示す方法をとっている(例 1号竪穴住居跡=SB1)。なお、遺構記号は以下の種類を用いている。竪穴住居跡(SB)、掘立柱建物跡・礎石建物跡(ST)、柵列跡(SA)、溝状遺構(SD)、土坑(SK)、遺物集中箇所(SQ)、集石遺構(SH)、焼土跡(SF)、性格不明遺構(SX)、墓(SM)。ただし、この遺構記号は調査の検出時に付されるため、主に検出形状から識別される分類となっている。したがって、厳密に遺構の性格を含めて分類したものではない点は注意されたい。例えば、検出時には土坑とみられてSKとしたが、調査結果で井戸跡や墓となる場合がある。今回報告するなかにも類似形態の石列や集石遺構に対して、調査者によってSA、SHを冠したりと一貫性がないところも生じている。これは整理で遺構記号を修正すると遺物や図面の記録類に混乱が生じやすくなることから、本報告書では調査時の遺構記号をできるだけ踏襲し、報告書では遺構記号に関わらず、あらためて遺構種類を分類して掲載することにした。ただし、調査時に遺構記号を用いず「石列」「石垣」「集石遺構」等と呼称したものがあがるが、遺物注記に不便を生じたため、遺構記号に振り替えた。

(2) 調査記録の種類

調査の記録は各種事務資料・調査日誌、図化記録(手取り図・写真測量図)、写真記録(35mm・6×7—モノクロ・リバーサル、空中写真)、調査の所見類(遺構調査カード・野帖類)がある。このなかで調査された遺構や遺物出土状態の記録類となるものが図化記録・写真記録・調査の所見記録類である。調査では図化記録・写真記録調査の作成が中心として進められるが、一方で所見記録は残されにくいところもある。そのため、当センターではこれを補うものとして調査年次の冬期整理において遺構所見カードを作成するようにしている。これについては後述する。なお、図化記録は基本的に遺跡に設定した測量基準線に基づく手取り測量図によっているが、集石遺構などは一部に写真測量を導入した。

(3) 測量方法

当埋文センターでの測量方法は調査グリッドを兼ねる測量基準線を設定し、それに基づいて測量している。グリッドの設定は国家座標の数値の40mの倍数にあたる数値を選択して基準線とし、この基準線にしたがってローマ数字のI・II・III〜地区と呼称される200m四方の大大地区を設定している。その内部は北西側からA・B・C〜地区と呼称される40m四方の大大地区に5×5の25区分し、さらに大大地区内部を8m四方で5×5の25区分する中地区、2m四方で20×20の400区画に区切る小地区を併用している。中地区はA2版の1/20の平面図(割り付け図)を作成するために用紙サイズに合わせて設定されたもので、先の大大地区・大大地区の設定基準線に国家座標で40mの倍数数値を選択する理由もこの中地区の設定によるものである。中地区の呼称方法は大大地区北西から大大地区のアルファベットを冠してA1、A2、A3〜とし、小地区は



第1図 グリッド設定模式図

東西方向が西側からアルファベット、南北方向は北から数字で呼称し、頭に大地区のアルファベットを冠して両者の組み合わせで呼ぶものとしている。例えば、A大地区内の北西隅はAA01となり、南東隅はAT20となる。以上のようなグリッド設定を兼ねる測量基準線に基づいて簡易透り方で個別の遺構を測量している。なお、前山田遺跡2次調査・小滝遺跡2次調査においては平面図を写真測量で図化しており、必ずしもこの方法によらない。

(4) 写真撮影方法

調査での写真記録にはマミヤRB6×7、ニコンFM2 (35mm) を使用し、モノクロ・リバーサル2種の写真撮影を行うことを原則としている。ただし、6×7については主な遺構についてのみ用いている。写真撮影は調査研究員が行い、焼き付けは埋文センターで行った。

4. 整理方法

整理方法も基本的には当理文センターの手順にしたがって進められ、調査年次の冬期の仮整理（冬期整理）と平成9年度から開始された報告書刊行及び収納へ向けての本格的整理の2段階で進められた。

(1) 冬期整理

調査年次の冬期に行う整理を冬期整理と呼称するが、各年次の冬期整理では遺物の仮収納へむけての整理や木製遺物の観察カード作成と仮保存、図面類・写真類の整理を行った。このなかで個別遺構については調査で作成された図面（原図）を調整してトレーシングペーパーに写しとった2次原図と呼ばれる図と所見記載カードを添付した「遺構カード」の作成を重点的に進めた。ただし、先述したように善光寺平での調査がピークを迎えた時期にあたって調査終了時期が軒並み1月に突出し、一方で3月には翌年度の調査準備にかからざるをえない状況があって十分な冬期整理が行えていない遺跡もある。そして、そのまま報告書作成の整理へ持ち越されたものもあり、北之脇遺跡・小滝遺跡については必ずしも遺構カードの体裁を整えることができていない。

(2) 報告書刊行・収納へ向けた整理

ア. 整理作業の経過

報告書刊行・収納へ向けた整理作業は平成9年度に本格的に開始された。遺物の整理から着手し、遺物の洗浄と注記を行うと共に、遺構記号の調整作業も平行して行った。この作業が終了した後に、土器類は遺跡・遺構ごとに区分けて接合作業に入り、順次、遺構別の遺物種類と量を計測した台帳を作成すると共に、実測用の遺物選択を行った。そして、9月～12月に焼物の実測、翌1月から石製品の実測を実施した。

平成10年度は4月に残りの石製品の実測、5～7月に木製品・金属器の実測を行い、合わせて写真撮影用の遺物の抜き出しと復元を行い、遺物写真の撮影も平行して行った。8月からはすべての遺物実測を終了して遺構の整理、遺構・遺物トレースと原稿執筆を行い、合わせて遺構写真の焼き付けを行って、収納と報告書の刊行に至る。なお、整理作業の体制は以下の通りである。

平成9年度－

遺物整理 市川隆之・阿部喜和子、滝沢みゆき、原田美峰子、吉川孝子、柳原智子

保存処理 白田広之・古平道子、日向富美子、宮下 幸一

平成10年度－

遺物・遺構整理・トレース 市川隆之・小根山貞子、北村久美子、桑原はるみ、滝沢みゆき、原田美峰子、柳原智子

復元 徳永哲秀・安東武子、内山美佐、小林タイ、松林節子、山岸隆男

写真 西島 力・北島康子、小出紀彦

イ. 各種記録類の整理

本報告で扱う3遺跡では石を用いた遺構が多数検出されており、調査段階では石列・集石遺構・石垣・礎石建物跡などに区分されたが、整理段階で見直すと個別に把握された遺構が組み合わせられて建物跡や区画施設を構成する遺構があると看取された。しかし、調査時には手取り個別遺構図、割りつけ図、写真測量図など多岐の方法で遺構図が作成されているため、遺構の組み合わせと個別遺構の認定を検討するためにすべての遺構を記入した1/100の全体図を作成した。この全体図を元に遺構の組み合わせと認定を行い、

合わせて遺構台帳を新規に作りなおしたり、あるいは調査時の台帳を一部改変して遺構一覧を作成した。これに基づいて認定した遺構の1/20を基本とする2次原因図を作成していったが、直接報告書の体裁に合わせて作成されたために「遺構カード」としての体裁を整えることはできなかった。

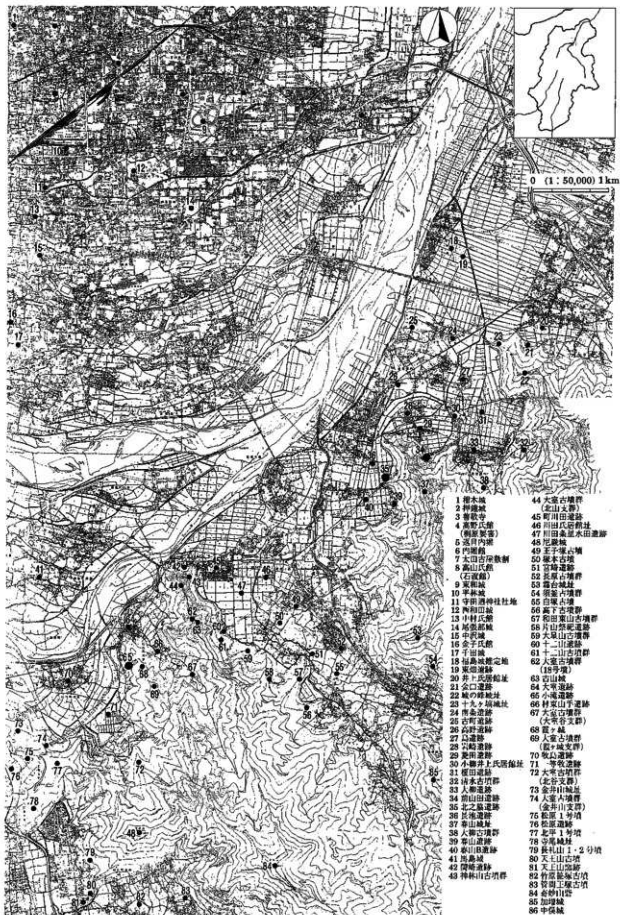
ウ. 遺物の整理

上述したように整理の遺構認定が調査とは異なるものもあるが、遺物の取り上げ自体は調査段階の遺構認定によっている。一方で整理段階の遺構認定が確定的でないものが含まれることから、基本的に遺物は調査の取り上げ単位を基本として扱うことにした。焼物はこうした遺構、取り上げ単位ごとに接合を試み、さらに肉眼観察に基づいて種類別分類と個体の識別・破片数・重量の計測を行った。このなかでカワラケ・内耳鍋などの出土量が膨大な遺物については遺構間接合を断念したが、陶磁器類については一旦種別に分類した後に再度種別に接合を行って、接合するものは遺構出土のほうへ帰属させ、台帳に接合関係の記載を行った。なお、本報告では焼物実測図は基本的に遺構・出土地点別に掲載することとし、写真は種類ごとにまとめた。図の掲載方法については直接遺構に帰属すると断定できたものが少ないことから、種類別に掲載する方法も考えたが、年代の特定できていない内耳鍋やカワラケが多いことを考えて遺構・出土地点別に掲載することにした。一方で、写真は色調や材質の異なる焼物を一括して撮影することは難しい点から類似した色調・材質別に撮影して掲載することにした。なお、石製品の整理は種類別に分けた上で接合関係を検討し、実測・写真撮影の選択を行った。ただし、この石製品は金属製品を含めて種別に掲載するものとしている。これは木製品も同様である。

第2節 遺跡の位置

個々の遺跡の地形環境や歴史的環境については後述することとして、ここでは3遺跡に共通する立地環境について概観しておく。本報告で扱う小滝・北之脇・前山田遺跡はいずれも長野県の北部、長野市周辺の善光寺平と呼ばれる盆地内にある。この善光寺平は長軸を北東—南西方向にとる細長い盆地であり、長軸方向に約40km、幅は8～10kmの規模である。この盆地内は西側縁部中央と東側縁部に広大な扇状地が連続・重複して発達し、それ以外の場所は中小河川の流入も少なく目立った扇状地がない。さらに、盆地中央には長軸方向に流れる千曲川があり、それに沿って自然堤防と後背低地が発達している。本報告で扱う3遺跡はこの盆地の東縁部中央のやや南に位置する。この周辺は千曲川対岸の厚川扇状地で押しやられた千曲川が盆地東縁部の山際を流れ、一方で川東山地から延びる尾根が手の指のように盆地側へ突出して千曲川岸まで達している。そのため、沖積地へ突出した枝尾根で周囲を区切られ、前面を千曲川で閉塞された湾状地形が連続することになり、本報告の3遺跡もそれぞれこうした地形のなかにある。

ところで、長野県は日本列島中央に位置し、日本列島を東西に分ける場合には東日本、海沿いの平地を中心に見た場合では中部高地と呼ばれる地域区分で扱われる。しかし、その内部は一定のまとまりを持ちながらもいくつかの山脈・山地で分割され、盆地ごとに地域的なまとまりがあると共に生活文化の異なるところがある。例えば、南は愛知・静岡といった太平洋側の文化、北は富山・新潟といった日本海側の文化との交流があって、それぞれに生活文化の様子も若干異なるところがある。本遺跡の所在する善光寺平は長野県を4分割した地域区分では北信と呼ばれる地域に入り、生活文化的に長野県を2分する場合に千曲川沿岸の東信と組み合わされる東・北信として扱われる場合が多い。北信は古来「奥郡」と表現されるが、これは東山道からみた場合に長野県で最も北東端にあたることによるものだが、中世においては日本海と鎌倉を結ぶ鎌倉街道が通り、場所的にも日本海に近いことから群馬等の北関東と日本海文化圏との結びつきが強い。この善光寺平には千曲川沿い南端に更埴市、中央西側の堀花川・浅川の扇状地周辺を中心



第2図 周辺遺跡(千曲川左岸は居館跡のみ記入)

とする長野市、盆地東側の百々川・松川扇状地周辺の須坂市、夜交川周辺の扇状地に中野市があり、長野県にあっては比較的人口密度が高い場所である。古代においても善光寺平のみが最も多い4郡が設置され、古墳時代前期にあっては前方後円墳集中地域であったように、古来よりの安定した生産に支えられてきた場所といえる。しかし、現代の中核的な都市は盆地周囲に発達した扇状地部に立地するものが多いが、弥生～古代集落はむしろ中小河川の扇状地、あるいは千曲川沿いに多く分布し、千曲川後背の低地を生産域として遺跡が展開していたようである。なお、これらの現代の善光寺平の中核都市の起源については千曲川右岸の須坂市・長野市松代町は近世城下町からの発展であり、千曲川左岸の旧長野市は中世から続く善光寺の門前町からの発展である。この長野市は周囲の町村との合併でだいに大きくなったものなので上記以外にもいくつか古い中核的な町が存在するが、これらは旧街道沿いの宿場町、あるいは街道沿いの農産物の集積地から発展したものとみられる。また、善光寺北西背後の山は山岳信仰の飯綱山・戸隠へ連続し、盆地東側の山も北東部は志賀高原、南東は菅平へ続く比較的高い山があり、いくつかは古来より山岳信仰の山として知られる。本報告で扱う遺跡はこうした環境のなかにあるが、3遺跡のなかで小滝遺跡と、北之勝・前山田遺跡は若干距離をおいて離れている。そのため、歴史的環境の詳細は各遺跡のところで触れることとするが、周辺遺跡の分布図のみは便宜的にここに掲載しておく。

遺跡分布図 参考文献

- | | |
|--------------|------------------------------|
| 金井 正三 | 1980『井上氏城跡』須坂市教育委員会 |
| 須坂市史編纂委員会 | 1981『須坂市史』 |
| 長野市若穂公民館 | 1983『若穂の文化財』 |
| 岡崎 晋明 | 1986『須坂の古墳文化』須坂市立博物館 |
| 須坂市教育委員会 | 1986『須坂市遺跡地名表』 |
| 長野市教育委員会 | 1988『岩崎遺跡』 |
| 長野県埋蔵文化財センター | 1991『(財)長野県埋蔵文化財センター年報7』 |
| 長野市教育委員会 | 1993『岩崎遺跡』 |
| 長野市教育委員会 | 1998『鶴内遺跡群 南条遺跡 現地説明会資料』 |
| 長野市教育委員会 | 1993『松原遺跡Ⅲ』 |
| 長野市教育委員会 | 1981『長野・大室古墳群』 |
| 長野市教育委員会 | 1988『黒川田遺跡』 |
| 長野市教育委員会 | 1993『古町遺跡 流人塚』 |
| 長野県教育委員会 | 1983『長野県中世城館跡分布調査報告書』 |
| 長野県史刊行会 | 1981『長野県史考古資料編全一巻 (一) 遺跡地名表』 |

第2章 小滝遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の概要

小滝遺跡は長野市松代町大室字小滝に位置し、上信越自動車道建設に伴って今回はじめて発掘調査が実施されることになった。発掘調査の結果、遺跡は山際の緩斜面と狭い後背低地・微高地から構成され、中世後半から近世初頭を中心とする遺跡であることが確認できた。縄文時代～古代の遺構・遺物も検出されたが、その量は非常に僅かであり、ほぼ山際の緩斜面に限定される。これに対して中世以後の遺構は広域で検出され、隣接地にも広がると予想された。遺跡周囲に目を転ずると、背後の尾根には山城（霞城）があり、その尾根から裏側の谷は積石塚で有名な大室古墳群、縄文時代を中心とする村東山手遺跡がある。また、当地周辺では平安時代前期に「大室牧」が存在したとされ、近世には千曲川右岸を通る北国街道が通っていた。今回の調査では「大室牧」「北国街道」関連遺構の検出も期待されたが、具体的に確認できなかった。しかし、一方で霞城に隣接する本遺跡で類似時期と思われる遺構・遺物を検出した点で興味深い資料を供したと思われる。なお、小滝遺跡の南方には周知の遺跡として一等牧遺跡がある。調査前では本遺跡も一等牧遺跡の一部とも考えられたが、周知の一等牧遺跡範囲から外れ、しかも低地で隔てられることから字名をとって「小滝遺跡」とされた。

2. 調査と整理の概要

(1) 調査概要

今回の発掘は上信越道長野線建設に先立つ長野県教育委員会文化課（現文化財保護課）による試掘調査で発見され、(財)長野県埋蔵文化財センター（現長野県埋蔵文化財センター）が発掘調査を担当したものである。なお、この上信越自動車道長野インター以北は暫定2車線とされたので1989年に本線2車線・側道部分のみを対象として1次調査を実施し、残る2車線分は1992年に2次調査として調査した。

ア. 1次調査

1989年、石川条里遺跡の調査を終了した調査班（調査研究員4名）が10月9日から調査に着手した。しかし、調査に先立つ遺跡情報が少ないこともあり、まずは側道部分の調査から遺構の種類と分布、密度・検出面数を確認することにした。その結果、遺跡内は千曲川によって形成された自然堤防と小規模な後背低地、山際の崖錐地形からなることが判明し、山際から西へ向かって崖錐地形部をA区、後背低地部分をB区、自然堤防部分をC区、その

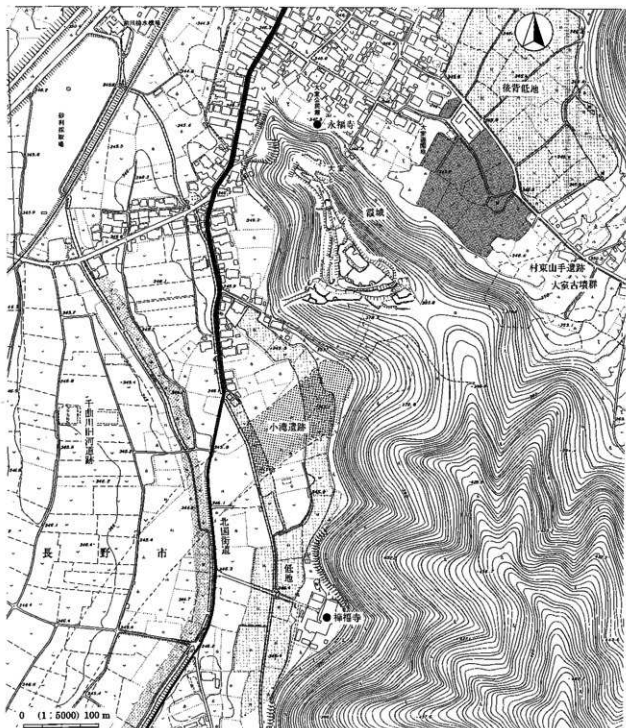


第3図 作業風景



第4図 現地説明会

西の後背低地をD区と呼称した。遺構はA・C区で中世居住関連遺構が検出され、B・D区では近世以後の水田層が数枚あることが判明したが、D区以西については砂礫層や遺構は確認できなかった。次に、本線部分の調査に入ったが、B・C・D区は側道部分と同様の様相が確認されたものの、新たにA区は石垣・石列・礎石建物と整地土が存在することが知られた。そのため、A区中央で傾斜方向に土層観察用のベルトを追加設定し、整地と石を用いた遺構の関係を把握することとした。ただし、重機による表土掘削開始当初では石を用いた遺構の存在に気づかず削平してしまった疑いがある。特に、SH04・09より山



第5図 小滝遺跡周辺

手の礎石建物等の遺構の有無については明らかにできない状況を生じてしまった。しかし、A区の石列・石垣・礎石建物跡は部分的ながら少なくとも上下2回にわけて構築されていることは確認できた。このA区中世遺構面調査後に中央ベルト脇に試掘トレンチを入れたところ下層に焼土跡の存在を確認し、その検出土層と類似した土層がさらに数枚存在することが知られた。そこで順次掘削と精査を繰り返して調査を進めた。この中世面より下の土層は1次調査A区山際のごく限られた範囲のみ分布するものであり、2次調査部分までは広がっていない。なお、調査段階では中世面から1・2・3面と呼んでいたが、2次調査でも中世以後の調査面についても同じく1・2・3面と呼称したため、混乱を避けるために整理では中世以後の遺構調査面をI面とまとめ、I面内で上下にわけて検出された遺構面をI面上部、I面下部それぞれをII・III・IV面とした。調査は翌年の1月11日に終了し、冬期は図面類の整理作業を行った。なお、1989年の12月には現地説明会を開催し、翌年の1990年に(財)長野県埋蔵文化財センター年報9で調査概要を報告している。

イ. 2次調査

1992年に残り2車線部の調査を実施することになり、2000㎡を対象として調査研究員2名が前山田遺跡の2次調査終了後の5月11日から調査に着手した。調査の結果、ほぼ1次調査と同様の調査所見が得られたが、A区では中世以後の遺構が6面に分けて調査されるという新たな所見も得られた。ただし、整理段階での再検討では1・2面検出遺構がほぼ重複する同一遺構で調査面に差はなく、4・5面は整地部分を分割調査したものとみなされ、基本的に4面前後で捉えることが妥当と思われた。1次調査との対応関係では2次調査6面は1次調査では対応調査面がなく、2次調査4・5面は1次調査I面下部の遺構、2次調査3面及び1・2面は1次調査I面上部遺構に対比しようと捉えた。2次調査1・2面と3面は遺構面が異なるが、3面が1次調査I面上部遺構に対応する可能性が高いものの、1次調査では2次調査1・2面遺構を合わせて検出した疑いがあるため、上記のような対応関係と想定した。

ただし、1次調査のI面上部遺構も1次調査域に限定される遺構であった可能性があり、一方で2次調査4・5面の遺構も1次調査I面上部遺構と同時存在していた可能性は残される。また、2次調査ではA区低地部分も6面に分割して調査されているものの、出土遺物からみるとA区整地上の遺構とは時期が異なり、整地部分の遺構と対応しないと考えられた。なお、この2次調査の遺構測量では基本的に空測によって平面図を作成した。この2次調査は7月17日には調査を終了した。

(2) 整理作業

各調査年次の冬期には図面の整理を中心におこない、本格的な整理作業は暫く時間を置いた1997年より2年計画で開始された。初年度には遺物の洗浄、注記、接合、遺構別の土器出土量の計測を行い、秋頃から実測作業に着手した。翌年は残った石製品、木製品の実測を行うと共に報告書の作成へむけて原稿の執筆、図版の作成を行った。

(3) 調査の方法

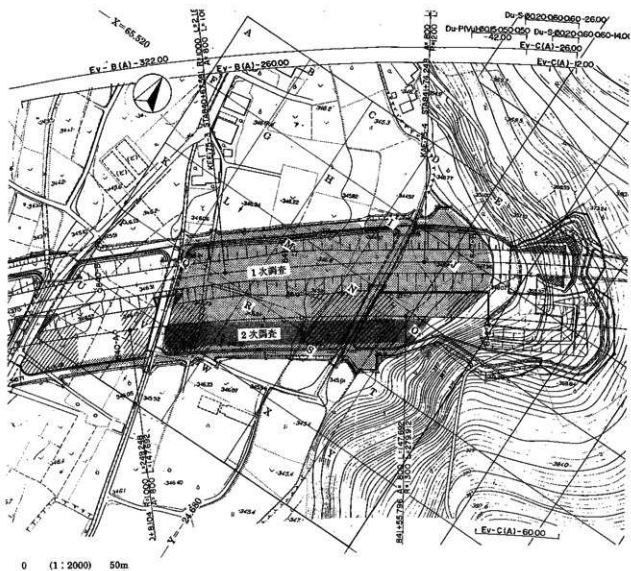
ア. 遺構の調査方法

調査では遺跡内に設定したトレンチ所見に基づいて検出面を決定し、この検出面まで重機で掘削して遺構精査をおこなっている。重機による検出面までの掘削ではA区緩斜面I面では掘り込み遺構がなく、礎石建物跡などが中心であったこと、調査当初には整地の確認が不十分であったことから一部の遺構を破壊してしまった可能性がある。また、B区では複数の水田土層が確認されたが、1次調査では内耳鋤破片を出土した中世後半前後と思われる土層を検出面としたが、2次調査では上層の近世水田を中心に調査され

ている。このことはD区においても同じである。C区については1次・2次調査ともに遺構が確認できる砂礫層上面を検出面とした。検出面まで掘削した後に個別遺構の精査に入り、掘り込み遺構は1～2方向の土層観察用の壁を残しながら掘り下げ、土層の記録を取った後に掘りあげた。ただし、柱穴跡と推測されるものについては上面を一部掘り落とし、柱痕を確認して平面図と写真撮影を行って最後に断ち割って土層の確認を行っている。また、墓については1次調査では概略の骨を露呈させて記録を作成し、残りは整理段階で掘り出すことにしたが、2次調査では遺跡調査段階で直接骨の応急処置を行って取り上げている。これ以外の石を用いた遺構については石を露呈させて空洞・写真実測で図化作業を行った。遺構出土の遺物については破片が散在的に出土するものが多いことから遺構別に一括して取り上げている。写真撮影は6×7、35mmのモノクロ・リバーサルで撮影し、一部は空中写真を導入した。

イ. 測量方法

(財)長野県埋蔵文化財センターの測量方法に準じ、国家座標Ⅷ系の $X=65.560$ 、 $Y=-24.800$ を基準とする調査グリッドを設定し、これを測量基準線として測量を行った。なお、このグリッド設定線は村東山手遺跡とも共通している。調査グリッドは200m四方を大々地区とし、そのなかを40m四方の大地区に



第6図 小滝遺跡調査範囲とグリッド配置

区切り、大地区内はさらに8m四方の中地区と2m四方の小地区に区分している。(財)長野県埋蔵文化財センターでは大々地区を北西側からローマ数字Ⅰ・Ⅱへと呼称しているが、本遺跡の場合では1大々地区内に納まることからⅠ・Ⅱへの呼称は用いていない。大地区内は大々地区の北西からアルファベットA・B・Cへと呼称し、中地区は同じく北西からA1、A2、A3と呼称している。また、小地区は大地区内を2mごとに東西方向A～T、南北方向1～20に区切って両者の組み合わせで呼称するものとした(例AA01)。なお、測量基準線及び標高の基準点の設定は測量業者に委託したが、空洞図面では測量業者のミスでXとYが逆転して記載されたものがあり、また、2次調査では遺跡に設定した測量基準線が2mずれていることが判明した。さらに、2次調査標高の基準点数値も1次調査と異なっていたが、これは各種地図類からみた道跡周辺の標高数値から1次調査の数値が正しいと判断し、2次調査の標高は連続する道跡の標高差から誤差を割り出して修正した。

ウ. 遺構の認定と区分

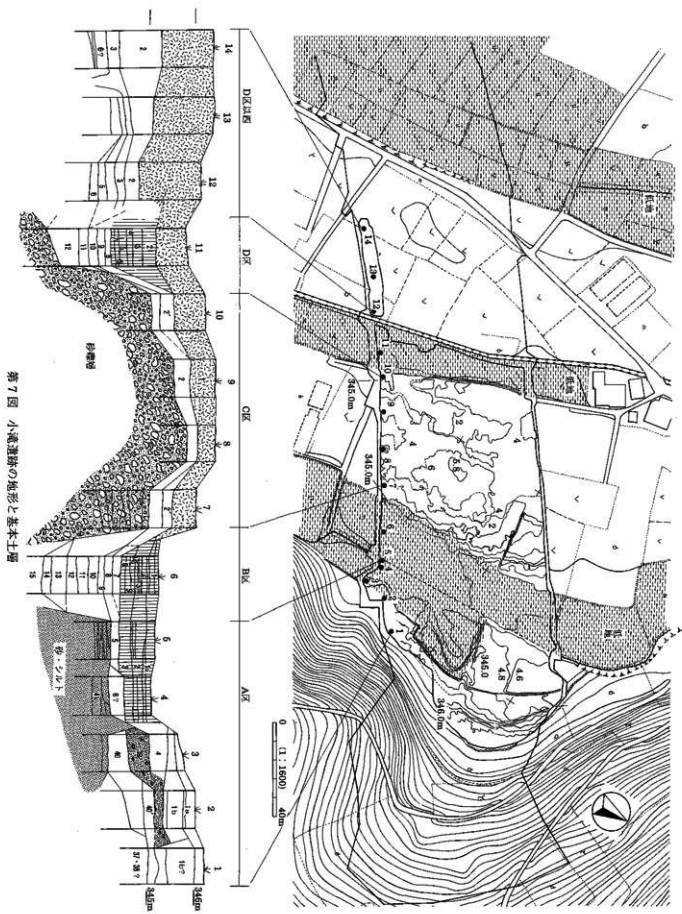
調査段階では検出状態で竪穴住居跡—SB、掘立柱建物跡—ST、棚列跡—SA、土坑—SK、墓跡—SM、溝跡—SD、焼土跡—SF、集石遺構—SH、遺物集中—SQ、性格不明遺構—SXに区分し、これにアラビア数字を組み合わせて個別遺構を表記した。ただし、遺構記号は厳密に遺構の性格を区分して用いておらず、性格不明の集石遺構が多い本遺跡では調査者によって同種遺構に多様な遺構記号が付される事態が生じている。整理段階では遺構記号にかかわらず、同種遺構と見られる遺構ごとに区分して報告するほうが良いと判断し、遺構記号に関係なく類似遺構ごとにまとめることとした。例えば、石列については1次調査ですべてSHとして扱ったが、2次調査ではSA、あるいは石列として仮番号が振られている。報告書では石を列状に配置した遺構という形状は同じであると考え、これらをまとめて石列に一括している。各遺構出土遺物では注記作業の簡便化のために、調査段階の遺構記号をそのまま用いている。また、調査段階では個別に把握された遺構が整理時に照合すると、ひとつの遺構を構成するとみられる場合もあった。例としてはSH22とSK398・397とSF01、SX04に統一したSX02・SK361・SH23、ST08としたSH05～08などがある。このような場合は遺物の注記は調査時の取り上げに従い、本報告書の記載はまとめている。

3. 地形環境と基本土層

・(1) 地形環境

長野県北部にある善光寺平は、その中央西縁に松本平から山地内を流れ下った厚川が広大な扇状地を形成して千曲川と合流する。この厚川扇状地によって千曲川は盆地東縁の山際に押しやられるが、その反対側の千曲川右岸では川東山地からいくつも尾根が手の指状に沖積地へ突出して千曲川岸まで達して平地を分断する。そのため、千曲川右岸では3方を山に囲まれ、残る1面も千曲川で閉塞された湾状地形が並列する。各湾状地形内では千曲川沿いには自然堤防と後背低地が形成され、手手には崖錐地形や沢が形成した扇状地・押し出し地形が認められる。本遺跡周辺もこうした湾状地形のひとつにあり、奇妙山・尼師山から延びた尾根で東・南・西を囲まれ、平地を臨む1方も千曲川で閉塞される湾状の景観を呈する。その内部の平地部分は規模が小さく中央まで千曲川旧河道が入り込んでいたため、千曲川右岸の自然堤防は山際に取りつく形となり、旧河道の左岸にあたる部分には牧島と呼ばれる中州状微高地が形成されている。この牧島はかつて千曲川左岸の更科郡に帰属していたが、江戸時代の戊の満水で千曲川の流路が現位置に移動してしまい、現在は千曲川右岸にある中州状微高地となったものである。同様の状況は千曲川沿いに多く認められ、近世には同一村であったものが千曲川の右岸と左岸に分離してしまった例は多い。

本遺跡は牧島を中心とする湾状地形の北東山麓に立地し、西に旧河道跡を臨んだ自然堤防と後背低地、さらに崖錐地形から構成される。調査では千曲川旧河道に面した西側から地形ごとに調査区の呼称を与え、



第7図 小滝通跡の地形と基本土層

D区西（微高地）、D区（低地）、C区（微高地）、B区（低地）、A区（崖錐地形）とした。このなかでA区は巨視的にみると崖錐地形となるが、微視的にみるとSH04・09より東側山手の緩斜面、その西側の平坦地、南部の低地の3つに分けられる。本報告ではそれぞれ「A区緩斜面部」、「A区平地部」、「A区低地」と呼称している。

(2) 各地区の基本土層

多様な地形が含まれる上に人為的な整地土や耕作土層が組み合わさっており、しかも調査記録に粗密があって基本土層を整理しきれなかった。そこで煩雑ながら地区ごとに遺跡の土層を地形別に併記する。

ア. A区の土層

場所により微細地形が異なり、土層枚数も多く複雑である。調査段階では統一した基本土層として整理できていなかったため、ここでは調査で作成された土層図を元に類似土層をまとめて基本土層として記述する。なお、概略の堆積順序は上から耕作土となる褐色～黄褐色土、低地部に分布する近世水田関連とみられる灰白・褐灰・暗褐色のシルト・粘質土、中世末～近世の整地及び遺構群が含まれる暗褐色土・褐色土群、山土の堆積土となる暗褐・褐・黄褐色土層群、千曲川系堆積土の砂・シルト、ラミナ構造土層群となる。これより下層は未確認である。

(現耕作土)

- 1 a層 現耕作土にあたり、緩斜面部で褐色～にぶい褐色、平地部で黄褐色、低地部では水田耕作によって褐灰色を呈する。平地部の低地寄りでは1 a層に類似したにぶい黄褐色土層がある。
- 1 b層 暗褐色土。緩斜面部先端付近から低地寄りに分布する。現耕作土に伴う整地土と思われる。

(低地水田関連土層群)―近世水田

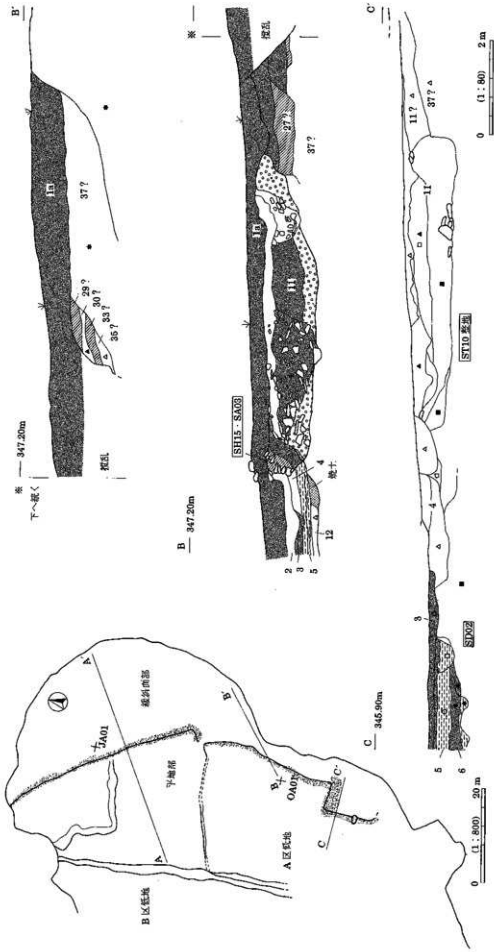
- 2層 にぶい黄褐色～暗褐色土。低地のみに分布する水田耕作土で上面が2次調査1面にあたる。B区2・3層に対応すると思われる。
- 3層 褐灰色粘質土。水田耕作土で上面は2次調査2面にあたり、分布範囲は2層に同じである。1次調査側道部分ではSD03の片割を切るように分布し、SD03自体は本土層下面が検出面となる。B区4～6層に対応するか。
- 4層 暗褐色土。山土起源の堆積土でSA03やSH30の前面を中心に分布する。2次調査低地3面は本土層上面を露呈させたものである。
- 5層 灰黄褐色～褐灰色粘質土。全体的に粒子が細かい。B区7層に対応か。
- 6層 灰黄褐色土。2次調査域5層の下にあるが、1次調査地点では対応層が不明であり、基本土層と捉えうるか問題がある。

(平地部～緩斜面上部土層)―中世末・近世初頭整地土～近世耕作土?

- 7層 褐色土。A区南端11層上に位置する。形成過程は不明である。
- 8層 褐色土。1次調査域のSH04以西の平地部に分布する。土層の起源は不明である。
- 9層 暗褐色土。緩斜面に分布し、上面遺構SH04はこの土層に含まれる。5層と対応する。
- 10層 灰黄褐色土。4層と対応し、1次調査平地部に分布する。上面でI面上層遺構、下部で下層遺構を検出した。
- 11層 暗褐色土。SH09・14～16・30、SA03等に伴う整地土。場所により礫や山砂を多く含む。
- 12層 褐色～暗褐色土。A区南部の11層下に部分的にみられる。

(山土の堆積土層)―縄文?～中世末以前

- 12～38層 暗褐・黒褐色土と褐色土、黄褐色土の相互堆積である。枚数が多いので個々の土層について



第9圖 A区 土層 2

は省略し、全体を通して説明する。12・14・17・19・21・26・28・34層が褐色～にぶい褐色土、23・25・27・29・33が黄褐色～黄褐色土、31・36が灰色～褐灰色土、それ以外が黒褐色～暗褐色土である。全般的に褐色～にぶい褐色土と黄褐色～黄褐色土層には礫・山砂は余り多く含まれておらず、むしろ暗褐色～黒褐色土層に顕著である。また、山際側ほど褐色～にぶい褐色土と黄褐色～黄褐色土が堆積するのに対し、部分的に互層状態となるものの暗褐色～黒褐色土は緩斜面の先端側に厚く堆積する傾向がある。これらの土層は分布から大きく13～15層、16～24層、25～30層、31・32層、33～36層に区分できる可能性がある。まず、31～34層が傾斜して堆積して先端に2次的な31・32層を形成し、それを覆うように23～28層が傾斜を減じながら堆積したようである。そして、一定の高さになったところで傾斜の急な低地側前面に16～24層が堆積し、最後にその先端に13～15層が堆積したとみられる。中世末以後の整地に際して13・16層より上部が削平されている可能性もあるが、全体的な傾向としては時代を追って低地側へ押し出すように堆積したとみられる。これは一定の高さまで堆積すると、より傾斜が急な低地側へ押し出すように堆積を繰り返した結果とみられるかもしれない。

遺構検出面との関係ではA区南部低地脇の整地以前に分布する暗褐色土～褐色土12層で1次調査SH14下部の焼土跡、2次調査のSX06を検出し、21～25層上面が古代竪穴住居跡SB02の検出面、29層上面がⅡ面調査面、33層上面がⅢ面調査面、35・36層が縄文土器が検出されたⅣ面にあたる。このなかで古代の住居はⅠ面として中世遺構と一緒に検出しているが、本来は異なる基本土層に属する。

なお、上記の土層で15層も途中までしか確認しておらず、13・14層を含めて整地土の可能性も残る。さらに、37・38層は36層より下層に位置する礫を多く含む暗褐色土である。A区南壁の土層図下部及び2次調査の整地土層図の山手に堆積する土層が類似するので、同じ番号を当てたが、直接対比できるか断定できなかった。

39層 におい黄褐色土。A区南部のST10基礎より南に分布する。SD04の上面を覆い、低地脇で消える。SD04はST10整地に切られるので、本層と整地はいずれもSD04よりも新しいと判断される。分布はA区整地と類似して整地の可能性があるが、土質はシルト質であり、A区の整地土とはやや様相が異なる。

40層 暗褐色シルト質土。A区南部のST10より南に分布し、上面にSD04が位置する。

40'層 黒褐色シルト質土。40層に類似する。ST10より南に分布し、40層の山手上部に位置する。

(千曲川系堆積層)―縄文以前

41層 遺構・遺物が検出されないため一括した。砂・シルトから構成される土層で、一部にラミナ構造をもつ。下部は砂などの粒子の粗い土層で構成され、山際まで入り込んで緑灰色を呈する。上部ほど粒子が細かく、しかもA区中央部が低くなる。そのためか、細い流路状の落ち込みがいくつか確認できた。

42層 褐灰色粘土。35層より下部の山際に分布する。土層の供給源は不明である。

以上の土層を遺構・遺物関係から時代別に整理すると、1層が現耕作土、2～3層が近世(後半)水田、10・11層が中世末～近世初頭の整地で1次調査では10層の上・下が遺構面となる。6層、12層及び10層下面は整地直前の遺構面、21～25層上面が古代、それ以下は年代の詳細は不明ながら29層上面が1次調査Ⅱ面、33層上面がⅢ面に対応し、35・36層が縄文中期(以後?)とみられる。なお、35・36層がA区下層の千曲川系堆積層の上に載ることから縄文中期頃まではかなり山際まで千曲川の影響が及んでいたが、やがて次第に山からの供給土のほうが勝って傾斜地が拡大するようだ。これは千曲川の影響減少と山からの崩

落土の増加が原因と思われる。

イ、B区の土層

B区はA・C区中間の低地で、土質から1～3層のやや砂質の残る粘性土、4～6層の粘性強くしまつた土、7～11層の砂質の強いシルト、12層の砂を含む粘土、13・14層の植物遺体を含む粘土（泥炭）、15層の砂・シルトのラミナ構造土層群に区分できる。

（現耕作土）

- 1層 褐色土。現耕作土にあたり、A区1a層に対応。下部には水田の酸化鉄・マンガンの浸透による薄い黄橙色・暗褐色土層がある。

（低地水田耕作土層）—近世

- 2層 におい黄褐色粘性土。水田土壌と思われ、下部に酸化鉄浸透層がある。A区2層に対応するか。
 3層 におい黄褐色粘性土。A区2層に対応か。数枚に細分できる可能性がある。
 4層 におい黄褐色粘性土。粘性が強く締まっている。土質・標高の比較からA区3層に対応か。
 5層 におい黄褐色粘性土。6層よりやや暗めの色調で粘性が強く締まっている。A区3層に対応か。
 6層 におい黄褐色粘性土。7層に類似するが、砂・礫がわずかに混じる。A区3層に対応か。

（低地堆積土層—一部水田の可能性あり）—近世初頭以前

- 7層 におい黄褐色シルト。砂質が強く、砂・礫がわずかに混じる。内耳鍋の破片が出土している。A区5層、C区2'層に対応すると思われる。
 8層 におい黄褐色シルト。上面が1次調査B区検出面にあたる。本層もA区5層に対応か。
 9層 灰白色シルト。細砂に近い。
 10層 灰白色シルト。全体的に細砂を多く、粗砂・小礫を少し含む。
 11層 におい黄褐色シルト。
 12層 におい黄褐色シルト。細かい黒褐色土が縞状に入る。
 13層 黒褐色粘土（泥炭）。植物遺体を含む。
 14層 黒褐色粘土（泥炭）。上層より暗めで植物遺体を含む。

（千曲川系堆積土層）

- 15層 黒褐色砂と灰白色砂のラミナ

他地区土層との対比関係はA区1層=B区1層、A区2層=B区2・3層、A区3層=B区4～6層、A区5層=B区7・8層=C区2・2'層に対応すると思われる。遺構・遺物はB区7層で内耳鍋破片が採取され、8層上面で内耳・カワラケ・唐津を出土したSH17を検出している。2次調査C区微高地よりではSD12～14を検出しているが、層厚の薄いB区端部であることや遺構自体の遺構下部を検出したとみられることから構築面は上層に求められる。各土層の時代は7・8層が中世後半～近世初頭、6層以上が近世（後半以後）で水田土層とみられる。なお、2次調査のプラントオパール分析でB区13層まで水田の可能性が指摘されるが、遺構は確認できていない。

ウ、C区の土層

C区は微高地にあたり、土層枚数も少なく比較的単純に捉えられた。

（現耕作土—千曲川系堆積土層？）近世末以後

- 1層 におい黄褐色土。現耕作土を含み、薄いところでも厚さ60cmを測る。C区より西側に分布し、B区境では2層水田を覆う。洪水性堆積物である可能性が高い。

（遺物包含層）—中世～近世

- 2層 褐色土。遺物包含層及び遺構埋土の基調となる。

2'層 B区7層に類似するが、酸化鉄の浸透で褐色味を帯びる。2層との区分は不明瞭で、ほぼ同一層と捉えうる可能性がある。

(微高地形成基盤層)―古墳時代以前？

3層 土が混じらず、砂・砂礫・シルトで構成される。一部の深掘りトレンチでは地表面下2m以上連続し、ラミナ構造が認められる。出土遺物は一切ない。

2層が遺物包含層にあたり、3層上面が遺構検出面である。また、SX03のように遺構上面の石積やSX04の土壇状遺構が認められたことから、1層は洪水性堆積土層とみられる。他地区との土層対比では1層がD区1層・D区西1層に対比され、2'層はB区7層に対比しうる。1層の形成時期はB区2層を覆い、B区2・3層と対比しうるA区2層は近世後半以後とみられることから近世末期以後と思われる。2層に関しては遺構・遺物から中世～近世の1層堆積以前とみられる。3層の形成時期は明らかでないが、中世以前の遺構が検出されないことからすべし少なくとも中世ではC区微高地が安定していたと思われる。また、僅かながら出土した古墳時代と思われる土器小破片を積極的の評価すれば古墳時代以前に遡る可能性はある。

エ. D区の土層

D区はC区・D区西微高地中間の低地にあたる。近世においては水田としての利用が認められるが、中世以前の遺構は検出されていない。土層記録は1次調査側道部（調査区南壁）、2次調査、1次調査本線部分（調査区北壁）の3地点で作成されたが、分層方法と土層の記載が若干異なる。全体的には上部にC―D区西に共通するにぶい黄褐色土層に覆われ、その下に土中の金属イオンの影響を受けた灰～褐色を基調とする粘土・シルト、最下層にC区から続く砂礫層が分布する傾向が認められる。ここではD区西と連続して土層図が作成され、しかも比較的深く掘削された1次調査の側道部分の記録を標準としてD区基本土層として記述する。

(現耕作土―千曲川系堆積土層?) 近世末以後

1層 にぶい黄褐色土。現耕作土を含み、薄いところでも厚さ60cmを測る。C区より西側に分布し、B区境では2層水田を覆う。C区からの連続関係から洪水性堆積物である可能性が高い。

(近世水田層)

- 2層 褐色砂質土。1層堆積以前の耕作土にあたる。下部に酸化鉄・マンガン集積が認められる。
- 3層 褐色砂質土。2層に類似し、下部に酸化鉄・マンガン集積が認められる。現用水に先行するとと思われる古用水上面を覆い、トレンチ西端まで広がる。
- 4層 にぶい黄褐色砂質土。下部に酸化鉄・マンガン集積あり。古用水対応水田層か。
- 5層 にぶい黄褐色シルト。マンガン全体的に浸透する。水田耕作土層とみられる。
- 6層 にぶい黄褐色粘質土。古用水に先行するさらに古い用水を伴う水田層。

(水田以前の土層)

- 7層 褐色シルト。灰色のブロック土を僅かに含む。D区中央の低い部分のみに分布する。
- 8層 にぶい黄褐色粘質土。C区2層に対応する可能性がある。
- 9層 にぶい黄褐色シルト。8層よりやや砂質である以外は同様。土層の標高比較から1次調査本線部分の9層対応と思われる土層から内耳鍋破片が採取されている。
- 10層 褐色粘土。全体的に灰色を呈するが、酸化鉄の浸透が著しく褐色にみえる。
- 11層 暗褐色シルト。かなり砂質が強い。D区全体に広がるが、D区西土層の対応は不明である。
- 12層 黒褐色粘土。D区中央から西に分布。土質や色調から細かく細分できる。
- 13層 C区3層から連続する砂・シルトの互層。C区側からの傾斜は確認できたが、D区西側には立ち

上がりが確認できていない。

D区の土層はC-D区西に連続する1層、砂質の強い2・3層、粘質土とシルトが交互にD区一杯の幅で分布する4~10層、D区中央を中心に分布して暗褐色・黒褐色を呈する10~12層、C区3層から続く13層に概略大別できそうである。4~10層については厚いシルトと薄い粘質土が交互にみられる4~7層と、土質が異なるものの層厚が類似する8層以下の土層にさらに細分できるかもしれない。このシルトと粘質土が交互に現われる様相は流速の違う堆積が交互にみられるか、同一堆積契機内の流速スピードの違いによるのか、洪水堆積と水田耕作で安定した土層が連続したものは不明である。ただ、この粗粒子と細粒子土層の互層は低地B区では認められず、河川本流に近い堆積土の多さに由来することは想像される。また、2次調査で2・3・4層対応すると思われる土層から採取された土壌サンプルではいずれもかなりの量のプラントオパールが検出されており、水田として利用されたことが推測できている。したがって、上記のような粘質土とシルトの互層は洪水が少なく安定的に耕作されていた段階と、洪水で耕作土が上昇する段階が交互に現れた結果とみられる可能性もある。

遺構・遺物と年代についてみると1層が近世後半以後の洪水土の可能性があり、2~6層はそれに先立つ水田とみられる。7層以下はどこまで水田として利用されたか明らかでないが、D区西端で検出された現用水に先立つ古用水の関係から7層前後までは可能性が高い。そして、8・9層がC区2層との関係から中世末から近世頃とみられようか。このD区低地の形成時期は断定できないが、D区西の土層と大きく異なる様相からは少なくとも11~12層段階で低地が形成されていたとみられる。

オ. D区西の土層

トレンチの土層記録にしたがって記述する。トレンチは地表面下約2mほど掘削したが、隣接するD区とも様相が全く異なっており、隣接するD区下層の砂礫層、あるいは水田層は認められなかった。上部に褐色系の土層が厚く堆積し、下部には薄い褐色~暗褐色の砂質土が認められる。全体的にシルトよりも細かい堆積物で占められる傾向がある。

- 1層 褐色砂質土。D区1層のぶい黄褐色土に対応する。ただし、本土層下面標高はD区2層よりも若干低くなり、調査では識別できていないものの、堆積時期の異なる数枚の土層が含まれる可能性が高い。
- 2層 褐色土。堅く締まっている。D区西全域に分布し、西側ほど厚い。
- 3層 ぶい黄褐色土。砂質が強く、シルトに近い。D区9層か11層に対比しようか。
- 4層 褐色土砂質土。3層と平行して分布し、西側で低くなる。
- 5層 ぶい黄褐色土。砂質で灰色土と粗砂を含む。D区西の東部の傾斜部分にみられる。
- 6層 暗褐色砂質土。トレンチの中央が最も高く、東西へ傾斜する。

このD区微高地の土層は他地区と大きく異なる。しかも、旧河道跡に近いわりに粒子の粗い砂層や砂礫層がみられない。B~D区で最下層に砂礫・砂層が確認され、上層はシルト以下の細かい土で占められる傾向からするとD区の微高地の形成はC区の微高地を形成した3層の堆積よりも新しい段階の所産とみられよう。その時期は特定できないが、D区との対比からは中世~近世に至る以前にはすでに低い微高地が形成されはじめ、それと対応してD区が低地となって水田に利用されたのだろうか。ただし、D区西の現地表面標高はC区とさほど変わらないが、1層堆積以前ではC区微高地よりかなり低い。1層が単一契機ではなく複数回の洪水による可能性をもつものの、現在みる景観は1層の堆積が大きな役割を果たしたことは間違いない。

(3) 地形形成過程

次に上記の所見に基づいて各地区の堆積状況と地形変遷を簡単にまとめておく。D区西微高地は全体的に粒子の細かい土層で構成される。その形成時期はC区微高地より新しく、本来は低い高まりであったが、1層の堆積でC区と同じ標高になったとみられる。低地D区は最下部にC区微高地より続く砂礫・砂層があり、その上にD区西の微高地から続く土層、低地段階の褐色・にぶい黄褐色・暗褐色を基調とする堆積土、水田関連土層、最上層にD区以西から連続するにぶい黄褐色土が覆う。C区微高地は最下層に砂礫を中心として砂・シルトのラミナ構造がみられ、その上に中世遺物の包含層と遺構埋土の基調となる暗褐色土、最上層にD区以西から続く褐色・にぶい褐色土が厚く堆積する。C区の微高地の形成時期は断定できないが、(古墳)中世以前であることは間違いない。B区は最下部が確認できていないが、下部に泥炭層、その上はB区と類似する灰白色・褐色土、水田関連土層、現耕作土が続く。D～C区の1層と同一視できそうな褐色・にぶい褐色土層は確認できず、水田耕作で攪拌されてしまった可能性がある。A区は一番土層が複雑で、最下層に山際まで及ぶ千曲川の堆積土、その上に山土の黄褐色、褐色土、暗褐色・黒褐色の交互堆積、中世末期から近世初頭の整地、低地の水田関連土層、近世以後の耕作土とみられる褐色・にぶい黄褐色土が載る。この褐色・にぶい褐色土はC区以西の最上層の土層と類似するが、B区低地で一旦途切れることやA区緩斜面部にも分布することから、直接対応できないと考えた。

上記の土層で同一あるいは対応すると思われる土層はC区以西の1層褐色～にぶい黄褐色土、A区低地とB区の近世水田層群などがある。また、遺構・遺物の年代比定と合わせるとD区8・9層—C区2・2'層—B区7層—A区5層—A区9・10・11層はほぼ中世後半～近世初頭(近世)に該当しよう。

以上から小滝遺跡土層を概観すると、垂直方向のみならず、平面的にも西側(旧河道)寄りほど形成時期が新しい地形・土層が分布し、千曲川系堆積土では粒子の細かいものが主体となる傾向が指摘できよう。また、A区の山土堆積土層の多くは千曲川系堆積物の上に載っていると看取され、時代が下るにしたがって山土の堆積が増加するようだ。なお、低地については本流に近いD区のほうがシルト質、あるいは砂質土層の枚数が多い傾向があるが、その理由は明らかにできなかった。以上の傾向から、小滝遺跡は千曲川の本流の影響を受けやすい場所であり、古い段階ほど千曲川の影響が山際まで及んでいたとみられる。こうした変遷を時期ごとに整理しなおしてみよう。

縄文時代 縄文時代と想定できる土層はA区35・36層であり、その下には千曲川系の堆積物で形成された微高地がある。つまり、縄文時代中期(以後～古代以前)では千曲川がかなり山際まで流れ込んで影響を与えていたが、しだいに低地側へ移動して山土の堆積が増加していくとみられる。

～**古代** A区のみしか様相がわからないが、A区では山土が厚く堆積して緩斜面を形成し、そこに竪穴住居跡が構築されることになった。この時期で問題になるのはC区微高地が存在していたかどうかである。僅かなC区出土の古墳時代と思われる土器器出土やA区の山土堆積土が増加する点に注目すれば、この時期にはA区は千曲川の影響を受けにくくなる＝C区微高地はできていたとみられる。しかし、弥生～古代の土器は圧倒的にA区出土が多いこと、さらにC区では中世以前の遺構は確認されないという点では千曲川の直接的な影響を受けやすい不安定な環境であったとみられる。

中世～近世 中世前半の遺物は少量ながらC区で認められ、中世後半になって遺構が多数認められるようになる。中世にはC区の微高地が安定していたことが知られる。一方で中世後半の遺物を出す土層はD区低地へも連続しており、D区以西の河道付近には低い微高地が形成されはじめていたようだ。この中世後半以後の時期が最も安定していたようである。この安定傾向からすれば、近世の居住遺構がC区で認められていない点は環境によるものではなく、むしろ社会的な背景によるものと推察される。

近世末期 近世は比較的安定していたとみられるが、近世末期に唐突にC区以西に1層の堆積が認められ

る。D区西では分層できる可能性もあるが、基本的には1回の契機による厚い堆積土があったことは確実視でき、これは通常の洪水とは様相が異なったものと思われる。近世後半期頃の大洪水としては千曲川の戌（いぬ）の満水、善光寺地震に伴う犀川氾濫が知られる。前者は寛保二年（1742）に千曲川上流の東信に降った連続雨と台風で千曲川の水が増水したものである。この時に現在位置に千曲川流路が移動し、遺跡近くの牧島は千曲川左岸から右岸へ移ったとされる。後者は弘化四年（1847）に起こった善光寺地震によって上流で地すべりが発生し、その土で堰き止められた犀川が水圧に耐え切れなくなって一気に川中島地区の犀川扇状地にあふれ出たものである。この時の氾濫で扇状地の先端対岸にある大室も水害にあったとされる。調査結果から推測される年代では後者の可能性が高い。また、善光寺平において戌の満水の洪水土層が特定できたものはないが、善光寺地震の犀川氾濫土層は川中島地区の新幹線建設に伴う発掘調査でいくつか確認されている。ここでは犀川氾濫土層は暗黄褐色土とされ、本遺跡C区以西の1層と色調や土質は類似する。以上のことからすると本遺跡のD区以西～C区1層は善光寺地震に起因する犀川氾濫の所産である可能性が高いが、詳細は今後の検討によるものとした。

参考文献

1995「図説 北信濃の歴史 上巻」郷土出版

1998「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 篠ノ井遺跡群 石川条里遺跡 築地遺跡 於下遺跡今里遺跡」長野県埋蔵文化財センター

4. 歴史的環境

本遺跡は大室古墳群で有名な長野市大室にある。古代においては高井郡に属していたが、現在は旧埴科郡に属する長野市松代町に含まれる。これは江戸時代に松代藩領であったことにもよるが、明治22年市制・町村制の施行に際して、隣接する川田村・牛島・大室で一村を成すとの郡長の提案に対し、大室村は地形的な条件から埴科郡柴村や更科郡牧島村・小島田村の一部との合併を望んだことによる。古来の行政区分は別としても生活環境的には南に隣接する牧島や柴村に近いと認識されていたようである。なお、明治時代の町村誌では大室村はかつて濠城のある尾根を境に上室・下室に別れていたが、何時にか1村となったと伝える。また、明治時代では水田6町8反4畝19歩、畑は73町4反4畝29歩と圧倒的に畑が卓越し、物産として菜種・綿・梨・薪・割石が挙げられる。このなかで割石は「青色を帯び、字岡崎霞城より出、日々三百五十貫目出る、輻一尺、厚五寸、長三尺一人持二十しめ舟にて隣郡隣村へ出す。」と記され、その採掘地は遺跡背後の山腹に現在も残る。

この大室地区は先述したように尾根と千曲川で周囲を区切られているが、同様の地形は善光寺平南東部の千曲川右岸によくみられ、それぞれがひとつの地域的なまとまりとなっている。長野市域の千曲川右岸でみると、南から松代、牧島、大室、若穂川田、若穂綿内の各地区がこうした地形的に区分された地域単位となっている。このなかで松代、若穂川田、若穂綿内は比較的広い平地を含む規模の大きな地域となるが、牧島・大室は平地が狭く、しかも牧島では旧千曲川が平地内に湾曲して流れ込んでいたために利用できる平地も狭い。また、松代は松代藩の城下町から発展した町があってひとつの政治・経済的な中核をなし、若穂川田や若穂綿内は広い水田地帯を控えて農業を基本としながらも、北国街道や群馬県へ続く保科道・大笹街道、あるいは千曲川右岸の谷街道の結節点として近世の宿場町、あるいは農産物の集積地として仲買人・酒造業者の屋敷から発展した町並みがみられる。一方の大室・牧島周辺では北国街道沿いを中心として集落が営まれているが、あまり政治・経済的な役割は担っておらず、隣接した若穂川田や松代町にはさまれた小集落にあたる。

大室・牧島地区の遺跡は千曲川沿いの自然堤防に大室・村北遺跡（縄文中期・後期、弥生後期、古墳時代、平安）、牧島遺跡（平安（古墳後期?））があり、山際にある崖地地形や沢が形成する扇状地・押し出し地形・山際に接する旧河道外側の自然堤防には小滝遺跡・一等牧遺跡（弥生後期・古墳）、大室古墳群北谷支群、村東山手遺跡（縄文中・後期、弥生後期、古墳、奈良・平安）がある。そして、各地域を区切る尾根上には古墳や山城があり、遺跡背後の尾根には霞城・大室古墳群霞城跡群、西の金井山には金井山城・北平1号墳・大室古墳群金井山支群が分布する。このように大室・牧島地区周辺では古墳群のみが目立ち、平地も狭いためあまり大きな居住遺跡はみられないようだ。一方、隣接する松代・若穂川田地区は居住域となる自然堤防や生産域となる後背低地も広大で、松代地区の松原遺跡（縄文前期～中期、弥生中期・後期、古墳時代前期、奈良～平安、中世）、若穂川田地区の町川田（弥生中期・後期、弥生後期末～古墳初頭、平安）・川田条里遺跡等の相対的に規模の大きな遺跡が形成されている。以下には上記の遺跡分布と史料的検討からみた遺跡周辺の歴史的環境について時代別に触れておく。

縄文～古墳時代

縄文時代の遺跡は霞城の尾根北側にある大室の大室・村東山手遺跡、あるいは金井山南側の松代の松原遺跡などが知られるが、牧島周辺では不安定な環境、あるいは活動領域の境にあたるのか縄文時代の遺跡があまり知られていない。弥生時代は自然堤防を中心にいくつか遺跡が知られるが、狭い後背低地を生産域とする小居住遺跡とみられ、古墳時代へは直接連続するものではないようだ。古墳時代には集落が不明瞭で古墳のみがある。古墳時代では地域的なまとまりが形成されると共に、一定の領域内のそれぞれの場所に空間的意味が行与されるようだが、当地域は広大な後背低地・自然堤防を控えた松代・若穂に挟まれた境界域として位置づいていたのだろうか。なお、この大室古墳群に埋葬された人々がどこに居住していたのかは諸説ある。その特長的な古墳形態から大室周辺に限定する考え、あるいは大室古墳群の古墳数からみても広域に求めるべきとする考えもあるようだ。こうしたなかで千曲川対岸の犀川扇状地側の遺跡に埋葬者の居住地を求める考えもある。

古代

古代の遺跡は大室の自然堤防上にある村北遺跡や、奈良・平安時代の堅穴住居跡が検出された村東山手遺跡がある。このなかで靱を出土している村北遺跡は注目される。遺跡周辺は文献に記載される古代の郡では高井郡に属するとみられている。ただし、遺跡周辺は高井郡南端にあたり、遺跡南西にある金井山より南は埴科郡、千曲川対岸は更科郡となるように古代3郡の境界域といっても良い。埴科郡と高井郡の境が何に由来するか不明であるが、更科郡境は千曲川とみる説が多い。後の時代では千曲川の流路変更が度々あってひとつの村が千曲川で分断されたり、時代によって千曲川沿いの村の編成が異なることがみられ、郡の帰属は少し異なるようだ。もちろん、古代の郡の意味が後にどのように意識されていたか不明であるが、遺跡にほど近い牧島は現在では高井・埴科郡のある千曲川右岸にあるが、明治時代の町村誌では更科郡に含めて掲載される。なお、明治時代の町村誌では後考を待つと断りながらも、村人が郡境石と称する自然石が村内にあったことを記している。

もう一つ、当地域周辺で触れておかなければならないのは「大室牧」である。これは平安時代の延喜式にみえる牧の一つであるが、地名からも当地域に比定する説が一般的であり、現在も周辺には「牧島」「一等牧」といった「牧」を含む地名がみられる。しかし、この大室牧については構造や範囲についてほとんど解明されておらず不明なところが多い。構造的には千曲川の中洲を利用したものでだろうとされるが、範囲については現千曲川対岸にある真島（馬島）、あるいは若穂川田の牛島も牧に関連する地名として千曲川沿いに展開するとみる説もある。このなかで、牧島は江戸時代に千曲川の流路が変更する以前においては千曲川左岸にあったとされ、馬島も千曲川左岸にあって更科郡に含まれる。また、牛島は川田にある

中洲状の微高地ながら距離的には少し離れている問題もある。牧がなぜ大室に設定されたのかの理由もよくわからないが、中洲を利用する地形環境的な利点に加えて、郡境にあたる地理的な環境も関係したのだろうか。いずれにしろ、大室牧の構造、範囲については今後の検討に寄らざるをえない。

中世

周知の中世遺跡には霞城が知られるのみで、現状では考古学的に地域の様相を語るには情報が少な過ぎる。そこで、以下には文献史料からみた周辺の歴史的環境について触れておく。

当地域の地名を冠する武士として大室氏がある。この大室氏の出自は上杉藩「御家中譜系譜」では北信諏訪七家の一つ（諏訪・水上・大室・小室・寺尾・真島・善光寺等）で始祖を清和源氏とする。しかし、県下の武士が列挙される大塔合戦関連の伝記、あるいは結城陣番帳にはその名が一切みえず、文献史料で確認できるのは戦国時代からである。文献上の初出は武田氏滅亡後に北信に入った織田氏配下の森長可が大室左衛門に出した安堵状である。以後は上杉景勝の支配時代の安堵状を初めとするさまざまな史料にみえ、最後に上杉氏移封にしたがって転出している。このように大室氏は武田氏が侵入する前後頃にはいたようだが、それ以前についてはどのような系譜の人物なのかまったく不明である。

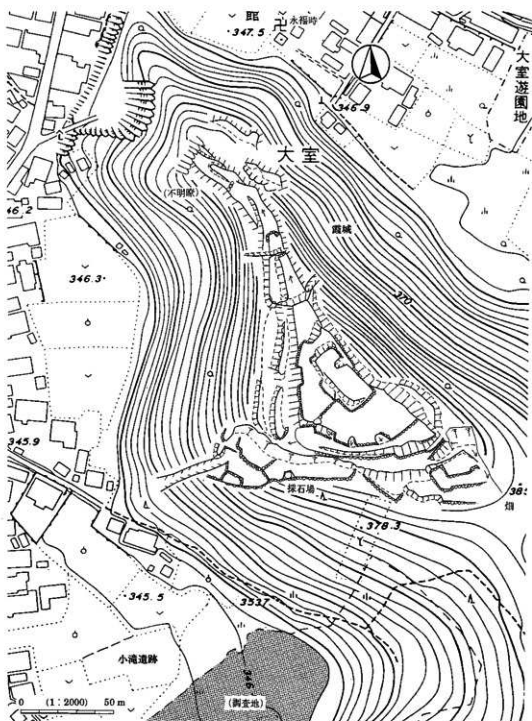
この大室氏に関連する遺跡として霞城が良く挙げられるが、一方で大室氏の居館跡は全く知られていない。これは大室氏に限ったことではなく、長野市周辺の戦国時代武士に共通するものである。例えば、周辺の地名を冠する屋代氏、清野氏、東条氏、寺尾氏、保科氏等の武士が文献に現れるが、どれ一つとして居館跡の場所が特定できていない。いくつか推定地があるが、いずれも山際に立地することを共通とするものの、その多くは堀の痕跡も不明瞭で一般的な土塁や堀で囲まれた平地居館の形態を当てはめることはできない。こうした状況からこれまでに知られる城館跡分布では、千曲川右岸では山城のみが多く、居館跡があまり分布しない偏在傾向を示すことにもなっている。ただ、県下の他地域では戦国時代に存在した居館跡は確実に認められることから、全く居館跡が存在しなかったわけではないと考えられ、居館跡の形態・立地が大きく変化しているものと予想される。この当地域における戦国時代の居館跡が不明瞭な様相の解明は今後の大きな課題として残される。

次に霞城についてみておく。霞城は遺跡背後の尾根の小ピークにあり、調査地はこの霞城主郭から約150m離れた南西山麓に当り、調査地と山城はごく至近距離にある。主郭の標高は408mであり、周囲の集落との比高差は60mと当地域の山城のなかでも低い。構造は小ピーク頂上に主郭を設け、周囲に切り岸や削平地を配する形態である。主郭は小ピーク頂上の比較的広い空間を占め、最も中核的な部分とみられる高さ1～2mほどの長方形土壇状遺構を東側端部に付設して南・西側が比較的広くなっている。主郭の西～南側周囲は石垣で取り巻かれており、ところどころ長方形に突出する部分が認められる。石垣はこの尾根周辺で産出する山礫を積みあげた低いものであるが、一般的にはこの石垣が霞城の付属施設とする説が多く、霞城を戦国時代末期の所産とする根拠の一つとされている。しかし、主郭部分もかつては畑として利用されたようであり、山城山腹にある近世・近代の石切り場でも石垣が多数認められるため、単純に霞城の施設とする説を疑問視する意見もあるようだ。主郭の西方向に延びる尾根先端側は切岸を設けて区切り、西側には細長い腰郭数段を付設させる。尾根続きは急斜面となるが、石積みを伴う狭い削平地状の段々が複数認められる。東側は小規模な狭く細長い郭が僅かにあるだけで目立った施設はない。上記にみたように主郭は西・南側が広く、最も中核的な土壇状施設はその反対側にあたる主郭東端に設置され、東側よりも西側に防御施設が多く認められる特長がある。また、山城の所在する尾根先端側もいくつか配石や削平地状の地形が認められるものや不明瞭であることから、霞城は基本的には西側を意識した構造とみられる。

この山城への登城ルートは南西側山麓にあたる調査城北約200mのところにある集落内の細い道から入

って西側に突出する枝尾根を上り、旧石切り場跡周辺を經由して主郭に至るルートと推定されている。上記にみた城の構造からもこのルートは妥当と思われる。このように推測されるならば、遺跡のある地点を含む西側が山城の「表」にあたり、現在の大室集落はむしろ山城の裏側となる。厩館は所在地が不明であるため山城との関係についてはわからないが、大室氏の居館跡を想定するならば、西側のほうが可能性が高いとみられる。ただし、尾根先端側からも山へ上る道があり、かつての古い登城道は尾根先端側から登るとする説もある。

以上の霞城の特長をまとめると以下の点が挙げられる。A. 城の規模は小さく、比較的コンパクトにまとまっている点、B. 小さいながらも主郭の空間はかなり広く、対して付属防御施設は数も少なく小規模で堀切は伴わないこと、C. 石積みを伴うとされることである。これらの特長についていくつか補足しておくとして、Aについては霞城が当地域の山城のなかでも小さい部類に入るが、若穂保科の加増城、奇妙山頂上の奇妙山砦のように非常に小さいながらも堀切や小削平地が明確に認められるタイプよりは大きく、むしろ中規模クラスの川田の古山城、松代の寺尾城に近い。このことから在地の武士がかかわる山城とみ



第10図 霞城 (作図 市川 隆之)

られる。Bについては近在の山城では掘切で区切って、やや広い郭をいくつか並列するタイプが多いなかで趣が異なり、狭く細長い小削平地のみを僅かに重ねるあり方は異質にみえる。例えば、隣接した松代の金井城・寺尾城、川田の古山城はいずれも主郭背後はもちろん、前面や連続する枝尾根を掘切で区切る造作が行われており、主郭ほどの規模ではないが、一回り小さい郭がいくつか付属する。ただ、他山城では逆に狭い削平地状遺構は川田の古山城の先端付近にあるだけで、むしろ主体的な存在ではない。こうした防御施設をどのように評価できるか筆者にはわからないが、掘切の有無や付属郭の形態の違いは個別の部分的な違いとしてみるより、全体的な基本思想の違いとしてみたほうが良いのかもしれない。なお、三島正之氏は小削平地の存在を古い形態の指標とされ^(註1)ており、これからすると本山城の基本形は古い形態を残す可能性が考えられる。

最後のCの特長であるが、これが従来より指摘される霞城の最も代表的な特長である。この石垣については中世末の所産とし、北信で最も新しい所産と位置付ける考えが一般的なが、後代の畑に関連する施設とみる考えもあるようだ。北信で石垣をもつ山城は屋代城・鷲尾・鞍骨・小坂城などが知られる。これらの山城はいずれも太平洋戦争前後から近年まで畑として利用されていたところでもあるが、基本的には山城の施設とする理解のようだ。このように周辺に類例がないわけではないが、霞城のように長方形の突出部を設けるものではなく、しかも石垣が配される場所はより狭い範囲に限定されているように思われる。なお、上記のような堀を伴わず、いくつかの石垣を伴う郭で構成されて主郭に1段高い土壇状の施設をもつ形態は近世城郭に類似する。北信では一時、織田氏配下の森氏が入っており、この時に霞城が構築された契機を求めることができそうである。しかし、北信に入って数か月の内に、本能寺で織田信長が倒れて撤退しているので石垣を用いる城を構築している時間はなかったと考えられている。このことは支配の拠点とされた松代城でも石垣が作られたのは近世初頭とみられている点からも推定され、霞城のみが石垣を用いる山城として構築される必然性がないとも思われる。また、通常こうした石垣を伴う形態の城では独特な虎口のあり方がみられるようであるが、霞城の場合では虎口といえる部分が判然としない。主郭に入る緩斜面状の入口は南側3か所にあるが、この周辺は石垣がそれほど顕著でなく、しかも主郭との比高差も小さい。さらに、霞城中腹には後代の石切り場があり、そこには類似した石垣があるので石垣を山城の時期の所産とできるか疑問も残るところである。この石垣の評価については今しばらくの検討が必要であるが、少なくとも石垣は近世城郭、あるいは織豊系城郭そのものではないことは確認できる。また、石垣が城郭施設として構築されたとなると、少なくとも森氏支配以後の所産と考えられるだろう。

以上の特長をみてきたなかでは、霞城は周囲に類似形態の城が見られず、勝手な裁量で作られているとみられる点、規模からすると少なくとも在地武士がかかわるものであることが考えられる。しかし、一方で周囲の山城と比較すると、所在する山が低い上に防御施設も貧弱とみられること、一方で山城の施設としては新しい要素とされる石垣のみが目立つ点は異質である。これをどのように考えるかが霞城を位置付



第11図 霞城石垣(突出部)



第12図 霞城石垣(正面)

ける鍵になるとなるが、現時点では何とも言いがたい。この要素のみを見るかぎりは戦争を意識した構造というより、見た目を重視したような感じもする。この霞城が何時に構築され、それがどのように変遷したのかを窺うのは難しいが、僅かな狭い削平地を先に挙げた三島氏の指摘に当てはめると、霞城は古い形態を残す山城ということになる。この推測からすると霞城は在地の大室氏が構築し、織田氏配下の森氏支配以後に石垣を加えたということになる。ところが一方で、大室氏の文献上の初出が織田信長配下の森氏が北信に入ってきた段階であるという点と、大室氏自身が有力な武士とは考えにくいことは注意される。根拠のない憶測ではあるが、これ以前の文献に出てこないのはよほど小さな武士であったか、新興勢力として出てきた人物ではないかとも考えられる。こうしたことからすると、森氏からの間接的に入手した情報で山城を作った可能性も出てくる。この場合、山城を構築する契機が問題となるが、大室氏が頻繁に文献にみえるのはすでに戦国大名の支配がおよんでいた段階であり、勝手な城の改築・構築は反抗と取られかねない危険性をはらんでいる段階といえる。しかも、諏訪大社の祭礼費用の負担はすでに村落に移って直接在地武士がかかわるものではなくっており、在地村落と武士のあり方も変化してしまっているとみられる。そうしたなかで、可能性を探ると森氏の撤退直後から上杉氏支配の及ぶ間か、あるいは戦国大名支配時代の公認の元につくられたかのいずれかが想定できよう。以上のように霞城について現段階で評価を下すことはできないが、これらの問題を解く鍵は石垣の評価と、石垣の有無は別としても類似した堀切を伴わない中小の山城が他に認められるかどうかにかかっていると思われる。特に後者の問題では当地域で類似した山城がもっと多く認められるならば、霞城の構築時期を遡らせることができると考える。これらの問題は今後の検討に依らざるをえないが、最後に霞城と本遺跡の関係の問題を整理しておく。

本遺跡とのかかわりで問題になるのは位置関係と存続時期の関係、さらにこれらに関連する石垣(石積)が見られる共通性である。まず、位置関係である。先にみたように、山城の主要登城道は西側にあるとみられた。西側から入る理由は大室氏に関連する屋敷が西側にあったことに関連するとも思われるが、この事実関係はわからないものの、少なくとも本遺跡は山城の表側にあたることは推測できる。この点では山城・居館跡の配置を含めた居住遺跡のなかに本遺跡も位置づいていた可能性がある。ただし、位置的にみて登城道から外れるため、調査地は大室氏の居館跡そのものとは見られないだろう。次に存続時間差であるが、上記に述べたように霞城自体の年代を特定できていないので確定的な所見がない。少なくとも石垣が存在するとすれば、16世紀末以後の年代は推定でき、本遺跡とも重なっていた可能性が高い。ただ、問題はそれ以前に遡るかどうかである。これについては断定しきれていない。

次に石垣(石積)であるが、石の積み方は類似しているように思われる。ただし、霞城中腹に見られる近世～近代にかけての石切り場にも類似したものが認められ、必ずしも同時性を保証しないと考えられる。また、本遺跡のA区で認められたものは後述するように近世初頭に下る可能性があるため、山城の主体的な年代とは一致しないともみられる。ただ、A区の年代推定の根拠も不確定なところがあり、現時点では直接結びつけることを否定しきれぬものでもない。当地域の石積や石垣のあり方の検討のなかで評価すべきことと思われるので結論は保留しておく。なお、霞城と呼ばれる所以は千曲川にほど近く川霧に包まれやすいことによるようである。霞城の先端の千曲川岸には離山があり、その中間を龍ノ口と呼ぶが、これは川霧が竜の吐く息にみたとられたことによるらしい。

近世

近世の状況については松代藩に帰属すること以外の詳細は調べられなかったが、ここでは北国街道と隣接する寺院についてのみ触れておこう。まず、北国街道であるが、上越から善光寺平へ出たルートはそのまま善光寺へ続く道と千曲川を渡河して千曲川右岸から松代へ向かう道に別れる。本遺跡を通るのは後者の道である。この北国街道は自然堤防上を南下し、本遺跡周辺では千曲川の河道跡の山手にあたる外側を

通り、金井山の最も低い鞍部（烏打峠）を越えて松代町へ入る。この道は中世にさかのぼるとされるが、松代へ入るには烏打峠の他に、もうひとつ東側のピーク脇を越えて松代温泉へ出る候可峠が使われていたとされる。この北国街道の位置は現集落内を通り、旧河道外縁に沿う農道が該当するとみられる。調査ではこの旧北国街道の推定地点を調査していないが、少なくともD区までの間では検出できていないので、現道周辺に比定するのが妥当と思われた。

次に周辺の寺であるが、遺跡地周辺には禅福寺・永福寺がある。禅福寺は調査地の南約300mの山際の緩斜面にあり、地形的には本遺跡のA区とまったく類似した地形に立地する。大滝山と号し、佐久郡正安寺の末寺の曹洞宗の寺である。寺伝では創建が天文三年で大室氏が創立したという。なお、この周辺では若穂川田の東光寺、綿内の春山にある如法寺など天文年間に創立されたとされる曹洞宗の寺がいくつかあり、いずれも山際に立地する。如法寺は江戸時代に現在地へ移転したため本来の場所は異なるが、東光寺とこの禅福寺共に集落から離れている共通点があることは興味深い。この禅福寺は江戸時代の承応元年に松代藩の真田信之の娘が深く帰依して諸堂を改築して諸道具を寄付し、また、周囲は岩肌が露呈する風景佳絶により藩主真田幸賢が良く訪れて書画を興したとも伝える。

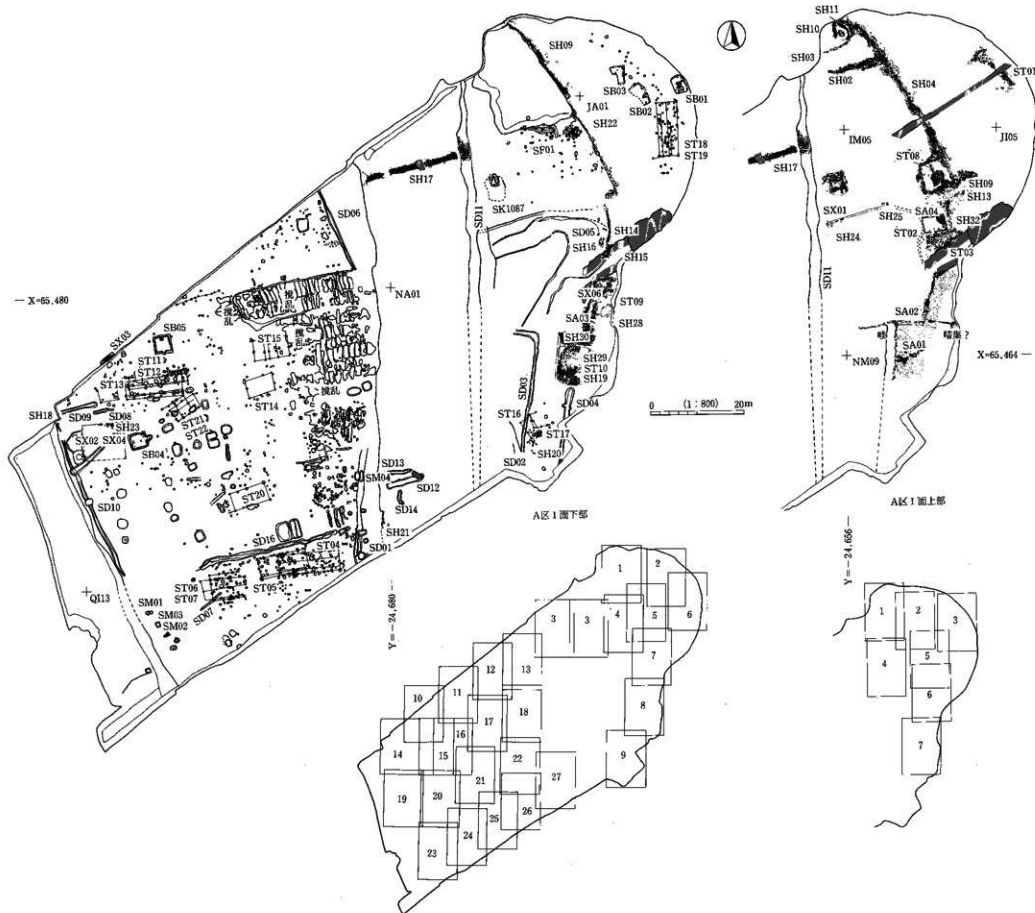
永福寺は尾根を隔てた霞城の北側山麓に位置し、真言宗の飯綱社神宮寺とされる。この永福寺は松代岩井の練光寺の末寺とされ、元禄年間のつちくれ鑑によると元禄年間より遡る数十年前にわけあって松代から大室へ転出したとされる。岩居堂の準堤観音と呼ばれる古仏がこの永福寺西南の岩の上（霞城のある山腹）にあったとされる。

なお、地域の伝承として調査地に寺堂があったという話も聞いたが、文献では確認できない。また、明治時代の信濃宝鑑の禅福寺の記載に伝承がかかっているが、それによると、かつて周囲は村もない原野であり、夜な夜な滝が光るのをいぶかしく思った僧が調べると観音像がみつかり、これをまつたという伝承が伝えられている。

註1 三島正之「第二章 第一節 縄張り調査」『歴代城跡範囲確認調査報告』更埴市教育委員会

参考文献

- 1995 『長野縣町村誌 北信篇』郷土出版
- 1997 『長野市誌 第八巻 旧町村史編 旧上水内郡 旧上高井郡』長野市誌編さん室
- 1980 『日本城郭体系 8 長野・山梨』新人物往来社
- 1983 『長野県中世城郭跡 分布調査』長野県教育委員会
- 1987 米山一政「更埴地方の氏人、城館跡」『更科植科地方誌』
- 1994 「つちくれ鑑」長野市松代史跡文化財開発委員会



第13図 全体図

第2節 遺構

遺跡内は多様な地形からなり、調査地区によって検出面や遺構・遺物の種類や年代が異なる。山際にあるA区では大別して4面の調査面があり、I面で古代と整地を伴う中世以後の遺構、II面で時期不明の焼土跡、III面で時期不明の土坑状の不整形な落ち込みを検出し、IV面では縄文土器破片を少量採取した。このなかでI面では整地による複数の調査面に更に細分され、1次調査で上下2面、2次調査では6面に分割調査された。ただし、2次調査の6面は同一整地面を分割調査した可能性もあり、4面前後にまとめられる。また、2次調査ではA区低地部分で各調査ごとに水田関連遺構が調査されているが、出土遺物からみると水田遺構はいずれも近世後半期以後の所産で整地上の遺構とは時期が異なる。低地B区はA区低地水田と対応する水田土層が数枚あるが、面的に調査したのは1枚のみであり、ここではA・C区をつなぐ道と思われる遺構も検出した。自然堤防C区では中世以後の遺構・遺物を検出したが、中世より遡る遺構はなく、遺物もわずかに採取されたに過ぎない。低地D区はB区同様に水田として利用されていることが確認できたが、近世以前の遺構は全く認められなかった。以上のように本遺跡では縄文中期以後の遺物が出土したが、居住遺構は古代と中世以後の所産しか認められなかった。また、中世以前の遺構・遺物はA区に集中し、中世以後においてC区以西にも居住遺構が認められるようになることが知られた。これは自然堤防C区の形成、あるいは安定時期が比較的新しいことを示すと思われる。

本報告では上記に述べたような遺構検出状況の多様さに鑑み、まずは時代ごとに大別し、中世以後については地区別に遺構を記述することにした。なお、層位的な上下関係を把握できたが、年代が特定できていないA区II・III面の遺構は層位的な所見から縄文時代～古代の中間に位置付けた。

1. 縄文時代～古代以前の遺構

(1) 縄文面—A区IV面

A区IV面はA区30層にあたり、縄文土器片が少量採取されたものの、遺構は検出されなかった。土器は破片で散在的に出土し、特定地点に集中する様相は看取されなかった。摩滅していないことから調査地背後の尾根鞍部付近からの流入品と思われ、直接調査域内で活動が行われたことを示すものではないが、千曲川系の堆積土がかなり山手まで及んでいた時期を想定する材料となった。

(2) 時期不明—A区III面

A区29層黄褐色土上面を検出面とする。土層の分布する山際のごく限られた範囲を調査し、土層の傾斜が比較的緩やかな地点で不整形な落ち込み3基を検出した。出土遺物は皆無で時期は不明であるが、層序からみると縄文時代中期～古代に位置付けられる。この不整形な落ち込みは木根、あるいは風倒木根の可能性もあるが、断定できなかったためここで取り上げる。

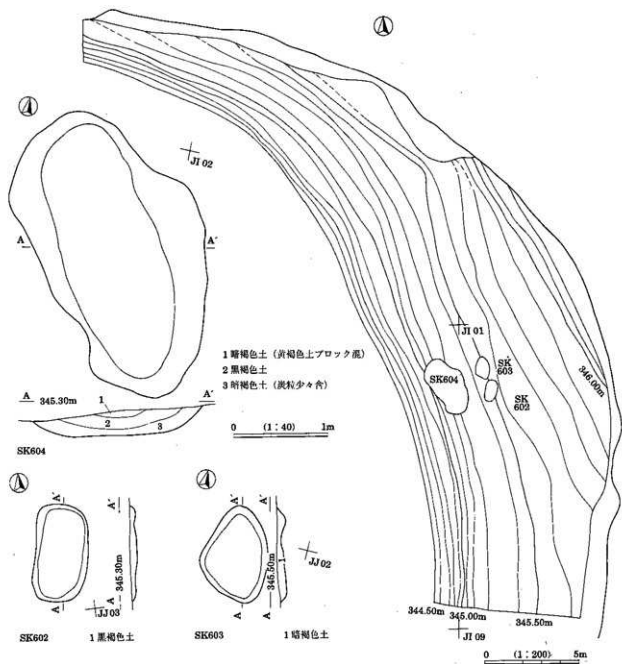
SK602～603 A区 JI02 (第14図、PL6)

A区の緩斜面顶部付近の中央に隣接して位置し、黄褐色土の検出面に黒褐色土が入る落ち込みと認定された。SK602は平面形が長軸104cm、短軸58cmの楕円形を呈し、底面はやや凹凸があり、検出面からの深さは10cmと浅い。出土遺物はない。SK603は平面形が長軸104cm、短軸74cmの不整楕円形を呈する。底面はやや凹凸があり、検出面からの深さは8cmと非常に浅い。SK604は平面形が長軸316cm、短軸174cmの不整形な長楕円形を呈する。断面形は立ち上りの緩やかな逆台形となり、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は底面上に炭粒を少々含む暗褐色土、中位に黒褐色土、上部に黄褐色土ブロックを含む

暗褐色土が入る。いずれの土坑も出土遺物は皆無で、木根や風倒木根の可能性もある。

(3) 時期不明-A区II面

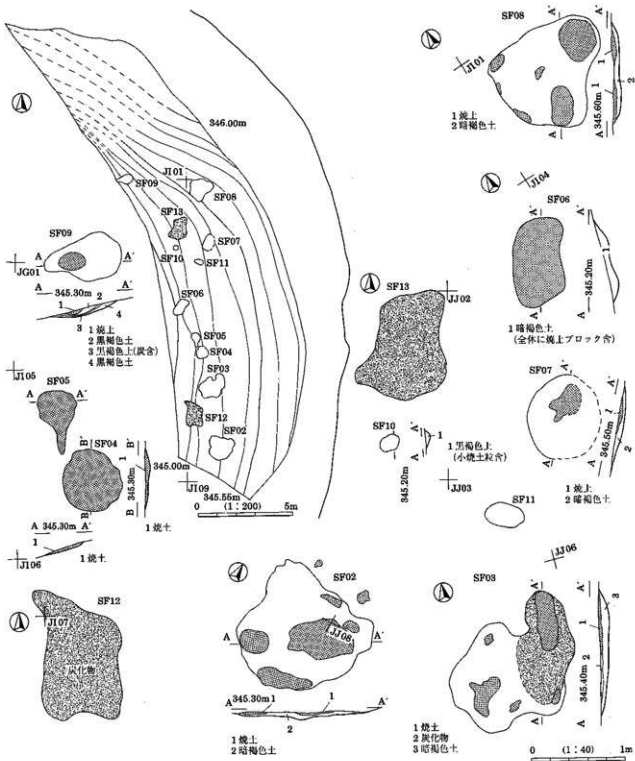
A区28層上面を検出面とする。土層の分布するごく狭い範囲を調査し、複数の焼土跡を検出した。出土遺物は皆無であったが、層位から縄文時代中期以後～古代の間に位置付けられる。なお、焼土跡の遺構番号は調査時にSF200番代を付けたが、整理段階では通し番号としてSF02～11に統一変更し、調査段階で遺構番号の振られていなかった炭化物集でも新たにSF12・13とした。



第14図 A区第II面全体図と検出遺構

SF02~13 A区 EG20~JL08 (第15図、PL6)

A区II面で検出された焼土跡で、A区の傾斜の緩やかな地点に等高線に沿って並列して全部で12検出した。検出状態から炭化物が顕著なものと焼土が顕著なものの2種認められる。炭化物が顕著なものは



第15図 A区第II面全体図と検出遺構

SF12・13の2基が該当し、平面形はそれぞれ140×80cm、114×98cmの不整形を呈する。焼土が顕著に認められたものは浅い窪み状となるもの、焼土のみのもの、焼土粒の集中と認められたものがある。浅い窪み状となるSF02・03・08・09は底面に黒褐色、暗褐色土が薄く入り、その上面に部分的な焼土が認められたものである。平面形は不整形でそれぞれ径130cm、140×130cm、112×124cm、84×50cmである。SF04・05・07は焼土のみのもので、それぞれ平面形は直径64cm前後の円形、72×40cmの不整形、直径90cmの円形となる。SF06・10は焼土粒の集中であり、98×52cmの楕円形、直径20cm前後の円形の平面形である。これらの検出状態の差異は遺構の残存状況等によるもので、性格や時期差によるものではないと思われる。なお、SF11～13については断面図記録漏れで子細不明である。これらの焼土跡はA区の頂部付近の傾斜の緩やかな地点にほぼ等高線に沿って分布することから、人為的な所産であることは間違いないと思われる。しかも出土遺物が見られない点ではキャンプサイトのような臨時の活動の所産で、同一場所で複数回反復的に営まれたものと推測される。

2. 古代—A区I面の遺構

竪穴住居跡3軒と土坑1基がA区山際のごく狭い範囲で検出され、C区では一切遺構が検出されていない。検出面はA区I面であるが、A区中央ベルトの土層観察では本来A区25層が検出面にあたり、中世遺構とは検出土層が異なることが確認された。これらの遺構は平安時代前半の比較的限定された時期の所産と思われる。

SB01 A区 EJ19～EL20 (第16図、PL6)

A区最頂部に位置する。北東壁際が中世と思われるピットに切られ、上面にはST01が重複する。遺存状態は不良で西側半分は流失し、南壁も立ち上がりが不明瞭である。残存部分から平面形は方形になると推定され、その規模は南北方向で3.9m、東西方向は残存範囲で約2.7mを測る。住居跡の主軸方向はほぼ傾斜方向に沿っており、カマドと推定される焼土跡は斜面上側の東辺中央にある。床面は若干傾斜するものの平坦で軟弱である。床面上には中央部で焼土跡がいくつか検出されたが、柱穴等の施設は検出されなかった。埋土は多数の礫を含む黒褐色土の単層である。出土遺物は内黒杯3点・鉢1点、両面黒色土器の皿1点、土師器杯3点（2点は内黒土器の可能性あり）・盤1点・小型甕2点・甕17点、須恵器壺2点がある。いずれも1/8前後の破片で完形になるものはない。出土量は多くないが、供膳具の焼物種組成は内黒が主体で、他に僅かな両面黒色土器・土師器杯が加わる。須恵器・灰軸陶器は含まれない。また、器種組成では碗が欠落するが、灰軸陶器模倣の両面黒色土器皿は認められている。これらの特長から9世紀中頃の所産と思われる。

SB02 A区 EF20～JH01 (第16図)

SB01より若干干つたところにあり、中世のピットSK602に切られる。本跡も遺存状態が不良で、斜面側半分のみが残存するものである。また、A区中央に設定したトレンチによってカマドの一部を破壊してしまった。残存部分から推測すると平面形は方形を呈すると思われ、南北辺は約4.9m、東西辺は残存部分で最大約3.0mを測る。住居の主軸は傾斜方向であり、カマドは斜面側の東辺中央に設けられている。カマドは遺存状態が悪く、火床面と若干の窪みと芯石材の痕跡と思われる窪みや袖の一部が確認されたのみである。床面は軟弱で全体的に南東から北西へ緩やかに傾斜する。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物はカマド周辺に集中し、内黒杯2点、土師器杯1点、須恵器杯1点・高台杯2点、土師器小型甕3点・甕8点、須恵器壺1点がある。この他には混入と思われる中世のカワラケ、古墳時代の土師器壺・高杯の破片もある。供膳具の焼物種組成は内黒・須恵器・土師器があって灰軸陶器は含まれない。また、器種では杯と須恵器の高台杯が含まれる。これらの特長のなかで土師器杯が含まれる点は新しい様相ではあ

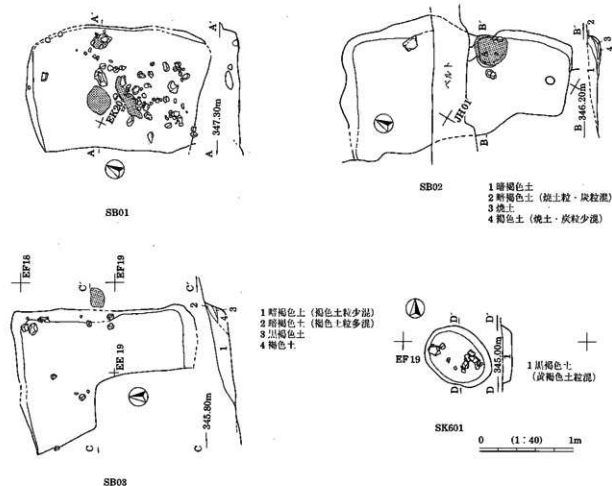
るが、それ以外はSB01よりやや古い様相を示す。

SB03 A区 EE18~EF19 (第16図)

SB02、SK601に隣接して位置する。遺存状態は不良で斜面側の東半分のみ残存する。規模は南北約3.9m、東西は残存部で3.1mを測り、平面形は方形と推測される。主軸方向は比較的東西南北に一致するが、これも傾斜方向に近いものである。床面は比較的平坦ながら軟弱であり、カマドは確認できなかった。ただし、本跡の斜面側の壁付近で焼土が認められており、これが煙道の一部であった可能性がある。埋土は壁際に褐色土小ブロックを含む暗褐色土や黒褐色土層があり、埋土の主体は褐色土ブロックを少量混じえる暗褐色土である。出土遺物は破片で散在的に出土したが、出土量はA区検出住居跡のなかで最も多い。内黒杯13点、その可能性があるもの5点、土師器壺と思われる破片1点、須恵器杯1点、土師器小型甕3点・甕13点、須恵器壺1点がある。これ以外では須恵器の甕破片1点、古墳時代の土師器壺破片1点がある。内黒杯2点が略完形となる以外は1/8以下の破片がほとんどである。供膳具の焼物種構成は内黒で占められ、わずかな須恵器が加わるものである。

SK601 A区 EF19 (第16図)

A区山際の緩斜面にあり、SB03北側に隣接して位置する。平面形は長軸78cm、短軸58cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さ11cmと浅い。埋土は地山の黄褐色土小粒を所々混入する黒褐色土の単層である。遺物は内黒杯4点、土師壺4点、土師小型甕2点、砥石1点があるが、いずれも小破片であり、このなかで内黒杯2点はSB03出土品と接合した。本跡の性格は不明である



第16図 A区 古代竪穴住居跡

が、竪穴住居跡とほぼ同時の所産と思われる。

3. 中世以後の遺構

当該期は本遺跡においてももっとも広域に遺構が分布し、検出された遺構数も多い。遺構の時期はほとんどが中世後半以後の所産であり、この時期から本遺跡での安定的な土地利用が確認できる。居住遺構はA・C区で検出されたが、両地区では遺構のあり方が異なる。すなわち、A区は整地造成と石垣・石列を伴うほぼ一つの屋敷跡と見られるが、C区は溝で区画された複数の屋敷地の集合である。また、遺構種も異なって掘立柱建物跡はC区で主体的ながら、A区は整地と共に石列・礎石建物・石垣など石を用いた遺構が卓越する。しかもA区では井戸跡・土坑は僅かで墓跡はまったく検出されていないが、C区は井戸跡は検出されず、土坑・墓跡は多数検出されている違いもある。残る低地のB・D区では近世水田跡が確認され、B区では溝跡やA—C区をつなぐ道跡とみられる石列もみつかった。ここでは地区ごとに地形環境・検出遺構が異なるため地区ごとに区分して個別遺構について記述する。

(1) A区の遺構

中世以後の遺構はA区I面を検出面とする。A区内は山手の崩土等の堆積による傾斜面（緩斜面部）と千曲川系の堆積土で形成された低地盤の微高地（平地部）、B区へ連続する低地（低地）に細分される。このなかで居住遺構が検出された緩斜面部と平地部の境にはSH04・09・SH14・15・SA03・SH30が配置され、A区を大きく2分する。検出された遺構は緩斜面部と平地部で掘立柱建物跡・礎石建物跡・竪穴建物跡・石列・集石遺構・井戸跡など石を用いる遺構が多数みつき、低地では水田遺構が検出された。このA区では整地を伴う造成が数度行われたと看取されたが、1次調査では上下2枚、2次調査では6枚に分けて調査されている。整理で1次・2次調査の所見を統合しようと試みたが、対比しきれない部分を残した。これは遺構の連続関係と調査面が対応しない部分があり、しかも整地がA区全域にかかわるものか、あるいは部分的なものかも判断しかねたものがあつたことによる。そこで個別遺構の記述の前に、調査面の対応関係について調査・整理時の検討について触れておく。

1・2次調査の調査面の対比 まず、調査段階での整地面の認定経過から述べる。1次調査では調査開始直後に調査区南境にトレンチを設定し、そこで石垣の存在を確認すると共にA区内で整地が行われていることを確認した。しかし、この時点では石垣の時期を特定するまでには至らず、周囲の畑に石垣が認められることから後代の耕作地に利用した段階の所産と考えた。また、トレンチを設定した位置が丁度ST03にかかる場所であつたためにST03の整地土を石垣に伴うものとして整地土は1枚と誤認してしまつた。この所見に基づいてA区頂部付近から地山まで掘削する表土除去作業を開始したが、掘立柱建物跡の柱穴跡を検出できたことからトレンチの所見も変更の必要はないと思われ、整地を伴うST01もあくまでも部分的な存在と判断した。以後は地山まで掘削して調査を進めていったが、A区頂部よりやや下つた付近から遺構がほとんど確認できなくなり、やがて緩斜面部境で礫が帯状に集中するSH04を確認するに至つた。このSH04の検出によって初めて周辺の畑の石垣とは別の遺構面があることが知られたが、この時点でもSH04の年代が不明であつたため上記の所見を変更しなかつた。しかし、SH04を検出した付近から順次平地部の掘削に移行することにしたが、ここで地表面下のかなり深いところでSH02・03の存在を確認するに及び、SH04も近代以後の所産ではない可能性が考えられた。この所見によって整地は緩斜面境周辺に2枚あつて時期も近年の所産ではないと判断され、そこで急遽SH04を検出する高さで表土を削ぐことに変更した。この調査面でSH05～08・10～13・33、ST02・03が検出され、単なる耕作のための整地ではないことが確認された。次にこれらの石列・礎石建物を精査して撤去したところ下層に石垣SH09・14～16

の存在が知られ、最終的にA区では居住遺構に伴う整地が上下2枚あると捉えられた。これが1次調査段階での所見である。

2次調査では現表土から地層ごとに順次調査を進め、合計6面にわたる調査面が設定された。整理で各調査面の遺構を重ねたところ同一遺構が分割調査されたと考えられるものがあり、実際の整地・遺構構築面土層はより少ない枚数にまとめられると思われた。まず、2次調査1・2面は重複関係からSA01・02を上下に分割して調査したものであり、4・5面はSA03・SH30が検出されているものの、礫の露出程度の差異しかないので整地基礎上部を検出した段階と整地基礎内の礫を露出した段階と推測した。したがって、2次調査での6面に渡る調査面も、居住遺構に関連する整地は1回であり、整地以前の6面、整地基礎部分にあたると思われる4・5面、整地上面か部分的な整地が追加された3面、耕地化段階の1・2面と捉えるのが妥当と考えた。このなかで明治時代の旧公園をみると、1・2面のSA01・02部分は水田と記載されている。このSA01・02検出土層前後は水田耕作土と認められないので、これらの遺構は近代以後の所産で、部分的な整地であった可能性がある。以上の推測のなかでは1次調査上部遺構の対応整地面が2次調査域にはない問題が残される。また、同一段階とみた1次調査下部遺構と2次調査3～5面も連続遺構ながら時期差があるかどうかは断定できていない。

最後に1・2次調査面の対応を整理すると、2次調査6面は1次調査では調査しておらず、1次調査下面のSH14・15は2次調査4・5面検出のSA03・SH40(SH19)と連続することから同一面と認められ、2次調査3面はその上面遺構、あるいは1次調査の上部検出遺構に対比できる段階とみられる。最後の2次調査1・2面であるが、これは近代以後の所産で対応検出面はないと考えた。

整地について 最後に整地について整理しておく。A地区で確認できた整地は遺跡全体にかかわるものと、個別の礎石建物跡遺構に関連する2種がある。後者は個別遺構に伴うものとして後述し、ここでは遺跡全体に関連する整地のみ触れておくことにしよう。A区の整地は中世末(近世初頭)以後数枚あり、数段階に分けて整地が繰り返されていることが知られる。

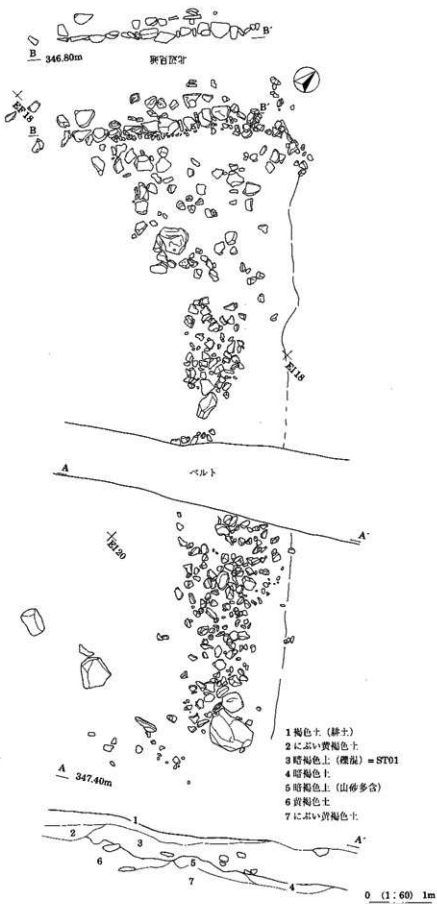
最も古い整地はA区緩斜面部と平地部境を縦断するSH09・14～16・30、SA03の石垣群に伴うものである。この整地は礫を多く含む土で構成され、A区11層が整地土層にあたり、この下面が2次調査6面、整地上面が1次調査1面下部遺構と2次調査(3)4・5面検出遺構に該当する。整地範囲はA区北部では緩斜面部と平地部境周辺、南部では山際から低地にかかる部分にあたり、ほぼ直線的に帯状に分布する。

次の整地はA区北部の1次調査域のSH04周辺に認められる基本土層A区9(・10)層の整地である。上面が1次調査1面上部の遺構面となり、前段階のA区を縦断するSH09—SH14—16を埋め立てて、その上に建物跡を構築する。建物遺構との切り合いからも整地が行われていることは確実であるが、その範囲と位置づけは問題を残す。すなわち、範囲についてはSH04からST02・03までの1次調査調査域では確認できたが、2次調査域ではその対応層を明らかにできず、南限範囲を確定できなかったのである。これが2次調査3面の対比を明らかにできなかった原因ともなっている。また、位置づけについてはA区居住遺構の全面的な改変を想定させるが、石垣SH09—SH14—16を埋め立てる理由は明らかにできなかった。いくつかが可能性が想定できるが、石垣に付随していた土塁などの施設を崩したのか、あるいは屋敷地の拡大が意図されたのであろうか。ただ、2次調査域では1次調査域のSH09—SH14—16上面と同様の建物跡の構築は確認されていないことを重視すれば整地はほぼ1次調査域に限定されていた可能性が高く、さらに検測を重ねると、A区南側へ拡大した屋敷地をA区北側へ集約するための整地ともみられる可能性もでてくる。これも確実なところは不明である。なお、平地部に分布するA区10層がこの整地に伴う可能性も想定できるが、土質が異なることから整地土と断定はできなかった。

各整地の時期であるが、1面下部遺構に伴う整地や石垣からカワラケ・内耳鍋・青磁碗が出土し、最も

新しい遺物としてSH30より唐津皿が出土している。I面上部遺構についてはカワラケと内耳鍋、古瀬戸香炉などがあり、いずれもカワラケ・内耳鍋が出土遺物の中心となる。ただ、I面下部遺構で唐津皿が出土したことから下部遺構の整地は17世紀初頭前後と考えざるをえず、上部遺構の整地はそれより後出段階の所産ということになる。下限については2次調査で石垣前面を埋める土層より上部に位置する水田層から伊万里Ⅳ期後半～Ⅴ期（18世紀後半以後）と思われる碗が出土しているので、18世紀後半までは下だらないと思われる。以上の年代推定では1点のみの唐津皿がポイントとなるが、この唐津皿以外では近世の陶磁器は目立ったものがないこと、出土焼物は16世紀の所産のほうが多い点では年代の断定は躊躇される。特に、I面下部遺構を17世紀初頭とすると16世紀の遺物が帰属する遺構は不明になってしまう点が大きな問題である。しかし、他にこの問題を総合的に解釈することもできなかったため、ここでは断定できないものの、唐津皿の出土を重視してI面下部遺構を17世紀初頭と捉えておきたい。

このI面上部・下部の屋敷地関連整地をみると、石垣を伴う点、広範囲に行われている点が特長として挙げられる。ただし、石垣を伴う整地は古い段階であり、2回目の整地は石垣を伴わない点は注意しておく必要がある。これは位置付けは明らかにできなかったが、遺跡の改変の質的な問題を表



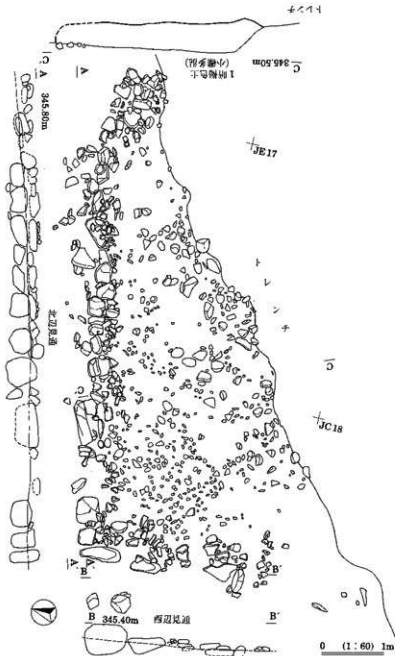
第17図 ST01

現しているようにも思われる。また、広範囲にわたって行われている点についてであるが、A区自体が単一の屋敷地であった可能性を想定させると共に、屋敷内を複数の空間に分割する上で非常に重要な位置を占めているとみられる。

以上がA区の中世末から近世にかけて行われたと推測される屋敷関連の整地である。この1次調査I面上層よりもさらに上部に位置する土層については整地と断定できていないものもあるが、耕作地化に際して整地が行われた可能性が想定できる。2次調査1・2面はこれに伴う遺構であろう。いずれも整地土の母体土の供給源が判然としませんが、山土自体ではなく千曲川系堆積土が加えられているようだ。

ア. 礎石建物跡

礎石建物跡はC区に極端に少なく、山際のA区に多くみつかった。この偏在する様相は遺跡内での土地利用のあり方の違いを表現するものと思われる。A区で検出された礎石建物跡には礎石のみ検出された建物跡と、石列で囲まれた長方形整地として検出された建物跡がある。前者は一定数の礎石が残存しないと認定が難しく、今回の調査ではSA04の1基が識別できたのみである。後者は周囲に石列を配した小規模な整地基礎を伴う建物跡で数棟が認定された。礎石を認定できたものはないが、整地の規模と配石のあり方から礎石建物跡の基礎ではないかと推測した。ST01・03を典型例とする。これ以外のST08～10は建物基礎の可能性を考えて礎石建物跡に加えたものである。ST08は方形に石積や集石を配する遺構であるが、部分的に石積ともみられる部分があるものの石面は揃っていない部分のほうが多く、しかも底面が平坦ではない。形状はST02とも類似するので堅穴建物跡とも考えたが、内部の形態の特長から礎石建物跡の基礎とした。ST09は礎石も判然とせず、周囲に石列を伴わないが、方形範囲に礫集中が認められることから礎石建物跡の基礎と捉



第18図 ST03

えた。ST10は上面で建物跡の礎石が認定されなかったが、整地の規模と形状から礎石建物跡の整地と判断したものである。このように認定に問題を残す遺構も多いが、礎石建物跡の可能性が想定できた遺構をここにまとめて報告する。なお、A区では低い石積・石列から構成されるSH22があり、内部や周辺で焼土・炭化物の集積が認められたことから竈穴建物跡や建物跡の内部施設の可能性も考えられた。しかし、遺構単位や構造が明確に把握できなかったため建物跡と認定はしていない。

ST01 A区 EF18~EJ20 (17図、PL2)

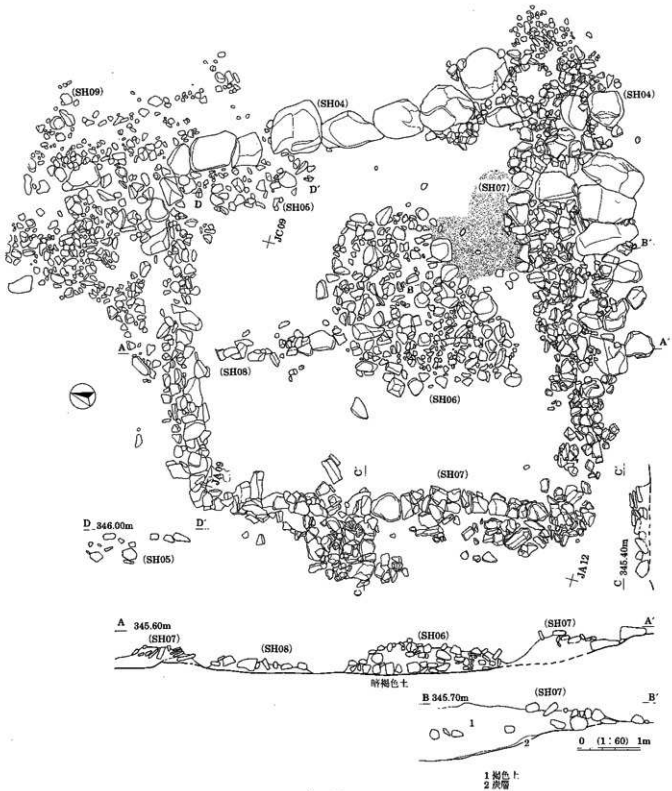
A区緩斜面部最頂部に位置し、1次調査I面で調査した。石列を伴う点や礫集中範囲が建物跡規模として妥当と思われたことから本跡を礎石建物跡と認定した。本跡にかかる中央ベルトの土層観察では検出された礫は整地土の一部であり、南半分と整地上面は耕作等で削平されていると観察された。確認範囲では平面形は等高線方向に長軸をとる長方形と推測され、長軸約10.1m、短軸約4.4m前後の規模である。検出された礫は山際に帯状に集中し、北西辺は石列状に並べられている。中央の礫集中内に点在する大きめの礫は礎石とも考えたが、上面は平坦でないため断定はできなかった。出土遺物は礫検出中に採取されたもので、カワラケ・内耳鍋・在産土器香炉・大窯丸皿、弥生土器・古墳時代土師器壺・甕、古代の土師器杯・甕、須恵器杯の破片がある。いずれも小破片である。本跡はA区緩斜面で確認された唯一の礎石建物跡であるが、具体的な性格は不明である。

ST03 A区 JA16~EJ20 (第18図、PL2)

1次調査I面上部で検出した。緩斜面部と平地部の境にあり、石垣のSH15の上部に位置してST02は同一検出面で並列する。したがって、本跡はSH04・14の石垣群より後出し、ST02とは同時存在と思われる。建物跡の範囲は北・西辺が石列部分と認定できたが、東辺はA区の土層確認トレンチで破壊してしまい、南西部も礫が減少していくため範囲が不明瞭となる。規模は判然としませんが、2次調査域までは延長されており、ほぼ1次調査範囲内で納まるとみられる。確認範囲での平面形は長軸約8.1m、短軸約4.0m前後の長方形を呈すると思われる。構造は検出面から44cmほどの深さの長方形の掘り込み周囲に石列状に石を並べ、その内部を礫混じり土で充填するものである。北・西辺の石列はほぼ直線的に配され、1~2段積まれるところも認められる。礎石と特定できた石はないが、内部に比較的大きめの石も含まれていた。また、本跡の掘方底面上で大きな平石1つを検出したが、類似した石は他には認められないため、埋土中の礫の一部と捉えた。出土遺物は礫を露呈する過程や掘方埋土中に採取されたもので、カワラケ・内耳鍋、古代の内黒鉢・土師器壺・須恵器蓋等がある。出土遺物は比較的多いが、すべて破片出土で基本的に整地土に混入したものと考えられる。本跡の性格は明らかにできなかったが、構造はST01と類似する。

ST08 A区 A区OB06~OD08 (第19図、PL2)

緩斜面部と平地部を画する石垣SH04南端に位置し、1次調査I面上部で検出した。調査ではSH04から分岐して西側にコの字に配される集石SH07を最初に検出し、SH07の北・西辺内側の石面が比較的揃うと看取されたことからSH07範囲内が掘り込まれる遺構ではないかと考えた。そして、その内部を掘り下げたところで、中央部に円形礫集中SH06、SH06北側に帯状集石SH08、SH09脇に帯状集石SH05を検出した。調査当初は検出順序によって集石遺構を個別に把握したが、整理段階で全体を見直すとSH07はSH09と一部重複・接続しながらSH09を東・南辺として利用し、SH07を北・西辺とする「口」の字形になると看取された。このことからSH05~07をまとめて建物跡ST08とした。ST08の平面形は南北約8.0m、東西はSH09前面まで約6.3mを測る方形を呈し、低地側の西辺中央に小規模な方形の礫集中の突出部を付属させる。南・東辺のSH07上面から底面までの深さは約70cmを測り、北・西辺は低く30cmである。SH07の一部に石積と認められる部分があるが、大部分は礫を寄せ集めたものに近い。底面は平坦ではなく、南側のSH09側が高く、中央へ向かって傾斜する。内側は礫を含む褐色土で占められ、SH06下部の底面上で薄



第19図 ST08

い炭層が検出された。炭層や礫集中は建物構築以前の地業作業中の所産であろうか。本跡は部分的ながら内面側に石面を揃えると看取され、しかも他の整地を伴う建物跡は長方形の平面形が多いことから竪穴建物跡とも考えた。しかし、一方で周囲を取り囲むSH07の大部分は石積が不明瞭で底面が平坦でなく、西側に突出部を付属させることから竪穴建物跡よりも礎石建物跡として扱うほうが良いと考えて礎石建物跡に含めることにした。出土遺物は多数のカワラケ・内耳鍋の破片と1点ながら青磁碗の破片、わずかな古

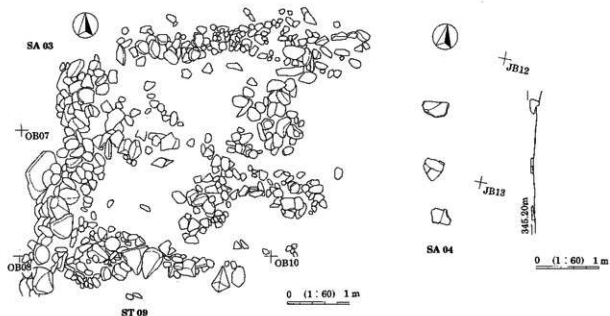
代の須恵器甕・土師器破片、石臼が出土している。性格は不明である。

ST09 A区 OB06~OD08 (第20図、PL2)

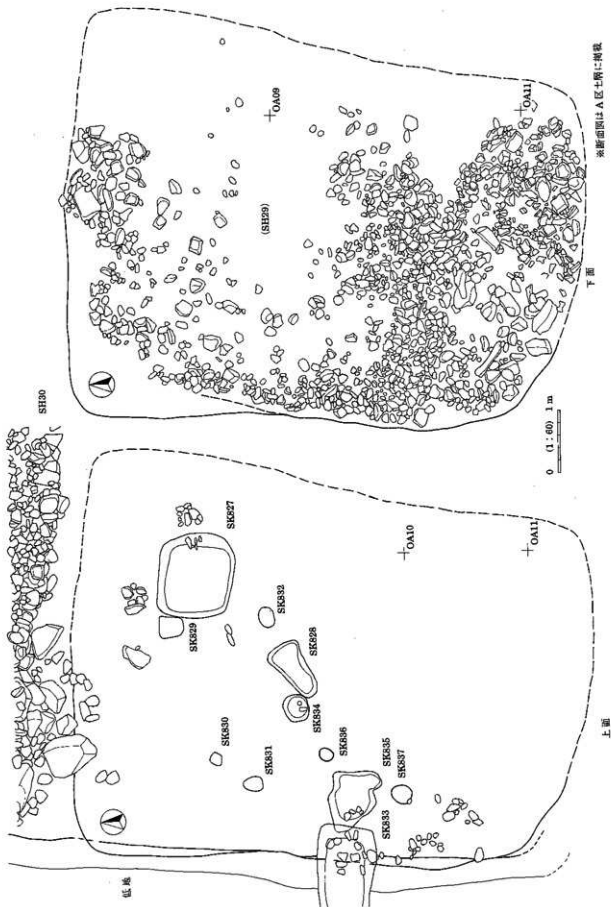
ST03南の山際の狭い範囲に位置する。2次調査の4・5面で検出されたが、1次調査の1面下部に比定される。2次調査ではSA03北部に直交方向の石列が2本が検出され、その中間に大きめの礫が分布すると認められたことから礎石建物跡の基礎ではないかと判断された。建物跡の範囲は石列を北・南辺とし、西辺はSA03までである。東辺は判然としないが、本跡南側に位置するST10への通路を想定すると山際までは達しないと思われ、ほぼ礫分布域に納まると見られる。本跡の規模は上記の推測から東西約4.0m、南北約4.0mの方形の平面形と推測されるが、遺跡内ではかなり小規模な建物跡であり、平面形が方形とみられる点ではやや異質な存在である。なお、本跡基礎部分の構築状況やSA03との関係については断面記録がなく不明である。本跡に帰属すると捉えられた出土遺物はない。

ST10 (SH19・29) A区 NR07~0A11 (第21図、PL2)

A区南部に位置する。1次調査側道部分で検出されたSH19と、2次調査6面検出のSH29(調査時遺構番号石集中No.4)を整理段階で照合したところ、両者は連続した同一遺構であることが判明し、形状・規模から建物跡整地と捉えてST10とした。このST10の整地範囲は東辺を山際斜面の旧地形部分とし、北辺はSH30と接する部分、西・南辺は礫分布範囲である。1・2次調査いずれも最下層で検出されたが、これは整地基礎部分を検出したものとみられ、2次調査トレンチ内土層記録から遺構構築面は4面より上部にあることが確認できる。配置関係からすると北辺がSH30の南辺とほぼ一致することから、SH30と同時かそれ以後の所産と推定される。ただし、本跡の西側にあたる整地部分では石積みが施されていない違いがある。なお、本跡に重複する範囲上面にあたる2次調査3~4面では柱穴・土坑状のSK827~835、小規模な集石遺構SH27・32・平石等が検出されている。SK833は位置がずれるため本跡を切る遺構と思われる、類似形態の土坑SK827も同様の所産であろう。SH27・32・平石等は本跡に関連する礎石の可能性はあるが、具体的な関係は把握できなかった。整地範囲の規模は南北約8.3m、東西約6.4mを測り、平面形は長方形を呈する。整地は傾斜地形を若干掘り窪めて内部に礫を大量に含む土で充填し、上面には山



第20図 ST09・SA04



砂・粗砂・B区の千曲川系堆積砂ブロックを含む黒褐色土が盛られる。この上部の黒褐色土はSH30の構築以後に盛られているものである。出土遺物は整地盛土中から出土し、カワラケ・内耳竈若干があるが、いずれも破片である。出土遺物には中世の所産しか認められていないが、SH30との関連から17世紀初頭以後の所産とみられる。

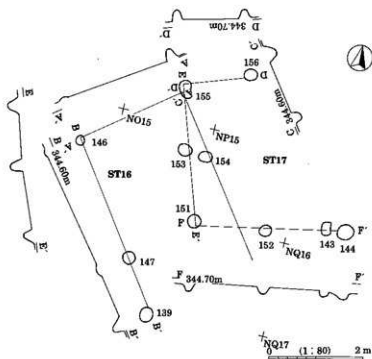
SA04 A区 JA12・13 (第20図)

A区緩斜面部への通路と想定されるSH09南端とST02中間に位置し、1次調査I面上部で検出された。平石3つが直線的に北から約90cm・80cm間隔に配置されるもので、検出形状から遺構記号はSA(柵跡)を冠した。しかし、礎石であることから構造的に柵跡とは考えにくく、建物跡の礎石が部分的に残存したものと思われる。平石は若干北側へ低く傾斜するものの、ほぼ類似した高さである。出土遺物はまったくない。検出面の高さや配置位置からST08・02とは同時存在したと思われるが、具体的な性格は不明である。ただ、位置的にみると通路を塞ぐような位置関係となることからすると、簡単な門や入口施設のような構築物であった可能性がある。

イ. 掘立柱建物跡

A区内で掘立柱建物跡柱穴跡は大きく3か所で検出されている。それはA区緩斜面部の頂部付近、調査区南端の低地、平地部中央部である。このなかでA区緩斜面部の頂部付近の柱穴跡は数も多く、重複して検出されている。このことから類似した建物が頻繁に建て替えを繰り返したと見られるが、整理段階で認定しえたのはST18・19の2棟のみである。しかも、認定に不安が残り、あくまでも可能性のひとつとして捉えたものである。調査区南端の低地に位置するものは数も少なく、1次調査の側道部分でしか検出されていない。整理でST16・17の2棟を認定したが、ここは整地を伴う石垣・石列構築段階では低地にあたと考えられるので、建物以外の施設か、A～B区の低地が埋没・上昇して低地域が拡大してくる時期以前(中世以前?)の所産、あるいは遺構でない可能性が考えられる。中世とする根拠は何もないが、便宜的にここで掲載することにした。残る平地部の柱穴跡であるが、SH09脇周辺に比較的集中して検出されたものの具体的な建物跡は認定

できなかった。柱穴跡の数が少なく、しかも若干散在することからはあまり頻繁に建て替えはおこなわれていないようである。なお、これらの掘立柱建物跡と礎石建物跡との関係であるが、南端低地部分の掘立柱建物跡については時期不明であるが、平地部検出の柱穴跡は1次調査のI面下部で検出されているので、少なくともST02・03・08に先行する時期の所産があると思われる。また、A区緩斜面部の頂部付近では認定された建物跡と直接切り合いにはならないが、周辺で検出された柱穴跡とST01が重複しており、ST01に先行する可能性はある。以上からす



第22図 ST16・17

ると、掘立柱建物跡は分布域が限定されて礎石建物跡と同時に存在した可能性は残るものの、相対的に礎石建物跡よりも古い所産が多い傾向は想定できよう。

ST16 A区 NM15~NP16 (第22図)

A区南端の低地部に位置し、1次調査側道部分A区41層上面で調査した。SD03とSH20に切られ、ST17とは北東部の柱穴が重複するものの、前後関係は不明である。規模は桁行3間約4.0m、梁行1間2.4mを測り、棟方向はN-35°-Wである。柱間寸法は桁行1.4m前後と非常に狭く、柱穴跡は平面形が直径20~30cmの円形で、断面形はU字状で検出面からの深さ20cm前後を測る。埋土にはぶい黄褐色土の単層である。切り合いからは近世水田以前の所産としかわからず、中世の所産とする根拠は何もない。また、低地域内で検出されたことからB区低地が埋没して低地域が拡大する以前の所産か、あるいは低地際に設置された建物以外の施設かが考えられる。前者であれば中世より古い所産となるが、断定できなかったためここに含めた。出土遺物はない。

ST17 A区 NO14~NQ15 (第22図)

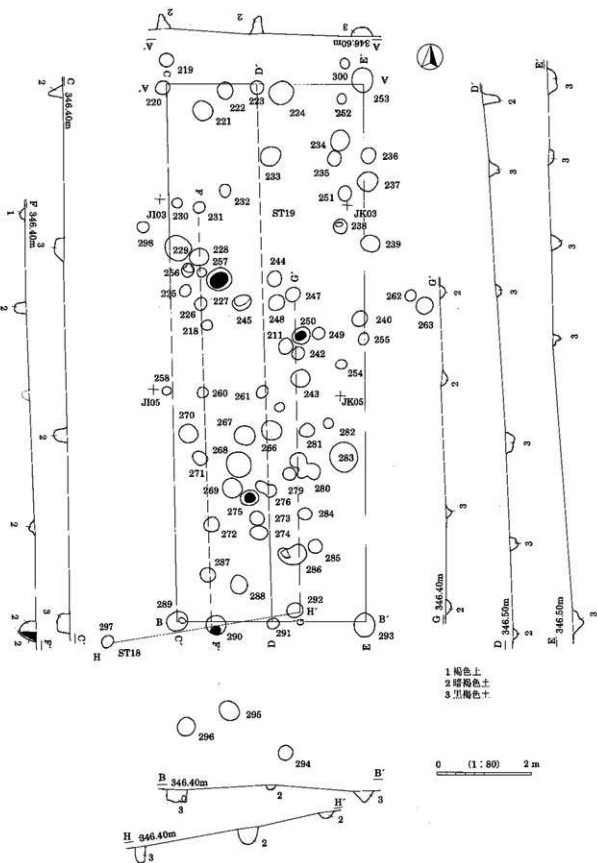
A区南端にST16と一部重複して位置する。検出状況は同様に建物跡の認定も整理段階でおこなったが、東側に該当する柱穴跡が検出できていないため、構造・規模の詳細は不明である。認定した建物跡は南北2間約3.0m、東西は確認範囲で2間約3.2mを測る。どちらが棟方向になるのか不明であるが、南北方向はN-18°-W方位である。柱間寸法はいずれも約1.5m前後で、やや狭い。柱穴跡の平面形は直径20~30cmの円形を呈し、断面形はU字状を呈して検出面からの深さは16~26cm前後である。埋土はST16と同様である。本跡はST16とは構造が若干異なるが、立地関係や規模が小さい点でほぼ同様の所産とみられる。時期は近世以前としかわからず、中世とする根拠もない。性格も不明であるが、ST16同様に便宜的にここで扱った。

ST18 A区 JI03~JJ06 (第23図)

A区緩斜面部頂部付近に位置する。1次調査で検出された柱穴跡を整理で検討して建物跡を認定した。認定作業にあたって等高線方向に棟方向を取ると仮定し、等高線方向に一定間隔で直線的に配列する柱穴跡を探して、そのなかで平行する配列をもって建物跡と認定した。しかし、想定位置に柱穴跡がすべて揃って検出されていないことや、柱穴跡の重複状況から類似建物跡の建て替えと想定できる本跡とST19は形態・規模が異なるなど認定に不安を残す。また、検出面となるA区21層は分布範囲も狭く、その範囲外に広がる暗褐色~黒褐色土層では埋土が類似して柱穴跡が見逃された可能性も残る。以上のように認定に問題を残すが、確認できたところでは棟方向がN-4°-Wで、規模は桁行3間約6.7m、梁行1間約1.9mの規模である。南梁行の西方延長先にSK297、西側桁行の北方延長先にSK231があって、規模はより広がる可能性がある。認定範囲での柱間寸法は桁行北側から1.9、2.8、2.2mである。柱穴跡は直径20~30cmで、断面形はU字状を呈して検出面から底面までの深さは10~34cmまでであるが、12cm前後が多い。遺物は採取されていないが、周辺ではカワラケが採取されており、本跡を中世の所産と考えた。

ST19 A区 JI01~JK08 (第23図)

ST18とほぼ重複した位置にあり、本跡も整理段階で認定したものの、柱の通りも悪く、想定位置の柱穴跡は欠落するものが多いなど認定に不安を残す。認定した建物跡は棟方向N-3°-Wで、桁行6間約11.3m、梁行2間約4.0mである。柱穴跡が部分的に欠落するため構造は詳細不明である。柱間寸法は桁行で1.5~2.0m、梁行は2.0m前後である。柱穴跡は直径30~40cmの円形を呈し、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは10~40cmで、全般的に20cm内外が多い。柱痕が確認されたものはない。出土遺物はないが、周辺でカワラケが検出されていることから中世の所産と推定した。本跡は直接切り合わないため前後関係は不明であるが、ST18と重複位置にある。この位置関係から建て替えの関係とも思われるが、



第23図 ST18・19

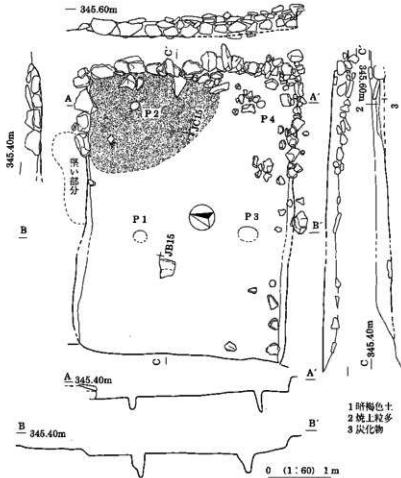
認定された形態・規模がやや異なる。

ウ. 竪穴建物跡

A区で竪穴建物跡と捉えられた遺構はST02の1基のみがある。しかも、C区のSB04・05のように明瞭な竪穴建物跡と捉えられたものではなく、形状は竪穴建物に類しながらも断定に躊躇される遺構である。また、礎石建物跡の基礎としたST08 (SH05~07)・集石遺構SH22も竪穴建物跡の可能性も残るが、他種遺構の可能性が高いと判断し、それぞれ礎石建物跡と石列・集石遺構として扱った。なお、ST02とST08・SH22はいずれもSH04・09のラインよりの平地部側に位置する。これらは竪穴建物跡と断定していないが、いずれも緩斜面部には認められない傾向が指摘でき、A区内の建物配置に何らかの計画性があったことが考えられる。

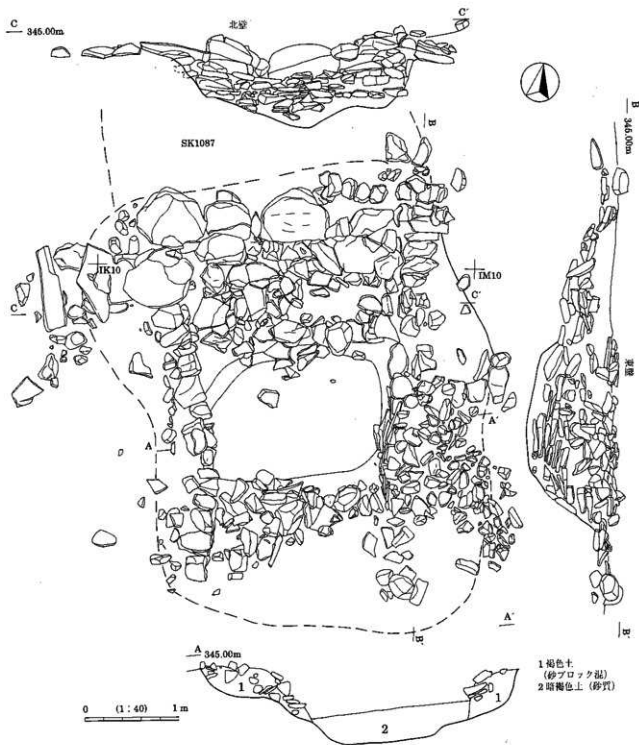
ST02 A区 JA14~JC15 (第24図、PL2)

A区南西部の低地よりにST03と並列して位置し、1次調査のI面上部で検出した。調査当初に「コ」字状石列として検出されたことから礎石建物跡基礎と考えてST02としたが、精査を進めるなかで石列は内側に面を揃えると看取され、本跡に入れたトレンチで北東隅に焼土・炭化物の集中、底面上で柱穴跡が確認できたことから竪穴建物跡に変更した。しかし、調査ですでに遺物を取り上げていたこともあって遺構記号は変更せず、そのまま使用することにした。本跡の北・東辺は石列や土層変化部分と認定し、南辺は南東部の直線的に配置される石列から確定した。しかし、南辺南西部はやや不明瞭で、比較的礫が直線的に点在する部分と推測した。西辺は不明瞭であるが、周辺の様相や本跡全体で西側に礫が少ない点から耕作で破壊された可能性がある。また、掘方範囲は調査ミスで記録がない。以上の確認できたところでは長軸を傾斜方向にとる長方形の平面形を呈し、その規模は長軸約5.0m以上、短軸約3.3mを測る。構造は検出面から20cmほど掘り込んだ内側壁に石を1~3段積み上げるもので、石積は東辺側および北辺東部・南辺東部が比較的明瞭に認められる。石列が全周せず、部分的に散在する点は後の耕作や廃棄時の破壊によるか、本来の構造に起因するものか不明である。ただ、北辺中央部縁の礫が分布しない場所は非常に堅くしまっており、この場所が入口に該当する可能性がある。ここが入口とすると桁行方向からの平入りになる。底面は低地よりに緩やかに傾斜し、東壁際2か所と中央西寄り2か所で合計4



第24図 ST02

基の柱穴跡が確認された。また、炉は特定できなかったが、北東隅に炭化物と焼土跡の分布が認められている。埋土は全体的に多くの焼土粒と少量の炭化物を含む暗褐色土で占められ、東側底面上に焼土や炭層が広がる。出土遺物は多数のカワラケ・内耳鍋の破片と青磁盤の破片1点が出土した。いずれも破片である。なお、青磁盤はSA03出土品と接合しないが同一個体と思われるものである。本跡は形状から竪穴建物跡と捉えたが、石積みが全周しない点や掘り込みの浅さ、あるいは平面形が長方形になる点からC区



第25図 SX01

SB04・05と同一遺構とは断定できない。むしろ、緩斜面に構築された土間状施設をもつ建物跡としたほうが良いかもしれない。

エ. 井戸跡

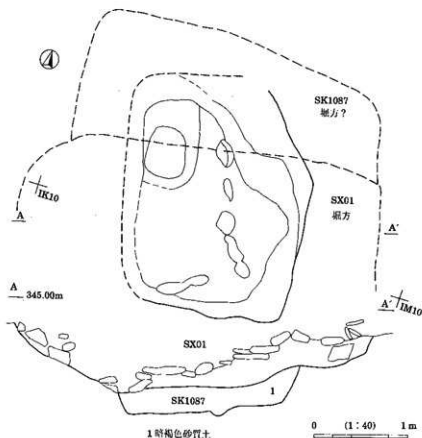
本遺跡で井戸跡と認定された遺構はA区 SX01・SK1087しかなく、C区ではまったく認められていない。これはC区の基盤は砂礫層であるために井戸跡が掘削しにくいこと、一方で比較的簡単に自然流路から水を確保できたことによると思われる。A区で検出された2基の遺構はいずれも同一場所に重複して構築されており、作り替えの関係にあると思われる。つまり、これらの遺構はA区屋敷の施設配置の計画性のなかで設定されたもので、決してA区内はランダムな遺構配置ではなかったと推測される。なお、SK1087とSX01共に長方形の平面形ではあるが、前者は石積を伴わない違いがある。この差異は本来SK1087の石積は作り替えに際して撤去されたか、あるいはSX01がA区の石積遺構の出現時期に作られた時期差によるものか考えられるが、仔細は明らかにしえなかった。

SX01 A区 IJ09～IM11 (第25図、PL5)

A区中央の平地部西端の最も高い地点に位置し、SK1087を切る。1次調査I面上部で検出した。平面形は南北約4.8m、東西3.5mの不整形な隅丸長方形の掘り方周囲の壁に石積を施したもので、内法の規模は南北約2.6m、東西約2.0mである。底面は中心部が最も深く掘られ、検出面からの深さは96cmほどである。側面の石積は東西辺が比較的丁寧な造作で下部に平石を積み上げ、上部にやや乱雑に石を配する。これに対して南辺はほぼ垂直ながら乱雑に積まれるのみで、北辺は上部に比較的大きな石が規則的に配置され、傾斜は緩やかで部分的に階段状となるところが認められる。平面的な石の配置状況から壁の石積順序は東西辺側を最初に積み、次に南辺と北辺側の石積を行ったとみられる。傾斜の緩やかで階段状石組もみられる北側が井戸への降り口と推測され、直接湧水地点まで下りて水を汲む構造と思われる。埋土は石を露呈させる作業で上部を掘り下げてしまったが、下部には砂質の暗褐色土を確認した。出土遺物は小破片が散在的に確認されたに過ぎず、古墳時代の土師器甕破片、古代の内黒杯破片、カワラケ・内耳鍋破片が出土している。本跡は形状から井戸跡と考えられ、ほぼ重複する位置にあるSK1087を作り替えたものと思われる。

SK1087 A区 IK09～IL10 (第26図)

A区平地部中央の西寄りにはほぼSX01と重複して位置し、大部分はSX01に切



第26図 SK1087

られる。1次調査の1面調査が一段落した後には下層土層を確認するための中央トレンチを掘削したところ、SX01とずれた位置に落ち込みが確認されたことから、本跡の存在が判明した。調査では南側はSX01に切られ、北側上面もトレンチ掘削で破壊してしまったため底面の一部を確認したのみである。残存部は南北に長い長方形の平面形で南北約2.5m、東西約1.9mを測り、北東部のみは傾斜が緩やかとなる。上面は削平して規模は子細不明であるが、SX01の掘り方とされた部分の一部は本跡の掘り方であることが知られた。確認できるところでは掘り方の規模は東西約3.0~3.7m、南北は残存部で約3.0mである。底面の形状は全体的に西側が深く傾斜し、北西隅に長方形の小掘り込みがあって最も深い。ここが水を集める部分と思われ、検出面からは124cmの深さとなる。また、この底面上にはいくつか跡痕と思われる小規模な長紡錘形の窪みが見つかった。埋土は下部しか確認できていないが、暗褐色の砂質土である。本跡は形状や位置からしてSX01に先行する井戸跡と思われ、石積は見られないものの、形状の類似から湧水地点まで下って水を汲む構造と思われる。出土遺物はカワラク・内耳鍋・龍泉窯系青磁碗・古瀬戸印皿などがある。いずれも小破片である。

オ. 石列・石垣・集石遺構

建物跡・井戸跡以外の集石遺構を一括して報告する。A区には多数の集石遺構が検出されたが、形状からみると直線的に石を配列した石列 (SH02・03・16、SA01・02)、直線的に石を積み上げた石垣 (SH09・14・15、SA03、SH30)、帯状に石が散布する帯状集石 (SH04・10・11・13・(24・25)・28・32)、円形・楕円形範囲に分布する集石 (SH12・20) などがある。この他に短い石列で建物内施設か竪穴建物跡の可能性のある遺構 (SH22) がある。全般的に石列・石垣・帯状集石のような細長いものが多く、その多くは区画に関連する施設と思われ、なかでも石列・石垣は整地境を画する施設とみられる。各遺構は途切れるところをもって1遺構と区切ったが、配置位置から類似時期に構築された群として括れる遺構がある。例えば、石垣SH09・14・15、SA03、SH30はA区緩斜面部と平地部の境にほぼ直線的ながら断続的に配置される石垣であり、緩斜面部整地に付随してA区内を2分する区画施設となる。この石垣群にはSH14・15中間に位置するSH16やSA03に平行するSH28も関連する集石群として含まれる。また、これらの石垣遺構上部で帯状集石SH04・10・11・13・32が検出されたが、接続するように検出された石列SH02・03も含めて1群をなすとみられる。この帯状集石群はSH09・14・15上部にあり、位置的にもほぼ重複するが、A区南部にあるSA03、SH30上面には同様の帯状集石は認められていない。なぜ北部にあって南部に無いのかは明らかにしえなかったが、帯状集石が認められなかった地点は直接低地と接する場所、あるいは緩斜面部の狭い場所にあっており、このことと何らかの関連があると思われる。これ以外では規模の小さいSH24と25はA区平地部の低地際において同類遺構と思われるものである。

なお、各遺構記号は初年度調査分ではすべてSHを付したが、2次調査ではSAと石集中No.を付した2者がある。整理では初年度調査部分SHと2次調査分SAをそのまま使用し、石集中No.はSHに振り替えた。したがって、ここで扱う遺構にはSA・SHを冠するなど一貫しないところもあるが、遺構形状に違いはない。また、SH01は欠番、SH05~08は建物跡を構成すると判断してST08、1次調査SH19と2次調査SH29は同一の建物基礎としてST10にまとめた。さらに、ST10上面で検出された小規模なSH27 (調査時石集中No.2) はST10上面施設の可能性があり、SH26 (石集中No.1) はSH30の上面部分に別遺構番号を与えたものなので欠番とした。

SH02 A区 DK18~DQ18 (第28図、PL3)

A区北西部に位置し、1次調査A区平地部1面上部で検出された。SH04から分岐するように始まり、SH03と平行して緩やかなカーブを描きながら東西に延びる。その規模は長さ約11mである。北側に石の面を揃え、一部には2~3段積まれる部分も認められるが、南側は小規模な礫が不規則に散在する状態と

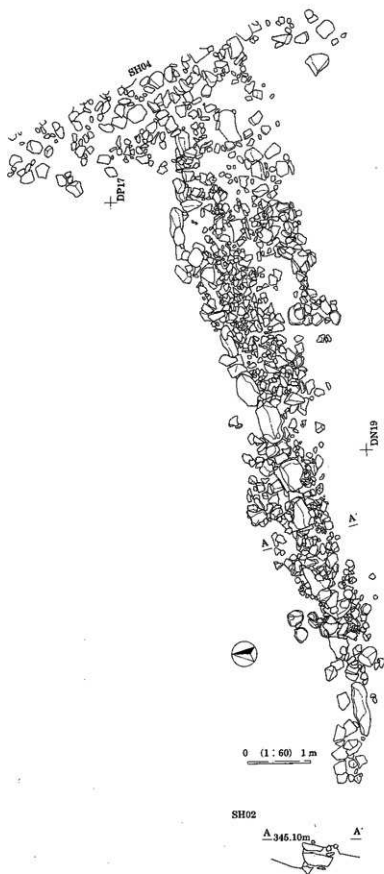
なる。明らかに北側を意識した石積みとなっている。調査でもこの状態から本跡の北側が一段低くなっていると推測したが、土層の上では明瞭に確認できなかった。出土遺物は検出時および石の解体時に採取されたものでカワラケ・内耳鍋の破片若干と古代の須恵器甕破片若干が出土した。本跡は具体的な性格は不明ながら整地を伴う区画施設の一部とみられ、連続関係からSH04と近接時期の所産と思われる。また、SH03も平行して位置することから関連性が窺える。

SH03 A区 DK16～DM15 (第31図、PL3)

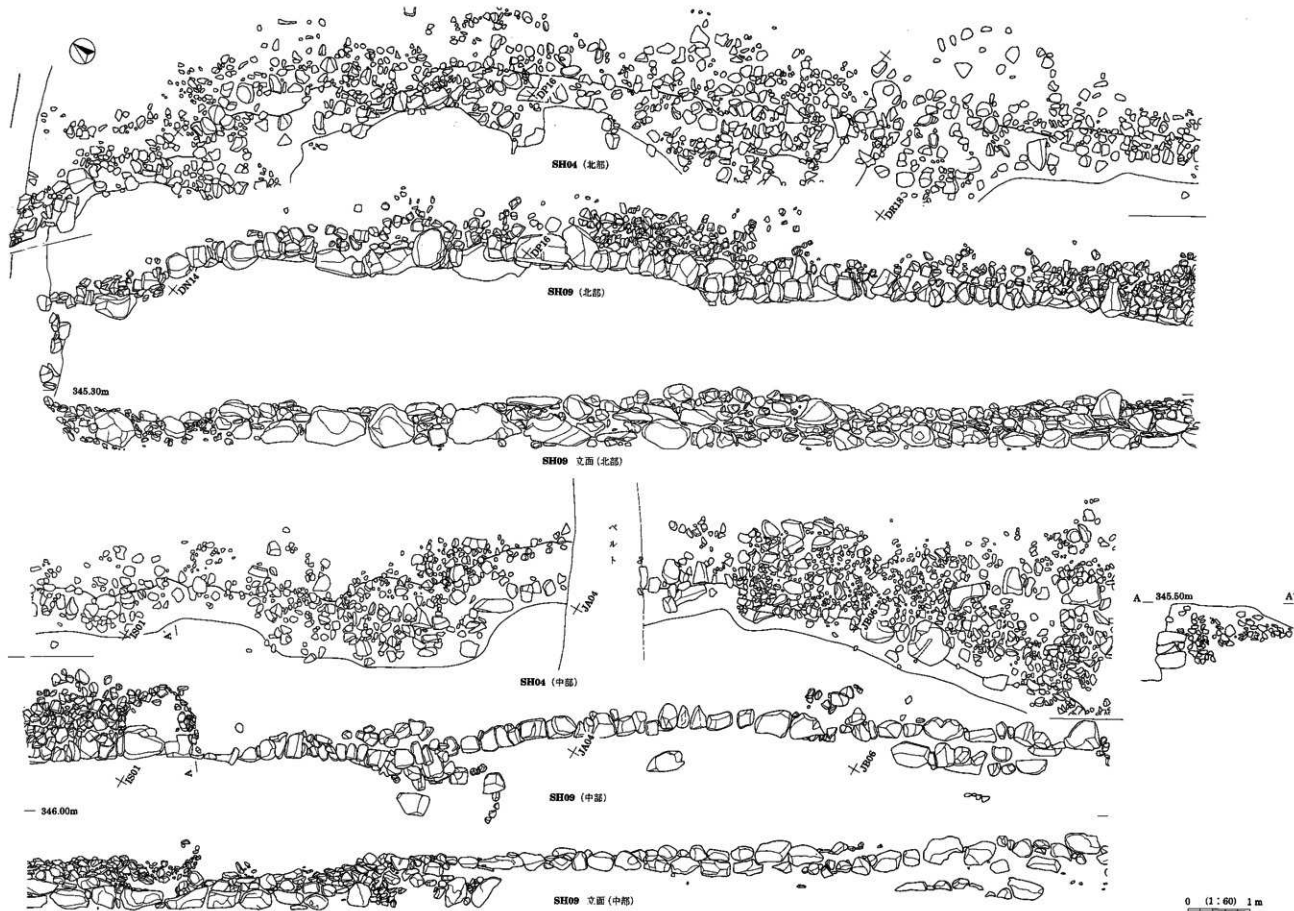
A区北西端に位置し、1次調査I面上部で検出した。東端はSH04・11から分岐するように始まり、ほぼ南西方向へ延びて西端は調査区外へ連続する。その長さは調査域内では約7.6mを確認した。石の配置方法は東部で拳大～人頭大の礫を帯状に配置するものの、西半分は比較的大きめの礫を間隔を開けて列状に配置する。SH02ほど明確に石の面を描える傾向は窺えない。出土遺物はない。本跡も何らかの区画施設と思われるが、北側は山斜面が迫る狭い範囲を区画することになるため、どのような区画目的で設定されたのか不明である。位置関係からSH03・04・10～12は関連する遺構と思われる。特にSH10～12の部分を区画する意味をもつ施設として本跡が設定された可能性は考えられる。

SH04 A区 DL13～JD08 (第29・30図)

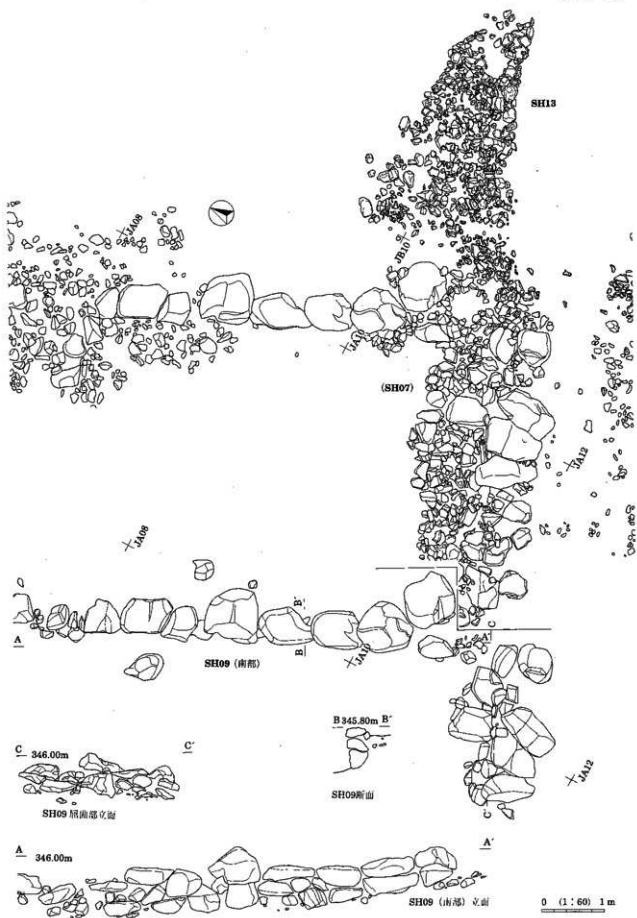
1次調査I面上部で検出した。A区緩斜面部と平地部境に構築された



第28図 SH02



第29図 SH04・09その1



第30図 SH04・09その2、SH13

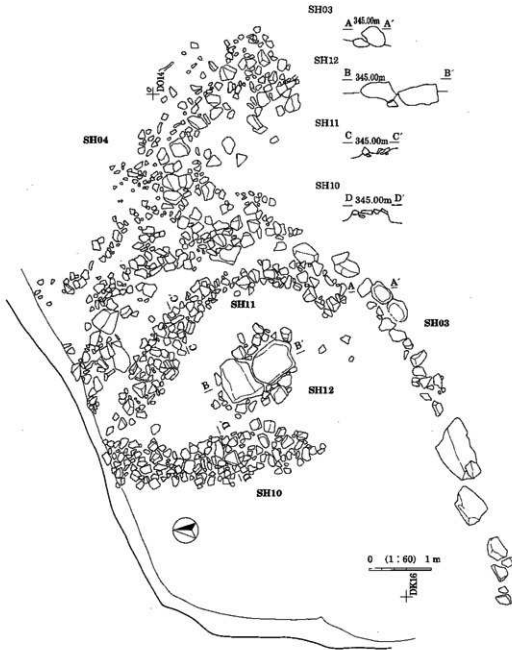
SH09の上面に位置し、北端は調査区外へ延び、南端はST08に含めたSH07が分岐する付近までは確認できた。その長さは調査域内で約37.2mを測る。南端付近のST08を構成するSH07との関係は直接把握できていないが、南端がSH07端部付近で消えており、相互に接続していた可能性がある。また、SH02・03はそれぞれ連続するように検出されているので、ほぼ関係する遺構とみられる。本跡は長大ではあるが、拳大～人頭大の礫を中心とする帯状礫集中と認められたもので、石積や石列を構成する部分もなく、石の配置に規則性もない。また、SH09断面図ではSH09裏面から上面まで小礫を含む土層が連続するように記録されているが、本跡は石垣SH09を覆うように緩斜面側と低地側に礫が分布することから別遺構と判断した。ただし、本跡は石を意図的に用いた遺構というよりは整地土内の礫を検出した可能性が残る。出土遺物は1遺構としては最も多く採取され、内耳鍋・カワラケ、火鉢・風炉、古瀬戸香炉などが得られている。これ以外にも古墳時代の土師器甕、古代の土師器甕、内黒鉢、須恵器甕等も混入して出土した。本跡は礫を意図的に用いた遺構でなく、礫混じり土を平地側に盛った所産とも思われる。その起源土層は緩斜面部にあるとみられるが、なぜ本跡のような遺構が構築されたのかは不明である。SH09とあまり位置が変化していないことからすると緩斜面部分を拡張するための整地とは考えにくく、むしろ土塁状の施設、あるいは別地点の削平土を盛ったものとも考えられる。

SH09 A区 DL13～JD08 (第29・30図、PL4)

1次調査のI面下部で検出された。緩やかなカーブを描きながらA区緩斜面部整地先端に位置し、上部にはSH04が重複している。北端は調査区外へ延びて不明ながら、南端はA区中央南よりの緩斜面部への通路と思われる付近でL字状に西に短く折れて終わる。調査区内で確認した規模は南北方向が約43.3m、L字状屈曲部が約2.8mの合計約46.1mである。石垣は低地側（西側）に石の面をそろえて1～5段前後積まれ、高さは60～100cmを測る。ただし、石垣上端の高さを比べると北側が低く、南側が高くなっており、その比高差は最大1mである。石の積み方は比較的大型の礫を西側に面をそろえて積み、その裏に小振りな礫や礫混じり土を充填するものである。本跡の断面では整地に伴う石垣裏の礫が石垣上端より高く連続するようにみえる部分があるが、これが上面のSH04に帰属するものか、あるいはSH04の起源となる整地なのか判然としにくい。石垣に用いられる石の規模は全般的に大きめのものが多いが、場所により若干小さな石が用いられるところもある。北側では最下部に大きな石を配置し、その上や間を埋めるように人頭大の礫が配置され、全体的に上部ほど礫が小さくなる傾向が認められる。それに対して南側の一段高い平地部に面した部分では類似した規模の石が揃えられ、入口付近の南端部では一抱えもある石を用いて最も丁寧に積まれる。これは入口付近の目につく部分丁寧に造作したものと思われる。出土遺物はSH04除去作業中や本跡検出中に採取された遺物がほとんどで、裏込整地内では部分的なトレンチのみで採取を試みたが、ほとんど得られていない。本跡は配置場所からもA区で整地を伴って屋敷が造成される初期に構築されたものと思われ、ほぼ直線的に並ぶSH14・SH18・SA03・SH30と関連する一連の遺構と思われる。また、上面で本跡を覆うSH04や関連するSH02・03・32、ST02・03・08は本跡より後出する段階の所産と捉えられ、A区内が改築される段階で廃絶したと思われる。

SH10 A区 DK13～DL15 (第31図、PL3)

A区平地部北部のSH12の南側に位置し、1次調査I面上部で検出した。北端は調査区外へ延び、南端はSH12付近で消えるまで確認した。その規模は幅約0.8m、調査域内で長さ約3.5mを測る。拳大～人頭大の礫が南北に長い帯状に検出され、石積みと認定できるところはない。出土遺物は無い。本跡はSH12を取り巻くように位置しており、何らかの関連があると思われる。ただ、本跡は南北方向の方位に近く、周囲の石列・石集中とは配置方向が若干異なるようにもみえる。性格は明らかにしなかった。



第31図 SH03・10～12

SH11 A区 DL13～DM15 (第31図、PL3)

A区平地部の北西隅にあるSH12を取り巻くように位置する。1次調査のI面上部で検出した。本跡の範囲は北端がSH10と接触する部分周辺から始まり、カーブを描いて南端はSH03に連続する。ただし、接触するSH10との前後関係は明らかにできなかった。また、SH04とはほぼ平行して位置し、若干の細い帯状の空白地をおいて直接連続していない。形状は拳大～人頭大の帯状集石となり、石の配置に規則性もなく石積や石列となる部分も認められない。規模は調査域内では幅約0.7m、長さ約4.8mを測る。出土遺物はカワラケ・内耳鍋破片が若干採取されている。本跡はSH03に連続することから近似時期の所産と推測され、SH12を取り巻くように位置することからSH12と同時かそれ以後の所産と思われる。また、礫の配置状況はSH10に類似し、SH12を中核とした施設を構成する遺構ともみられる。

SH12 A区 DL14・15 (第31図、PL3)

A区の平地部北西隅に位置し、1次調査I面上部で検出された。北～東側をSH11、西側をSH10、南側をSH03で囲まれた範囲内にあり、SH11とSH03と関連する遺構と思われる。SH10との関連も想定できるが、SH10のみは方位が異なる点で直接関連付けられるか明らかにできなかった。形状は一抱えもある山礫2個を中心として周所に拳大～人頭大の礫若干が集中するもので、その範囲は東西約1.3m、南北約1.8mを測る。出土遺物はない。性格は不明であるが、礫の配置状況は他石集中や石列と異なって一抱えもある石を用いること、A区内でも北端に位置する点は注意される。庭園遺構、あるいは邪魔な礫を埋設した片付け遺構とも考えたが、確証はない。

SH13 A区 JE09～JF10 (第30図)

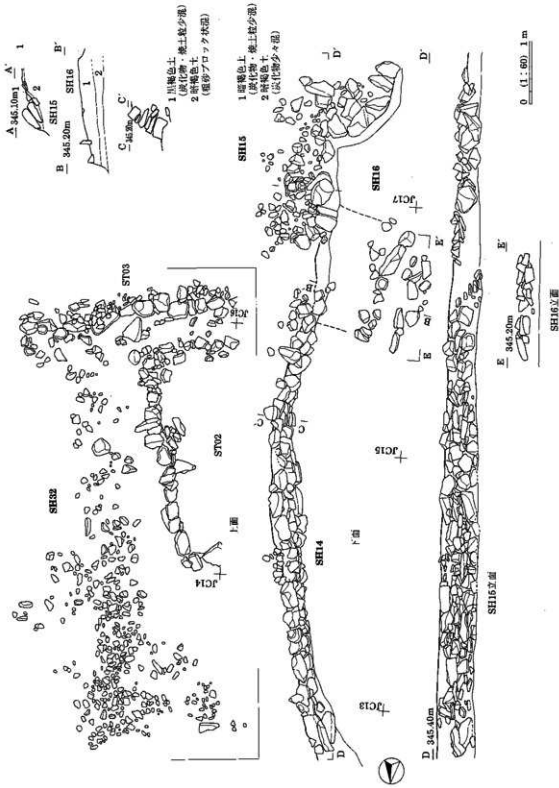
A区緩斜面部中央南よりに位置し、1次調査I面上部で検出した。拳大を中心とした礫が帯状に集中するもので、緩斜面部と平地部境の石垣SH04南端の屈曲部付近から始まり、山手の緩斜面側へ延びて徐々に細くなって消える。範囲は礫散布が散的となり、曖昧で明瞭なラインとして認定できないところもあるが、比較的集中する部分で長さ約4.4mを測る。幅はSH04周辺で約2.5mと広いが、東側へ徐々に幅が狭まり、先端は三角となって収束する。南に位置するSH07とは連続するように検出され、隣接するSH32とは礫の分布状態が類似する。何らかの関連があると思われる。出土遺物はない。本跡はSH04南端の緩斜面部通路と推定された部分に沿うように検出されており、この通路に関連した遺構であることは間違いないが、礫の分布状態は石垣や石列状ではないため、どのような性格の遺構として捉えられるか不明である。また、構造的にも何らかの区画施設の基礎部分を検出した可能性があるが、子細は不明である。

SH14 A区 JC13～JC15 (第32図、PL3)

A区南部に所在し、1次調査のI面下部で検出した。本跡の上面には重複した位置にSH32が位置し、SH32、ST02・03よりも先行する遺構と捉えられる。形状は低い石垣状となり、範囲はSH04南端から少し離れた地点からSH16付近の石垣が途絶えるまでとしたが、南の延長上にあるSH15とは連続するものと思われる。平面形は緩やかなカーブを描きながら南北方向に延びるもので、総延長約7.3mを測る。石垣は平たい小礫を低地側(西側)に面を揃えながら若干斜めに4～6段前後積まれるものながら、石が小さいために高さは約60cm前後でしかない。調査ミスで裏面の土層観察記録がないため、構築方法の詳細は不明であるが、類似したSH15から類推すると緩斜面部の先端付近に平石を積み上げ、背後を山砂・小礫を多く含む土で充填するものと思われる。本跡はSH09・SH15・SA03・SH30と共にA区を2分する石垣の一部と見られる。ただし、全般的にSH09に用いられる石よりも小さめの石が用いられる傾向があり、やや造作の違いが感じられる。

SH15 A区 JC16～JC18 (第32図、PL3)

A区南部に所在し、1次調査I面下部で検出した。遺構の範囲は北端がSH16周辺から始まり、南端は1次調査範囲内までとした。SH16周辺で一旦途切れるが、北側の延長先にあるSH14とは接続し、南端も2次調査で検出されたSA03が連続するとみられる。したがって、調査年次が異なるために別遺構記号が付されているものの、SH14・SA03はほぼ関連する遺構とみられる。形状は部分的に石積状に認められるものの、全般的には集石遺構状である。これは上面にあったST03に破壊されたためと推定され、SH14やSA03同様の石垣状の遺構と見られる。規模は長さ約3.3mである。上部はST03で破壊されるために本来の高さは不明であるが、本来はSH14とほぼ同規模になるとと思われる。構築方法は部分的に確認できる場所で緩斜面部先端に平たい山石を積み上げ、背後には小規模な山礫と山砂を多く含む土で充填するものとみられる。出土遺物は内耳鍋の小破片2点と弥生後期の高坏、古代の内黒杯・甕・鉢、須恵器長頸瓶破片が得られた。中世の所産は少ないが、古代の土器類は比較的多く採取されている。本跡はA区の緩斜面

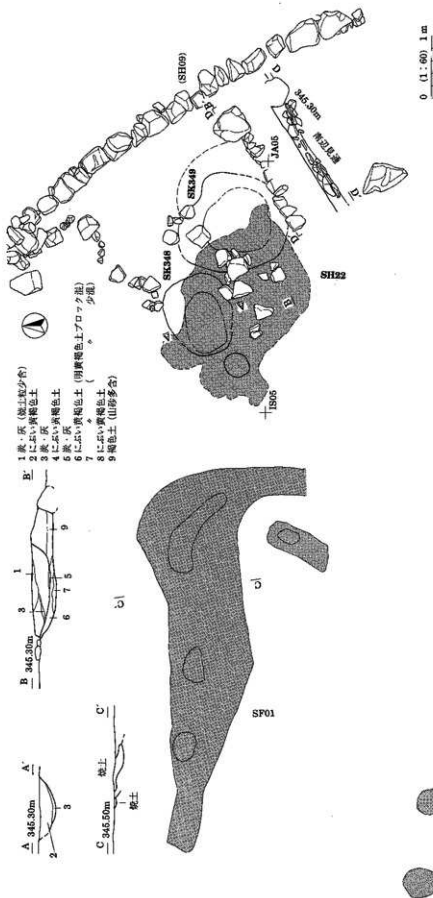


第32図 SH14～16・32

と平地部の境に位置し、SH14・SA03に関連した一連の石垣とみられ、重複位置にST03が位置することからA区内の改築が行われた段階では廃絶していたとみられる。なお、SH16はSH14と本跡中間に構築された入口施設とみられる。

SH16 A区 JB15~JC16 (第32図、PL 3)

SH14・15の中間に位置し、1次調査の1面下部で検出された。調査ではSH32、ST02・03下面でSH14・15と共に検出されたが、SH14と15の途切れる中間にあつて位置もSH14・15ラインより少し低地よりに突出した場所にあたる。石列の規模は南北2.0m、東西約1.0mの範囲であり、ほぼ2列に石が並ぶ形状である。石は積まれた状態ではなく並列しており、その石上面の高さはSH14・15上面より若干低い。検出時にはSH14・15の一部が破壊されたものではないかと考えたが、石の配置が意図されたようにもみえ、何らかの入口状の施設ではないかと考えた。ただし、その西側には低地が間近に迫り、しかも近くには緩斜面部への入口と推定されるSH09—14中間の空間地



第33図 SH22、SF01、SK348・349

があるため、何のために設置されたかは不明である。

出土遺物は検出時に採取されたもので内耳鍋の小破片が少量採取されている。

SH20 A区 NP16～NP18 (第27図)

A区南端に位置し、1次調査側道部のA区41層上面で検出した。遺構の残存状態は非常に悪く、重機による削平で上部を破壊した可能性がある。形状は礫が帯状範囲に散在的に検出されたもので、並べたり、積み上げた状態は確認されない。残存部の規模は最大幅約2.0m、長さ4.8mを測る。出土遺物はない。本跡の構築時期や性格は詳細不明であるが、礫の分布範囲は2次調査で検出された近世末水田の畦延長上に一致しており、近世の畦基部かもしれない。

SH22 A区 IS03～JA04 (第33図)

1次調査I面下部で検出し、A区中央のSH09脇に位置する。形状はSH09直交方向に小平石を最大で3段、高さ20cmほどに積み上げた約2.2mの石垣状遺構と、北側のやや離れた地点で平行する約2.2mの散在ぎみの中央の石列、さらにその北側にある約2.0mの石列からなる。これらの石垣や石列はほぼ平行して位置し、しかも規模がほぼ同じことから関連する遺構と捉えてSH22にまとめた。これらの遺構は規模が小さいこと、さらに明確な掘り込みは捉えられなかったが、南側石垣は北側に面を揃えて石が積まれることから堅穴状の掘り込みを有する遺構であった可能性がある。また、上面検出時には炭化物・焼土が集中的にみつかっており、中央の石列を除去したところで炭化物・焼土を埋土に含むSK348・349が検出されている。SK348は長軸130cm、短軸106cmの円形の平面形の土坑で断面形はU字状で検出面から底面までの深さは26cmである。埋土は底面に薄い炭化物層があり、上部はにぶい黄褐色土で占められる。SK349はSK348に隣接した土坑で長軸168cm、短軸162cmの不整形の平面形となり、南端はSH22の南側石組遺構と接する。断面形はU字状で検出面から底面までの深さは38cmを測り、埋土は炭・灰層とにぶい黄褐色土が交互に入る。この二つの土坑はSH22に関連する施設とみられるが、堅穴状の掘り込みが若干埋められた時点の所産で、しかも2基の土坑を覆う焼土層の上に中央石列がある。したがって、SH22は火を用いる遺構として継続的に維持されているが、SH22南側の石垣が構築された段階と、中央石列が構築された段階の2段階に分離できそうである。出土遺物はない。本跡は火を用いる遺構と判断されるが、その性格は明らかにしえなかった。掘り込みを有する点、さらに周囲に石列や石積みを伴う点では堅穴建物跡、あるいは建物内施設の可能性があるが、断定できなかったため、ここに掲載した。

SH24 A区 IK14～IL14 (第27図)

A区平地部南側の低地落ち際に位置する。1次調査のI面上部で検出し、周囲に石があまり認められないなかで、石の出土が目だったことから集石遺構と認定した。しかし、石の分布は幅約1.1m、長さ約3.9mの範囲内に散在し、そのなかで比較的石が集中する地点が3つ含まれる。出土遺物は一番東端の礫集中付近から内耳鍋の破片がまとまって出土していたが、直接関連するものと断定はできなかった。本跡は地形変換点に位置することから区画施設に関連する遺構と思われる。しかし、石の出土分布が散在的であることから、区画境に片付けの石を集めたものか、あるいは水田跡の畦基部とも考えられる。なお、形状の類似するSH25は距離的にやや離れるものの、関連する遺構であろう。

SH25 A区 IP13～IQ12 (第27図)

A区南部の低地落ち際東端付近にあり、SH24とは類似した立地場所ながら若干離れて位置する。1次調査のI面下部で検出し、SH24と同様に石が散在的ながら比較的多く検出されたところを遺構と認定した。石は幅約0.7m、長さ約2.7mの範囲に認められるが、東側に集中し、それ以外は散在的である。範囲も明確なラインとして認定しにくい。出土遺物はないが、立地場所や形態の類似するSH24とはほぼ同様の遺構と考えられる。

SA03・SH28・SH30 A区 JB20～OB07 (第34図、PL4)

A区南部に位置し、2次調査4・5面で検出された。調査では南北方向に延びる石垣をSA03、SA03南端から西側に屈曲する石垣部分をSH30(調査時には石集中No.5とした)とした。両者はL字形に接しており、SH28もSA03に伴う整地土内の集石と判断されたのでこれらをまとめて記述する。SA03はSH15の南延長上に位置し、2次調査区北端からSH30屈曲部まで長さ11.6mを測る。A区山際の整地に伴う石垣であり、西側は低地となる。平面的に石垣・礫集中部分と認められたのは幅0.7～1.2mと狭く、整地上にはST09、SH28がある。構築方法は山際の緩斜面を若干埋めて整地した後に、本跡の基部を少し掘くぼめて平石を積み上げ、併せて背後に多数の礫を充填したものである。石垣は最も高いところで約80cmを測るが、整地下部には石積みを伴わず上部のみに認められる場所も多い。下部から石を積み上げるところでは最下部に一抱えもある大きな石を配し、その上に規模の類似した人頭大の平石を積み上げる。また、石積みが判然とせず、崩れたような状態として認められた箇所もある。SH28はこのSA03上面のやや山手で検出された帯状の集石である。北端はST09付近にあり、南端はSH30付近までである。長さ約6.8m、幅約1.5mである。調査時にはSA03と別遺構と捉えられたが、断面観察ではSA03背後にある浅い溝状くぼ地内集石であることが判明し、SA03に伴う整地の一部と判断した。出土遺物はカワラケ破片2点、内耳鍋破片2点があるが、いずれも小破片である。SH30はSA03南端から西側に屈曲する石垣である。2次調査3面から礫が部分的に確認され、4面で全容が判明した。形状は岡筋に石積された内部を礫主体の土で充填する堤防状の形態となり、南側はST10とした建物整地で埋められていた。範囲もSA03接続部分からそのまま折れるのではなく、SA03南端側から山際へ少し食い込んだ地点から始まっている。長さはSA03屈曲部から西へ約5.0mを測るが、山手の整地部に食い込んだ部分まで含めると約7.8mである。幅は2.4m前後で最大は3.2mである。低地に面した部分の石垣は高さが最大約80cmを測り、部分的に一抱えもある石を積むが、多くは最下面に大きな石を配して、上部に人頭大の礫を積み上げる。上端はSA03接続部以西では平坦ながら山手の東部が若干高い。SH30はSA03と接続するものの、その形状が異なる。これはSA03が山際の狭い範囲に施された整地に伴うもので、本跡は低地側にかなり拡大する整地による違いと見られる。出土遺物は内耳鍋やカワラケなどの破片の他に唐津皿がある。SA03・SH28・30は構築順序差が認められるが、その時間差は不明である。しかし、連続あるいは関連した遺構群とみられるためA区全体としてみると類似時期の所産ではないかと思われる。

SH32 A区 JC12～JC15 (第32図)

SH14の上面にあり、1次調査1面上部で検出された。北端はSH09脇の緩斜面部通路付近から始まり、南端はST03脇までである。ほぼ南北に長い帯状集石である。北端はSH13と平行してL字状に屈曲しているようにも見えるが、石分布は散在的なため断定はできない。範囲は曖昧であるが、幅約1.0～2.0m長さは約6.4mを測る。拳大の礫が帯状に集中して検出されたもので、石積みは認められない。SH13と類似した形状で関連すると思われる。出土遺物はない。構築時期はSH14の上面に位置することからSH04・14以後の所産で、ST02・03・08と同時期の所産と思われる。性格は不明であるが、本跡自体が区画施設になるとは考えがたい。区画付近の整地の一部、あるいは区画施設の基礎の一部と思われる。

SA01 A区 NR05～NR11 (第27図、PL4)

A区南部に位置し、2次調査1面で平面の大部分を確認して2面で残存する石を検出した。平面位置と1・2面検出標高を比較すると1・2面間に大きな差は認めがたく、ほぼ同一遺構を分割調査したものと判断される。本跡北端はSA02と接続し、南端は2次調査域内で立ち消える。形状は南北方向に石を並列するもので長さは約12.2mを測る。礫配置は直線的ながら散在的で、密に配置したり礫面を揃えるなどの意識は窺えない。出土遺物はない。本跡はSH30とST10整地西側の若干低地よりあって、ほぼ類似した

場所に構築されるが、検出面は異なって直接接続する遺構ではない。本跡はSH30、ST10の区画を踏襲するなかで構築された石列であり、位置的にも水田の境周辺に施された畦の基部ともみられる。構築時期は下層の水田面との関係から近世末以後の所産とみられる。

SA02 A区 NR05~NR11 (第27図、PL4)

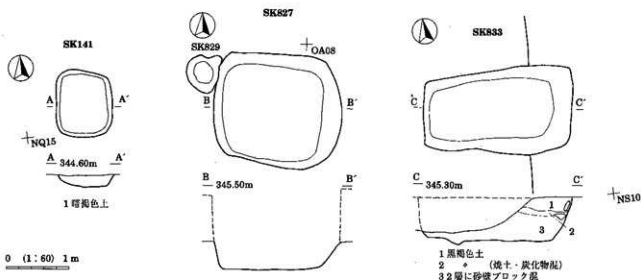
A区南部に位置し、2次調査1・2面で検出した。1面ではSA01北端と接続してL字状になる石列として検出されたが、2面では低地側に延長される部分と1面と重複する位置の石列が検出された。これらの遺構は検出面ごとの石出土標高を比較したところ、ほぼ連続しているのと同様一遺構を分割調査したものとして一括した。本跡は長細い石を直線的に並列するものでSA01との接続部分東側は直線ながら、SA01接続部西側では若干南側に膨らむ緩やかなカーブを描く。東端はSA03・SH30の接続部分まで確認したが、その延長上には暗渠がある。西端は調査外へ連続するが、延長先はA・B区境の現用水付近までとみられる。調査域内で確認した長さは約13.8mである。検出層位からもSA01同様に近世末以後の所産とみられる。出土遺物は検出時にカワラケ・内耳鍋破片、志野織部大皿を転用した円盤が採取され、周辺では松代焼甕、唐津の鉄釉すり鉢破片、伊万里陶胎碗、伊万里破片などが得られた。

カ、土坑

柱穴・井戸跡以外のやや大きめの掘り込み遺構を土坑として報告する。A区ではSK141・348・349・827・833のわずか5基が検出されのみで、C区の土坑の多さと対照的である。これ以外に浅いくぼみ状の落ち込みが検出されたが、遺構かどうか断定できないもので除外した。また、SK348・349はSH22の関連施設として触れたので、ここではSK141・833・827の3基について記述するものである。なお、この3基はいずれも調査区南部に分布している。

SK141 A区 NQ14 (第35図)

A区南部に位置し、1次調査側道部分のA区41層上面で検出した。平面形は南北72cm、東西60cmの隅丸方形を呈し、軸方向は比較的東西南北に一致する。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは14cmである。埋土は暗褐色土の単層で出土遺物はない。本跡はA区41層上面で検出されたものの、構築面はより上層にあるとみられるが、出土遺物もないことから時期は不明である。ただし、遺構方位からみると同様



第35図 A区SK

分が低地にかかる。このことから、構築面はA区4層が整地部前面に堆積していた2次調査3面以上に求められる。平面形は長軸160cm、短軸96cmの長方形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは48cmを測る。埋土は3層に分層され、底面上には焼土粒・炭化物・砂質土ブロックを含む黒褐色土、中位に焼土粒・炭化物を含む黒褐色土、最上部に黒褐色土が入る。出土遺物はない。本跡は整地以後の所産とみられ、SK827とほぼ同時と思われる。ただし、2次調査1・2面で検出されていない点から近世後期までは下らないと思われる。性格は不明である。

キ. 溝跡

A区内では低地から平地部境にかけて5本の溝跡が検出された。このなかでSD03・11は近世水田に関連するもので、SD02も同様とみられる。また、SD05は自然流路であり、SD04はST10周辺で途切れる溝跡で整地以前の所産と思われる。なお、SD11は若干位置がずれる2本の溝跡からなるが、ほぼ同一の溝跡の作り替えと捉えてSD11にまとめた。

SD02 A区 NM15～MN18 (第36図)

1次調査側道部A区41層上面で検出し、地形的にはA区低地内に入る。SD03と切り合うとみられるが、接触部分がトレンチに当たり前後関係は不明である。南端は調査区外へ延び、北端は2次調査側へ連続するものの、北端は2次調査の調査域から外れて不明である。調査域内ではN-22°-W方向で長さ約6.8mを確認した。断面形はU字状で検出面から底面までの深さ約42cmである。埋土は明褐色～黄褐色を基調とする砂質土で粒度の違いから上・下層に分層された。出土遺物はカワラケ破片が1点採取された。

SD03 A区 NM05～MN18 (第36図)

1次調査側道部A区41層上面で南部を検出し、北側に連続する部分は2次調査の5面(A区5層)上で確認した。検出土層から近世水田の用水とみられる。南端はSD02と重複するとみられるが、接触部にトレンチを入れたために切り合いは不明で、2次調査3面検出の水田畦はほぼ重複する位置にある。南端は調査区外へ延び、北端は1次調査域へ連続するものの、見逃されて調査されなかったが、ほぼSD11に接続するとみられる。確認範囲ではST10西辺に平行するN-9°-E方向に長さ約25.4m、SH30先端付近でN-80°-W方向に直角に折れて約5.0mほど延びるL字状の形状となり、総延長は30.4m以上である。埋土は近世水田耕作土と同じA区3層に近似した褐灰色粘土の単層である。出土遺物はない。

SD04 A区 NS11～NR19 (第36図)

1次調査側道部A区40層上面で検出した。南端は調査区外へ延び、北端はST10整地に切られて不明となる。検出面や切り合いから中世末～近世初頭の整地よりも古い所産とみられる。走行方向はSD03とほぼ平行したN-9°-Eで確認長は約16.4mである。断面形はU字状を呈し、最も残存する調査区南壁では深さ約50cmを測る。埋土にはぶい黄色褐色の粘性のあるシルトである。出土遺物はない。

SD05 A区 IL16～NO05 (第36図)

1次調査本線部分の低地にあり、近世水田土層を除去したA区41層上面で検出した。形状はA区低地内を蛇行する浅く幅広いもので、形状から自然流路とみられた。ただし、自然流路とするとB区低地がある程度埋没した段階のものと考えられる。本跡に直接帰属すると捉えられた遺物はないが、上部の水田土層からはカワラケ・内耳鍋、瀬戸美濃本業焼の鉄釉碗、古墳時代土師器高環、甕の破片が得られている。

SD11 A区 EH19～NJ10 (第36・37図)

A・B区境に位置する現用水に先行する古用水である。位置的には現用水とほぼ重複するものの、A区低地付近では現用水よりもかなりB区側に寄り、B区側の立ち上がりはB区7層前後にある。1次調査本線部分では本跡の範囲と調査区壁で断面図のみを記録したが、2次調査では重複位置にコンクリート3面側溝が作られたために調査不能で、1次調査側道部分の該当位置はトレンチ調査で面的には確認していな

い。そのため連続関係には不安を残すが、調査区壁の土層図との比較から、ほぼ調査範囲を横断するとみられる。走行方向はN-6°-Wで長さは約86m以上である。断面形はA区側がやや高いU字状を呈し、検出面からの深さは50cmである。埋土は上部に灰白色に近い褐灰色土、下面に暗めの褐灰色土に分層された。面的に2本の溝が重複するようにみえるところがあるが、埋土の違いが重複位置の掘り直しかは明らかにできていない。出土遺物は面的な精査を実施していないため採取していない。

ク. 焼土跡

I面内で焼土跡と捉えられた遺構は2基ある。ひとつは平地部SH09脇にある炭化物集中であり、もうひとつは2次調査6面で検出された山際のSX06とされた焼土跡である。これ以外にA区緩斜面部の南東壁際で検出された焼土跡があるが、上層から掘り込まれる攪乱と判断されたので除外した。

SF01 A区 IO04~IR05 (第33図)

A区のSH09西脇の平地部に位置し、1次調査I面下部で検出した。L字状の帯状に炭化物・焼土が検出されたところを中心とし、南側周囲にも焼土・炭化物集中が点在する。帯状に分布するところは平地部西側が一段低くなる際にあつて地形に合わせて傾斜し、内部にいくつか炭化物の塊状集中が含まれる。本跡は調査時に単独の遺構SF01とされたが、整理段階で図面を照合したところ炭化物・灰が多量に含まれるSH22、SK348・349が東側に隣接することが判明し、相互に関連することが推測された。本跡はSH22、SK348・349に関連する何らかの火を用いる施設と思われるが、具体的な性格は明らかにしえなかった。出土遺物はカワラケ、古瀬戸か大塚と思われる天目茶碗破片がある。

SX06 A区 JA20~OA02 (第91図)

2次調査6面で検出されたが、一部は1次調査壁にかかっている。平面形は幅が最大約1.4m、長さ約4.5mを測る細長い紡錘形を呈し、その範囲に焼土・炭化物が分布する。位置的にはSH15・SA03の石垣前面にあたるが、直接切り合いにはならない。土層関係では先行する可能性があるが、これも断定的な所見ではない。出土遺物はカワラケ・内耳鍋の破片がある。性格は不明である。

ケ. 水田跡

水田跡はA区低地に広範囲に広がるが、2次調査3面の低地のみで調査を実施した。2次調査では粘性の強いA区3層上面で砂質の強い2層を除去して遺構を検出し、畦跡と推定される帯状の低い盛り上がりを確認できた。ただし、2層は砂質が強いとはいえ、単純な洪水砂層とは認定できておらず、検出された遺構も畦基部であった可能性がある。この畦はA区3層下面で検出されたSD03と位置が類似しながらも若干ずれているので、山手にSD03を配していた段階からA・B区境のSD11より取水するように変化して、溝跡の上が畦とされた2段階が想定できるかもしれない。ただし、SD03と2次調査3面で検出した畦はほぼ位置が類似することから地割は変化していないようである。出土遺物はA区3層検出面で伊万里碗、瀬戸美濃灰釉碗が検出されており、2層は近世末の所産と思われる。したがって、検出された畦が畦基部とすると水田は近世末前後の所産と思われる。

(2) B区の遺構

低地域B区では上部に数枚の水田層と思われる還元-土中金屈イオン集積層の互層が認められ、その下にB区7層とした灰白色シルト層がある。1次調査では中世末と思われるB区7層上面のみで遺構検出を実施し、B区低地を横断してC-A区をつなぐ帯状集石SH17を検出した。2次調査も同様であるが、微高地よりの浅いところで上面の近世水田の下部遺構と思われる溝跡を数本検出した。このB区は基本的に水田跡と利用されていると思われる。

ア. 集石遺構

SH17 B区 HR09～II07 (第37図、PL4)

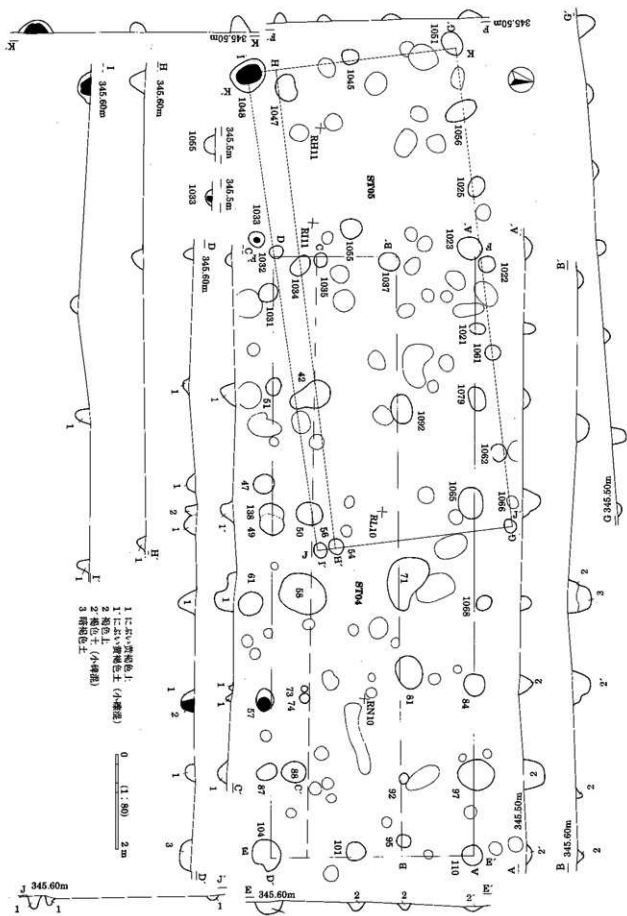
B区北側に位置し、1次調査本線部分のB区7層上面で検出された。形状は約1.4～1.6m、長さ約20mの帯状の集石であり、N-75°-E方向へ直線的に延びてB区低地を横断する。その先端には若干の空白地をおいてSD11と交差する部分で再び集石が認められた。B区低地を横断する部分は帯状に石を寄せ集めたものであり、積み上げたり石列状に配置するところはない。上面は水田層が被覆し、集石上面では盛土等は認められなかったが、配置位置や集石の様相から遺状施設の基礎部分ではないかとみられた。なお、SH17の西側に窪の欠落する空白地があるが、これは重機掘削中に破壊した部分で本来は礫が散布していた。この帯状集石東端のSD11と交差する部分も若干の空白地があるが、空白地の下層では溝跡などが確認できず、SD11に付随する畦があったと思われる。SD11と交差する部分の集石は部分的に石が立て並べられ、溝の改築に伴って石も並びかえられている。遺物はB区低地内を横断する集石内より内耳鍋、青磁盤、唐津碗、石臼などが得られた。本跡はA区とC区をつなぐ遺跡の基礎部分と思われるが、その上部構造は不明である。なお、現地割では本跡の位置に一致する区画は確認されず、本跡は現地割に踏襲されなかったようだ。

イ. 水田跡

水田面自体は調査を実施していないが、基本土層からみるとC区以西の表土-C区1層を切る現水田土層、B区西端部でC区1層が被覆する水田、さらにA区低地に連続する水田跡があり、A区3層に対応する水田層はB区において更に細分される可能性が知られた。B区低地水田の開始時期については土壌分析で7層よりも下層でプラントオパールが検出されていることから中世末以前にさかのぼる可能性が高いが、状況証拠ながら遺構から水田化が推測できるのは近世前半以後である。これはSH17のA区と接続する部分で石が途切れる空間があり、ここにSD11に関連する畦が存在したとみられるところによる。しかも現用水に先行するSD11も立ち上がりはB区7層上面とみられる点でも支持できよう。ただし、B区低地はA区低地よりも相対的に低いため、かならずしもA区低地と水田化された時期が同じであることは明確でない。これは堆積土の増加でB区低地が埋没し、地表面の上昇を招いてA区が類似した高さになって水回しが可能になるまで水田化できなかった可能性も考えられるからである。しかし、SD05の存在やA区SD03が構築された理由を考えると、SD03はA区低地とB区低地の標高差の矛盾を補助するために設置されたものとも考えられる。そして、低地の埋没で標高が同じになった時点で役割を終えたとも推測できる。いずれとも証する確証はえられなかった。なお、2次調査では低地と直交方向の浅い溝跡が検出されたが、これは溝状の形状ながら水田畦を盛り上げる際にできた水田耕作土下面の掻き揚げ痕の可能性のあるものである。ここではこの溝跡を取り上げて記述する。

SD12・13・14 B区 MT20～SB01 (第37図)

B区南部のC区微高地寄りに位置し、2次調査で検出された。地形と直交方向にSD12・13が並列し、その南に「く」の字状に折れる浅い溝跡SD14がある。形状が類似することや近接して位置することから関連遺構と思われたのでまとめて記述する。なお、調査時にはSD12～14はSD01～03とされたが、1次調査部分に同名遺構が存在するため重複を避けて整理段階でSD12～14に変更した。SD12は東端が攪乱で不明となるが、残存部分で長さ約8.0m、幅約120cmを測り、断面形は浅い逆台形を呈して検出面からの深さ14cmを測る。SD13は長さ5.4m、幅約70cmを測り、断面形は壁の立ち上がりが不明瞭なほみ状で検出面からの深さは8cmを測る。SD14は南端が徐々に浅くなって消えるが、長さ約2.8mは確認できた。幅約70cmで、検出面からの深さは3cmと非常に浅い。これらの溝跡は水田耕作に伴う遺構であり、SD12・13が並列する点、非常に浅い点から考えると水田耕作土の下面に残された畦掻き揚げ痕ではないかと思われる。



第38図 ST04・05

た。出土遺物はSD13よりカワラケが僅かに採取された。

(3) C区の遺構

C区はB・D区にはさまれた南北方向に長い微高地である。上面は若干の凹凸があるものの比較的平坦で、東縁は低地B区側へ緩やかに傾斜するが、西縁となる低地D区側は比較的急傾斜となる。基本土層はC区1層の褐色〜にぶい黄褐色土、その下に中世遺物包含層・遺構埋土の基調となるC区2層の褐色土、さらに検出面としたC区3層砂礫層からなる。検出された遺構のなかで葬送関連遺構SX03上部集石やSX04の基壇状遺構跡が検出できたことから、1層が洪水性堆積土であり、旧地表面をそのまま覆っているとみられた。遺構の遺存状況は全般的に良好であるが、B区寄りの東側は長年耕作の擾乱が著しく攪乱と遺構の識別が不明瞭となった。検出された遺構は全て中世以後の所産であり、中世以前の遺構は検出されなかった。遺構種類は掘立柱建物跡・竪穴建物跡・墓跡・土坑・溝跡などがあり、基本的に居住地として利用されているとみられるが、同じ居住域A区とは検出遺構に異なる点も多い。例えば、A区は遺構の配置状況や整地のあり方から単一の屋敷地と思われたが、C区は掘立柱建物跡や溝跡の配置状況から複数の屋敷地の集合であり、大規模な整地も認められない。また、C区ではA区のような石を用いる遺構は非常に少なく、掘立柱建物跡を主体として土坑・墓も多い特長がある。なお、調査では近世北国街道、あるいはその前身の中世道が遺跡を横断している可能性を想定したが、調査範囲内では確認できず、D区西の微高地付近にあると推定された。

ア 掘立柱建物跡

調査段階で認定されたものもあるが、具体的な規模や範囲の確定は整理段階で行った。全部で12棟の建物跡を認定したが、あくまでも調査段階で確定していないため、柱穴跡の有無は十分検証されておらず、構造・規模認定に問題を残すものも多い。しかもC区では柱穴跡が密集して掘立柱建物跡の存在は想定できるが、具体的な建物跡を認定できなかったところもある。ここで認定上の問題を残すものも含まれるが、建物跡の可能性が想定できたものを報告することにした。C区内の掘立柱建物跡のあり方をみると、北西隅と南東隅に複数建物跡が集中し、しかも重複して建て替えを繰り返したと思われる場所がある。その一方で単独で存在して建て替えられていないものもある。両者は時期差をもつ可能性もあるが、一定の屋敷地内で比較的長期的に建て替えられる建物跡と継続性のない建物跡の2種は想定できよう。

ST04 C区 RI09～RO11 (第38図、PL2)

C区南東隅に位置し、1次調査側道部と2次調査に分割して調査された。調査段階でも建物跡であることは窺っていたが、1・2次調査に分割されたため、具体的な規模や範囲の確定は整理段階に持ち越された。本跡はST05と若干位置がずれながらも重複して位置する。その前後関係は唯一重複するSK42の断面記録が不備で不明である。欠落する柱穴跡があるなど認定にも問題を残すが、棟方向はN-85°-Eで桁行7間約12.6m、梁行2間約3.4mで、南側に付属する庇状柱列を含めると合計梁行約4.2mの規模である。中央桁行の柱列は部分的に欠落したり位置がずれるが、後述するように構造的なものと思われる。柱間寸法は桁行約1.5m～2.0m、梁行約1.5～2.0mで、柱穴跡の直径は25～90cmとばらつき、深さも12～40cmとまちまちである。出土遺物はない。本跡はST05とは位置や規模が類似しており、両者は建て替えの関係と思われる。また、配置関係からST06・07、SD16は本跡と共にひとつの屋敷地を構成していたと思われる。

ST05 C区 LM16～LO17 (第38図、PL2)

C区南東隅にST04と重複して位置する。建物跡の認定は整理段階で行った。ST05との前後関係は両者が重複するSK42の土層断面の記録が不備で不明である。本跡の平面形や規模については欠落する柱穴が

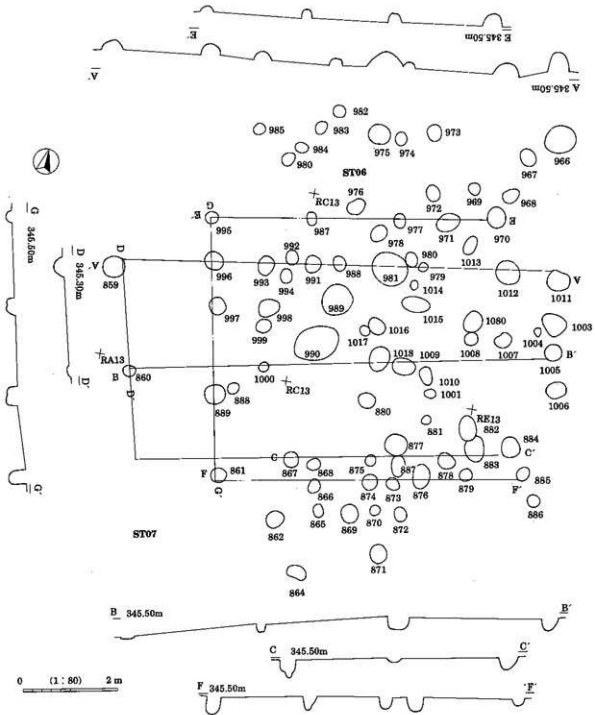
あって断定はできないが、認定したところは棟方向はN-79°-Eで桁行6間約10.2m、梁行2間4.4mで桁行はさらに延びる可能性がある。本跡はST04のような底状柱列は特定できなかったが、ST04と比較すると、上記の認定した範囲は底状柱列の範囲であって内側に入るSK1047-SK54のラインが本来の南辺桁行となる可能性がある。また、北辺桁行西側の延長先にはSK1053があるが、これが本跡の関連と考えると、もう1間西に延びる可能性がある。なお、内部の柱穴跡はST04同様に確定できなかった。柱間寸法は桁行で約1.3m~2.2mとなり、梁行は約2.0~2.2m前後となるが、梁行は南辺が底状柱列であった場合、底状柱列が幅60cm、梁行本来の柱間寸法は1.7~2.2mとなる。柱穴規模は直径30~70cmとばらつき、深さは10cm強~50cmまで認められ、一定の規模に限定されない。出土遺物は無い。本跡の規模・位置はST04と類似し、建て替えの関係になると思われる。ただ、棟方向が若干異なる点や桁行が短いなどの差異はある。

ST06 C区 RB11~RE13 (第39図)

2次調査で検出され、C区南部SD16南のST04・05西側に位置する。本跡周辺は柱穴跡の重複状況から類似建物が建て替えを繰り返していると想定され、整理段階の検討からST06とST07の形態の異なる建物跡2棟を認定した。しかし、何れも柱穴跡配置が規則的でなく、認定に不安を残すものである。したがって、本跡とST07はあくまでも可能性のひとつとして提示するものであり、規模や構造が確定できた遺構ではない。また、本跡とST07は別の建物跡として扱ったが、両者が組み合わせてひとつの建物跡になる可能性も残る。認定したものは南北3間約5.2mで、東辺柱列が確定できなかったため東西方向の規模は不明であるが、認定範囲は東西3間約5.6mである。棟方向は不明であるが、東西に延びる辺の方向はN-82°-Eとなる。側柱が規則的に配置すると看取されたところから建物跡を認定したが、内部では側柱と一致する場所にある柱穴跡は検出されおらず、内部構造は不明である。ただし、南北・東西のいずれか1方向のラインに一致するものはSK880やST07の柱穴跡としたSK989・991・1012などがあり、側柱と一致しない位置に内部柱が配置される構造なのかもしれない。柱間寸法は南北方向で1.8・1.7・1.7m、東西方向は北辺で2.0・1.8・1.9m、南辺で一部2.2mを測るがほぼ1.7~2.0m前後と近似した数値である。柱穴跡は平面形が直径24~40cmの円形を呈し、断面形はU字状を呈して検出面から底面までの深さ20~40cmを測り、北辺側のほうが20cm強と浅いものが多い。直接帰属する出土遺物はないが、周辺のSK879からカワラケ・内耳鍋の破片各1点が出土している。ST07は重複場所に位置し、しかも柱間寸法や建物跡方位は同じである。建て替えか、あるいは同一遺構を別建物跡跡に分離して捉えたことが考えられる。なお、本跡はST04・05と共にSD16南の屋敷地を構成する建物跡とみられる。

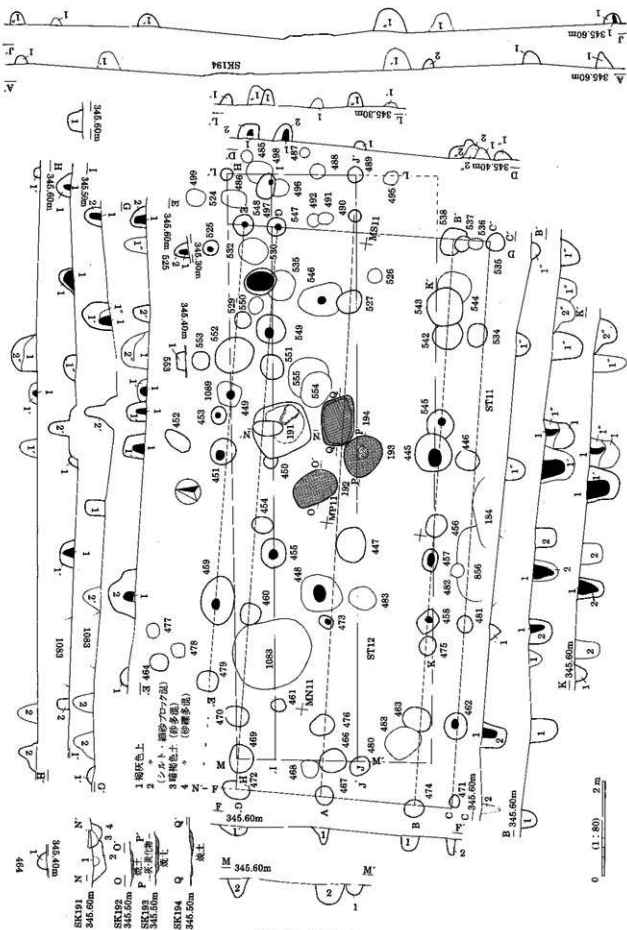
ST07 C区 RA12~RE13 (第39図)

2次調査で検出し、ST06と重複した位置にある。認定の経過はST06に同様であり、SD16南側に集中する柱穴跡のなかでSD16や重複位置にあるST06と同方位で等間隔に並列する柱穴跡の組み合わせから整理段階で認定した。しかし、南桁行西側から2本分の柱穴跡は相当位置に検出されておらず、東側梁行の中央の柱も同様に見つかっていない。認定した建物跡は棟方向N-83°-Eで、桁行4間約7.8m、梁行2間約3.9mの長方形建物跡とみられる。なお、東梁行中央の柱穴が検出されていないが、桁方向の東延長上約90cm離れてSK1011・1005が並列する。これが東梁行柱列とすると桁行8.7mとなる。柱配置は側柱が比較的規則的に配置するものの、内部の柱穴跡で桁・梁行側柱と一致するものはSK1009のみしかなく、内部の柱配置は不明である。ただし、1方向のみの側柱を結ぶライン上に並ぶものはST06としたSK995・997・889・861・987・977・970、他にはSK1018・1007などがある。この様相はST06も同様で、内部柱は側柱に一致しない位置に設定される構造か、側柱のほうが建物跡の重量を支える役割を担っていたと思われる。柱間寸法は北側桁行で1.8・2.0・2.0・1.9m、西梁行で北側から2.0・1.9mである。この



第39図 ST06・07

柱間寸法はST06に類似する。柱穴跡は直径24～72cmの円形を呈する。断面形はU字状を呈して検出面からの深さは10～40cmまでであるが、20cm前後が最も多い。出土遺物はない。本跡は認定に不安を残し、ST06と組み合わせる同一建物跡を分離して捉えた可能性もある。しかし、周囲を含めた柱穴跡の分布密度からは複数建物跡が建て替えられていることは間違いないと思われる。また、ST04・05共にひとつの屋敷地を構成していたと思われる。

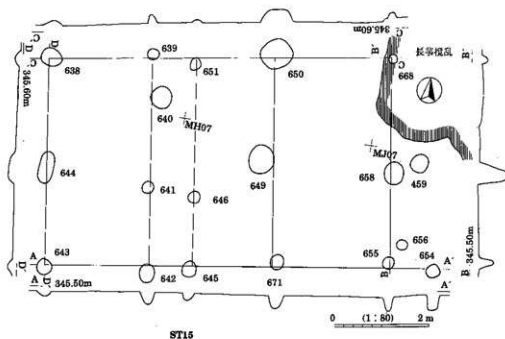
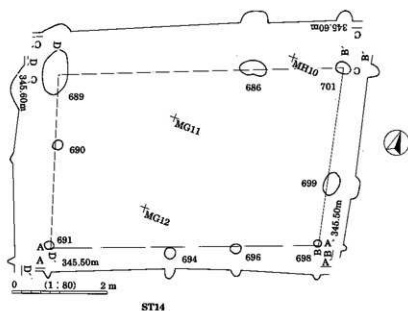


第40図 ST11・12

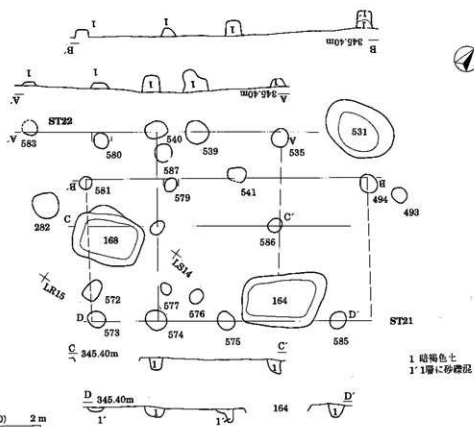
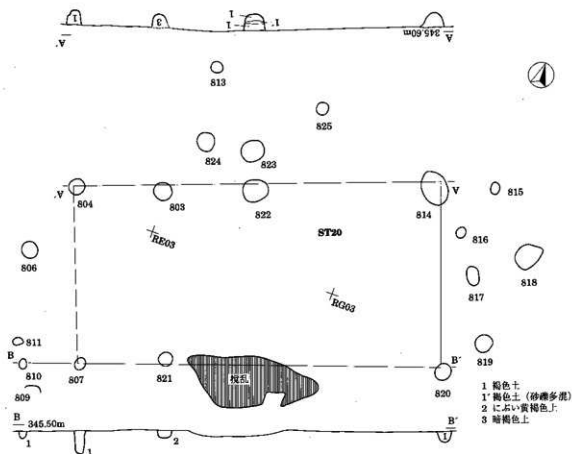
る。

ST13 C区 LJ11~LL12 (第41図)

C区北西部にあり、ST11・12西側に隣接して位置する。整理段階の検討から桁行1間?約3.9m、梁行1間2.7mの小型の側柱建物跡と認定した。桁行が長過ぎるので本来は2間とみられ、また、北辺桁行延長先約2.6m離れた場所にも柱穴SK468があり、もう1間延びる可能性もある。ただし、延びた場合はST11・12との同時存在は考えられない。棟方向はN-78°-Eで柱間寸法は桁行2間とすると約2.0m弱である。柱穴跡は平面形が直径約30~50cmの円形・楕円形を呈し、深さは検出面より30~50cmである。柱痕は



第42図 ST14・15



第43図 ST20~22

SK437のみで確認された。本跡はST11・12に棟をそろえて並列することから、ST11・12に付属する建物跡とみられるが、切り合う可能性もあって断定できない。

ST14 C区 MF06～MH11 (第42図)

C区中央東部のST15南側に位置する。建物跡の可能性は調査段階でも想定されていたが、具体的な認定は整理作業段階でおこなった。しかし、周辺は現代の長芋耕作による攪乱が著しく、規模や構造の認定に不安を残す。本跡の規模は桁行3間約5.7m、梁行2間約3.8mの側柱建物跡で、棟方向はN-70°-Eである。柱間寸法は梁行で1.4～2.6mであるが、2.0m前後が多い。梁行は各辺で1.4と2.4、1.5と2.2mを測り、それぞれ対応位置にあたる反対側が狭くなる。柱穴跡は直径30～50cm前後の楕円形・円形の平面形を呈するが、SK689のみが長軸98cm、短軸52cmの楕円形である。断面形はU字形を呈して検出面からの深さは10～20cmを測る。柱穴は全般的に浅いものが多いが、これは上面が長芋の攪乱で削平されているためである。埋土は褐色土の単層で柱痕が確認されたものはない。出土遺物はない。

ST15 C区 LM16～LO17 (第42図、PL3)

C区中央東部のST14の北側に位置する。調査段階でも建物跡と想定されていたが、具体的な柱穴跡と範囲の認定は整理段階で行った。ただし、東側を中心に長芋の攪乱が著しく規模の認定には不安がある。整理で認定した規模は桁行3間約7.3m、梁行2間約4.4mで棟方向はN-81°-Eである。西側から2・3番目の梁行柱列は間隔が狭いが、両者ともに中央の柱穴跡が南にずれて位置しており、建物内の柱配置上の1間とするよりは改築あるいは内部構造にかかわるものとみられる。柱間寸法は桁行2.2～2.6m、梁行1.9～2.5mである。柱穴は直径20～60cmの円形、楕円形を呈し、断面形はU字形となる。深さは東側のほうが深いものが多く、最も深い柱穴跡は検出から底面まで約62cm、浅いもので20cmを測る。出土遺物はない。

ST20 C区 RD04～RG01 (第43図)

C区中央南よりに位置し、建物跡の認定は整理段階でおこなった。柱穴跡が少ないなかで長方形に配列する柱穴跡の分布から本跡を認定した。しかし、一部に柱穴跡が欠落するなど認定に不安がある。柱穴跡は側柱のみで規模は桁行3間約7.6m、梁行1間約3.7mであるが、柱間寸法から類推すると桁行4間、梁行2間と思われる。棟方向はN-70°-Eである。また、南側桁行西延長先にSK810があるが、これも本跡に帰属する可能性がある。柱間寸法は桁行は1.9mでほぼ一定している。柱穴跡は直径20～50cmの円形の平面形で検出面からの深さは20～50cm前後である。出土遺物はない。

ST21 C区 LQ14～LT13 (第43図)

C区中央北寄りのST11・12南側に位置し、建物跡の認定は整理段階で行った。欠落する柱穴跡が多く、規模も確定できていないが、長方形に配置すると見られた柱穴跡から認定した。認定範囲の規模は桁行3間約5.9m、梁行1間約3.0mで棟方向はN-56°-Eである。柱間寸法は桁行で約1.4～1.8mである。柱穴跡は直径30～40cmの円形の平面形を呈し、検出面からの深さは10～30cmである。出土遺物は本跡に帰属するとは断定できないが、ほど近いSK585から手づくねカワラケが出土した。なお、SK164との切り合いは判然としなない。

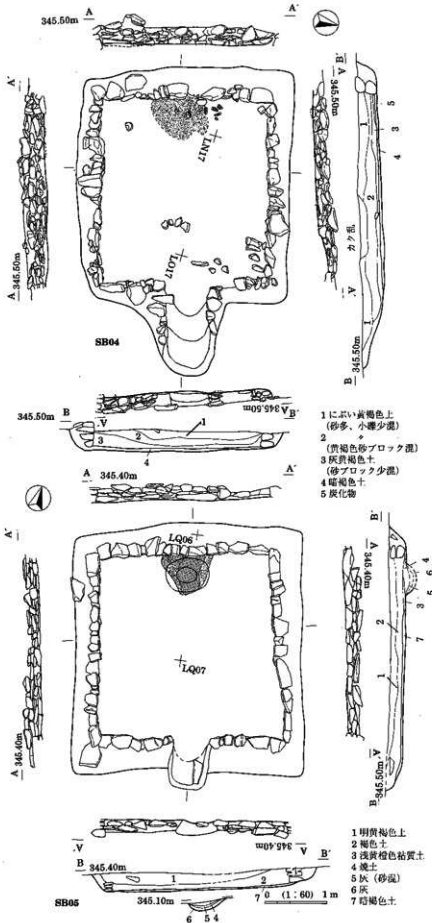
ST22 C区 LQ14～LT13 (第43図)

ST21と重複位置にあり、SK164に切られる。本跡は整理段階で柱穴跡の配置を検討して認定したもので、建物跡全体の規模は確定できていない。認定にあたってはSK585・540(・535)は直線的に約2.6m間隔で配置され、SK540の直交方向にあるSK578・574も約1.9～2.0mと等間隔で配置することから認定した。しかし、本跡の北桁行延長上にあるSK535はST11の柱穴跡としたものであり、この帰属と本跡の柱間寸法が長過ぎる点で建物跡認定に不安がある。ここでは可能性があるものとして提示する。想定され

る規模は桁行2間約5.2m、梁行2間約3.9mで、棟方向はST21に同じである。柱穴跡は直径30~50cmの円形を呈し、検出面からの深さは30cm前後である。本跡に帰属すると断定できないが、ほど近いSK585から手づくねカワラケが出土している。

イ. 竪穴建物跡

竪穴建物跡と断定できた遺構は2基のみがあり、いずれもST11・12に隣接して位置する。これ以外に規模的には竪穴建物跡に類する遺構があるが、断定できなかったために土坑の所で記述した。竪穴建物跡は県下の中世遺跡で普遍的に認められる遺構であるが、北信のみは検出例が少なく、しかも中世後半の所産は非常に限られている。このような地域的な偏在傾向が認められるなかで、本例は北信における数少ない中世後半例となる。本遺跡の竪穴建物跡は壁周囲に石積を伴うもので、類例は佐久市金井城遺跡、あるいは更埴市小坂西遺跡にある。他遺跡の所産も年代的に16世紀頃と思われ、本遺跡例も近似する。ただし、本遺跡では掘立柱建物跡と組み合わせっていた可能性があり、こうしたあり方は竪穴建物跡の機能を考える上で興味深い資料となろう。



第44図 SB04・05

SB04 C区 LP06~LQ07 (第44図、PL4)

ST11・12の南東部に位置する。東西3.8m、南北3.4mの方形に砂礫層を掘り込み、壁際に平石を3~4段積み上げて壁とする竪穴建物跡で、石積内の平面規模は東西3.0m、南北2.6mである。壁際の石積みは平石の面を揃え、上端の高さもそろっている。東辺中央には入口と推定される幅1.2m、長さ1.2mの突出部が付属し、建物内へ緩やかな傾斜をもって連続する。入口側面にも石積がみられ、通路自体は下端で幅62cmを測る。床面は薄く貼床されており、平坦で硬く、検出面からの深さは20cmを測る。柱穴跡は検出されなかったが、入口反対側の西壁際中央で炭化物の集積が検出され、炉のような施設があったと思われる。出土遺物にはカワラケの破片がある。時期は出土遺物から中世末の所産と推定される。本跡はSB05と共にST11・12に付属する竪穴建物跡と思われ、構造・規模の類似するSB05とは建て替えの関係と推定される。

SB05 C区 LM16~LO17 (第44図、PL4)

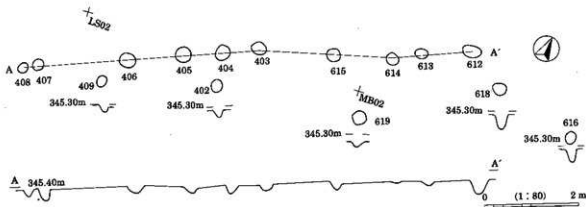
ST11・12北東部に位置する。本跡は南北3.8m、東西3.6mの方形の平面形を呈し、砂礫層を掘り込んで壁周囲に平石を2~4段前後積み上げるものである。石積内側の規模は東西2.8m、南北2.9mで、南側に幅60cm、長さ80cmの入口が付属する。この入口は緩やかに傾斜して建物内へ連続する。床面は検出面から30cm前後の深さがあり、全面に貼床されて平坦で堅い。内部施設は入口反対側の壁より焼土跡が確認されたが、柱穴跡は検出できなかった。根太材の上に柱をたて、その柱で直接屋根を支える構造ではないかと思われる。埋土は上部に小石を含む明黄褐色の粘性の強い土が入り、下層には褐色土が入る。出土遺物はない。本跡の構造・規模はSB04と同様であり、位置的にも隣接している。したがって、両者は建て替えの関係にあると思われ、位置的にST11・12に関連する建物跡と思われる。

ウ. 棚列跡

調査段階で認定された棚列跡はないが、整理段階で柱穴跡の配置関係からSA05の1条を認定した。これ以外に棚列跡の可能性のある柱穴跡配列がC区南東部に散見されるが、長手耕作の攪乱が著しい場所にあることから断定できなかった。しかし、他の可能性のあるものも含めてみて遺跡内では棚列跡があまり普遍的な存在ではなく、屋敷地の区画に多用される様子は窺えない。また、C区全体を囲む棚列跡も確認できないので、棚列跡は極めて限定された場所に用いられているといえる。

SA05 C区 LR02~LT01 (第45図)

C区中央北部に位置し、整理段階で配置関係を検討して認定した。中央で若干折れる「く」の字状を呈し、全体的にはN-72°-E方向に柱穴跡10基が長さ約8.9mの規模で配列する。南側にも柱穴跡が散在す



第45図 SA05

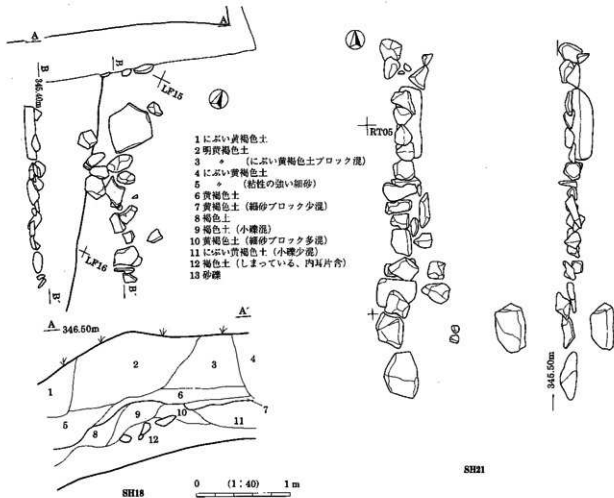
るが、関係は不明で北側周囲では柱穴跡が検出されていない。柱間寸法は不規則で西端のSK408・407は近接して並列し、406～403・614・613間も狭い。2時期の建て替えの可能性もあるが子細は不明である。個々の柱穴跡は直径20cm強の円形を呈し、検出面からの深さは20cm前後である。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。本跡の位置は現地表面地割に近似した場所にあたるが、少なくともC区1層堆積以前ではこの土地区画と同様の区画が存在していた可能性が想定される。

エ. 石列遺構

A区には同種の遺構が多数検出されたが、C区でも小規模な石列SH18・21の2基のみが確認された。いずれも山礫の平石を用いており、千曲川河川礫のみが認められるC区にあって比較的目立つ存在である。形状は石を列状に配するもので、いずれも規模は小さく、配置場所もB・D区の低地よりの微高地縁に部分的に配される。また、この2基以外ではSH23、SK361跡で検出された石列があるが、これらはSX04を構成する施設と判断したもので、SX04のところで触れる。

SH18 C区 RT12～RT14 (第46図)

C区北西部、微高地の落ち際に位置する。微高地西縁に沿って南北方向に平石を配し、北端は調査区外へ延びる。調査区内で確認した規模は約2.3mである。石配置は平石を雑に並べたもので、あまり丁寧なものではないが、本跡がかかった調査区壁の土層観察では石列が低い土盛り状施設の芯にあたりとみられた。位置的にみて地形変換点に設定された境施設と思われるが、上部構造や機能は不明である。出土遺物



第46図 SH18・21

はない。

SH21 C区 RT12～RT14 (第46図)

C区南東部のB区境に位置する。I次調査側道部調査で検出され、本線側の確認できる範囲を拡張したのが、南端側は表土掘削時に破壊した可能性がある。残存長は約4mでB区低地側に面をそろえた平石を1段ないし2段直線的に並べる。出土遺物はない。時期は子細不明ながら、地形変換点に配置された境施設と思われる。

エ、墓跡

本遺跡で墓跡と断定できた遺構は土葬墓11基、火葬関連遺構6基あり、すべてC区にある。いずれの遺構も骨の出土から認定したもので、出土骨から推定された埋葬遺体は成人2基、子供7基、馬2基で子供の埋葬例が多い。火葬施設は6基のうち5基が長方形の片側1辺に煙道が付属する形態となり、1例のみは全体形不明ながら方形に礫を積み上げた上部施設をもつ。なお、火葬施設に対応する火葬骨埋葬遺構は確認されていないので、基本的に遺跡外へ搬出・埋葬されたと推測される。これらの墓跡はC区内の広範囲に散在して認められるものの、比較的集中する場所と散在的な場所がある。集中する箇所はC区北西部のSX03・SK199・198付近、C区南西部のSK01・840・841・839・SM01～03の集中箇所2か所であり、それ以外は散在的な分布である。ただし、SM02は本遺跡で唯一大人の全身骨埋葬遺構であり、時期も近世の所産と推定されるので群として捉えられるか不明である。このように本遺跡の墓跡の特長は分布が散在的なものが多く、集中する場合も数が少ない点、子供の埋葬が多く遺跡内に散在することが挙げられる。後者のあり方は子供と大人の埋葬が別であったか、あるいは集落の存続期間の短さによって由来して結果的に死亡率の高い子供の埋葬例が多く認められることになったことが考えられよう。いずれにしろ、特定の墓域を形成する集団墓とはいえないものであり、基本的に造墓や葬送行為単位は「家」などの小単位によるものではないかと思われる。

墓跡の年代は明らかにできなかったが、SM02は近世の所産と推定された。これ以外は不明であるが、遺跡内に散在する理由を考えた場合には、居住地としての利用が認められるなかで屋敷ごとに墓や葬送が行われたことも考えられる。屋敷地内で葬送が行われたと解釈すると、子供と大人は基本的に埋葬のされ方が異なって子供は屋敷周辺に埋葬されて大人は遺跡外部に埋葬されたことになる。また、わずかな大人の埋葬例は時代差によるとみられようか。なお、本報告に収録した前山田・北之脇遺跡と本遺跡は重複した時期に存続したとみられるが、これらの遺跡で墓跡は検出されていない。

以下には火葬関連遺構、土坑墓の順で記述していく。なお、遺構記号はSM、SX、SKを冠するものがあって一貫していないが、これは調査段階で振られた遺構記号をそのまま使用したためである。

A. 火葬関連遺構

SX03 C区 LJ08・LK08 (第47図、PL5)

調査区北西部に位置し、SK198、199が隣接する。重機による表土掘削で端部を破壊してしまったが、調査区の壁にかかっていたことから本跡の上部施設を具体的に確認できた。上部施設は周囲にやや大きめの山礫を方形に配し、その中央に低い盛り土をして多数の河川円礫を積み重ねるものである。調査区外へかかることから全体の規模は不明であるが、礫の配置状況からすると1辺250cm以上の方形の平面形を呈すると思われる。盛り土の高さは約20cm前後である。これらの上部施設を除去した下層では焼土・炭化物・焼骨を伴う土坑が検出された。土坑は確認範囲で長軸130cm以上、短軸90cmの長楕円形の平面形を呈し、断面形はU字状を呈して検出面から底面までの深さ20cm程である。埋土下層からは大量の炭化物・焼土・

焼骨が採取され、壁も一部焼けていたことから火葬施設と判断された。上部に礫集中を伴う遺構には火葬骨を埋納する墓跡がよく知られるところだが、本例は下部が火葬施設となる点で異質である。所謂火葬塚と呼ばれる遺構に該当する可能性があるが、子細は後考に待ちたい。出土遺物は焼骨のみである。

SK01 C区 RC18 (第47図)

C区南西隅に位置する火葬施設で、同様のSK840・841は北西10mの地点にある。平面形は長軸142cm、短軸84cmのやや不整形な長方形に西辺中央部が突出するもので、断面形は両側が傾斜の緩やかな逆台形となる。底面付近には焼土や炭化物塊、わずかな焼骨が検出されている。形態から火葬施設と思われる。出土遺物は焼骨のみがある。

SK356 C区 ML08 (第47図)

C区東部に位置する。周辺は長いも耕作による著しい攪乱を受けており、底部付近のみが検出された。調査途中で本跡と切り合いになるSK667の存在が判明したが、前後関係は明らかにできなかった。平面形は長軸124cm、短軸78cmの長方形に西辺の一部が20cm程突出するものである。底面上では多量の焼土・炭化物と共に、規則的に配置される平石6個が検出された。火葬の際に棺の台石として置かれたと推測される。なお、この平石のひとつは石臼を転用した石鉢である。埋土は2層に分けられ、上部に焼土、下層は掘り方と思われる暗褐色土が入る。

SK838 (839) C区 QO17 (第47図)

C区南東隅に位置し、周囲に火葬施設SK840・841がある。また、SK839は別遺構番号が付されているものの、位置的にみて本跡の一部と捉えてまとめた。本跡の遺存状態は非常に悪く、一部は重機による掘削で破壊したため、火葬施設の煙道底部のみを検出した。規模は幅40cm、長さ130cm、検出面から底面の深さ30cmである。埋土は黒褐色土を基調として焼土・炭化物・灰などが含まれ、その含まれ方によって細分している。一部にブロック土を含む土層が認められている。出土遺物はない。

SK840 C区 QQ18 (第47図、PL5)

C区南西部に位置する。SK841と隣接し、南東10mほどのところにSK01がある。平面形は長軸110cm、短軸70cmの長方形を呈し、北辺中央部に30cmほどの煙道が付属する。煙道は浅い溝状に底面へ連続し、この周辺が最も良く焼けていた。また、底面中央では直交する方向に炭化物の塊が認められている。埋土は暗褐色土を基調として炭化物・骨片の含まれ方が多い下層とやや少ない上層に分層された。出土遺物は焼骨片しかない。

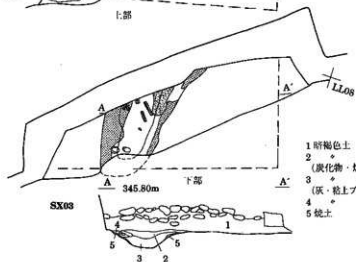
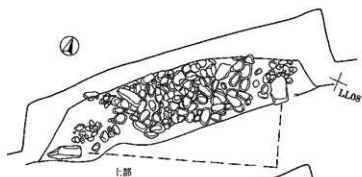
SK841 C区 QQ19 (第47図)

SK840に隣接して位置する。幅15cm、長さ74cmの溝状の遺構であるが、埋土に炭化物・焼土粒・骨片を含むことや、周囲が焼けていたことから火葬施設の煙道部のみが残存した遺構と推測された。また、本跡の下部から周囲にかけて円形の暗褐色土落ち込みが検出されているが、本跡の掘り方、あるいは底部の一部となる可能性があるが、断定はできていない。

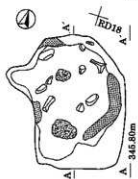
B. 土葬墓

SK171 C区 L104 (第47図)

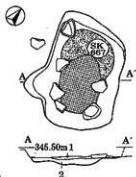
C区西端にあり、周辺には墓坑もなく単独の存在である。平面形は長軸70cm、短軸48cmの長方形を呈し、断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは20cmと浅い。埋土は小礫混じりの暗褐色土の単層であり、中央部で子供の頭骨と、足・手の一部と思われる骨が検出された。骨の遺存状態は非常に悪く、ごく一部しか残存していなかった。出土遺物は人骨以外ない。



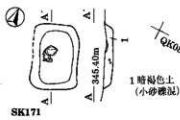
- 1 暗褐色土
- 2 (炭化物・焼土粒混)
- 3 (灰・焼土ブロック・骨片多混)
- 4 *
- 5 焼土



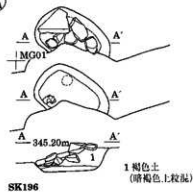
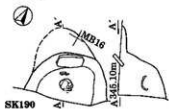
- 1 暗褐色土 (円礫少混)
- 2 炭化物



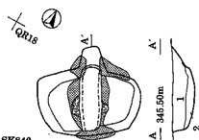
- 1 焼土粒より成る
- 2 暗褐色土



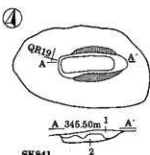
- 1 暗褐色土 (小砂礫混)



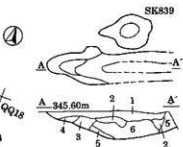
- 1 褐色土 (暗褐色土粒混)



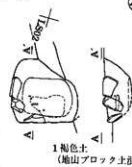
- 1 暗褐色土 (焼土粒・炭粒・骨片混)
- 2 * (* 多混)



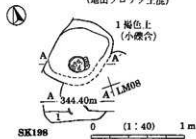
- 1 暗褐色土 (骨片・炭化物・焼土粒混)
- 2 * (多量の *)



- 1 暗褐色土
- 2 * (焼土・炭少混)
- 3 * (* 多混)
- 4 * (* 多混 暗褐色土ブロック混)
- 5 * (* 少混)
- 6 焼土・炭化物・灰



- 1 褐色土 (地山ブロック土混)



- 1 褐色土 (小礫混)

第47図 C区基跡1

SK190 C区 MB16 (第47図)

C区中央に位置し、本跡東側はSK189に切られる。平面形は東西約78cm、南北は残存部で50cmほどの丸味を帯びた方形を呈すると思われ、断面形は逆台形で検出面から底面の深さは50cmほどである。本跡北側が浅く30cmほど突出する部分があるが、これは自然地形の落ち込みで本跡に直接関連しないものと思われる。埋土の下部で子供の骨、壁際の上で平石ひとつが斜めになった状態で検出された。この平石は本来墓上部に置かれていた可能性がある。出土遺物はない。

SK196 C区 HG20 (第47図)

C区中央北寄りに位置し、南側は長いもの耕作で削平されている。残存部から平面形は長軸82cm、短軸54cmの楕円形の平面形を呈すると思われ、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は暗褐色土粒や砂を含む褐色土の単層で、埋土下層では人骨片が検出され、上部には多数の平石が認められた。人骨の遺存状態は非常に悪く、骨片も散在する程度であるが、南西側で歯が検出されたので頭位は南西側と推測される。出土遺物はカワラケと内耳鍋破片がある。

SK197 C区 LS01 (第47図)

C区中央、調査区北壁際で検出し、一部を調査区壁際のトレンチ掘削で破壊した。平面形は長軸70cm前後、短軸67cmの隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは26cmを測る。埋土は地山ブロック土をわずかに含む褐色土の単層であり、埋土中位で骨片が散在的に認められ、壁際では平石が貼り付いた状態で検出された。人骨は遺存状態が非常に悪く、歯以外は形状不明であるが、年齢は子供と推測された。出土遺物はない。

SK198 C区 LL07 (第47図、PL6)

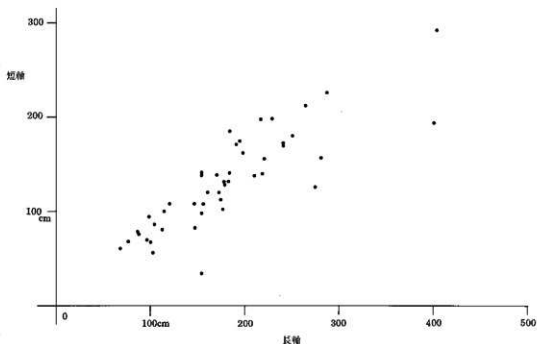
C区北西部の調査区壁際に位置する。埋葬施設SX03・SK199とは隣接し、SK358を切る。平面形は長軸70cm前後、短軸は確認範囲で56cmを測る不整形な長方形と推測され、断面形は検出面から底面まで14cmとかなり浅い逆台形となる。本跡の埋土上部で頭骨のみが検出され、他の部位の骨は検出されなかった。頭骨は成人のもので一部焼けており、顎は出土していない。頭蓋骨のみの出土で部分的に焼けていることからすると、本来的に土葬ではないと思われる。埋葬の経緯についてはわからないが、火葬後に残存した骨を埋葬したものであろうか。また、頭骨は重機掘削時に露呈したもので、出土標高からすると本来上部に盛土を伴っていた可能性が高い。出土遺物はない。本跡の時期はC区1層堆積以前としかわからないが、SX03やSK199に関連する可能性がある。

SK199 C区 LI04 (第48図)

SX03・SK198に隣接する。平面形は長軸128cm、短軸97cmの不整形な長方形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さ20cmを測る。埋土は上下2層に分層され、下層の北東部隅に人骨、その上には拳大前後の礫多数、最上部には大きめの山礫が出土した。人骨は頭を北にした側臥屈身の子供で、遺存状態は良好である。出土遺物はない。本跡は位置的にみてSX03・SK198と関連しよう。

SM01 C区 QN15 (第48図)

C区南西部の微高地縁にSM03に隣接して位置する。平面形は直径75～80cmの円形で、上面には大きな山礫の平石が蓋をするように重ねられていた。この礫は重機掘削時に遺構検出面よりも高いレベルでみつかっており、本来盛土を伴っていた可能性がある。断面形は周囲にテラス状の平坦部を作り出して中央が窪み形態であり、検出面から底面までは36cmを測る。骨の遺存状態は非常に悪く、土坑全体に破片が散在して検出された。歯は南東隅でみつかっており、埋葬頭位は南東側と思われる。埋葬遺体は出土歯から子供と推定された。



第49図 C区土坑規模グラフ

SM02 C区 LI04 (第48図、PL5)

C区南西部の自然堤防端部に位置し、近接してSM01・03がある。平面形は長軸108cm、短軸80cmの長方形で、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは12cmと浅い。土坑内には頭位を北として東向きの側臥屈葬人骨1体が埋葬されていた。この人骨は壮年男子のもので、歯には虫歯、歯槽膿漏、栄養不足によるストレス痕が認められる。調査区内で唯一の成人全身骨が埋葬された土坑である。出土遺物は在地産の火鉢、唐津と思われる皿破片が出土した。近世の所産であろう。

SM03 C区 QN15 (第48図)

SM01に隣接する。直径55cmの不整形の土坑で、断面形は逆台形を呈して検出面から底面までの深さ17cm程である。土坑中央部の底面上で頭蓋骨と若干の骨が検出され、整理段階での鑑定では6才以下の子供の骨であることが判明した。埋土や形状はSM01に極めて類似しており、ほぼ近接時期の所産と捉えられよう。出土遺物はない。

SK179 C区 LI04 (第48図、PL6)

C区中央部に位置する馬の埋葬施設である。本跡周囲には類似規模の土坑が多くみられるが、馬骨の出土は本跡とSM04のみである。平面形は東西234cm、南北202cmの円形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面中央がくぼむ。検出面から底面の最深い部分まで78cmを測る。埋土は上下2層に分層され、上層は粘性のある砂質土、下層は地山土ブロックを多く含む粘性のある褐色土である。馬の骨は下層上部で出土し、頭を北側にした西向きに足を折り曲げる姿勢である。出土遺物はない。

SM04 C区 RQ01 (第48図)

C区の自然堤防南東隅に位置する。SD01(SC01)を切り、SK826を切る。平面形は長軸230cm、短軸96cmの長楕円形を呈し、断面形は逆台形で検出面からの深さは46cmを測る。埋土は上下2層に分けられ、下層上面に馬骨が検出された。骨の遺存状態は非常に悪く、土坑中央部で背骨が検出されたのみである。出土遺物はない。本跡は馬を埋葬した土坑と推測されたが、時期はSD01を切ることから後出する可能性がある。

オ. 土坑

性格不明の円形・楕円形・方形を呈する掘り込み遺構を土坑として一括した。形態や規模は多様なものがあり、性格も一律ではないと思われる。時期は出土遺物が少ないこともあって子細不明ながら、配置関係やわずかな出土遺物、C区全体の採取遺物の年代から類推すると中世以後の所産とみられる。本報告で扱う3遺跡のなかで本遺跡のみが土坑・墓が多く認められており、本遺跡の特長のひとつとなっている。なお、土坑の分布状況は、掘立柱建物跡の分布の希薄なC区中央部のSX04南側からSD16の中間、B区低地寄りに多く認められており、一定の配置の計画性があるようだ。

土坑の規模は長軸規模から80～120cm、140～280cm、400cm以上3グループに分離できそうである。400cm以上のものはわずか2基しかなく特異な存在であるが、長軸140～280cmのグループは最も数が多く特長的な一群をなす。土坑の性格が特定できたものは少ないが、長軸80～120cmグループ内の鉄鏝を出土したSK186や上面に石組を伴うSK355は墓跡の可能性が残り、140～280cmのグループ内のSK175・851・989・990は単独で存在したり、長いも耕作の攪乱近くに存在するなどから遺構認定に問題を残すものがある。また、SK167・354は規模も大きめで周囲に柱穴跡が散在するなど竪穴もしくは掘立柱建物内施設の可能性がある。なお、SK361はここで記述するが、SX04に付属する施設とみられるものである。

SK03 C区 RD17 (第50図)

C区南西部に位置し、隣接して火葬施設SK01、南に類似形態のSK04がある。平面形は南北120cm、東西108cmの方形で、壁は垂直、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは14cmと浅い。埋土は褐色土の単層である。性格不明ながら、周囲には類似形態のSK04、SK848があり、また、土坑墓SM02と形態・規模が類似する。出土遺物はない。

SK04 C区 RE18 (第50図)

C区南西部の調査区壁にかかって検出され、北側には火葬施設SK01、類似形態のSK03がある。平面規模は南北56cm以上、東西102cmであり、調査区内の様相から平面形はほぼ方形を呈すると思われる。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは20cmと浅い。埋土は暗褐色土の単層である。性格不明ながら、周囲には類似形態のSK03、SK848がある。また、土坑墓SM02とも類似した形態・規模となるが、本跡では骨は確認されなかった。出土遺物はない。

SK10 C区 RQ09 (第50図)

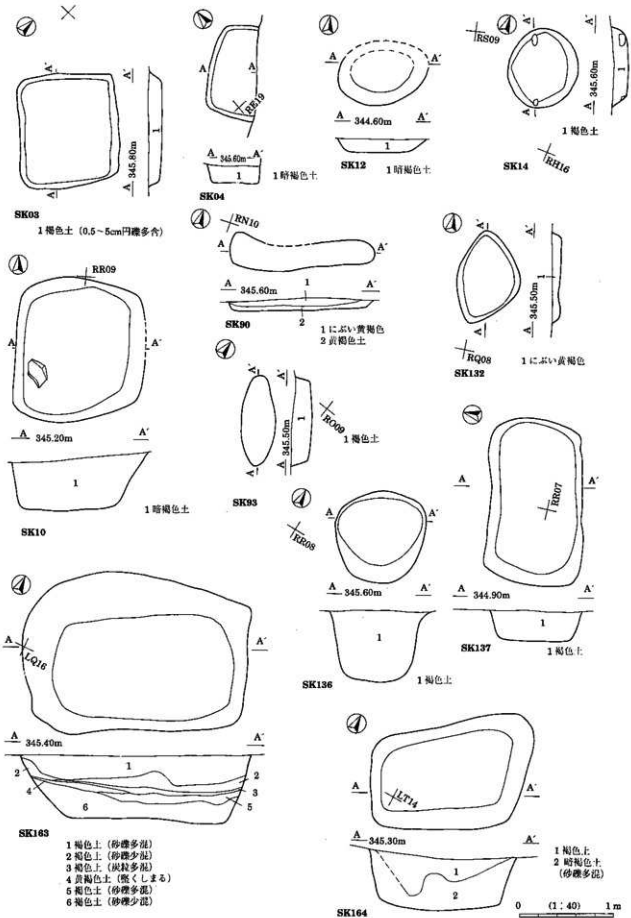
C区南東部、B区の低地寄りの自然堤防落ち際に位置し、SD01を切ってSK12に切られる。平面形は南北154cm、東西138cmの方形を呈し、断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは54cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で、埋土下部から人頭大の山礫1つが出土した。性格不明ながら、遺跡内各所にみられる方形土坑と同様の所産かもしれない。出土遺物はない。

SK12 C区 RR09 (第50図)

C区南東部、B区よりの自然堤防落ち際に位置し、SK10を切る。北側は調査ミスで破壊したが、平面形は長軸96cm、短軸70cm前後の楕円形になると思われる。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さは14cmと浅い。埋土は粗砂を含む暗褐色土の単層である。出土遺物はない。非常に浅いことから遺構でない可能性もあり、切り合い関係からするとSD01以後の所産で時期的に新しい可能性がある。

SK14 C区 RH16 (第50図)

C区中央の南壁近くにほぼ単独で位置する。長軸88cm、短軸76cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形となって検出面から底面までの深さは16cmである。埋土は小円礫を混じる褐色土であり、出土遺物はない。時期・性格はまったく不明であり、掘り込みの浅さからも遺構でない可能性がある。



第50図 C区土坑1

SK90 C区 RN09 (第50図)

C区南東部に位置し、1次調査側道部分で検出した。平面形は長軸154cm、幅34cmの長楕円形を呈し、検出面から底面までの深さも14cmと浅い。全体の形状は土坑というより浅い溝状である。出土遺物はない。本跡に近接して類似形状のSK93があり、両者は関連するとみられる。掘立柱建物跡ST04・05の関連施設と捉えた方が良いのかもしれない。

SK93 C区 RN10 (第50図)

SK90に隣接する。形状は長軸93cm、幅34cmの浅い溝状である。断面形は逆台形で検出面から底面までの深さ20cmを測る。形状の類似や位置関係からSK90と関連し、性格もほぼ同様と思われる。

SK132 C区 RQ07 (第50図)

C区南東部のB区寄りに位置する。平面形は長軸100cm、短軸68cmの南北に長い不整楕円形を呈するクライ状の土坑で、検出面から底面までの深さは10cmと浅い。埋土はにぶい黄褐色土の単層で、出土遺物はない。周辺の土坑とは埋土がやや異なり、しかもSD01の微高地側に位置する点も異なる。周辺の土坑とは時期差があると思われる。

SK136 C区 RR08 (第50図)

C区南東部のB区寄りに位置する。平面形は直径94～98cmの円形で、断面形はU字状を呈して検出面から底面までの深さは76cmを測る。埋土は褐色土の単層で、出土遺物はない。時期・性格不明である。

SK137 C区 RQ06・RR06 (第50図)

C区南東部のB区寄りに位置し、SD01を切る。平面形は長軸176cm、短軸102cmの東西に長い長方形を呈し、断面形は逆台形を呈して検出面から底面までの深さは32cmを測る。埋土は褐色土の単層で、出土遺物はない。性格は不明であるが、SD01を切ることからSK10と同様の時期と思われる。

SK163 C区 LS12・LS13 (第50図)

C区中央部、北よりに位置し、比較的大型土坑が集中する地点にある。平面形は長軸240cm、短軸170cmの東西に長い不整長方形を呈し、断面形は西・北辺の傾斜がやや緩やかな逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さは74cmを測る。埋土は最下部に砂礫を少量含む褐色土、その上に砂礫を多く含む褐色土が入る。中位には炭粒を多く含む褐色土、黄褐色土の薄い土層があり、上には砂礫の入り方で分層される褐色土が入る。出土遺物は青磁盤の破片、土師器と思われる小破片がある。時期・性格は不明で、土坑の密集する場所にあり、これらの土坑と関連があると思われる。

SK164 C区 LS12・LS13 (第50図)

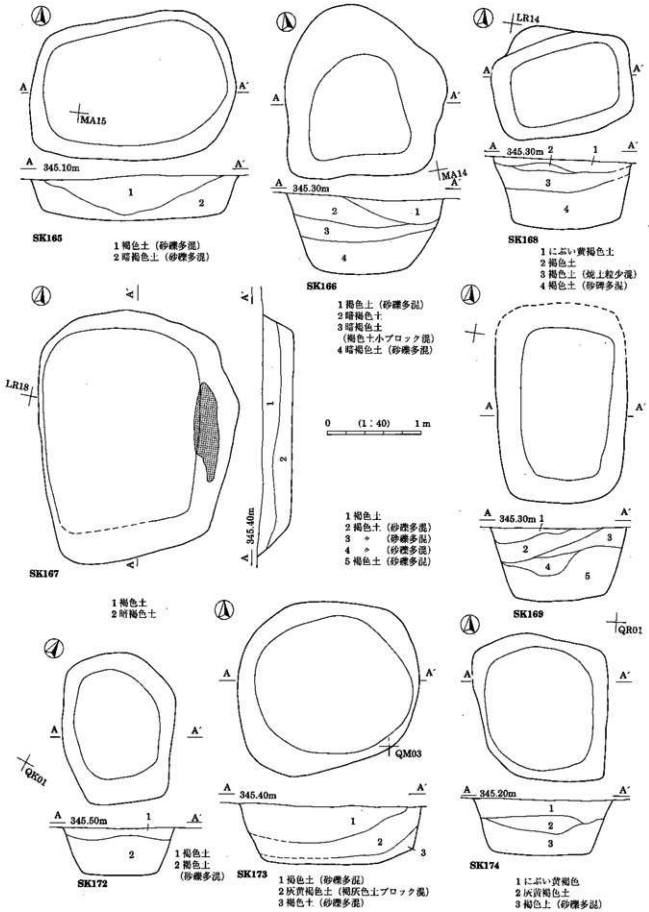
C区中央部北よりに位置し、土坑集中地点周辺にある。平面形は長軸172cm、短軸120cmの東西に長い不整長方形を呈し、断面形は逆台形である。検出面から底面までの深さは58cmを測る。埋土は上部に褐色土、下部に砂礫を含む暗褐色土が入る。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、周囲にある類似形態の土坑と関連しよう。

SK165 C区 LT14・MA14 (第51図)

C区中央部北よりに位置し、土坑が集中する地点にある。平面形は長軸220cm、短軸156cmの東西に長い隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さは48cmを測る。埋土は上部に砂礫を多く含む褐色土、下部に砂礫を含む暗褐色土が入り、埋土のあり方はSK164に類似する。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、周囲にある類似形態の土坑と関連しよう。

SK166 C区 LT13 (第51図)

C区中央部北よりに位置し、土坑が集中する地点にある。平面形は南側が方形で北側が楕円形となり、



第51図 C区土坑2

長軸190cm、短軸171cmを測る。壁の立ち上がりは斜めで断面形は逆台形となる。底面は平坦で検出面からの深さは80cmを測る。埋土は上部に粘性の強い褐色土があり、下部は砂礫や褐色土小ブロックの含まれ方で分層される数枚の暗褐色土からなる。人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、周囲の類似形態の土坑と関連すると思われる。

SK167 C区 LR17・LR18 (第51図、PL5)

C区中央部北よりに位置し、土坑が集中する地点にある。周囲には柱穴跡が散在するが、直接関係はつかめなかった。平面形は長軸262cm、短軸212cmの南北に長い隅丸長方形で、断面形は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは32cmを測る。埋土は上部に粘性の強い褐色土、下部に黒褐色土が入り、東壁付近で部分的に焼土や炭化物が検出された。埋土のあり方はSK164・165に類似するが、焼土や炭化物が検出された点は異なる。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、土坑が集中する地点にあるものの、規模の違いから関連する遺構が不明である。

SK168 C区 LR14 (第51図)

C区中央部北よりに位置し、土坑が集中する地点周辺にある。周囲には柱穴跡が散在するが、直接関係するか把握できていない。平面形は長軸146cm、短軸108cmの東西に長い隅丸長方形で、壁の掘り込みが垂直に近い箱形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは74cmを測る。埋土は下部の大部分を占める砂礫を多く含む褐色土、上部に焼土粒を少量含む褐色土、砂礫を多く含む褐色土、粘性の強いふい黄褐色土がある。砂礫を多く含む点では人為的に埋められている可能性がある。出土遺物はない。時期・性格は不明で、規模は小さいが周囲にある類似形態の土坑と関連するのだろうか。

SK189 C区 MA13 (第51図)

C区中央部北寄りの土坑が集中する場所にある。平面形は長軸210cm前後、短軸138cmの南北に長い隅丸長方形で、断面形は壁が斜めの逆台形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは78cmを測る。埋土は褐色土を基調として砂礫の含まれ方の多寡で分層された土層が交互に認められる。砂礫は基盤の土層起源であることから、掘り出された土を人為的に埋め戻した可能性がある。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、周囲の類似形態の土坑と関連すると思われる。

SK172 C区 LK20 (第51図)

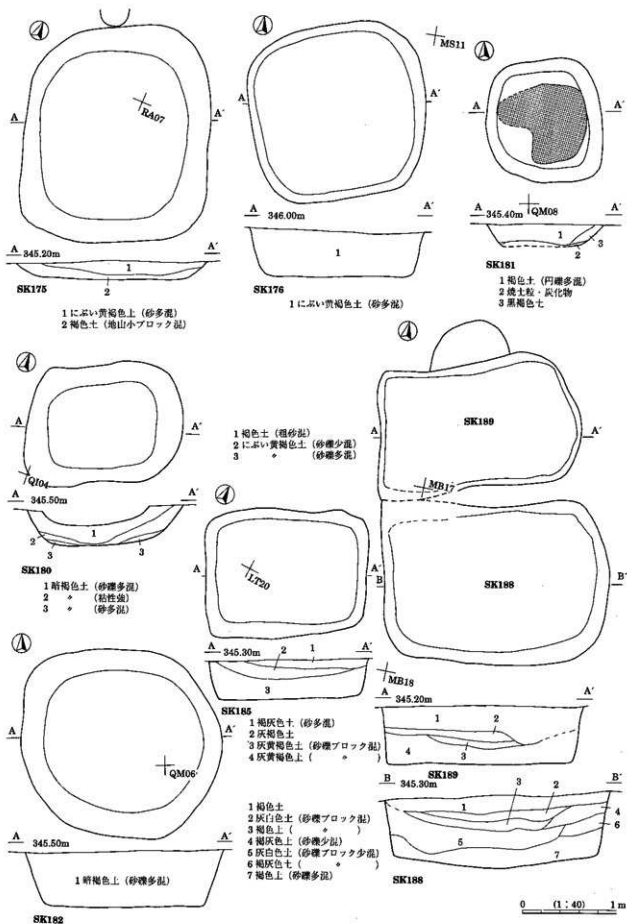
C区西端に位置し、隣接してSK186がある。平面形は長軸160cm、短軸120cmの楕円形で、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦で検出面からの深さは50cmである。埋土は砂礫の含まれ方の多寡によって分層されたが、全般的に褐色土を基調とする。出土遺物はない。時期・性格は不明である。

SK173 C区 QL06 (第51図)

C区西端に所在し、やや南にはなれてSK183がある。平面形は東西194cm、南北174cmの不整形を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さは62cmを測る。埋土は底面上に砂礫を多く含む褐色土、中位に灰黄褐色・褐灰色土ブロック土、上部に砂礫を交える褐色土が入る。人為的に埋め戻されていると思われる。出土遺物はない。時期・性格は不明であるが、規模・形態は馬の埋葬土坑SK179に類似している。

SK174 C区 QQ01 (第51図)

C区中央西よりに位置し、土坑の集中する地点にある。平面形は南北154cm、東西140cmの隅丸不整形を呈し、壁は斜めに掘り込まれる逆台形の断面形である。底面は平坦で検出面からの深さは58cmを測る。埋土は底面上に砂礫を大量に含む褐色土、中位に褐灰色土ブロックを含む灰黄褐色土、上部に褐灰色土ブロックを少し含むふい黄褐色土が入る。人為的に埋め戻されていると思われる。出土遺物はない。本跡の埋土は周囲の土坑とやや異なる。



第52図 C区土坑3

SK175 C区 QT07・RA07 (第52図)

C区南西部に単独で位置する。隣接して柱穴跡があるが、関連は不明である。平面形は長軸228cm、短軸198cmの隅丸方形で、壁は斜めの逆台形の断面形である。底面は平坦で検出面からの深さは20cmを測る。埋土は上層の砂を多く含む褐色土と砂礫を多く含む褐色土の下層に分層された。出土遺物はない。本跡は土坑集中地より少し離れているが、北側に分布する大型土坑とは何らかの関連があるのだろうか。

SK176 C区 MR11 (第52図)

C区東端、B区低地寄りに位置する。隣接して類似形態のSK851がある。平面形は東西184cm、南北184cmの隅丸方形で、壁はやや斜めの逆台形の断面形となる。底面は平坦で検出面からの深さは50cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土の単層である。出土遺物はない。本跡北側には長いもの攪乱があり、本跡も土坑ではなく、耕作による攪乱の可能性が残る。

SK180 C区 QI07 (第52図)

C区の西端に位置する。SD10と切り合いになるが、SD10調査後に本跡の存在に気づいたもので、本跡との前後関係はつかめなかった。平面形は東西方向に長軸をとる楕円形を呈し、長軸178cm、短軸128cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦で検出面からの深さ40cmである。埋土は暗褐色土を基調とし、砂礫の含まれ方から3層に分層された。出土遺物はない。本跡は単独で存在し、周囲に類似した土坑もなく、性格・時期は不明である。

SK181 C区 QM07 (第52図)

C区南西部に位置し、北側には規模やや大きなSK182がある。平面形は長軸132cm、短軸122cmの隅丸方形を呈す。壁は緩やかに掘り込まれ、断面形は逆台形である。底面は平坦で検出面からの深さは24cmを測る。埋土は底面上に焼土・炭化物を多く含む土層があり、その上部北側に砂を多く含む褐色土、その上全面に砂礫と少量の炭化物・焼土粒を含む褐色土が入る。出土遺物はない。本跡は構築直後に内部で火が焚かれていると推定されるが、性格は不明である。

SK182 C区 QL05・QL06 (第52図)

C区西部に位置し、南側にはSK181、北側にはやや離れて類似形態のSK173がある。平面形は東西216cm、南北198cmの不整形形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦な逆台形の断面形である。検出面から底面までの深さは58cmを測る。埋土は粗砂・円礫を多く含む暗褐色土の単層で出土遺物はない。本跡は性格・時期不明ながら、周辺の類似土坑と関連しよう。

SK184 C区 LP12 (第53図)

C区北西部ST11・12南側に位置し、SK856を切っている。平面形は長軸147cm、短軸82cmの楕円形を呈し、壁は斜めに掘り込まれ、底面はやや凹凸がみられる。検出面から底面までの深さは42cmを測る。埋土は底面上のにぶい黄褐色土、中位の灰白色土ブロックを含むにぶい黄褐色土、最上面の部分的な炭層に分層され、中位の土層は人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物はない。本跡の性格・時期は不明ながら、形態的には切り合いになるSK856と類似する。類似形態の土坑が重複するように切り合うのはC区内では珍しく、このあり方は北側にあるST11・12の關係に近い。したがって、南側に分布する土坑群に関連するというより、ST11・12との関連を想定すべきかもしれない。

SK185 C区 LT19・LT20 (第52図)

C区中央に位置し、北側には類似規模の土坑が分布する。平面形は長軸170cm、短軸138cmの長方形を呈す。壁はほぼ垂直に掘り込まれて箱形の断面形である。底面は平坦で検出面からの深さは42cmを測る。埋土は下半に砂礫を多く含むにぶい黄褐色土、上面に砂礫を少し含むにぶい黄褐色土、最上面に粗砂を含む褐色土がある。出土遺物はない。性格・時期不明ながら、北側にある土坑と関連すると思われる。

SK186 C区 LL20 (第53図、PL5)

C区西端にSK172と並列して位置する。平面形は南北114cm、東西100cmの方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。検出面から底面までの深さは調査記録土層図では深さ32cm前後であるが、完掘後に記載された底面標高の数値では66cm前後になる。底面を掘り過ぎたものなのか、断面記録時に掘り足りなかったのか不明である。埋土は底面付近にぶい黄褐色土があり、この土層上部から雁又の鉄線2本が並列して出土している。最上部には砂礫を多く含む褐色土が入り、人為的に埋め戻されているとみられる。出土遺物は雁又線2本がある。この線は並列して出土したことから置かれたものと思われる。埋葬に際しての副葬品とも思われるが、骨が出土せず墓跡とも断定はできない。

SK188 C区 RB17 (第52図)

C区中央に位置し、土坑集中地点付近にある。SK189とは一部接するように切り合うが、前後関係は把握できなかった。平面形は長軸240cm、短軸173cmの長方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦となる箱形の断面形である。検出面から底面までの深さは76cmを測る。底面標高数値と断面図の深さの記録が異なるが、整理では掘り過ぎたものなのか、掘り足りないものか判断がつかなかった。埋土は全体に地山のブロック土を含む土層で構成され、色調やブロック土の含まれ方の差異で細分された。出土遺物はない。性格・時期は不明であるが、周辺の土坑と類似しており、関連すると思われる。

SK189 C区 RB16 (第52図)

C区中央部に位置する。SK190を切るが、SK188とは接するように切り合うものの、前後関係は不明である。平面形は長軸218cm、短軸140cmの長方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦な箱形の断面形となる。検出面から底面までの深さは62cmを測る。埋土は下部に地山ブロック土を含む土層、上部に褐色土・灰白色土が入り、人為的な埋め戻しが想定される。出土遺物はない。性格・時期は明らかでないが、SK188を始めとして周辺に類似した土坑があり、これらと関連すると思われる。

SK354 C区 HK13~HL14 (第53図、PL5)

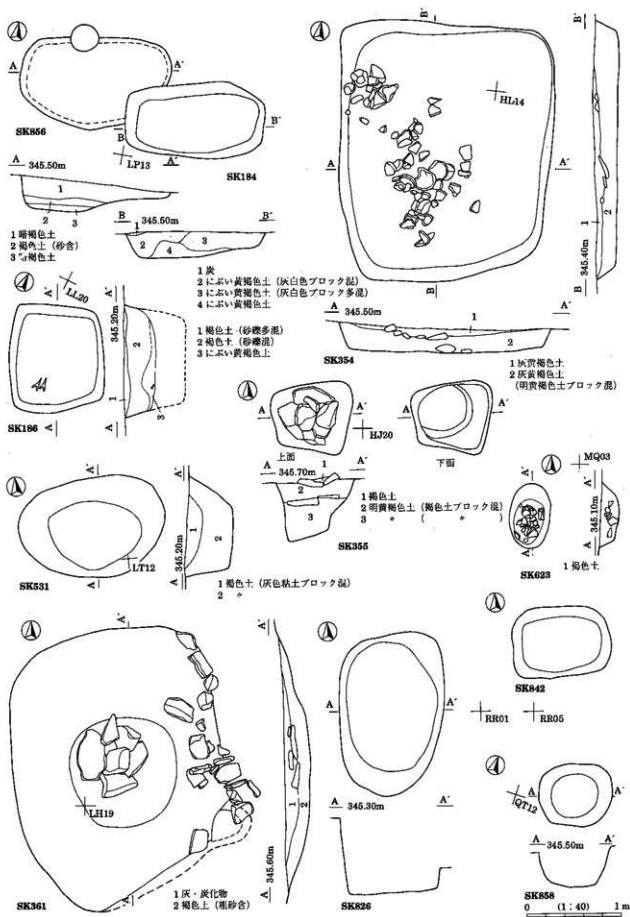
C区北東部に位置する。平面形は南北274cm、東西226cmの隅丸長方形を呈す。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦で軟弱である。断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは24cm前後を測る。埋土は2層に分層され、下半は灰黄褐色土と明黄褐色土のブロックよりなる土層で占められ、上部には薄い灰黄褐色土が入る。この下層上面では礫が集中的に検出され、本跡は人為的に埋められ、最後に礫が入れられたと想定される。この礫内には石臼破片が含まれていた。出土遺物は石臼のみがある。本跡は形態や周囲に柱穴が散在する様相から竪穴建物、もしくは掘立柱建物跡内施設の可能性がある。

SK355 C区 HI20 (第53図)

C区北西部に位置する。平面形は南北78cm、東西86cmの不整形で、東側中段にテラス状の斜面をもつ土坑である。検出面から底面の最も深いところまで深さ62cmを測る。埋土は下半に褐色土ブロックを含む明黄褐色土があり、その上面に北から反時計回りに重ねられた平石がある。その上は下部と同様の土層が入り、その上にも平石が入る。この上部の平石は下層よりも数が少なく、中央部に集中する。出土遺物はない。本跡は埋土から人為的に埋め戻されていると思われるが、蓋をするように石が配されている理由は不明である。規模や上面に平石が検出された例は他の子供の墓跡にみられるが、骨の出土が認められず、断定はできない。

SK381 C区 LH18 (第53図、PL5)

C区北西部に位置し、調査ではSX02南端にある土坑とされたが、整理ではSX04関連の施設と判断した。平面形は南北286cm、東西226cmの不整形で、壁の立ち上がりが不明瞭な浅い窪み状の遺構である。底面の最も深いところから検出面までは30cm前後を測る。埋土は底面上に粗砂・礫を含む褐色土、上面に炭化



第53図 C区土坑4

物・灰層があり、下層上面で平石が重なって集中的に検出された。また、東壁際には石列が並列し、一部には平石を平行に立てて溝状となる部分がある。出土遺物はSX02と一括して取り上げられている。本跡はSX04の関連施設と思われるが、炭化物や灰を含む特長が認められたものの、その機能は判然としない。ただ、本跡東縁辺に見られた石列の一部が溝状となる点からすると排水溜めのような施設とも考えられる。

SK531 C区 LS11 (第53図)

C区中央北寄りに位置する。ST11・12東部にあって、ST11・12と若干重複するような位置となるが、切り合う柱穴跡は確認されていない。平面形は長軸156cm、短軸108cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土は褐色土を基調として、上部に灰色粘土ブロックを含む。出土遺物はカワラケ・内耳鍋の破片若干と白磁皿破片1点、土師器の破片1点がある。時期は中世後半以後の所産とみられるが、性格は不明である。本跡南に分布する土坑と形状は類似するが、位置的に少し離れており、関連するか不明である。

SK623 C区 M003 (第53図)

C区東部の長いも耕作の攪乱が著しい地点内にある。長軸70cm、短軸44cmの楕円形を呈する小土坑で、断面形は浅い逆台形を呈する。検出面から底面までの深さは21cmを測るが、上部が長いも耕作で攪乱されるために本来の深さは上記の規模以上とみられる。埋土は褐色土の単層ながら、内部には内耳鍋と小碟が集中的に検出されている。性格は不明である。

SK828 C区 RQ01 (第53図)

C区東部に位置し、SD01 (旧SC1) を切り、SM04に切られる。2次調査で検出され、調査時にはSK14とされたが、整理では通し番号に変更してSK826とした。平面形は長軸174cm、短軸112cmの長楕円形を呈し、断面形は壁がほぼ垂直で底面が平坦な箱形を呈する。検出面から底面までの深さは84cmを測る。出土遺物はほとんどなく、性格は不明であるが、位置的に近いC区南東部の土坑と形状が類似し、関連すると思われる。なお、埋土は記録漏れで、礫・炭化物を若干含むとされる以外は不明である。

SK842 C区 RR04 (第53図)

C区南東部に位置し、2次調査ではSK12とされたが、整理で通し番号としてSK842に変更した。平面形は長軸104cm、短軸86cmの隅丸方形を呈する。断面形は調査記録漏れで不明であるが、埋土は小礫や炭化物を含む暗褐色土である。出土遺物はない。

SK843 C区 RP02

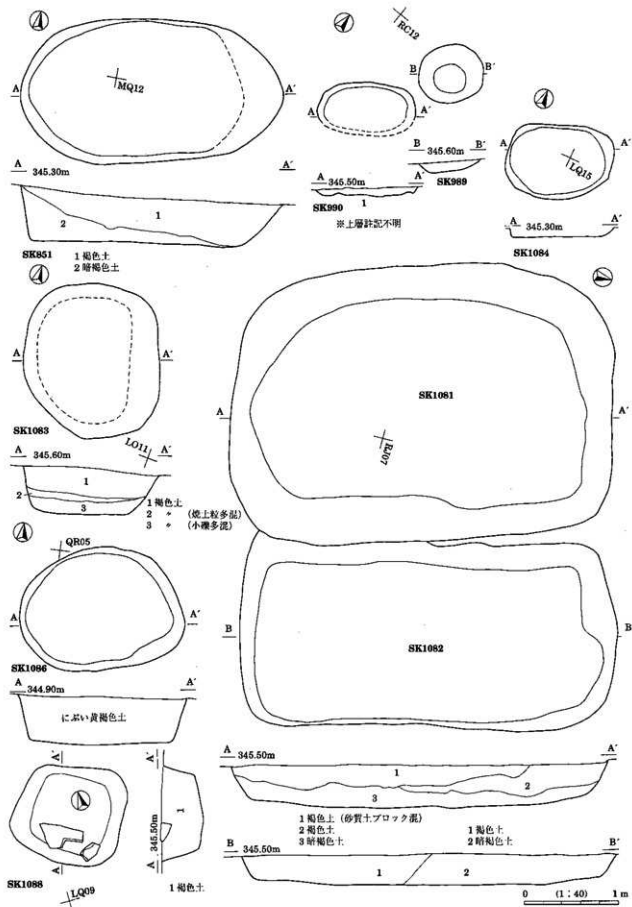
C区南東部、SK826の南に位置する。2次調査ではSK13とされたが、整理では通し番号に修正してSK843とした。平面形は長軸250cm、短軸180cmの隅丸長方形を呈する。断面形および埋土は調査記録漏れで不明である。出土遺物はない。時期・性格不明ながら、C区南東部の土坑と関連するか。

SK851 C区 MQ12 (第54図)

C区東部のB区低地よりに位置し、SK176と並列する。平面形は長軸280cm、短軸157cmの楕円形を呈し、壁は斜めに掘り込まれる。底面は平坦で断面形は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは58cmを測る。埋土は底面上に暗褐色土、上部に褐色土がある。出土遺物はない。本跡は並列するSK176と形状・規模が類似し、関連すると思われる。なお、本跡北側にある長芋耕作の攪乱も規模的には類似しているが、平面形や埋土の差異から本跡を土坑とした。

SK856 C区 LO12 (第53図)

C区北西部ST11・12南側に位置し、SK856に切られる。SK482の断ち割り調査後に本跡の存在が判明したが、前後関係は調査ミスで不明である。平面形は長軸154cm、短軸98cmの楕円形を呈し、壁は斜めに掘り込まれ、底面は西側がやや深くなる。検出面からの底面の深さは42cmを測る。埋土は底面上に暗褐色



第54図 C区土坑5

土、中に褐色土、上部に炭化物を少量含む暗褐色土が入る。出土遺物はない。本跡は具体的な性格・時期は明らかにしえなかったが、形態的にはSK856と類似し、位置的やSK856との重複のあり方からST11・12に関連するものと思われる。

SK858 C区 QT11 (第53図)

C区南西部に位置する。平面形は直径68～78cmの円形、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは43cmを測る。埋土は記録漏れで不明である。出土遺物はない。本跡は形状から柱穴跡の可能性も残るが、周囲には関連しそうなピットが認められず、しかもピットよりも若干大きめであることから土坑とした。性格・時期は不明である。

SK989 C区 RB13 (第54図)

C区南西部でSK990と並列して位置する。平面形は直径62～68cmの円形を呈する浅いクライ状の土坑で、検出面から底面までの深さは10cmと浅い。埋土は記録漏れで不明である。本跡は周囲のピットよりも高い位置で検出されており、耕作痕、あるいは窪地地形の可能性もある。出土遺物はない。

SK990 C区 RB13 (第54図)

C区南西部でSK989と並列する。平面形は長楕円形を呈し、長軸104cmを測る。本跡南側はC区に設けた土層観察用ベルト用にかかって南側半分は調査していない。底面は凹凸が著しく、検出面から8cmと非常に浅い。埋土は記録もれで不明である。本跡は周囲のピットよりも高い位置で検出されており、耕作痕、あるいは窪地地形の可能性もある。出土遺物はない。

SK1081 C区 RH06～RI07 (第54図)

C区南部に位置し、SK1082を切る。2次調査で検出され、SB01とされたが、1次調査の遺構番号と重複することや、形態から土坑と判断されるので整理でSK1081に変更した。平面形は長軸402cm、短軸292cmの隅丸長方形を呈し、断面は逆台形を呈して検出面からの深さ48cmを測る。埋土は3層に分層されたが、全体的に近似した色調である。なお、1層はブロック土が含まれ、埋め戻し土と思われる。出土遺物はカワラケ・内耳鍋の破片少量と無軸の唐津すり鉢破片が得られている。時期は近世前半以後の所産と思われる、埋土も周囲のピットと異なる。また、隣接する類似形態のSK1082は関連しよう。

SK1082 C区 RI06～RJ07 (第54図)

SK1081に隣接して、一部SK1081に切られる。本跡も2次調査ではSB02とされたが、整理でSK1082に変更した。平面形は長軸400cm、短軸194cmの隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形となる。底面は平坦で検出面からの深さは32cmを測る。埋土は2層に分層されたが、色調・土質自体は上下層とも類似する。埋土の様相から短期に埋め戻されたものと思われる。出土遺物はない。性格は不明であるが、形態の類似するSK1081は関連すると思われる。

SK1083 C区 LN10 (第54図)

C区北西部のST11・12と重複する位置にある。本跡は1次調査終了間際に検出された土坑である。平面図のみが記録され、断面図は遺構番号の記載されていない図を対比するなかで規模や検出面標高等から本跡の可能性が高いものを当てた。平面形は長軸184cm、短軸142cmの楕円形を呈し、本跡に比定した断面図では逆台形の断面形で検出面から底面までの深さは52cmを測る。埋土は上部と下部に褐色土が入り、中に焼土粒を多く含む土層が入る。

SK1084 C区 LQ14 (第54図)

C区中央北寄りに位置する。1次調査では遺構番号が振られていなかったが、整理で新たにSK1084とした。平面形は長軸112cm、短軸80cmの楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈して検出面から底面までの深さ10cmを測る。埋土は記録漏れで不明である。時期・性格ともに不明である。

SK1085 C区 QQ04

C区中央西寄りに位置し、南にSK1086が隣接する。本跡は1次調査終了間際に検出され、調査記録は平面図しかない。しかも、遺構番号が振られていなかったため遺構かどうか不明である。ただし、本跡と形状の類似するSK1086が土坑とされているので本跡も同様と考えた。平面形は長軸198cm、短軸162cmの楕円形を呈する。断面形や埋土等は記録漏れで不明である。

SK1086 C区 QR05 (第54図)

C区中央西寄りに位置し、北側にSK1085が隣接する。本跡はSK1085同様に標高を記載した平面記録のみがあり、遺構番号は振られていなかった。そのため、整理段階で新たにSK1086とした。また、断面記録は遺構名が記載されていない区面のなかで標高と土坑の規模の比較から比定しうるものを当てた。平面形は長軸178cm、短軸130cmの楕円形を呈する。断面は逆台形で、検出面から底面までの深さは50cmを測る。埋土にはふい褐色土の単層で周囲にある土坑とほぼ類似したものである。出土遺物はなく、本跡は認定や形状に問題を残すが、周囲にある土坑と関連すると思われる。

SK1088 C区 LQ08 (第54図)

C区北西部に位置する。平面形は南北108cm、東西116cmの隅丸方形で、断面形は逆台形となり、検出面から底面までの深さは44cmを測る。埋土は褐色土の単層で上面には平石と拳大の礫が検出された。周囲には類似した土坑もなく、単独で存在する。性格・時期は不明である。

カ. 溝跡

C区では7本の溝跡が検出された。微高地東縁辺部にあるSD01・06、微高地西縁辺部にあるSD10、調査区南部を横断するように配されるSD16、ST11・12南のSX04を区画するように位置するSD08・09、調査区南部で検出された短い溝跡SD07である。このなかでSD01・06、10、16は配置場所の類似からC区全体に関わる区画溝跡と思われる。これらの溝跡からC区微高地が広域に渡って同一基準で区画されていたと考えられるが、なぜSD01・10のような溝跡が微高地縁に配されているのかは不明である。また、SD07とした溝跡は走行方向が中世以後の遺構と比べると異質であり、出土遺物がないことから中世後半以前の所産か遺構ではないと思われる。

SD01 C区MR18～RQ09 (第55図)

C区の東縁部に位置する。1・2次調査で分割調査され、1次調査ではSD01、2次調査では道跡SC01とされたが、2次調査部分でも掘り込みは確認されているので整理でSD01に統一した。SK10・137・842・826、SM04に切れ、SK842に接する。北側延長先にあるSD06、直交方向に延びるSD16とは直接接続していないが、配置場所の類似や走行方向の類似から関連する溝跡とみられる。南端は調査区外へ延び、北端は長いも耕作攪乱付近で途切れるが、調査城内で約25.6mを確認した。走行方向はN-1°-Eで微高地東縁の方位に一致する。幅は90cm前後を測り、南端付近で狭いテラス状の平坦部をつくり出しているが、全般的にU字状の断面形で検出面からの深さは約42cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で、カワラケが僅かに出土した。本跡は微高地東縁に配された区画溝とみられ、北側にあるSD06は本跡の延長先にあたる可能性がある。

SD06 C区 HM10～HQ19 (第55図)

C区北東部の微高地東縁に位置し、北端は調査区外へ延び、南端は長いも耕作の攪乱で切られる。調査区内では長さ約19.0mを確認したのみである。走行方向はN-24°-Wで、異方位ながら立地場所の類似するSD01は連続する可能性がある。断面形は上端が広がる逆台形を呈し、幅は最大約140cm、検出面からの深さは52cmである。埋土にはふい黄褐色土である。出土遺物はない。本跡はC区を区画する溝跡のひとつとみられる。

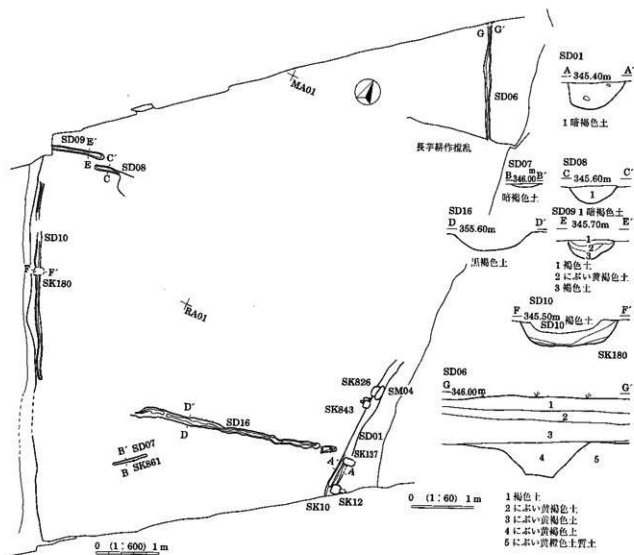
SD07 C区 RA06~RC05 (第55図)

C区南西部に位置し、2次調査で検出された。調査区内で完結する短い溝跡で、幅約44cm、長さ約5.6mを測り、走行方向はN-50°-Eである。断面形は浅く幅広いU字状を呈し、検出面から底面までの深さは5cm前後しかない。埋土は暗褐色土の単層である。出土遺物はない。本跡はC区中世以後の遺構とは走行方向が異なるため、時期的にも中世後半以前の所産か、遺構でない可能性がある。

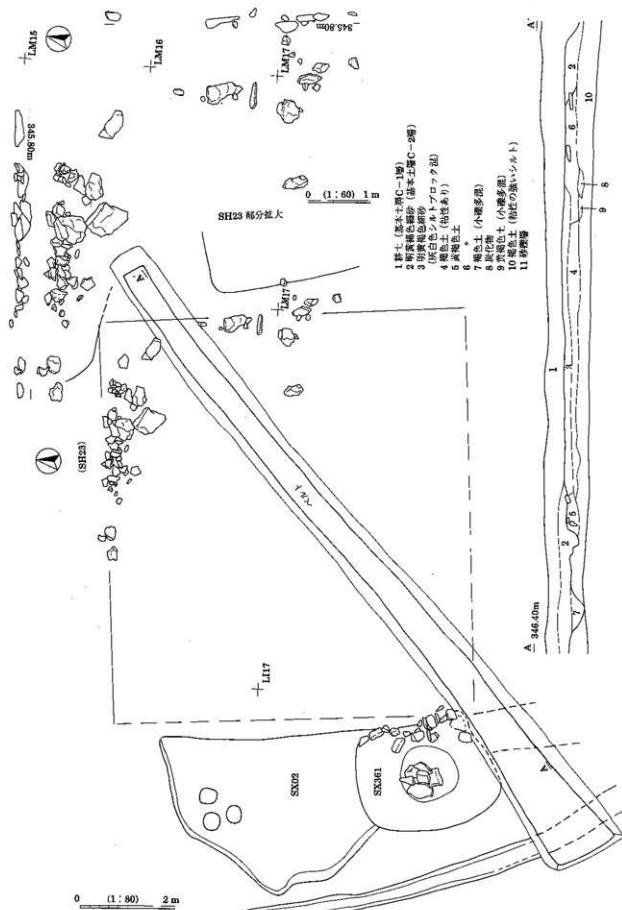
SD08 C区 LI14~LM13 (第55図)

C区北西部に位置し、SD09は土橋状に一旦とぎれて同一直線上に並列する。西端はSD09と対峙する位置から始まり、東端はST11・12南辺付近で浅く立ち消える。調査区内で確認した長さは約6.4mである。走行方向はN-82°-E、幅は約76cm、断面形はU字状を呈して検出面からの深さは約28cmを測る。埋土は暗褐色土の単層で、出土遺物はない。本跡はSD09と関連する区画溝とみられ、南に位置するSX04に付属する可能性もある。

SD09 C区 LF14~LJ13 (第55図)



第55図 C区溝跡分布



第56図 SX04

C区北西部にSD08と土橋状の空間を隔てて同一直線上に配列する。西端は調査区外へ延び、東端はSD08脇で立ち上がる。調査区内で確認された長さは約8.8mで、走行方向はN-74°-Eである。幅は約72cmでU字状の断面形を呈し、検出面からの深さは約30cmを測る。埋土は3層に分層されたが、褐色土を基調として中位以上でやや砂質が強いものの、全体的に大きな違いはない。本跡はSD08と共に南に位置するSX04を画する施設と思われる。

SD10 C区 LF17~QM11 (第55図)

C区の微高地西縁に沿って位置する。調査所見では本跡がSK180を切るとされたが、SK180は本跡の調査後に検出されたもので確定的な所見ではない。北端はC区内で浅く消えるが、C区調査区北壁では延長先が確認されなかった。南端はSD16の延長先付近で立ち上がり、確認できた長さは約31.5mで、走行方向はN-25°-Wである。断面形は非常に浅いU字状を呈して幅約112cm、検出面からの深さ約18cmを測る。埋土は褐色土の単層である。出土遺物はない。本溝跡の南端の立ち上がりがSD16の延長先にあたり、しかも配置場所の類似するSD01・06と関連すると思われる。これらの溝跡と共にC区内を区画する溝跡の一つとみられる。

SD16 C区 RA10~RP06 (第55図)

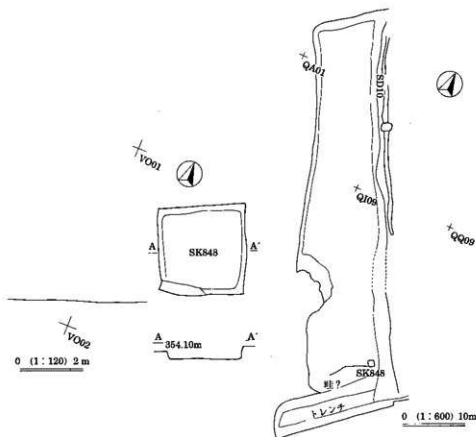
2次調査で検出され、C区南部を横断するように位置する。西端は2次調査区境まで確認され、その先には1次調査検出SD10の南端が当たるが、1次調査と2次調査の中間部分は見逃されて直接的な接続関係は明らかにできなかった。また、東端も2次調査区境付近で一旦途切れて浅く消え、1次調査のSD01と連続すると確認できていない。調査区内で確認できた規模は長さ約32.8m、走行方向N-77°-Eである。幅は西部が広く、約148cmを測り、東部で約52cmである。断面形は全般的にU字状となり、西端付近では南側の立ち上がりが緩やかである。検出面からの深さは20cmほどと浅い。埋土は暗褐色土で小礫を含むものである。本跡の西延長先はSD10の南端にあたること、東端はSD01付近と見られることからSD01・06・10と関連したC区内の区画溝とみられる。

キ、性格不明遺構

形状・性格不明な遺構としてSX04がある。これは調査当初にSX02・SH23として別々に調査された遺構を平面的に照合したところ、これらの遺構がほぼ方形に配置していることが明らかになり、これらの遺構をまとめてSX04とした。

SX04 (SX02・SH23) C区 LH15~LM18 (第56図、PL5)

C区北西部のST11・12の南西部に位置し、東側にSB04、南側に土坑群を控え、西側はSD10、北側はSD08・09に区切られる空間内にある。調査ではこの内部でSX02とSH23の2基の遺構が検出された。SX02は南端に石列を伴うSK361を付属させた幅約3.2m、長さ約4.2mの不整形な浅い落ち込みである。SK361は土坑のところどころで触れているが、東側に石組があり、一部は溝状石組となる。SH23はL字状に屈曲する集石遺構であり、重機掘削中に遺構検出面C区3層よりもかなり浮いた高さで検出された。検出面よりも高い標高で検出された理由が判然としなかったことからSH23を通る土層観察用ベルトを設定したところ、SX02とSH23中間が一段高い土壇状になることが知られ、しかも、SH23の屈曲する西端延長先がSX02の北端の延長先に位置し、SX02・SH23は組み合せて方形の空間を構成するように見受けられた。この所見から整理では2つの遺構をまとめてSX04とした。土壇状の遺構とは全く予想できず削平したため、全体の構造や規模は詳細不明であるが、範囲は直角に折れるSH23が北・東辺の縁にあたり、SX02の東辺立ち上がりが西辺と捉えられる。南辺は不明ながら南にあるSK171・172・186までは達しないと思われ、土層観察用ベルト西側にかかった石がSK361東辺の石列と若干ずれることからすれば、ベルト内に南西隅



第57図 D区の遺構

があると思われる。以上から本跡の規模は約8m四方の方形の平面形と想定され、C区2層前後に褐色土を盛り上げ、その上に灰白色シルトのブロック土、縁にあたる石列周辺には小礫を含む褐色土を盛り上げた構造と思われる。本来の高さは不明であるが、土層観察用ベルトでは遺構検出面から60cm程高くなるとみられる。この土壇状遺構の上面施設についてはまったく不明であるが、SK361東辺石組の一部に溝状石組と認められる部分があり、これが排水施設とすれば、土壇上には建物跡が存在した可能性がある。出土遺物はSX02とした部分でカワラケ・内耳鍋の破片が採取されている。なお、北側にあるSD08・09の中間が土橋状に切れていることや、本跡南辺の推測位置がSB04の南辺と近似することから、ST11・12の屋敷地内に含まれるとも考えられるが、一方でSX02出土遺物には古い所産が含まれることや南側の土坑群にも近接していることから別施設の可能性がある。

(4) D区の遺構

D区はC区西側にある狭い後背低地である。現地表面では畑として利用されていたが、近世には水田に利用されていたようで、数枚の水田土壌が確認された。その水田土壌より下層から内耳鍋の破片が出土し、中世においては水田としての利用はなかったようである。検出された遺構は水田跡と水田土壌を切る土坑1基のみがある。

ア. 土坑

SK548 D区 VP01 (第57図)

D区の水田面の最上部で検出した。掘り込みはかなり上層にあると思われ、調査では底部周辺を確認し

たのみである。平面形は一辺90cm四方の方形で、断面形は方形を呈して検出面から底面までの深さは18cm前後である。埋土は暗褐色砂壤土で底面上には水田土のブロックが多数認められた。本跡は近世以後の所産と思われるが、その性格は不明である。出土遺物はない。

イ. 水田跡

遺構は2次調査の南端で畦状の遺構が確認されたのみながら、プラントオパール分析及び酸化鉄集積層と還元状態の土層の組み合わせから数枚の水田層があると推定された。また、用水は調査していないが、現用水に近接した場所で行うものが最低2本あることは確認できた。現用水は調査前にはコンクリート製3面側溝に変えられていたが、検出された用水のなかで新しい用水はこのコンクリート製用水に先行する所産と思われる。D区の土層はC区から延びる砂・シルト互層があり、その上に水田土壌が数枚ある。水田として利用される時期は不明であるが、内耳鍋破片を出土したD区9層よりも上部で用水が構築されているので、水田化された時期は中世段階ではなく、近世と思われる。水田の構造や規模は不明であるが、2次調査の所見から西側の低地縁に用水を配し、幅約20m前後の帯状低地に直交する小畦で区切る細長い水田が連続していたと思われる。

第3節 出土遺物

今回の調査では縄文時代以後の各時代の遺物が得られたが、古代以前の所産はわずかで中世の所産が主体である。しかし、その出土総量はさほど多くない。本遺跡では時期毎に出土分布が異なる傾向があり、縄文～古代までの所産は山際のA・B区、中世以後の遺物はA～C区の広域で検出されている。以下には時代ごとに出土遺物について記述していく。

1. 縄文時代の遺物 (第71図)

A区のⅣ面で縄文時代中期の土器破片が少量出土している。小破片がほとんどで、図示したものは1の弧状の沈線が施される深鉢破片である。

2. 弥生時代の遺物 (第71図)

A区で少量出土している。図示したのはⅠ面検出面出土の2の弥生時代中期後半の壺体部破片、3のSH15出土の弥生後期高杯脚破片である。これ以外は小破片である。

3. 古墳時代の遺物 (第71図)

古墳時代前期の土師器は4～6を図示した。4はA区内の出土地点不明となったもので、北陸系の器台口縁部破片である。水平に作り出した受け皿から2段に口縁部が斜めに立ち上がり、その側面に複数の円形小孔が開けられている。5・6はいわゆる「く」の字甕で、6は体部がナナメの刷毛目調整、5がナデ調整される。なお、6は胴部の破片が小さく、歪みがあるため器形の復元に不安を残す。球胴に近い可能性がある。古墳時代後期の遺物は少ないが、SB03から出土した25の須恵器甕がある。他に古墳後期～奈良時代の甕の破片がわずかに採取されたが、C区SX02からはその可能性のある小破片が出土している。

4. 古代の遺物

(1) 焼物

①出土焼物の概略

A区の古代の竪穴住居跡と土坑及び、Ⅰ面検出面や中世遺構に混在して出土したものがある。焼物種には須恵器・軟質須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器があり、黒色土器には内面のみを黒色処理する内黒と内外面を黒色処理する両面黒色土器がある。器種は食膳具に平底の杯A・高台のつく蓋付杯B・碗・皿・鉢、貯蔵具には壺・壺・長頸瓶、煮沸具には大型・小型の2種の甕がある。このなかで食膳具が最も多く、貯蔵具はわずか、煮沸具は少量である。食膳具の焼物種構成は内黒が最も多く、少量の須恵器、僅かな灰釉陶器・軟質須恵器・土師器・両面黒色土器が続く。器種の組成は杯Aが最も多く、他は少ない。なお、灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式と黒笹14号窯式と思われる破片がある。煮沸具は土師器で占められ、識別できた大型甕は丸底で体部上面がロクロナデ、外面下半はヘラケズリされる。これ以外の奈良時代か古墳時代後期の所産が断定できなかったが、厚手でナデ調整される長胴甕破片が得られている。小型甕は平底で部分的にヘラケズリされるもので、調整はロクロナデ・カキ目調整を基本とする。貯蔵具はほぼ須恵器で占められ、壺と長頸瓶がある。これ以外では大型の鉢形土器が得られている。形態的には鉢形の模倣とも見られるが、土師器で外面下半をヘラケズリするなど土師器甕との共通性があり、用途は明らかにできなかった。以上のように本遺跡出土土器は平安後期を除く古代の各時期の土器が散在的に認められるが、遺構

の検出された9世紀の所産が最も多い。

②遺構・地点別出土焼物

以下には図示した焼物を中心に説明を加える。

SB01 (第71図)

出土量は少ない。7・8が内黒の杯か碗の口縁部、9が両面黒色土器の皿、10が底部から周辺を手持ちヘラ削りされる内黒鉢、11は外面が削り、内面横ハケ調整の土師器甕である。

SB02 (第71図)

12は底部回転糸切りの土師器杯A、13が底部回転糸切りの須恵器杯A、14が体部がハケ調整、肩から口縁部がロクロナデされる土師器甕、15・16が小型甕で15は底面から脇に手持ちヘラ削り、16がロクロナデされる土師器甕である。

SB03 (第71図)

食膳具を中心に比較的まとまった量が得られた。17～23が内黒杯A、24は内黒鉢、25は混入と思われる須恵器甕である。17～23には内面が明褐色を呈するものもあるが、内面にミガキを施していることから内黒土器と判断した。

SK601 (第71図)

土師器甕が出土している。26は外面にはタテ方向のヘラ削りが施される甕である。27は口縁部の屈曲が弱く、端部が軽く屈曲する甕で、外面はヘラケズリ、内面はヨコハケ調整が施される。28・29はロクロ調整される小型甕である。

検出面他 (第71図)

A・B区の検出面及び中世以後の遺構に混在して出土したものを一括した。30～33が内黒杯Aで31～33は外底面及び周囲に手持ちヘラ削りが施される。34は底部回転糸切の軟質須恵器杯A、35は底部回転ヘラ削りされる須恵器杯B、36は灰釉陶器碗で、方形高台で内面のみ軸がかかる特長から黒笹14号窯式ではないかと思われる。37は須恵器長頸瓶で、全体をロクロナデする。外底面には焼成前に施された「×」記号が認められる。38・39は須恵器甕で、39は縄目のタタキをもつ体部破片であるが、全体の器形は不明である。40～42は土師器の甕である。40は内面がヨコ刷毛、外面に斜めのヘラ削りが施され、41は外面がタテ方向のヘラ削り、内面は摩滅して詳細不明であるがヨコハケ調整とみられる。43は土師器鉢もしくは鍋と思われる。口縁部内面にはカキメと思われる調整が認められるが、外面は摩滅して子細不明である。44・45は土師器の鉢である。体部上部をロクロナデし、体部下半から底部にかけてヘラ削りされる。口縁部が内湾し、内黒鉢とは明らかに形態が異なる。鉢鉢に類似するように思われるが、焼成や製作技法は土師器の甕と同様である。類例の少ない器種ながら本遺跡では2個体得られている。

(2) 石製品

SK601より砥石が1点のみ出土している。砂岩製で上端部に穿孔され、下半分は欠損している。

5. 中世以後の遺物

(1) 焼物

小滝遺跡全域で採取され、総破片数2649点(同一個体と思われるものをまとめる(個体別識別)と2062点)を数える。このなかで近世以後の所産は49点で大部分が中世の所産である。ただし、内耳鍋とカワラケが大部分を占め、それぞれ類似破片を1個体とまとめたところでは約54%(破片数では60%)、同約43%(破片数では37%)であるが、他の焼物は僅か3%と極めて少ない。北之脇遺跡よりカワラケの比率がや

や高いものの、ほぼ類似した組成である。なお、近世の陶磁器は非常に出土量が少なく、A区検出面及びA・B区の水田関連土層周辺で出土している。

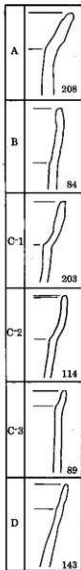
①出土焼物種の概観

ア、在地産土器

在地産土器は2591(個体識別1975点)点あり、出土焼物の98%(個体識別97%)を占めるが、その大部分は内耳鍋とカワラケの破片である。在地産土器には褐色系の色調を呈する酸化炎焼成の土器と青灰色を呈する還元炎焼成土器がある。還元炎焼成土器はすり鉢のみがあり、酸化炎焼成土器には砂を多く含む胎土でロクロを使用しない内耳鍋・すり鉢・風炉の大型品と、比較的精選された胎土でロクロ調整されるカワラケ・香炉、あるいは手づくりのカワラケ類の小型品に大別される。なお、在地産土器は器種ごとに胎土・整形・焼成方法が異なる傾向をもち、酸化炎焼成土器も単一の系譜の焼物とはいききれない。十分な整理ができていないため、ここでは便宜的にまとめるものである。

A、須恵質・瓦質すり鉢

還元炎焼成のすり鉢が3点出土した。このすり鉢は長野県北部の長野市周辺で多く類例が知られていたが、近年千曲川沿いで出土例が増加してきている。形態や焼成の特長から珠洲製品の模倣品と考えられるが、整形方法は珠洲と異なってロクロ未使用で底部は砂底、体部外面はタテ刷毛調整の後にナデ、口縁部から内面は回転台ナデが施される。この整形方法は内耳鍋と同様であり、しかも酸化炎焼成のすり鉢が認められるように基本的には還元炎焼成の須恵質から瓦質、やがて酸化炎焼成への変化を遂げると推測される。SX02出土の194は口縁部内端部が尖る三角形を呈し、焼成は還元炎ながら焼成がやや不良で、部分的に褐色を呈して瓦質土器ともみられる。口縁部の形態は珠洲編年Ⅲ期に対応しようか。検出面M23中地区付近採取の298はやや器壁が厚く、口縁部断面が方形となるものである。青灰色を呈し、比較的焼成良好である。珠洲編年との比較ではⅣ期前半の14世紀前半の所産とみられる。329は表採品で灰白色を呈して瓦質に近いが、2次焼成を受けている可能性がある。口縁部端面が幅広で水平となり、体部外面には薄くタテ方向の刷毛目調整が観察される。珠洲編年に対比するとⅣ期末～Ⅴ期前半と思われる。これ以外に本遺跡では酸化炎焼成のすり鉢も出土しているが、これは須恵質のすり鉢から系譜がたどれる可能性があるものの、焼成の違いから別に扱った。なお、この瓦質すり鉢の年代は珠洲編年との対比からすると、北関東で知られる瓦質こね鉢とも類似する年代にあたると思われる。



第59図 内耳鍋分類

B、酸化炎焼成大型品

a、内耳鍋

今回の調査では総破片数1571点(個体識別1092点)得られ、中世焼物内の約60%(個体識別54%)を占める。ただし、内耳鍋は比較的大型品であり、1個体から発生する破片数も相対的に多くなり、しかも体部の破片はあまり特長がないことから接合作業や同一個体の認定が難しいところがある。したがって、遺跡で使用された個体数は上記の数よりかなり少なくなるとと思われる。

内耳鍋は酸化炎焼成で表面が褐色系の色調を呈する土器であるが、器壁中央が灰色、もしくは青灰色を呈するものもあり、簡単な窯状施設を用いると思われる。形態は桶型の体部から短い外反・直立・屈曲する口縁部にいたり、内面2か所に耳がつく。底部は平底と丸底があるが、平底が圧倒的に多く丸底は僅か

である。なお、今回の調査ではホウロク型の浅い形態は認められていない。外面には使用時のものと思われる煤が付着する。整形方法は川砂を離れ砂として撒いた台の上で粘土紐積みで基本形をつくり、板状工具で内面はヨコ、外面体部はタテ方向に調整し、さらに内面はヨコナデ、外面は体部下半もしくは体部外面全体にヨコナデを施す。なお、体部外面にはタテナデが部分的に観察できるものがあるが、外面の遺存状態が悪く、口縁部ヨコナデとの前後関係やその範囲が不明瞭なものも多い。そして、口縁部及び内面底部脇から底部、さらに体部と底部境周辺に回転台を使用したナデが施されている。耳は半円形の紐を芯とし、周囲に粘土を補いながら形づくられている。内耳鍋は従来より口縁部の形態に着目されて扁平されているが、この口縁部形態に着目すると以下のような種類が認められる。

- A. 口縁部が「く」の字状に屈曲するもの (例202・208)
- B. 口縁部が直立し、内面にナデ調整を顕著に残すもの (例53?・54・84・151等)
- C. 口縁部が緩やかに内湾して立ち上がり、内面にあまり顕著な調整痕を残さないもの
 - 1. 口縁部上部が肥厚し、屈曲部付近のみが薄くなるもの (211・287等)
 - 2. いったん内湾した後にそのまま直線的に立ち上がるもの (例57・69・114・165等)
 - 3. 短く外反するもの (例52・44・145・166等)
- D. 体部と口縁部の境が不明瞭でほとんど屈曲せず直立するもの (例143)

本遺跡で最も多く認められるものはC-2類、C-3類で、他は少ない。また、遺跡内ではA区で比較的多く出土している。

b. すり鉢

酸化炎焼成すり鉢は249の1点のみあるが、小破片で全体の形状は不明である。色調は褐色を呈するが、内耳鍋と比べると焼成がやや不良である。内面には節目があるが、単位は不明である。外面にはナデ痕が観察できる。

c. 風炉・火鉢

風炉は1点のみA区SH04から出土した148がある。胎土や焼成方法は内耳鍋に類似する。底部は平坦な砂底で、底部にヘラで調整された足が推定3か所つく。調整方法は体部がナデ調整、体部上半は回転台ナデを使用すると思われる、体部上半に円形の窓が開けられる。瓦質の風炉を模倣したと思われるが、瓦質火鉢によくみられるスタンプ装飾やヘラミガキは認められない。当地域での類似品は15世紀代と推測される体部破片が石川条里遺跡、栗田城跡から出土している。あまり類例が多い遺物ではないが、石川条里遺跡・栗田城跡では精製された瓦質火鉢と共に出土し、若干軟質の瓦質ぎみの焼成もあるので、本遺跡例は石川条里・栗田城出土品に後出する可能性がある。

火鉢と推定されるものは同じくSH04から149の1点が得られた。平坦な底部からやや斜めに体部が立ち上がり、口縁部上端が平坦で上端外側が若干引き出される器形である。口縁部外端部が若干外反ぎみになるが、欠損するため詳細な形状は不明である。整形方法は風炉と同様に底部は砂底である。胎土は砂を多く含むが、内耳鍋に比して砂が若干少ない印象を受ける。色調は明褐色を呈する。

C. 酸化炎焼成小型品

a. カワラケ

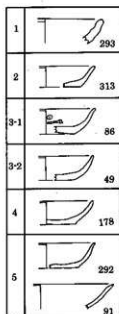
カワラケは多く検出された。総破片数1008点(個体識別870点)を数え、中世焼物の約38%(個体識別43%)を占める。多様な形態が認められるので、時間差があると思われる。成形方法はロクロ調整のものが大部分で僅かながら手づくねカワラケがある。手づくねカワラケは3点得られ、すべて図示した。法量は大(口径14cm前後)の104・198と小(口径9cm強)の300の2種あり、体部外面下半には指圧痕、内面から口縁部にはヨコナデが認められる。底部は198・300のみが確認できたが、内底面にはヨコナデが施される。

いずれも精選された比較的緻密な胎土が用いられる。これに対してロクロカワラケは大量に採取された。法量は口径で6~8cm前後(小)、9~10cm前後(大)、14cm前後(特大)の3種認められる。胎土は大きく灰白色の精選された胎土と全体的に緻密ながら風化酸化鉄粒を含む明褐色~褐色を呈するものがあり、後者はさらに数種類ある。形態は以下のような種類が認められるが、これは本遺跡のみの仮分類として述べるものである。

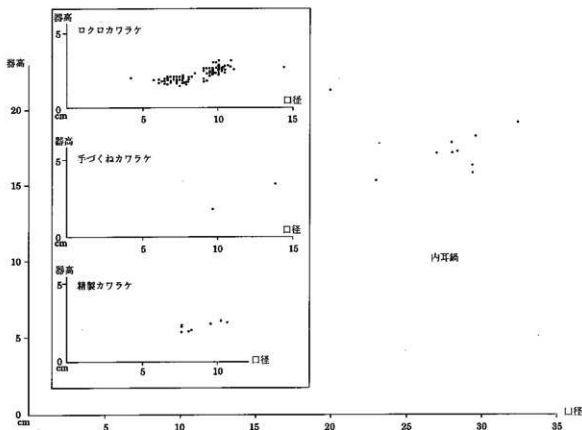
1. 黄褐色を呈する胎土で、器壁も厚く作りが雑である。口縁部破片しかないが、丸く肥厚するような形態となる。(例293)
2. 赤褐色や明褐色の胎土で平坦な底部から体部が直線的に立ち上がるもの。口縁部端部は外反ぎみとなる。出土例は少ない。(例241・284・313・317)
3. 明褐色・褐色を呈する胎土で内湾ぎみに体部が立ち上がる。口縁部は外反、内湾ぎみになる2者があり、内底面脇が強くナデられて内底面中央が盛り上がったたり、若干くぼむもの、あるいは平坦になるものがある。口縁部の形態から2種に分離しておくが、これらの差はあまり明瞭でない。本遺跡でもっとも主体的な存在である。

— 1 口縁部端部が外反するもの (例大-67・86・102・312・316等、小-47・48・116・128等)

— 2 口縁部端部が内湾ぎみになるもの (例大-49・97・133・181等、小-121・129・130等)



第60図 カワラケ分類



第58図 カワラケ・内耳縄法量グラフ

4. 灰白色の精製胎土で口縁部が内湾するもの(例179)
 5. 灰白色の精製胎土で口縁部が外反するもの(例292・91)

上記の分類も出土カワラケすべてを網羅するものではなく、比較的目についたものを取り上げただけで分類の妥当性について検討していない。上記のなかで4・5類が精製されたもので、それ以外は砂粒を多く含む。成形はロクロによるが、1類は不明ながら2・4・5は内底面にオサエのヨコナデー外底面に板状圧痕が残るものが多く、3類はあまり内底面のオサエや外底面の板状圧痕が見られない。

これらのカワラケのなかで1類は14世紀後半から15世紀前半の当地域に認められる厚手の粗雑なカワラケに類似し、2類は内耳鍋B類に伴うとみられるカワラケに類似する。3類が本遺跡の中心的存在であり、北之脇・前山田遺跡でも比較的多く出土している。4類については全く位置付けが不明で、今後検討が必要と思われる。5類は当地域では2類(1類?)前後に明褐色のカワラケと共に出土するようだ。カワラケの年代は子細不明であるが、石川条里遺跡^(註1)では1類が主体、他に2・5類が認められ、内耳鍋は瓦質内耳鍋・A・B類が出土している。栗田城跡^(註2)では1類とそれ以前のカワラケ、一部5類の特大カワラケが出土し、内耳鍋は瓦質内耳鍋があるが酸化炭成内耳鍋は出土量も少ない。また、屋代城^(註3)では外底部を回転糸切りする大法量のカワラケ、2類に類似したカワラケと内湾したものが認められ、内耳鍋はB類?とC-2(3?)類があるようだ。これらのことから1類カワラケは瓦質内耳鍋かA類内耳鍋、2類はA・B類内耳鍋前後にあり、合わせて5類が伴うようだ。残る3類は内耳鍋の変遷の想定からするとこれらのカワラケに後続する可能性がある。4類については屋代城に類似品があるが、子細な位置付けは検討が必要である。

なお、カワラケは小破片が多く、特定の場所で集中して出土する出土状況は認められていないが、圧倒的にA区での出土が多い。また、煤付着例は33点あり、出土カワラケの1.6%に該当する。また、カワラケを二次的に加工するものがいくつかあり、例として底部中央を穿孔したり、外面に放射状の沈線を入れるものがある。本遺跡の場合では底部穿孔と放射状沈線が併用されるものが多く認められ、両者は何らかの相関関係があるのかも知れない。

註1 1997「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 石川条里遺跡第1分冊」

(長野県教育委員会・財)長野県埋蔵文化財センター

註2 1991「栗田城跡・下字木遺跡・三輪遺跡(3)」長野市教育委員会

註3 1995「屋代城跡範囲確認調査報告書」更埴市教育委員会

b. 香炉

土器香炉は2点出土し、155の1点を図示した。整形方法・胎土はロクロカワラケと同じである。形態は古瀬戸の袴腰香炉を模倣したと思われる。

イ. 輸入陶磁器

調査面積や遺構数に比して出土数は少なく、青磁25点、白磁2点、青花と思われる破片2点がある。総数は古瀬戸・大窯製品よりも若干多いが、中世焼物内の約1%でしかない。

青磁は碗と盤があり前者は20点、後者は5点である。碗は同安窯系青磁碗と思われるものは171の1点、龍泉窯系蓮弁文碗(横田・森田分類I-5b類)は326の1点、同じく沈線の蓮弁文碗(横田・森田分類I-5b類)は240・269の2点、玉縁状口縁の青磁碗(上田分類D-I類)は209・326の2点、粗線蓮弁文碗(上田分類B-III・IV類)は76・214・243・327など4点、同形の腰の張る無文碗(上田分類E類)が101・213・333など3点ある。他は小片で子細不明であるが、334は龍泉窯系青磁碗の蓮弁文碗の底部破片の可能性が

ある。これらの青磁碗は年代幅があるが、中世後半の14世紀後～16世紀前半とされる細線蓮弁文碗や腰の張る無文碗などが多い。なお、口縁部に雷文帯をもつ碗（上田分類C類）はその可能性のあるものが1点のみある。盤は5点あるが、多様な形態がある。174はL字状に屈曲する口縁部のもので体部内面が丸ノミで蓮弁を施し、157は内面にヘラで紋様が施され、93は外面に蓮弁文を施す。碗の出土量が多いとは言えないが、盤は周辺遺跡に比べて若干多いように感じられる。

白磁は小型の高台から内湾ぎみに開く小皿のみがある。図示した103・328があり、焼成はやや不良である。青花と推定されるものは2点のみあり、いずれも図示した。141は小野正敏氏の分類でB群Ⅱ類(15世紀)の碗と思われる。254は皿と思われるが、小破片のため断定は躊躇される。なお、上記に挙げた分類や年代観は前山田遺跡の輸入陶磁器のところで挙げた文献を参照した。

ウ. 古瀬戸・大窯製品

輸入陶磁器同様に調査面積に比して出土量はわずかである。輸入陶磁器よりも若干少なく、中世焼物全体内では約1%に満たない。一部古瀬戸と大窯製品の区別がつかなかったものがあるが、識別できたところでは古瀬戸3点、大窯製品は10点と大窯製品のほうが若干多い。ただ、年代的にはあまり隔たりがないことから大部分は継続的な使用によるものと考えられよう。

古瀬戸と思われるものは3点あり、前期様式では332の小皿、後期様式と思われるものは113の卸皿と140の香炉がある。小皿は灰白色の緻密な胎土で回転糸切りの底部から内湾ぎみに体部が立ち上がる。釉は観察できず、内面に自然の降灰釉がかかる。卸皿は小破片で子細不明である。なお、天目茶碗は体部破片しかなく、大窯か古瀬戸か判断に迷ったものとして183があるが、体部下半に錆釉が施される。これ以外の古瀬戸の平碗や鉢類、縁軸小皿類はまったく認められていない。

大窯製品も余り多くないが、古瀬戸よりは比較的多く出土する。天目茶碗は古瀬戸との識別が困難な体部破片であるが、286は体部下半に暗紫色に発色する錆釉が施されるもので大窯製品と思われる。高台脇は狭く削り込まれているとみられるので大窯第1段階（15世紀末～16世紀初頭）の可能性がある。丸碗はA区のSH15周辺に入れられたトレンチから出土した276の1点がある。透明な淡緑色の灰釉が施され、体部外面には蓮弁を施す。大窯第1段階（15世紀末～16世紀初頭）の所産と思われる。皿類は大窯製品のなかで比較的出土量が多い。灰釉を全面に施す丸皿は7点、折縁の皿1点があり、前者では口縁部の外反する217・253・277は大窯第1～2段階前半（15世紀末～16世紀前半）、やや内湾ぎみに立ち上がる46・210は大窯第2段階後半～3段階（16世紀中頃～後半）と思われる。これ以外は270・297の底部破片である。折縁皿は271の1点のみあり、大窯第3段階（16世紀中頃）と思われる。器種は非常に少ない。なお、古瀬戸や大窯製品の年代は前山田遺跡のところで挙げた参考文献によっている。

エ. 珠洲製品

珠洲すり鉢は図示した2点あり、壺・甕類は出土していない。A区ST10（SH29）出土の88は口縁部が肥厚して端面が水平となるものである。内外面にクロコナデ痕を残し、内面に7本前後を1単位とする卸目が施される。焼成がやや不良でガサついた感じのものである。珠洲Ⅳ期後半からⅤ期初頭（14世紀後半～15世紀初頭）と思われる。C区検出面出土の299は体部1/8程の破片であるが、卸目は観察できない。焼成は比較的堅く良好である。この破片のみで時期を特定することは難しいが、体部が若干カーブするとみられることから珠洲Ⅱ期以前（13世紀前半以前）の所産だろうか。この珠洲製品の年代観についても前山田遺跡のところで挙げた参考文献によっている。

オ. 常滑

壺の体部破片が1点のみあるが図示していない。時期は不明である。

カ. 唐津・肥前産陶器

唐津は6点出土し、4点図示した。大橋康二氏の肥前産陶磁器編年のII-1期(1600~1630)と思われるものは156の鉄釉小碗、169の砂目積灰釉溝縁皿がある。小碗は削りだし高台で外体部下反から外底部は無釉である。これ以外はIII期以後の所産とみられる。すり鉢は3点出土し、SK108Iから図示していないが、無釉のすり鉢体部小片1点、図示した248のような全面に鉄釉を施すすり鉢が2点ある。後者は肥前編年のIV・V期(1690~1860)に比定されよう。これ以外には鉄釉?の刷毛目を施す皿、いわゆる刷毛目唐津の鉢体部破片がある。肥前産陶器は252の1点出土した。所謂呉器手と呼ばれる碗で大橋氏の肥前陶磁器編年ではIII期(1650~1690)の所産と思われる。黄灰色の灰釉が高台の畳付以外の全面に施され、胎土は比較的緻密である。なお、年代観については前山田遺跡のところで挙げた参考文献によった。

キ、伊万里

出土量は非常にわずかで10点しかない。碗5点、瓶類1点、蓋2点、皿2点である。図示したのは216・247の碗のみである。216は外面に所謂芙蓉手の文様が施される。時期は明らかにできなかった。247は内外面に菊花文が施されるもので大橋氏編年のIV・V期(1690~1860)の所産と思われる。これ以外にIV期(1690~1780)の伊万里の陶胎碗が2点ある。なお、年代観は前山田遺跡のところで挙げた参考文献によっている。

ク、瀬戸美濃本・新業焼

大窯製品との識別が不十分であるが、近世と思われる瀬戸・美濃産の陶磁器をまとめた。出土量は非常に少ないが、17世紀の所産と18世紀以後の所産に大別できそうである。陶器は全部で25点あり、17世紀前半では志野丸碗1点、志野丸皿1点、志野織部大皿1点がある。この内、172は円盤に加工されている。これ以外は18世紀以後と思われるものである。鉄釉碗1点、灰釉丸碗8点(250を図示)、鉢類3点、瓶類2点、花瓶2点、染付陶胎碗2点、馬目皿1点、器種不明の破片1点がある。また、279は高台削り出してロクロナデするもので、輪はげ皿と思われるが子細を明らかにできなかった。新業焼と思われるものは6点あり、染付と上給付がある。碗は全部で5点あり、246のみ図示した。これ以外は杯の破片である。19世紀の所産と思われる。なお、年代観は前山田遺跡のところに掲載した参考文献によっている。

ケ、近世以後の在産土器・陶器、産地不明陶器

近世の在産土器と思われるものは火鉢破片2点がある。いずれも小破片で図示していない。在産陶器では松代焼の甕破片1点、土瓶1点、灯明具類破片1点がある。これ以外は近在の窯と思われるが産地を特定できなかったものとして急須1点、仏飯具1点、すり鉢1点がある。

②地点・遺構別出土焼物の概況

ここでは遺構別の出土状況を記述しておく。本遺跡内で最も多くの中世焼物が出土したのはA区I面のSH04~08であるが、複数時期の焼物が混在して出土し、限定時期の所産と断定できる例は非常に少ない。また、A区では上下面に遺構面が分離されたが、下部遺構から出土した遺物も少なく、しかも遺物年代と層位的な所見に矛盾があつて、良好な層位的資料とはできない。これは編年上の問題ではなく、本遺跡の整地は遺跡内の土の移動で行ったために混入が多くなったためとみられる。以下には個別遺構出土の焼物について図示した遺物を中心に説明を加える。

ア、礎石・堅穴建物跡出土焼物(第72~74図)

礎石建物跡で出土した焼物は建物跡が認定された以後の検出面及びその整地土中からの出土品である。大部分は整地土中出土の所産が多く、各遺構で使用された遺物が残存したというより混入品と捉えられるものがほとんどである。また、堅穴建物跡ではA区のST02、C区のSB04などでは埋土中より焼物が出土しているが、量は少なく小破片ばかりである。したがって、これらの建物跡遺構出土品はいずれも一括廃棄された所産、あるいは使用時の残存とは考えられない。

ST01 周辺 石を露呈する段階で採取された遺物である。46は大窯丸皿、47～51はロクロカワラケで、47・48は3-1類、49は3-2類、50・51は5類の特大カワラケである。52は内耳鍋C-3類である。

ST02 竪穴埋土から採取された遺物である。カワラケ若干と内耳鍋があるが、内耳鍋を図示した。53はC-2か3類、54はC-1類と思われる。

ST03 整地土中から採取された遺物である。55・56はカワラケで55は3-1類、57はC-2類の内耳鍋である。なお、ST03検出段階で採取された遺物をST03付近として掲載したが、58～60がカワラケで58は3-1類、61がC-1類の内耳鍋である。59・60は外底部に放射状の沈線が施される。

ST02・03下層 ST02・03調査終了後にSH14～16を検出したが、その掘削途中で検出した遺物である。62～64のロクロカワラケのみがある。65が3-2類?、67が3-1類と思われる。

ST08 調査ではST08を構成するSH05～07で採取された遺物である。65～67、77～83がロクロカワラケ、76が細線蓮弁文青磁碗、それ以外は内耳鍋である。内耳鍋は84がB類と思われるが、それ以外はC-2類である。カワラケは77が4類、80・83が5類?と思われ、他は3類である。

ST10 2次調査のSH29で採取された遺物が大部分であり、基本的に整地土中に混入して出土した遺物である。85～87がカワラケで85・86が3-1類、88が珠洲すり鉢、89がC-3類の内耳鍋である。

SB04 90・91のロクロカワラケ若干が採取された。90は3-1類、91は5類である。

イ. 土坑・柱穴跡出土焼物 (第74図)

個々の遺構から出土した焼物は少なく、一括して記述する。いずれも小破片である。SK01の92は2類?ロクロカワラケ、SK163-93は外面に蓮弁文を施す青磁盤、SK196-94・95が3類カワラケ、96が内耳鍋である。SK201-97・SK423-98は3-1類カワラケ、SK428-99はC-1類内耳鍋、SK445-100は3-2類?カワラケ、101は腰の張る無文青磁碗である。SK449-102は煤が付着する3-1類カワラケ、SK531-103は白磁皿であり、出土地点不明で取り上げられた底部破片と接合した。SK585-104は手づくねカワラケ、SK879-105はロクロカワラケ、106はC-2類内耳鍋、SK893-107・SK998-108・SK1020-109・SK1047-110はカワラケで、109は3-1類と思われる。SK1087-111は3-1類ロクロカワラケ、112は内外面沈線による文様が施される青磁碗、113は古瀬戸後期様式の鉤皿、114はC-2類と思われる内耳鍋で口縁部内面には薄くヨコ刷毛痕が残存する。

ウ. 集石・石列遺構出土焼物 (第74～76図)

A区集石・石列遺構とB区にあるSH17から出土した焼物である。A区I面上部に帰属するSH02・04ではST08(SH05～07)と共に最も多くの出土遺物が採取された。このA区I面上部に帰属する遺構はこの他にSH11がある。下部遺構で遺物を出土したのはSH16・SH30・SA03のみである。なお、2次調査のSA01・02は土層の検討からはA・B区水田以後の所産とみられ、出土遺物は直接関連するものとはみられない。また、SH26はSH30上面にあるが帰属は判然としない。

SH02 115～117がロクロカワラケ、118～120が内耳鍋で、118はC-3類と思われる。

SH04・09 礫検出作業中に出土した遺物で、大部分が上部遺構SH04に帰属するものであり、SH09の整地土中で出土したものではない。121～139はロクロカワラケ、140が古瀬戸香炉、141が青花碗、142～147は内耳鍋、148の内耳質風炉、149が火鉢である。内耳鍋はC-3類に分類しうるものがほとんどであるが、143はD類とみられる。形態的にST08出土品とほぼ類似する。カワラケは122・129・130・134・135が3-2類、136・137が不明の他は3-1類と思われる。

SH11 出土遺物は少ない。図示した150はカワラケ、151はB類内耳鍋である。

SH16 I面下部に帰属する遺物で、ST02・03下層で取り上げられた遺物とほぼ同様の位置にある。152の内耳鍋を図示したが、小破片でA類かC-2・3類か判断できなかった。

SH17 礫検出時や礫内より出土した焼物である。いずれも破片で摩滅したのものもある。153は2類、154は不明のカワラケ、155は土器香炉、156は唐津小碗、157は青磁盤、158～163は内耳鍋である。162はB類、159～161はC-2類とみられる。158は判然としないがB類であろう。

SH28 SH14～16と対応するSH30の上面(2次調査3面)に位置する。SH30と関連する遺構が断定はできていない。内耳鍋のみ図示したが、164・166はC-3類、165はC-2類と思われる。

SH30 SH14～16・SA03延長先に位置する石垣である。これらの石垣やST10(SH29)は本跡と関連するI下面下遺構とみられる。167・168がカワラケで167は3-2類?、169が唐津溝縁皿、170はC-1類の内耳鍋である。169はSH30の年代推定の根拠としたが、一方でA区の整地面の年代を考える上で他出土遺物との関連に問題を残すことになった。

SA01 図示したのは同安窯系青磁碗底部と思われる破片であるが、他には内耳・カワラケ、瀬戸美濃本業焼碗、松代焼灯明具破片などが近世末期の所産がある。

SA02 172の志野織部の大皿を加工した円盤を図示した。これ以外に近世火鉢、伊万里陶胎碗、伊万里蓋、瀬戸美濃本業焼鉢、瓶類破片がある。また、SA01・02一括で取り上げられた焼物として瀬戸美濃染付陶胎碗、松代焼壺などがある。年代的にはSA01と同様である。

SA03 SH14～16、SH30の関連遺構と思われる。いずれも破片出土で4点を図示した。173は3-2類?カワラケ、174が青磁盤、175・176が内耳鍋である。176は石垣の最下部より出土している。

エ. 溝跡出土焼物(第77図)

溝跡から出土した遺物は非常に少ない。しかも、図示したのはいずれもカワラケである。

SD01 カワラケ小破片が出土したのみである。177・178はロクロカワラケである。177は内底面中央が盛り上がるもので3類と思われる。178は精選された胎土の灰白色を呈するカワラケであり、内底面はヨコナデされる。4類に該当する。

SD02 179はロクロカワラケで3類と思われる。

SD13 ロクロカワラケで180は3-1類、181は3-2類に該当する。

SD16 カワラケ1点のみ図示した。182は3-1類に該当しよう。

オ. 焼土跡、性格不明遺構他出土焼物(第77図)

SF01 183は古瀬戸・大窯製品か判別できなかった天目茶碗の破片、184～188はカワラケである。カワラケは185・186共に3類、187も3-2類と思われる。

SX01 遺構の切り合いからSK1087より後出する所産が含まれると思われるが、破片が多く良好な資料はない。189～191がロクロカワラケであり、189が2か3類、190・191が3類に該当すると思われる。内耳鍋はいずれも小破片で混入の可能性が高い。192は不明、193は子細不明ながらB、もしくはC-1類に該当しようか。

SX02 (04) C区の基壇状遺構の西側SX02出土品である。比較的古い時期の焼物がまとめて出土したが、類似時期の所産ではない。194は在地産の瓦質すり鉢で、口縁部内面端部が尖る三角形の断面となる。195～200はカワラケであるが、198は手づくねで他はロクロ整形である。破片で出土しているため、分類が困難なものがあるが、195・196は4・5類、197は3-2類、199は3-1、200は不明である。内耳鍋は3点図示したが、201・203はC-1類、202はA類に該当しよう。

SX06 SA03の低地側にあり、SH14～16、SA03、SH30より先行する可能性もあるが、断定はできない。204の1点のみ図示したが3-1類と思われる。

カ. 検出面、出土地点不明出土焼物(第77～79図)

A区2次調査検出面出土遺物 2次調査ではA区の整地・石垣を伴う遺構が全部で6枚の調査面に分けら

れて調査されている。整理では4面にまとめられると思われたが、調査の所見にしたがって掲載した。205～208は1面出土焼物である。整理時に1次調査の検出面出土遺物と混乱した可能性がある。205～207はカワラケ、208は内耳鍋A類である。2面出土焼物も少ないが、209～212を図示した。209は口縁部が玉縁状になる青磁碗、210が大窯丸皿である。211は内耳C-1類、212はC-2類と思われる。3面で採取された遺物は比較的多く、213～239を図示した。213は腰の張る無文青磁碗、214は細線蓮弁文青磁碗、215は青磁碗体部破片、216は伊万里碗、217は大窯丸皿、218～237がカワラケである。破片で分類不能なものもあるが、218・219・223は3-1類、224が口唇部が削られたようになっており分類不明、227・228は3-1類、232・233は3類と思われる。内耳鍋は238がC-2類、239は耳周辺で分類が不明のものである。4・5は面は整地土内にあたるが、出土遺物は少なく、240の沈線蓮弁文青磁碗の破片、241の2類カワラケ、242のカワラケ、243の細線蓮弁文青磁碗を図示した。242は1類、241は3類と思われる。6面は244の3-2類カワラケ、245の丸底内耳鍋を図示した。

A・B区水田出土焼物 246～249を図示した。246は瀬戸美濃新業焼の染付碗、247は伊万里Ⅳ・Ⅴ期(1690～1860)の碗、248が唐津すり鉢、249が酸化炎焼成土器すり鉢である。18世紀から19世紀までの所産がみられる。水田面検出時に採取された焼物は250を図示した。250は瀬戸美濃本業焼の灰軸丸碗である。水田耕作土層中～下面出土の焼物は251が3類カワラケ、252が肥前産陶器Ⅲ期碗、253が大窯丸皿、254は断定できないが、青花皿と思われる。255が内耳鍋C-3類である。

A区1次調査検出面出土焼物 1次調査の検出面で出土した遺物であるが、ほとんどがSH02～08周辺で採取されたものと思われる。258～268がカワラケ、269が沈線で蓮弁文が描かれる青磁碗、270が大窯丸皿底部、271が大窯折縁皿である。261は2類?、262・267が3-1、266・268が3-2類と思われる。なお、263は口唇部が削られている可能性がある。

A区ビット群周辺採取焼物 A区の最上部ST18・19周辺で採取された遺物である。272・273いずれも3-2類と思われるカワラケである。

A区南トレンチ採取焼物 A区1次調査、SH15・16周辺にいたれたトレンチで採取された遺物である。274・275が3-2類カワラケ、276が大窯第1段階の丸碗、277が大窯1～2段階の丸皿と思われる。

A区出土地点不明焼物 A区で出土したものの、取り上げ時の記載ミスで出土地点不明となった遺物である。278は3-2類カワラケ、276は瀬戸美濃産本業焼の輪はげ皿、280はC-2類の内耳鍋である。280は土器集中と記載されていたが、平面図に記載がないため出土地点不明とした。

B区出土地点不明焼物 281～285はカワラケで281・282・285は3-1類、284は2類、286は大窯第1段階の天目茶碗と思われ、287は内耳鍋C-1類と思われる。

C区検出面出土焼物 288～296がカワラケで293が1類、292が5類である。297は大窯丸皿底部破片、298が在産須恵質すり鉢、299が珠洲すり鉢である。332が古瀬戸前期様式の小皿、333が腰の張る無文青磁碗、334が龍泉窯系青磁碗と思われる破片である。内面にスタンプ文が施される。

出土地点不明焼物 取り上げ記載ミスで出土地点が不明となった焼物である。300が手ずくねカワラケ、301～324がカワラケ、325が蓮弁文青磁碗、326が玉縁の青磁碗、327が細線蓮弁文青磁碗、328が白磁皿、329が在産瓦質すり鉢、330がA類内耳鍋、331がC-3類内耳鍋と思われる。ロクロカワラケでは302・313・317が2類と思われるが、他は3類である。

(2) 土製品

ア. 土錘 (第82図、PL10)

全部で3点図示した。1がA区I面、2がA区の溝跡内、3はC区の長イモの攪乱から出土した。B区

を挟んだ両縁付近で出土しているが、B区低地に関連して使用されたのか不明である。いずれも細身の土鐘である。時期の詳細は不明であるが、形態的にみて古代以後の所産と推定される。

イ. 土製円盤（第76図、PL9）

明確に土製円盤と捉えられたものはA区SA02周辺から出土した志野織部大皿を転用したものがある。周囲を研磨している。これ以外では土製円盤と明確に捉えられたものはない。

(3) 石製品

中世以降と思われる石製品には茶臼・粉挽臼などの臼類、石鉢、凹石、砥石などがある。これらの石製品は中世の所産が多いと思われるものの、厳密な時期比定ができなかったため、近世の所産も含む可能性がある。なお、本遺跡出土石製品で臼類や石鉢類が多い点は当地域の当該期の中世遺跡とほぼ同様の様相である。また、安山岩は近在でも入手可能な石材である。ただし、遺跡背後の霞城中腹には近世の石切り場跡が残るが、ここから産出する石は「青石」と呼ばれるように青味を帯びる。色調のみを比較するとこの石切り場からもたらされたものではないようだ。

ア. 茶臼（第80図、PL11）

1点のみ下臼が出土している。出土地点不明となったもので、受皿の口縁部を欠損するが、約1/2程遺存する。安山岩製で磨面は8分割と推定され、副溝は9～12前後で細い。

イ. 粉挽臼（第80・81図、PL11）

粉挽臼は上臼10点、下臼5点の合計15点が出土した。調査時の取り上げミスもあって出土地点不明となったものがあるが、確認できるなかでは山際のA区の集石遺構や石垣内出土が多い。本遺跡出土の石臼は北之脇遺跡や前山田遺跡のものと形態は同じで石質も同様の安山岩である。また、上臼のほうが比率的に多い傾向も同様であるが、出土量自体は2遺跡よりもはるかに少ない。

上臼は7点図示した。上面の縁を一段高く削り残し、下面の磨り面を凹面とする筒形の形状である。磨り面中央には軸孔があり、この軸孔を挟んで供給口と側面の引き手孔が直線的に配置される。軸孔は内部が軸の回転で摩擦して平滑になるが、上面まで貫通するものと孔底が途中で止まるものがある。後者が圧倒的に多く、前者は5の1例のみである。供給口は方形の平面形で上下2方向から彫りこまれるもので、磨面には「ものくばり」と呼ばれる右側に緩やかにカーブする浅い溝がある。引き手穴は供給口と軸孔を結ぶ直線上の側面に設けられているが、磨面の摩擦で磨面に孔が露呈してしまったものがあり、このような例では他の場所に引き手孔が別に設けられる場合が多い。新しい引き手孔を設けている場所は古い孔から120°振った場所にあるもの(5)、隣接して設けられるもの(4)がある。磨面に施される目は確認できるところでは6分割で、副溝は7～15本前後までである。この上臼の整形は痕跡からすると、いずれも細いタガネによると推測される。その方向は側面はタテ方向、上面の口縁部から側面はナナメ、上面は摩擦するため子細不明ながらナナメの回転、もしくは回転させながらの多方向のものがあるようである。前山田遺跡出土未製品では全体がノミ状タガネによって形づくられており、軸穴・供給孔・引き手孔・目・ものくばりなど一切認められない。このことから出土品にみられる先端の細いタガネは仕上げ工程のもので、石臼は未製品をもって職人が村々を訪ねて、その場の要求を受けて整形したものかもしれない。

下臼は4点のみ図示した。上面が凸面状の磨面となり、中央に軸孔が穿たれる。裏面は幅広のノミ状タガネ痕が残され、やや中央がくぼむ凹面となる。軸孔は上臼同様に下面まで突き抜けるもの(10)と途中で止まるもの(9)がある。軸孔の形状が判別できるのは数が少なく、その貫通、未貫通の比率は不明であるが、いずれも孔内にタガネ痕が残るので下臼の軸孔で芯棒が固定されていたと思われる。磨面の目は確認できるところで6分割のものがあり、上臼とほぼ対応する。副溝は7～12本前後のものが見られるが、

最も多いのは8本前後である。整形は上臼同様に側面にはタテ方向の細いタガネ痕があり、裏面には刃幅3cm前後のノミ状タガネ痕が観察される。上臼の様相からすると、裏面の調整痕は粗型を作る工程のもので、側面のみに細いタガネで仕上げられたものと考えられる。

ウ、石鉢 (第81図、PL11)

石鉢は全部で6点出土し、すべて図示した。底部を厚くつくり、そこから内湾ぎみに体部が立ち上がる形態である。このなかで13は石臼の転用品で裏面には臼の磨目や中央の軸孔がそのまま残る。中央に軸孔を残すことからすれば、使用に不都合があったのではないかと疑問も残る。どのように使用していたのかは不明である。また、18は形態的にやや異質で、真中の窪み径が狭い。いわゆる掲き臼としたほうが良いかもしれない。石鉢は法量的に数種類に分離できる可能性もあるが、図示したいずれも破片であるため詳細は不明である。内面は摩擦して平滑になるものが多く、外面にノミ状タガネ痕が認められる。外面に残る調整痕から基本的な整形はノミ状タガネによるもので、石臼のような細いタガネの仕上げは行っていないようである。ただ、内面の調整については子細が明らかでない。磨る機能を重視すると内面にはできるだけ凹凸を残さないほうが良いと思われるので、本来は内面のみに細いタガネの仕上げが施されていたのかもしれない。石鉢の性格は内底面の摩擦からすり鉢として用いられたものと推測できる。このことは珠洲すり鉢の流入減少、在地産の須恵質・瓦質すり鉢の消滅時期から唐津すり鉢の流入時期までの焼物すり鉢空白期に石鉢が多く認められる点からも支持される。また、瀬戸美濃からの焼物すり鉢流入が多かったと思われる南信濃では、石鉢があまり見られない分布状況も対応しているよう。

エ、凹石類 (第81図、PL10)

本遺跡では凹石と認定できた石製品は1点のみで、類似した石質の溝状のくぼみをもつ石製品が1点出土した。いずれも用途は不明であるが、類似した多孔質安山岩製であることから関連する遺物としてまとめて報告する。凹石は県内の中世遺跡でよくみる遺物であるが、用途は明らかにされていない。図示した20は円礫上面を平坦に仕上げた中央に平滑な窪みをつくりだし、反対側の底部は平坦にして安定するようにしている。この形態は従来知られるものと同じである。ただ、本遺跡では窪み周囲に炭化物の付着が認められ、灯火用に樹脂の多い松根などを燃やすヒレ鉢等として使用された可能性も想定できる。もう1点の19は複数の溝状の窪みを上面にもつもので、形態的には凹石と大きく異なる。類例もあまり知られておらず、用途自体も明らかにしえなかったが、同じ石材であることは類似した用途のものと考えられるであろうか。

オ、五輪塔 (第81・82図、PL11)

全部で7点出土し、すべて図示した。空風輪が3点(21~23)、火輪が3点(25~27)、水輪が1点(24)である。地輪は検出されていない。いずれも山際平坦地A区の石集中・石垣内に転用されたもので、本来の位置にあったものではないようだ。ただ、C区では山際があまり出土していないようにA区の石を用いた遺構はA区周辺で石を集めていると考えられるので、本来は周辺にあったものだろう。石質は安山岩であり、外面にはノミ状タガネによる調整痕を残す。空風輪は空の部分に最大径をもつものながら、サイズは一定していない。火輪の形態は3様である。25は全体的に平たく軒反がきつい形態である。26・27はそれに比べて器高があり、軒ぞりもきつくない類似点があるが、27のみは空風輪を差し込むためのほぞ穴がつくられている。水輪は中央部に最大径をもち、全体的にやや扁平となり、上下面が若干くぼむ。外面にはノミ状タガネによる整形痕が残る。

カ、その他の石製品 (第82図、PL10)

明確な製品とは断定できないが、山際A区から平面が円形で上下面が平坦な石がいくつか出土している(28~31)。石質自体は遺跡の近在で入手できる安山岩であるが、周囲を打ち欠いているようにも見受けら

れ、人為的な加工が施されている可能性もある。これらの石は山際A区の石集中や石垣よりの出土であるが、これらの遺構で用いられる石は整形された均一規格のものではないことから、遺構構築に合わせて加工されたものではないと思われる。むしろ、建物跡の礎石の可能性もあると思われる。

(4) 金属製品 (第83図、PL10)

出土した金属製品は非常に少ないため、一括して記述する。まず、鉄製品であるが全部で8点ある。1・2はSK186 から出土した雁又鎌である。県内では平安時代後期のものはよく知られるが、中世の所産としては希少な例となろう。古代で知られる雁又鎌と比べると、分岐する先端の幅がやや広く、外縁のラインが直線的である。3は刀子類と思われる細長い板状の鉄製品である。4は小刀、あるいは刀子の柄と思われるもので、一部に目釘と思われる小孔が認められる。5は火打ち金具と思われるものである。6・7は板状の鉄製品で表面の凹凸が著しい。鋳物の破片ではないかと思われ、鉄錆の可能性はある。8は釘であるが、形態的に木ねじの可能性もある。混入品かもしれない。

次に銅製品である。9は草葉文を意匠とする刀装具である。C区の長いも耕作の攪乱出土のため出土背景や時期の詳細はまったくわからない。また、鉛製品としては10の火繩銃の玉が出土している。11～19が銭貨である。取り上げ時の混乱で出土地点不明となったものが多い。出土地点がわかるものでは11・12がC区SK553・1089、13がSH06出土である。11は文字がつぶれてまったく判別できなかったものである。私鑄銭だろうか。12が「泉宋通寶」、13は「熙寧元寶」である。それ以外は出土地点不明、もしくは検出面出土である。14は鉄銭で、文字は腐食で全く読めない。鉄銭は「寛永通寶」に類例があるので、本例も「寛永通寶」と思われる。15は「祥符元寶」である。残りも良く文字も判読しやすい。16は「天聖元寶」で銭の上部に鋳流れか、鋳型の割れによる線状の盛り上がりがあって文字にかかる。私鑄銭だろうか。17は「熙寧元寶」で文字がかなりつぶれている。18は「元祐通寶」、19は近世の「文久永寶」である。裏面には青海波文がある。

第4節 小結

小滝遺跡では縄文時代以後何らかの活動が行われていると認められたが、なかでも中世後半期以後は不安定な土地利用が認められる。以下には時代ごとに調査成果を整理しておこう。

1. 縄文時代～古墳時代

A区で僅かながら遺構・遺物が検出された。遺跡内にはA区以外にC・D区以西の二つの微高地が存在するが、C区微高地では中世以前の遺物は僅かに採取されているのみで、遺構は全く確認できなかった。これは基本土層のところで触れたようにC区以西の微高地は形成時期が新しく、中世以前では千曲川が間近に迫った不安定な環境であったことによると思われる。ところでA区で出土した土器を概観すると通時的なものが少量づつみられる特長がある。つまり、限定された時期のみに集中的に活動が行われたというより、通時的に少しずつ利用されているとみられる。その具体的な活動内容は一律ではないと思われるが、当期に含まれると思われるA区Ⅱ面検出の焼土跡は一定の反復されるキャンプ地的な利用の可能性が想定された。A区の遺物出土の背景も日帰り生活圏外での植物採取や狩猟、木材の伐採などの活動による所産が含まれていると思われる。また、立地環境からも近世の北園街道のような千曲川右岸を通る古道が遺跡周辺を通過していたと思われ、道に関連したキャンプ地的な利用も想定できる。道沿いであって周囲に集落もなく、しかも千曲川の直接的な影響を受けにくい緩斜面が形成されていた点ではキャンプ地的な利用に便があったと思われる。また、遺跡名の「小滝」もかつてあった小さな滝に由来するとされ、現在でも遺跡周辺で湧水が認められるように水に恵まれた条件もある。なお、遺跡内では古墳後期の土器片も採取されているが大室古墳群等との関連は具体的につかめなかった。

2. 古代

古代の遺構はA区で竪穴住居跡敷軒と土坑1基が検出されたのみで、C区では遺構が検出されなかった。C区微高地は前代同様に不安定な環境であったと思われる。このA区に竪穴住居跡が構築された理由は山からの堆積土が増加して緩傾斜面が拡大したことが考えられるが、緩斜面拡大は竪穴住居跡を構築しうる条件のひとつながら、遺跡の出現自体の主要因は歴史的な背景に求められよう。その背景については今回の調査では解明できなかったが、二つの可能性が考えられる。ひとつは遺跡周辺に存在したとされた大室牧に関連する可能性であり、もうひとつは県内において9世紀後半頃に出現する1・2軒単位の竪穴住居跡で構成される遺跡の可能性である。大室牧の構造・時期について考古学的検討はほとんど行われていないが、千曲川沿いの「牧島」・「牛島」・「真(馬)島」を牧関連地名と捉え、千曲川流域沿いに散在する中州を利用していたとする説がある^(註1)。ただし、「牧島」・「馬島」はかつて千曲川左岸にあって更科郡に帰属したとみられ、「牛島」も同じ高井郡内ながら大室からはかなり離れている。また、大室の牧がこうした千曲川沿いの中州を利用するとした場合でも本遺跡のような山際に竪穴住居跡が営まれる理由や、遺跡が継続性をもたない点は説明しにくいように思われる。一方、9世紀後半頃の散在形態の遺跡のひとつであったとすると、尾根を越えた村東山手遺跡で類似時期の遺構が検出されていることや、年代的にも近い所産とみられる点では背首しうる。ただし、これまでに知られる類例は山間地などの未開発地に出現するものが多いと捉えられているので、牧の範囲内にこのような居住形態の遺跡が出現しうるものか疑問も残る。いずれにしろ、本遺跡の位置を明らかにするには大室牧の領域・構造の解明が必要と思われる。

註1 明治時代の町村誌にこうした記述がすでにみられる。

3. 中世

遺構・遺物の分布は広域にわたり、それまで遺構が検出されなかったC区の微高地域でも居住遺構が確認できるようになる。出土焼物を概観すると中世各時期の焼物が出土しているが、最も中心となるのは中世末期である。ここでは遺構と遺跡の変遷に絞って整理しておく。

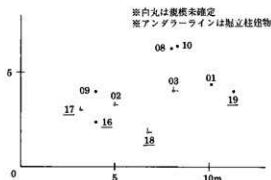
(1) 検出遺構について

緩斜面A区と微高地C区の2地点に分かれて遺構が分布するが、A区は複数の分割された空間で構成される単一の屋敷地とみられ、C区は土地利用が異なる部分を含む複数屋敷地の集合となるようだ。また、A区は礎石建物・石列・石垣・築石遺構が多く検出されたが、C区の建物跡は掘立柱建物跡が中心で墓跡や土坑が多い特長がある。上記のように小滝遺跡では地点ごとに遺構のあり方が異なる点、石を用いる遺構が多い特長があるが、以下には検出された遺構の種類ごとに調査成果を再確認しておこう。

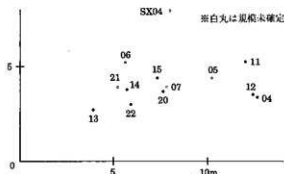
ア. 礎石建物跡

本遺跡を特長づける遺構のひとつである。本遺跡で認定された礎石建物跡はA区ではST01・03・08・09・10、SA04の6棟あるが、C区では可能性があるのはSX04の1棟のみで、これ以外は確認できていない。平面形はST01・03・10が長方形、ST08・09が方形と思われる、これ以外は規模や平面形が不明である。検出状態からみると2種あり、SA04のような礎石と思われる平石のみが検出されたものと、ST01・03を典型例とする建物1棟分の範囲を浅く掘り込んで周囲に石列を配して内部に盛土整地するものがある。前者は礎石が一定数認められないと認定が困難で、SA04の1基のみしかないが、他に存在した可能性は高い。後者も礎石を特定できたものはないが、整地痕や石列の残存から認定できるため、前者よりも認定しやすく多数ある。なお、この検出状態の異なる建物跡は基礎作業の違いと考えられる。

次に規模であるが、本遺跡の場合では規模が確定できなかったものが多く、しかも認定した規模も礎石配置から認定したものでないため厳密な規模を明らかにしえないものばかりである。認定範囲で規模の小さい順ではST09が約4.0m四方、ST03で桁行約8.1m梁行約4.0m前後、ST08・10は桁行約8.0m梁行約6.0m強、ST01が桁行約10.1m梁行約4.4mである。この数値を比べるといずれも2.0m前後の倍数である。このことから、柱間寸法はほぼ約2.0m前後で作られているとみられよう。ただし、ST08・10以外はほぼ単独の分布であり、A区屋敷は一定の類似した規模の建物跡から構成されていたとは言いがたい。もちろん、建物跡すべてが同時存在した確認もないが、建物規模からみると規模の異なる建物跡で構成されていた可能性は窺える。ちなみに小滝遺跡の掘立柱建物跡規模と比較すると、ST01は母屋と推定された建物跡の規



第61図 小滝遺跡 A区建物跡規模グラフ



第62図 小滝遺跡 C区建物跡規模グラフ

模に類似し、ST03はそれより少し小さめである。それ以外は掘立柱建物跡と一致した規模のものはない。また、前山田遺跡例と比較すると、ST03とST08・10は類似規模の建物跡が見られるが、それ以外は一致するものがなく、特にST09のような小型の建物跡は確実な例はない。

以上から小滝遺跡で確認できた礎石建物跡は数種類の規模があるが、居住の掘立柱建物跡と類似した規模の範囲が主体である。また、逆にいえば、卓越した規模の建物跡も見られないということになる。ただ、A区内で最も中核的な場所と見られる緩斜面部では礎石建物跡がST01の1棟のみしか確認できなかったことを考えると、礎石建物跡が見逃したか、破壊されて検出できなかった可能性は高い。

県内の類例では中世には礎石を配置するものが知られるが、浅い掘り込みを伴う長方形の礎石建物跡は近世にある。例として上層農民の屋敷跡と推定される吉田川西遺跡^{註1}があり、柱位置に礎石を配する礎石建物跡に近接してL字状に整地を伴う類似形態の建物跡3棟検出されている。ただ、年代的には近世後半も末期に近い所産と思われ、本遺跡の推測年代と大きな隔りがある。また、全く同一ではないが、松本城下町遺跡^{註2}でいくつか検出されている土蔵基礎とされる遺構に類似しているところがある。松本城下町遺跡で土蔵基礎とされる遺構は楔形に整形された地間石を石列状に建物基礎周囲に配置するもので、この石の配置の仕方は本遺跡で検出されたものと類似する。ただし、これらの遺構は石を設置するために溝状の掘り込みを伴うが、本遺跡では石の配置に溝を設置するのではなく、1棟分の建物範囲として整地を行っている違いがある。また、土蔵とされる遺構は多くの場合、複数が並列したり、近接して配置されるようだが、本遺跡では散在的に配置され、規則的には配置していない。なお、前山田遺跡にも整地を伴う礎石建物跡があるが、類似した基礎作業の痕跡は確認されていない。

以上から近世に類似例があるようだが、細部の形状が異なって同一の遺構とも断定できない。もっとも、整地の有無を除けば周囲に石列を伴う建物跡は類例がある。なお、上記に比較した類例はいずれも近世後半から末期の所産であり、本遺跡の推定年代とは大きな隔りがある。しかも、県内では農村にまで礎石建物跡が普及するのは比較的新しい時期ではないかとされることから、本遺跡のあり方はきわめて特殊な例とも感じられる。ここに本遺跡の推定年代に不安を感じるが、本遺跡の年代の推定根拠については変遷のところでも触れているのでそれを参照されたい。

註1 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』

長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター

註2 1996『松本城下町跡 伊勢町第1次発掘調査報告書』、1998『松本城下町跡 本町第3・4次 伊勢町第14～17次発掘調査報告書』松本市教育委員会

イ. 竪穴建物跡

遺跡内で検出された竪穴建物跡はSB04・05、ST02の3基あり、他にも竪穴建物跡の可能性のある遺構としてST08、石列SH22がある。この内、ST08は底面が平坦ではないことや周囲の石積が明瞭でないことから竪穴建物跡ではないと判断し、SH22は竪穴建物跡の壁の石積を石列と誤認した可能性があるものの、断定できなかったために除外したものである。

竪穴建物跡SB04・05とST02はいずれも浅く地面を掘り込み、周囲の壁に石積みを伴うが、SB04・05とST02では若干違いも認められる。平面形はSB04・05が方形、ST02が長方形であり、SB04・05の一辺には入口と思われる突出部が付属するが、ST02は特別な入口施設は伴わないものの壁面から桁行側から入る平入りと推定された。また、内部施設についてみるとSB04・05で柱穴跡は検出できなかったが、ST02では柱穴跡があり、SB04・05は入口の反対側の壁際で炉・カマドと思われる焼土跡が検出されているが、ST02

は北東隅に炭化物集中が検出されたものの焼土跡と断定できなかつた。この違いは地点を違えることから構造的な差異、あるいは推定年代から時期差によるものかもしれない。

これらの竪穴建物跡の分布はA・C両地区に分布し、礎石建物跡のような偏在は認められない。また、SB04・05はC区の掘立建物跡ST11・12を中心とする屋敷地の付属建物とみられ、SB02もA区屋敷地内の付属建物のひとつと見られる。したがって、形態は異なるが、基本的に個別屋敷地に付随する建物跡であったと窺える。しかし、一方でこうした竪穴建物跡が認められないST04・05の屋敷地もあって、必ずしも建物跡すべてに付随するとも言いがたい。建物跡の性格は不明であるが、SB04・05で検出された焼土跡はカマド・炉の痕跡と思われるので少なくとも倉庫とは考えにくく、下層居住者の住居、あるいは作業小屋ではないかと思われる。なお、これ以外にSK167・354も規模的には竪穴建物跡に類似するが、断定できなかったため土坑として扱った。また、A区内で検出されたST02、竪穴建物跡と断定できなかったが、その可能性のあるSH22・ST08はいずれもSH09-SH14~16のA区を2分する石垣の平地部側に位置する共通点がある。仮にこれらが竪穴建物跡、あるいは準ずる施設ならばA区では竪穴建物跡が石垣で区切られた緩斜面部側には構築されない空間の機能的な違いを示すことになる。

ウ、掘立柱建物跡

A・C区に分布するが、C区では主体的な存在である。ほとんどの建物跡は整理段階で認定したので規模や構造認定に不安を残すが、平面形はいずれも長方形である。梁行規模は2間約4m前後が最も多く、他は5m前後が2例、3m前後が1例である。このなかで3m以下のものは全体規模が不明のもの、あるいは中世とも断定できなかったものである。したがって、梁行3m以下の規模は除外して考えられよう。また、5m前後のものは桁行側面に庇柱列を付設するか、規模認定に不安があるもので、本遺跡では梁行2間約4m前後を基本とすることが知られる。一方、桁行規模は梁行ほど規則性が認められず、2間4m以下、3間5~6m、3間7~8m前後、4間9m弱、6間10m前後-6間11~12mに分けられそうである。このなかで2間4m以下は規模や認定自体に問題を残すもの、あるいは中世とする根拠が弱いものなので基本的には除外すべきかもしれない。残りは3間5~6m、7~8m、4間9m弱、6間10m前後、11~12mとなるが、4間9m弱のST07は規模を断定できておらず、重複するST06と組み合わさる可能性もあって断定的な規模ではない。また、6間10m前後のST05はST04と重複する建て替えの所産とみられるので6間11~12mのグループに含めて良いと思われる。したがって、梁行2間約4m前後で桁行3間5~6m、3間7~8m前後、6間10m以上のグループが認定できる。

以上のなかで規模の大きな梁行約4~5m、桁行11~12m前後のもの(ST04・(05)・11・12・19)は側面に庇柱穴列を付属させる形態となり、重複位置で建て替えられる共通点がある。このような建て替えを繰り返しながら継続的に維持される特長から各屋敷地の中核的な建物跡(母屋)とみられる。ただし、本報告書に収録した北之脇・前山田遺跡の掘立柱建物跡では桁行10mを超えるものはなく、本遺跡の規模は一回り大きい。もっとも北之脇遺跡の建物跡の梁行規模は本遺跡よりも大きいものがある。この側面に庇柱列を付属させる大型建物跡は側柱が比較的明瞭に識別できるが、内部の柱は欠落、あるいは不明瞭なものが多い。これは構造的な問題とみられ、側柱が主に屋根重量を支えて庇柱列は近世民家から内部を壁で画さない所謂「下屋」と呼ばれるものに該当すると考えられる。つまり、概に指摘される通り^(注1)、建物の下部にあたる「軸部」と屋根にあたる「小屋組」が分離し、中世前半期の総柱建物跡のような棟を直接支える柱を必要としない構造によるものと思われる。類例は当地域の室町ころから近世前半の遺跡で見られ、北之脇遺跡・小滝遺跡では類似建物跡もが一定間隔をおいて配置することから、ごく一般的な建物跡=母屋であると思われる。

次に、桁行3間の建物跡であるが、3間5~6m、3間7~8m前後の2者の規模がある。いずれも単

独で存在するものが多く、上記の桁行6間のものとは分布地点を違える傾向が認められる。このなかで、前者の規模はST14しかなく認定に問題を残す。類似規模では北之脇遺跡の桁行3間5m前後の建物跡があるが、大型掘立柱建物跡と近接して存在する傾向が認められることから付属屋と思われるものである。本遺跡のST14は近似規模であるが、大型の掘立柱建物跡とは必ずしもセットと捉えられないため、性格は不明としかいえない。一方の3間7~8mのものであるが、これについては居住の建物跡として認定して良いかもしれない。なお、桁行2間4m以下となるST13は規模が確定できたものではないが、位置的に付属屋であった可能性もある。また、ST04・05に隣接しているST06・07は上記の傾向からすると付属屋ではなく、同一屋敷内の居住建物跡であった可能性も考えられる。

註1 河西幹次 1994「第IV章 3 中世末から近世の建物」『海原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』

財団法人 富山県文化振興財団

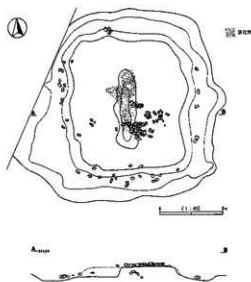
エ. 石列・石垣遺構

本遺跡の特長的な遺構のひとつであるが、単独の遺構ではなく整地に付随するか、何らかの構築物の基礎とみられる。例えば、石垣はA区のみで認められているが、これも屋敷地内の整地に伴う低いものである。この石垣の年代は確定できていないが、SH30より唐津皿II-1期（1600~1630）の所産が出土したことを目安に17世紀初頭以後と推測した。この年代は断定的なものではないが、推測年代とすれば本遺跡の石垣は当地域でも古い所産となろう。

オ. 土坑・墓

本遺跡ではC区で多数の土坑と若干の墓が検出された。性格不明ながら円形、楕円形、方形などに掘り込む大きめの遺構を土坑とし、内部で骨が検出されたもののみを墓跡とした。すべての土坑や墓跡を中世と断定できていないが、当地域の中世居住遺跡で土坑が多数検出されることはあまりない。特に本報告に収録した北之脇遺跡では礫片づけ遺構と思われる土坑が多く、他は墓跡と思われる土坑が1基、井戸と思われる遺構が1基、あとは小規模な土坑が散在的にみつけた程度で屋敷地に付随すると特定できた土坑は僅かである。したがって、土坑が集中的に検出された場合は居住地以外の利用、あるいは特殊な事情が想定される。本遺跡の場合も注意してみると土坑は掘立柱建物跡分布と異なる部分に集中し、少なくとも屋敷地に付随する遺構ではないよう

だ。規模的には土坑墓とされるものに類似し、鉄鏝の出土などはこれを支持するようにも思われるが、数も少なく骨が出土しない点で断定は躊躇される。また、この土坑の分布地点に近接してSX04とした基礎状遺構がある点は注意される。SX04についてはST11・12の屋敷地内施設か判断に迷ったが、SX04内のSX02出土物は比較的古い所産も認められること、土坑の分布はSX04と重複せずSX04東辺に一致する南北ラインで土坑分布域内を貫く帯状の空白地帯が南側にみられるとも思われることからSX04は土坑群と関連する施設のように見える。



第63図 玄照寺跡 SX01

墓跡はC区に散在的に検出され、火葬施設と思われる遺構と土坑墓の2種が認められた。火葬施設は県内でも良く見られる長方形土坑中央に煙道を付設するものであり、ST04・05の屋敷地西側に比較的集中する以外は1基ずつ散在している。このなかで注目されるのはSX03である。調査区域に位置して部分的にしか確認できなかったが、火葬施設上に山礫を方形に組み、その中央部に土盛して川原円礫を積み上げる形態である。上部に配石を伴う葬送遺構の県内例には高森町上ノ平遺跡^(註1)、長野市若穂流入塚遺跡^(註2)、小布施町玄照寺跡^(註3)等がある。前二者は中世前半期の所産で五輪塔等の石塔は伴わない火葬骨を埋納した墓跡と捉えられている。このなかで上ノ平遺跡のものは焼土・炭化物のみの場合と土坑を伴うものがあるようで、本遺跡例のものに近いものもある。しかし、上ノ平遺跡の報告書では火葬施設と断じられていないので同一の遺構とも判断し兼ねる。一方、小布施町玄照寺跡SX01は中央の楕円形の火葬施設？周囲に溝を廻らせるもので上面に礫積みがあったとされる。周囲の溝を除くと本遺跡例に非常に類似している。近世や室町時代の陶磁器や内耳礫を出土している点では年代的にも本遺跡例と近似したものである。現時点でもっとも類似した例となるが、玄照寺跡内では1基のみで特殊な施設であったようだが、本遺跡も他に検出例がない点では同じである。こうした遺構が構築された背景は不明である。一般的に火葬施設と考えられている遺構にも本来はこうした上部構造をもつものか、あるいは火葬塚^(註4)とされる遺構に該当するのかは今後の検討に依らざるをえない。

土坑墓と認定できた遺構は人骨・馬を埋葬した2種ある。人骨を埋葬したものである程度年齢が推測できたところでSM02、SK198の2基が大人、これ以外はすべて幼児であった。ただし、SK198も頭骨のみの出土で骨も部分的に焼けていたので、明らかに大人の土葬と断定できるのはSM02のみである。この様相については大きく2つ解釈が想定できる。ひとつは所謂「七才までは神の内」といわれるように幼児は大人と異なった扱いを受けていた可能性であり、もう一つは遺跡の存続時期が比較的短いため死亡率の高い子供の埋葬施設が多い傾向を生じたと解釈するものである。これについては断定的な結論は出せなかったが、火葬施設が同時存在とするならば火葬骨の埋葬施設が未検出であることから、大人は火葬後に遺跡外の別地点に埋葬されていた可能性が想定され、一方で遺跡内では子供の埋葬遺構が多く検出されていることからすると大人・子供の埋葬地が異なっていた可能性が考えられる。この場合、例外的なSM02は特殊な事情によるものと考えられる。なお、遺跡内の墓跡の分布をみると、全体的に散在的に認められるが、ST06・07の西側とST11・12周辺では集中する傾向がある。

註1 1996「上ノ平遺跡」高森町教育委員会

註2 1993「古町遺跡 流入塚」長野市教育委員会

註3 1997「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 飯田古屋敷遺跡 玄照寺跡 がまん淵遺跡 沢田鍋土遺跡 清水山窯跡 池田端窯跡 牛出古窯遺跡」長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター

註4 岡田保良 吉野治雄 1978「第3章 京大理学部遺跡BE29区の発掘調査」

【昭和53年度 京都大学構内遺跡調査研究年報】

2. 遺構の変遷

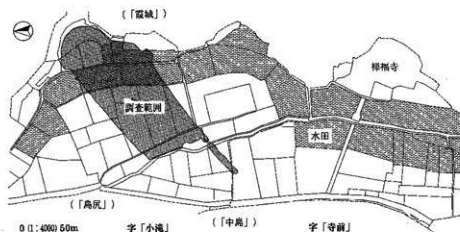
出土遺物は北之脇遺跡・前山田遺跡と類似した時期のものが主体的ながら、より古い所産も含まれる。したがって、長期にわたる利用も予想されるので、ここでは遺構の変遷について検討しておく。

本遺跡の遺構は全般的に出土遺物が少なく、遺構の型式学的な検討も不十分であることから個々の遺構から直接年代を求めることは難しい。そこで、遺構の配置・棟方向・遺構の分布等から同時存在と推測さ

れる遺構群を抽出し、切り合いや出土遺物から変遷を推測する方法をとることとした。これは同一時期に遺跡内に類似した土地区画が施され、建物跡や溝跡はそれに従って配されると仮定したもので、類似方位の遺構や類似形態の遺構が集中する場合は近似時期の所産と推測できると考えた。しかし、上記の方法はあくまでも同時期に同一規格の土地区画が存在することを前提とし、同一区画が時期を越えて踏襲される場合や、同一区画内で異方位の遺構が構築される場合などでは誤認しやすいことは断っておきたい。以下には遺構のあり方が異なるA・C区を個別に検討し、最後に遺跡全体の変遷についてまとめる。

ア. C区の遺構変遷

現地割 (第64図) 現地割は最終的な遺跡の姿であることから現地表面の線相に近いものは相対的に新しい所産と推測でき、現地割と遺構が一致する場合は調査区外についても推測できる材料とすることもできる。C区微高地は西辺がN-25°-W方向、東縁は調査区中央で屈曲して南側はN-1°-E、北側でN-16°-W方向である。現土地区画は西縁端の縦断道を幹道として、ここから直交方向の枝道が分岐して区画の基本形ができているが、微高地内部の区画はほぼN-75°-83°-E前後か直交方向のものが多く、また、微高地東側では微高地東縁の方位の区画が部分的に認められる。土地区画のあり方は比較的大い土地区画が認められる北部、南北方向に細長い区画を挟み込んで両脇に直交方向の細長い幅約20~28m、長さ30~35m前後の区画が並列する中央部、中央に長方形の土地を取り囲んでコの字形の区画が配される南部に分けられる。このなかで北部は中央部の土地区画がいくつか統合した区画とみられるが、南部の区画は単一区画の可能性があつてやや異質に感じられる。現地割と検出遺構を比較すると、SD10・16、SA05が現地割に一致、あるいは近似位置に認められ、SD01・06は現地割に一致する区画はない。また、ST11・12、SB04・05、SX04を含む範囲はほぼ地表面の地割と一致し、部分的にしか調査していないがST04~07の配置される部分もほぼ現地割に一致するようだ。ただし、中央の土坑群はほぼ一致しながら現地割境より北側にも分布し、逆に南側に空閑地を生じている。この土坑群分布のあり方は現地割と類似しながらも、若干ずれている点は注意される。以上から近世末期に洪水を被ったものの、基本的には中世の地割を踏襲している部分が多いとみられる。このことは逆に現地割から中世段階の土地区画を読みとれる可能性を示す。ただし、SD01・06は現地割に一致する区画が認められないように東側は後代に変更が加えられているようだ。また、土坑群の分布は現地割に類似しながらも若干ずれている。このことから現地割に近いST11・12、SB04を含む区画のほうが土坑群より後出するとみられようか。



第64図 遺跡周囲の地籍図(字「小滝」・「寺前」) 白抜きは畑・宅地

遺構分布 次に遺構の群構成について検討する。C区では中央部に土坑群、北西部と南部に類似規模の掘立柱建物跡が重複して認められ、基本的に分布範囲を逸えていと看取される。つまり、異なる土地利用が重複していないと考えられ、逆に遺構の多くは近似、連続するなかで構築されたと予想される。このなかでST11・12、ST04・05・06・07はそれぞれ規模的に母屋の可能性が想定できるもので、周辺の溝や竪穴建物跡を付属させた屋敷地を構成すると思われる。屋敷地を想定できるのはこの2地点のみであるが、これ以外に柱穴跡の分布する北東部、あるいは長いもの攪乱で乱されて子細不明ながら東部にも屋敷地があった可能性がある。また、微高地縁のSD01・06、10と微高地を横断するSD16は位置関係から関連があるとみられ、近似時期に広域にわたる区画が施された可能性が想定できる。

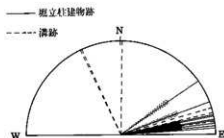
上記のなかで注意されるのはST11・12の屋敷地関連遺構と土坑群の関係であり、巨視的にみると分布域がずれるが、微視的にみると部分的に重複することである。これは継続的な利用ながら、若干の時間差があることを窺わせる。これについては後述する。また、散在する基跡については他遺構と組合わせるものは認められないが、調査区南西端の火葬施設・土坑基は同種遺構が群を構成し、近似時期の所産とみられよう。次に単独、あるいは散在する遺構についても検討するために遺構方位についてみてみよう。

上記のなかで注意されるのはST11・12の屋敷地関連遺構と土坑群の関係であり、巨視的にみると分布域がずれるが、微視的にみると部分的に重複することである。これは継続的な利用ながら、若干の時間差があることを窺わせる。これについては後述する。また、散在する基跡については他遺構と組合わせるものは認められないが、調査区南西端の火葬施設・土坑基は同種遺構が群を構成し、近似時期の所産とみられよう。次に単独、あるいは散在する遺構についても検討するために遺構方位についてみてみよう。

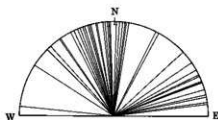
上記のなかで注意されるのはST11・12の屋敷地関連遺構と土坑群の関係であり、巨視的にみると分布域がずれるが、微視的にみると部分的に重複することである。これは継続的な利用ながら、若干の時間差があることを窺わせる。これについては後述する。また、散在する基跡については他遺構と組合わせるものは認められないが、調査区南西端の火葬施設・土坑基は同種遺構が群を構成し、近似時期の所産とみられよう。次に単独、あるいは散在する遺構についても検討するために遺構方位についてみてみよう。

遺構方位 掘立柱建物跡方位にはN-78~86°-E、N-67~70°-E、N-46°-E方位の3種に区分できるとと思われる。N-78~86°-E方位の建物跡はST04~07・11~13・15の8棟が該当し、N-67~70°-E方位はST15・20の2棟、N-46°-EはST21・22の2棟である。溝跡はSD06・10がN-67~70°-E方位、SD08・09・16がN-78~86°-Eか直交方向に類似し、SD01のみが異なる。SD06を除くと微高地縁に配されるSD01・10は微高地縁方位と同じであり、横断方向の溝跡は現地割に近い方位となる。土坑では不整形なものもあって正確な方位を割り出しにくい、N-78~86°-Eか直交方向、N-67~70°-Eか直交方向前後に集中があり、他にN-0~8°-E方位に集中がある。これ以外に様々な方位が認められるものの、ほぼ単独で存在するものなので計測上の誤りかもしれない。

以上の溝跡・掘立柱建物跡・土坑に共通する方位はN-78~86°-Eか直交方向、N-67~70°-E方向か直交方向で、土坑と溝の一部にN-0~8°-E方位である。これらは非常に近似しており、分離して捉えるのが妥当か問題を残すが、遺構方位のN-78~86°-Eか直交方向のものは現地割の区画方位N-75~83°-E前後か直交方向に重なり、N-67~70°-Eは微高地西縁の方位N-25°-Wの直交する方位に近い。最後のN-0~8°-Eは比較的正方位に一致しているが、遺跡内では微高地東縁の南部に認められる方位である。先に類似時期の遺構群と推測したST04~07、11~13、土坑群の一部、SD(06・)08・09・(10・)16はN-78~86°-Eであり、この方位の遺構はC区広域にわたる土地区画によって出現したとみられ、現地割方位と一致していることから相対的に新しい所産と推測される。また、中央の土坑群内にはN-78~86°-EとN-67~70°-Eの2方位がみられるが、同じ分布域内にあることから継続的な土地利用のなかにあるものの、ある段階で土地区画が変化するために異方位の土坑が出現したと想像できる。この場合、現地割に近いN-78~86°-Eが新しいと考えられるので、N-67~70°-E方位はN-



第65図 C区建物・溝跡主軸方位



第66図 C区土坑主軸方位

78~86°-E方位に先行する所産とみられる。この推測においてN-78~86°-E方位とN-67~70°-E方位の区分が妥当であることを前提とするが、方位自体は近似して分離しうるか不安も残る。ただし、このように考えると現地割、あるいは遺構分布でみたように土坑群がST11・12の屋敷地と相対的に分布が異なるものの、部分的に重複する点は説明できると思われる。

次にN-46°-E方位であるが、現地割にまったく認められない異質な方位である。この方位に該当するST21・22はN-67~70°-E方位とN-78~86°-E方位の区画があった場所に位置するため、時期差になると考えられる。しかも、N-67~70°-E→N-78~86°-E→現地割とすると、継続的な区画とならない最も古い所産と考えられよう。残るN-0~8°-E方位の遺構であるが、該当する遺構はSD01、SK10・166・184・826・842・856、SM04、SX03がある。このなかでSK10・826・842・SM04はC区南東端のSD01周辺に所在し、しかもSD01を切る。したがって、N-0~8°-E方位はN-78~86°-Eに近い方位であるが、微高地東部に分布する遺構はSD01周辺の土地区画を踏襲するなかで出現したとみられ、その時期も切り合いから後出する可能性が窺える。この点は現地割において微高地東部にN-0~8°-E方位の区画が重なり、それらは東西方向の区画優位の内にあって部分的なもので後出すると見られる点で総合的である。これ以外の地点に分布する同方位の遺構はわずかとなるが、東西南北の方位に一致させることに意味があった遺構か、調査・計測上の誤差の範囲で捉えるべき遺構とみられる。

遺構変遷 上記の検討からN-78~86°-Eか直交方向が現地割に続く新しい時期の所産で、中央の土坑群内のあり方からN-67~70°-E方位がN-78~86°-E方位に継続的ながら先行する所産、残るN-46°-E方位は全く単発的なものでN-67~70°-Eより更に遡ると考えられる。なお、主軸方位別に分布をみるとN-78~86°-E方位遺構はC区内に広範囲に分布し、N-67~70°-E方位の遺構はC区中央の土坑群・掘立柱建物跡ST14・20の2棟、残るN-46°-E方位の遺構はC区中央のST21・22の2棟以外は認められない。後出する段階ほど広域的な利用が認められ、特にN-78~86°-E方位の遺構の分布からは統一的な区画が広域にわたって施行された時期があると推測されよう。以下には遺構方位から遺構変遷を整理するが、あくまでも推測のひとつで確定的なものではないことを断っておきたい。

第1段階

N-46°-E方位の遺構段階を想定する。ST21・22の2棟が該当するが、建物跡認定に不安があって問題を残す。認定が妥当ならばC区で確認できる最も古い居住遺構となり、小規模な掘立柱建物跡が散在する景観で単発的な利用であって継続性は持たないと思われる。年代はST21・22に近接するSK585で手づくねカワラケ1点が採取されており、13世紀代の可能性がある。この年代からするとC区で採取された中世前半に遡る焼物の手づくねカワラケ、珠洲すり鉢、14世紀代前半の在産須恵質すり鉢はこの段階に帰属するかもしれない。なお、この遺構方位が何を基準としているのかは判然としない。C区内の微地形に規定されたものだろうか。

第2段階

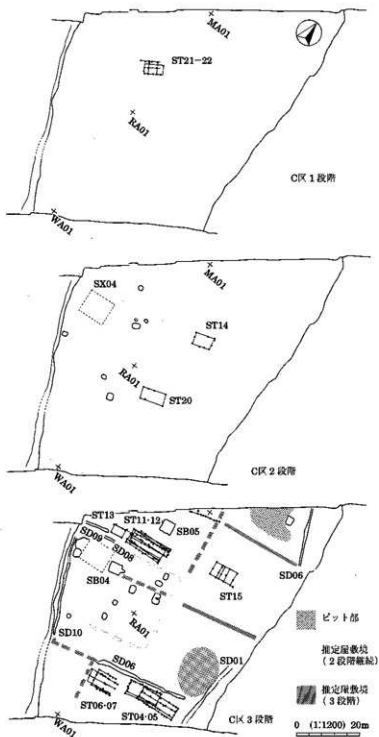
N-67~70°-Eか直交方向の遺構段階と想定する。ST14・20の2棟の掘立柱建物跡とC区中央西側にある土坑群内の土坑敷基が該当し、C区西側に偏在して西側に土坑、東側に掘立柱建物跡2棟が散在する景観とみられる。この方位は微高地西縁方位に近く、遺構分布からも微高地西縁の方位を基準としていると思われる。本段階の土坑出現契機は不明と言わざるをえないが、土坑群とST14・20は重複しないため異なる空間として意識されていたようだ。また、土坑群に隣接して北側にあるSX04はST11・12側のみSD08・09を配すること、SX04は土坑群との重複が見られない点で土坑群前後の所産と思われる。このことはSX04関連施設となるSX02より手づくねカワラケ、A類内耳鍋などの相対的に古い遺物が含まれることから支持される。もちろん、遺物も混入の可能性があつて断定的なものではないが、可能性のひとつ

として指摘しておく。本段階の時期は子細不明であるが、SX04関連遺構出土遺物と土坑群が3段階へ続く継続的なあり方から15世紀後半前後に該当しようか。

第3段階

N-78°~86°-E方位が直交方位の遺構段階と思われる。遺構はC区全体に認められるのでC区全域にわたって溝の区画を伴う統一的な区画が施され、居住地としての利用が認められるようになったと思われる。その区画は2段階の土坑群の分布域を踏襲しながら組み込んでいったと思われる。基軸方位はC区微高地西縁方位に近いが、東西方向の方位のほうが顕著に認められるため、広域的な東西方向の平行土地区画を現出させたことに由来するのかもしれない。屋敷地は溝区画と遺構重複状況からST04・05・06・07とST11・12を中核とする最低2地点が認められ、C区北東部や東部の柱穴跡が分布する地点もそれぞれ屋敷地と認められる可能性がある。この屋敷地の区画方法はSA05、SD16、土坑群の分布からN-78°~86°-E方位に微高地を横断する区画が3か所想定され、ST11・12周辺の遺構や土坑群の分布状況から微高地中央に交差する南北方向の微高地縦断区画ラインが想定できる。したがって、SD16以南は単一の屋敷地ながら、以北は「キ」の字状に南北約28m、東西規模は28~32m前後と類似した屋敷地規模に区画されていたとみられる。ただ、N-78°~86°-E方位の土坑分布はST11・12屋敷内と思われるSB04南端ラインと微妙に重なる問題点がある。これは3段階内のある時期まで区画が変化しなかったことによるものだろうか。なお、道跡は確認できていないが、C区中央部は遺構分布が散漫なので、ここに想定できようか。この推測からすればこの道の南端はSD16に当たって西に折れていたと推測されよう。

次に具体的な構成が知られるST04・05周辺とST11・12周辺を取り



第67図 C区の遺構変遷

上げて屋敷地内部の様相をみてみよう。ST11・12の屋敷は全容を明らかにできなかったが、北限がSA05の延長ライン、南限はSB04周辺、西限は子細不明ながら最大でも微高地西縁のSD10の延長先まで、東限はST14・15中間の遺構空白地帯と思われる。上記の範囲とすると凡そ東西32m、南北約28mの範囲となる。中心にST11・12の母屋があり、西側に小規模なST13、母屋の北と南には竪穴建物跡SB04・05が配置する。この範囲内の南西部にあるSX04は先にみたように屋敷外の施設と思われる。また、西側に基跡SX03、SK198、191が集中的に位置するが、これらは位置関係から屋敷地内に含まれるとも考えられるものの確証はない。この屋敷地内部は東側に空閑地があるので入口は東側に想定できようか。次にST04・05の屋敷であるが、こゝも調査区外にかかって全容は不明である。屋敷地の東西限はSD16が切れる範囲とすると東西約32m、南北は不明であるが、SD16が現地割と一致することから南限を現地割に求めると南北約20m強と思われる。東側に母屋ST04・05、西側に隣接してST06・07を併置し、北側はSD16で区切られる。南側に広い空閑地が認められ、屋敷地への通路は溝の配置から西側に想定されよう。なお、南西部と微高地西縁には基跡と火葬関連施設が並列しているが、関連は不明である。また、この屋敷地内では竪穴建物跡は検出されていない。以上のようにA・B屋敷は掘立柱建物跡を主体とし、ほぼ類似した規模の屋敷地と見られるが、諸施設の構成に若干違いが認められる。この差異の背景は不明であるが、ST04～07屋敷南側に異なる現地表面区画部分が隣接することから、屋敷居住者の性格が若干異なるかもしれない。

以上のように本段階でC区全体にわたる土地区画が施され、複数の屋敷地から構成される景観へ変化したと思われる。しかも、掘立柱建物跡が重複しているように一定期間連続して維持されたと思われる、この点でも2段階とは大きく異なる。この遺構配置で注意されるのは屋敷地が形成されたものの、それは町屋的な景観とはいえない点である。それは一定の土地区画は認められるが、中間に土坑群分布域を取り込んで均一な土地利用状況とはなっていない。さらに建物跡も道に面してしたとは考えにくいこともある。なお、子供の基跡で内耳鍋・カワラケ破片を出土したことから当該期に含まれると思われるものがあり、この推測からすれば集落内部に子供が埋葬されていたことになる。3段階の年代は出土遺物が少ないため、限定した年代の推定は難しいが、柱穴跡等から内耳鍋やカワラケが出土し、一方で近世陶器がほとんど認められない点から16世紀前後と推定される。

第3段階以後

3段階の年代や、切り合いから調査城南・東部で検出されている土坑数基が該当するとみられる。基本的に居住遺構は認められず、集落は途絶えるようだ。理由は不明であるが、B・D区の低地は近世に水田として利用されていることから耕地化したのであろう。また、SD01を切る土坑が認められているように部分的に区画が崩れるとみられ、SD01を切るSM04のように馬等の葬送の地としての利用もあったと推定できる。こうした葬送の地として利用されるなかで作られた基跡もあるかもしれない。

イ. A区の遺跡変遷

A区は山陰に位置する単一の屋敷地とみられ、整地と石を多用する遺構が多い特長がある。屋敷地の面積はC区より圧倒的に大きく、内部はいくつか機能の異なる空間に分割されていた可能性がある。このA区では平地部・緩斜面部境周辺で上下2枚の調査面が確認されたが、ここでは層位的な所見から遺構変遷を整理する。

現地割 (第64図) C区同様に現地割について触れておく。現地割は緩斜面部と呼称した部分は三日月形1つの土地、平地部と呼称した部分では北部に大きく二つの土地区画が認められ、B区と連続した水田が山際まで入り込む。そして、その南側はやや広めの長方形の土地が連続している。緩斜面部の三日月形の土地西境はSH09～SH30、平地部北部の土地区画もI面下層で検出された地形変換点、南部もSA03、SH

30へ連続する水田境にそれぞれ概略一致する。このA区ではあまり大きな区画変化は認められないようである。なお、B区SH17は現地割に踏襲されていない。

区画施設と通路 A区は等高線方向に走るSH04・09、14～16、SA03、SH30の石垣によって緩斜面部と平地部に2分される。これは緩斜面利用のためのものと思われるが、一方では礎石建物跡がこのライン境より上部、壁穴建物跡は境周辺

にあるように遺構種類ごとに分布が異なる傾向が窺えるので機能の違う空間を視覚的に現出する施設でもあったといえる。A-C区の通路は現地割に痕跡を残さないが、B区SH17が該当すると思われ、このSH17から平地部の南西部に入り、そこからSX01の横を経由してSH04とSH14中間の石垣がとぎれる部分に至る通路が想定できる。これが正面通路と思われる。

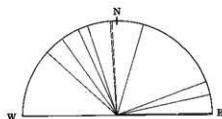
層位と遺構変遷 A区では整地を伴う遺構が上下2枚あり、2次調査のみで僅かながら整地以前の可能性も考えられる遺構の存在が知られた。1次調査と2次調査では調査面数が異なり、その対比関係を確定しきれなかったところもあるが、

最上層の遺構を除くと最低3枚の調査面にまとめられる。ここではこの所見に基づいて遺構変遷を整理してみたい。

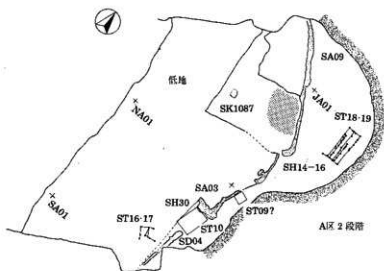
第1段階

整地以前の段階を想定したものである。SX06、あるいは1次調査域の平地部1面下部の遺構、緩斜面部のピット群に該当するものが含まれる可能性もあるが、断定できるものはない。

一番可能性のあるSX06はSA03前面の旧地形上で検出された焼土跡であるが、位置的には石垣前面ラインに一致しており整地以前の所産とも言い切れない。このような帰属遺構が判然としないものの、本段階を設定した理由は、大部分の遺構が17世紀初頭以後の2段階とすると、遡る時期の内耳竈やカワラケの位置付けが不明となってしまうことによる。つまり、遺構は判然としなが、出土遺物から2段階より遡る整地以前にも何らかの居住が行われていたと想定し、



第68図 A区建物跡主軸方位



第69図 A区の遺構変遷

概念的に設定したものである。しかし、一方でA区2段階を16世紀まで引き上げる、あるいは内耳鍋自体の年代を下げて考えられる可能性もある。子細は2段階の年代推定のところで触れる。

第2段階

A区I面下部の遺構が該当する。SH09、14～16、SA03、SH30の連続する石垣、SK1087 (SX01)、SH22などの平地部の遺構があり、SH30・SA03との関係からST09・10も含められよう。一方、ST01の位置が判然としないが、ST01に先行する可能性があるST18・19は前段階か本段階に含まれるのだろうか。この段階に大規模な整地を伴って屋敷地の基本形が作られる。屋敷地内の構成はSH09、14～16、SA03、SH30によって区切られる平地部と緩斜面部の2つの空間から構成され、空間の具体的な機能は不明であるが、より高台にある緩斜面が屋敷の中核的な場所であったと推測されよう。なお、SH17は出土陶磁器から本段階に存在したとみられる。

本段階の年代であるが、SH30から出土した唐津皿から17世紀初頭以後とみられる。ただし、他に内耳鍋・カワラケの破片が大量に採取されているが、唐津皿が最も新しい遺物と見られたために年代推定の根拠としたのである。しかし、本段階の年代を17世紀初頭とすると、従来指摘されるような内耳鍋の推定年代とは一致しなくなり、そこでA区2・3段階に先行する1段階を想定することになったのである。もっとも、一方で唐津皿を除くと本段階を16世紀に遡らせて捉えることも可能である。この問題を考えるには唐津皿を出土したSH30がSH04、SH14～16、SA03と同時期の所産であること、唐津皿がSH30の整地土に確実に伴うものであること、本段階と捉えた遺構よりも確実に古いと断定できる遺構が確認できていることが検証されなければならないが、いずれも確実な所見がない。ただ、上限年代については2次調査域のSH30とした整地内下部で採取された内耳鍋から16世紀中頃以後であることは間違いない。したがって、ここでは本段階の年代を17世紀初頭を中心としながらも、16世紀後半を含む可能性も想定しておきたい。なお、本段階が16世紀後半段階を含むならば、上記1段階は存在しない可能性もある。

第3段階

A区I面上部検出遺構が該当する。SH04、ST02・03・08、平地部のSX01、SH02・03・10～12があり、ST01も当該期の所産とみられる。この段階の遺構はいずれも1次調査域に所在するものばかりで2次調査部分以南のSA03、SH30周辺の様相は判然としない。これが1次・2次調査の調査面対比上の大きな問題であったが、SA03、SH30では1次調査域のような上面建物跡が確認できていないことや1次調査域のような石垣を埋める整地が認められない点では、基本構造を維持しながら1次調査域に集約するような遺構配置へ改造された可能性が高い。この段階の改変ではSH09-14～16-SA03-SH30のラインのなかでSH09、14～16部分が埋め立てられ、上部にSH04とST02・03・08が新たに構築される。また、2段階では不明瞭な礎石建物跡もこの段階では確認できる。3段階の屋敷地範囲は判然としないが、上記の推測からすると1次調査域に集約された可能性があり、SH09の埋め立てや平地部北端のSH02・03・10～12のような集石遺構の出現も集約化と限定された範囲を有効利用するなかで出現したものであろうか。なお、SH09-SH14～16の埋め土の起源は緩斜面上部側の整地や山際の削平、あるいは土塁のような施設や整地を取り壊して平地側を埋め戻したものであると思われるが、子細は不明である。

3段階の年代は2段階を17世紀初頭とするとそれ以後で、17世紀後半から18世紀頃の遺物が少ない点からはそれ以前とみられ、17前半頃と思われる。ただし、当該期の周辺遺跡で認められる唐津、瀬戸美濃産の天目茶碗・志野丸皿、越中瀬戸がまったく認められないか、少ない点は気になる。

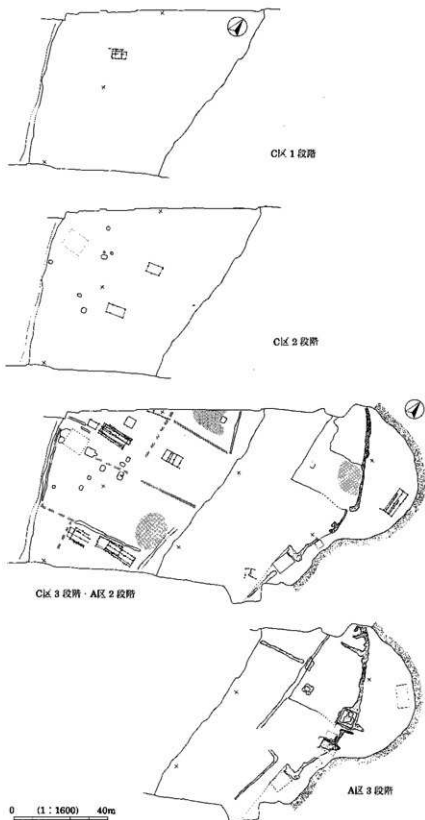
第3段階以後

この段階の様相は不明であるが、B区に連続する低地部分は水田化され、SA03、SH30前面にも土が堆積して石垣は埋没したようだ。C区同様に耕地化したのだろうか。

ウ. 遺跡全体の変遷

個別に検討したA・C区の変遷を併せて遺跡全体の變遷をまとめる。A・C区ともに3段階の変遷を想定したが、推定年代からC区1・2段階はA区に対応段階がなく、C区3段階はA区1段階に対比されるとみられる。また、A区2段階はC区3段階に重複する可能性を残しつつも、後出する段階を含む時期と思われる、A区3段階はC区に対応段階がないと思われた。C区3段階とA区1～3段階の関係は先にもみたような年代比定の問題があつて微妙であるが、相対的にC区3段階より後出する時期を含むとみられる。以上からすると、整地や石垣・石列・礎石建物跡といった特長は相対的に新しい時期のものとなる可能性がある。年代比定には問題があるものの、上記のような対比から遺跡の変遷を見直してみたい。

先の各地区の変遷にはいくつかの画期がある。C区では第1段階のみが単発的なもので、C区第2段階以後が継続的な利用が認められる段階となる。このなかで広域にわたる統一的土地区画の出現と居住地化が進むC区3段階が大きな画期と捉え得るもので、A区も類似時期の遺物が多いことから1・2段階の設定の問題はともかく、この頃から本格的な利用があつたと思われる。また、A区においては



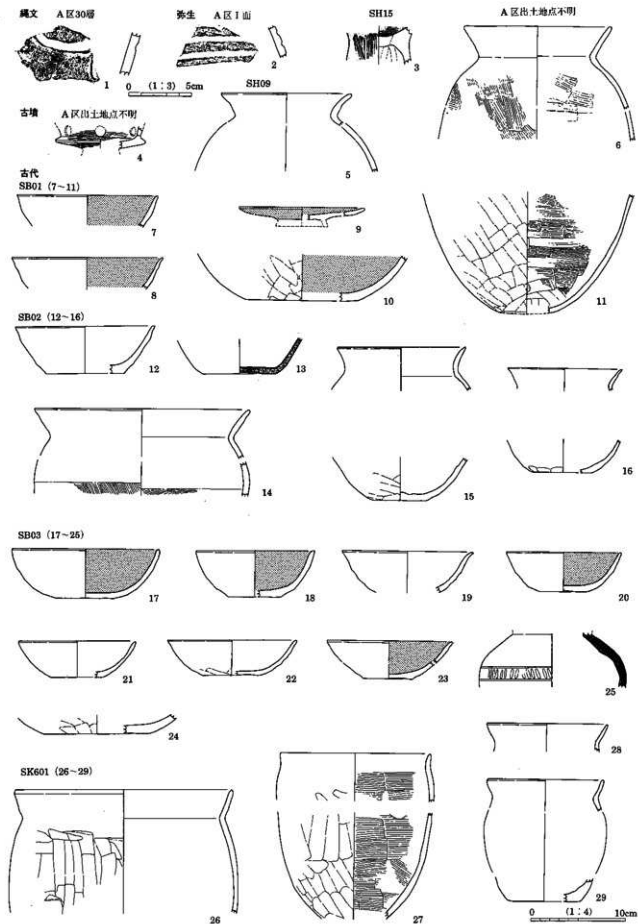
第70図 小滝遺跡の変遷

2・3段階がほぼ継続的な変化と捉えられることからA2段階が大画期であることは間違いない。以上からC区1段階、C区2段階、C区3段階-A区1～3段階が大きな変化のみられる時期と捉え、この区分にしたがって遺跡の様相を整理してみる。

まず、C区1段階の13～14世紀頃であるが、居住の認められないC区に居住遺構が認められるように千曲川沿いのC区微高地が安定したと思われる。ただし、単発的な利用しか認められず、継続的に利用される様相はない。次のC区第2段階となる15世紀後半頃では部分的ながら利用が再開され、以後は継続的に利用される。この段階では土坑群の出現が特長的であるが、その性格を明らかにできなかったため具体的な利用状況はわからない。ただし、遺構の分布からC区内の部分的な利用であり、検出された遺構の種類からもC区3段階とは根本的に異なる利用状況と思われる。

その延長にあるC区3段階-A区1～3段階が本遺跡の中心的な時期にあたる。その特長は遺跡全体に居住遺構が認められるようになる点、C区は統一的な土地区画を施して類似した規模の屋敷地が出現することにある。しかし、C区の区画は従来の土地利用を全く否定してしまうのではなく、それを取り込む形で編成されていると推測された。したがって、C区全域に及ぶ屋敷区画の出現は唐突ではあるが、全くの断絶ではないと思われる。また、A区とC区の段階対比に問題が残されているが、重複時期や先行する時期に何らかの利用があった可能性が高いことから、この段階ではA区のような大きな屋敷地とC区のような類似規模の屋敷地の2者が認められると考えられる。この2種の屋敷は規模や屋敷地内の空間構成、遺構種、存続時期が異なっており、基本的居住者の階層が異なると思われる。面積等からすると明らかにA区の居住者のほうがより階層的に上位の者であったといえよう。つまり、この時期には小滝遺跡には2種の階層の異なる居住者の屋敷が地点を違えて存在していた可能性が考えられる。この階層の関係についてはA区屋敷のみが若干後代まで存続した可能性があることから、両者は必ずしも密接に結びついた関係ではないように感じられる。すなわち、両者は類似した時期に居住していたことから何らかの関連をもっていたものの、A区3段階ではA区屋敷のみが継続し、C区居住者が移動・離散してしまうことから必ずしも一連托生の関係ではなく、やや距離をおいた関係のように感じられるのである。ただし、逆にみた場合、時代変化のなかでもA区屋敷居住者がA区に屋敷を存続させる点は何らかの立地場所に関する「拘り」があったようにも考えられるが、その理由は不明である。もっとも、A区の屋敷自体も時代が下るに従って規模を縮小し、しだいに居住地としての利用が減少していくようだ。そして、相対的に耕作地の利用が始まったと思われる。

上記のように遺跡内に特定段階に類似した屋敷地区画が出現している可能性が知られるが、これは北之脇遺跡でも同様に認められている。ただし、遺構種類や屋敷地区画の出現の仕方に若干の差異がある。これについては本報告書に収録した北之脇遺跡・前山田遺跡とも本遺跡の立地環境や存続時期が類似することから、合わせて後ほど検討を加えることにしたい。



第71図 焼物 1

第2章 小滝遺跡

古代 (30~45) A区I面



SH15



SH15



A区I面



ST01周辺



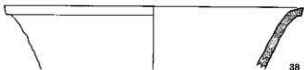
A区I面



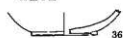
SH14



A区I面



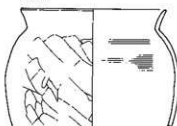
A区I面



SH02



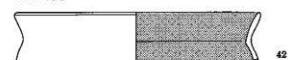
SH09



SH16



ST01周辺



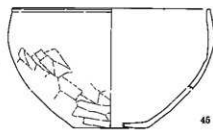
SH15



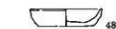
SH15



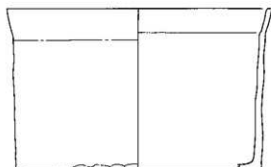
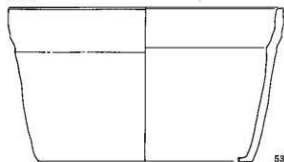
SH15



中世 ST01周辺 (46~54)



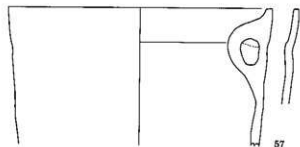
ST02



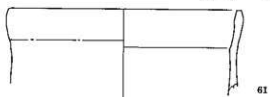
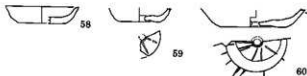
0 (1:4) 10cm

第72図 焼物 2

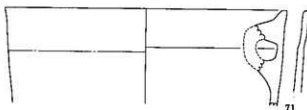
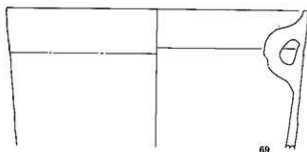
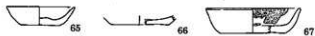
ST03 (55~57)



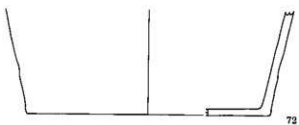
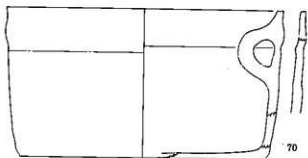
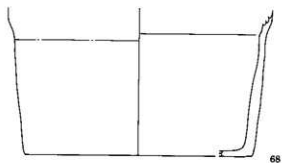
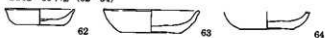
ST03付近 (58~61)



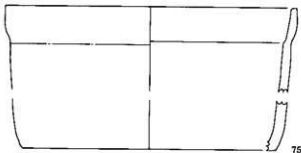
ST08 (SH05) (65~73)



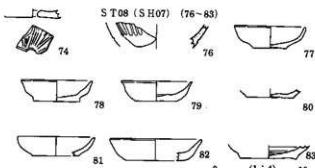
ST02・03 F層 (62~64)



ST08 (SH06) (74~75)



ST08 (SH07) (76~83)

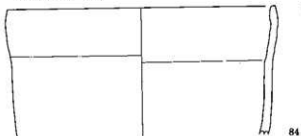


0 (1:4) 10cm

第73図 焼物 3

第2章 小滝遺跡

ST08 (SH07) (84)



84

ST10 (SH29) (85-89)



ST04 (90-91)



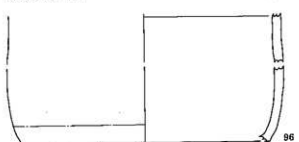
SK01 (92)



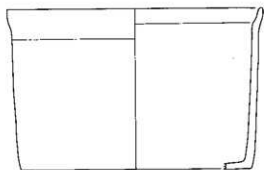
SK163 (93)



SK196 (94-96)

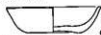


96



89

SK201 (97)



SK423 (98)



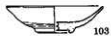
SK445 (ST11) (100-101)



SK449 (ST11) (102)



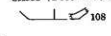
SK531 (103)



SK893 (107)



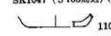
SK998 (ST06-07) (108)



SK1020 (ST04-05) (109)



SK1047 (ST05) (110)



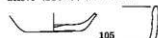
SH02 (115-120)



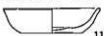
ST20 ?
(SK585) (104)



SK879 (ST06 ?) (105-106)



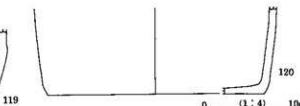
SK1067 (111-114)



114



118

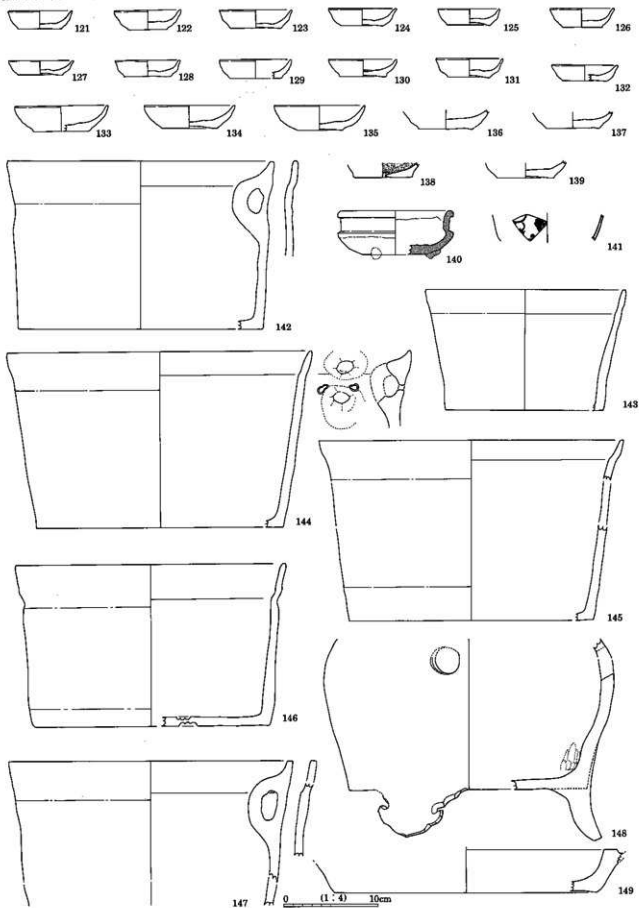


120

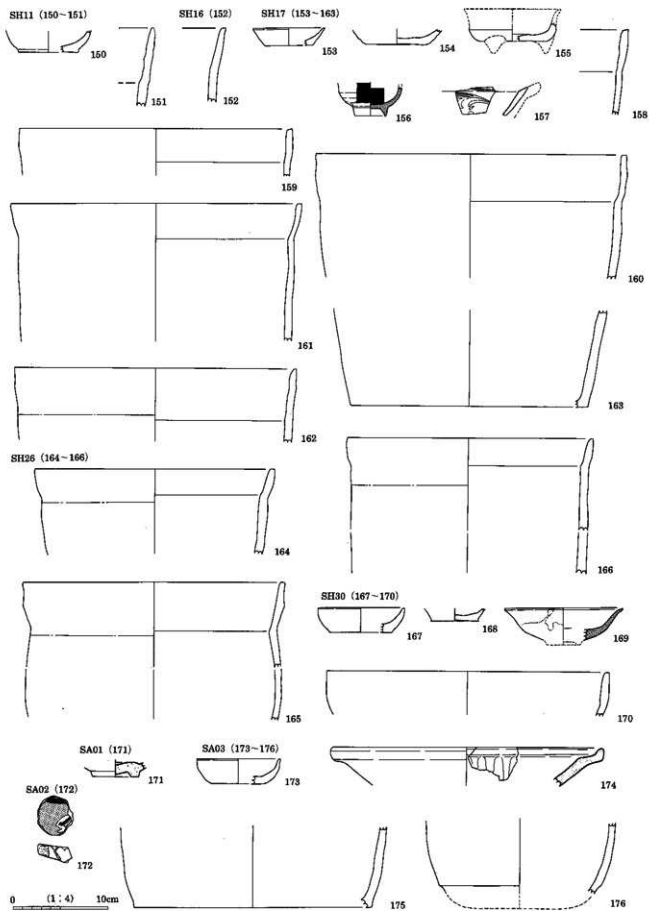
0 (1:4) 10cm

第74図 焼物 4

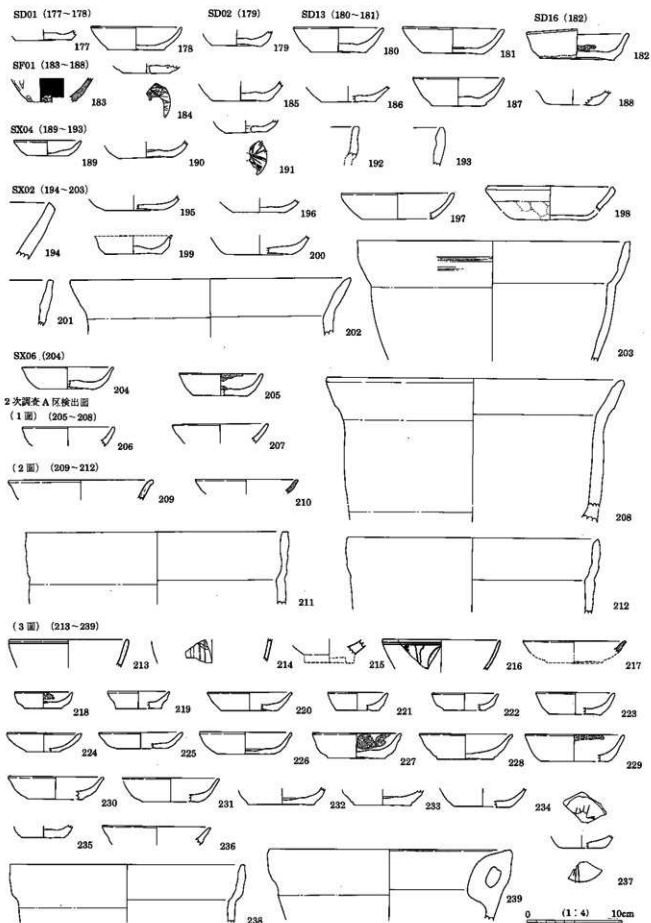
SH04·09 (121~149)



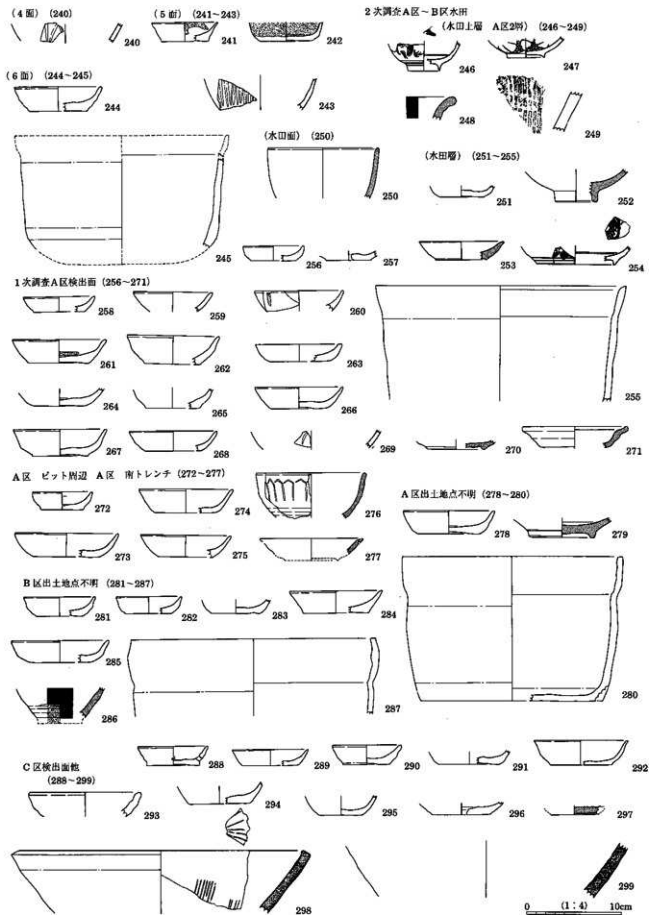
第75图 烧物 5



第76図 焼物 6

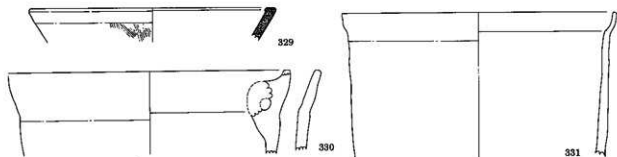
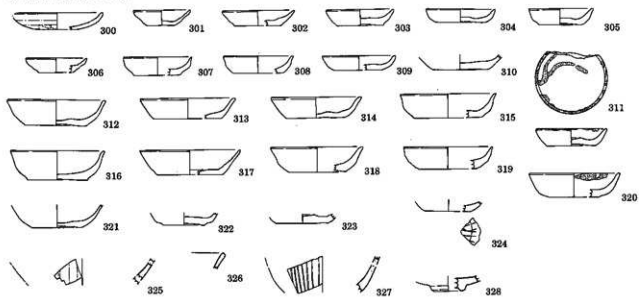


第77図 焼物 7



第78図 焼物 8

出土地点不明物 (300~332)



C区1面



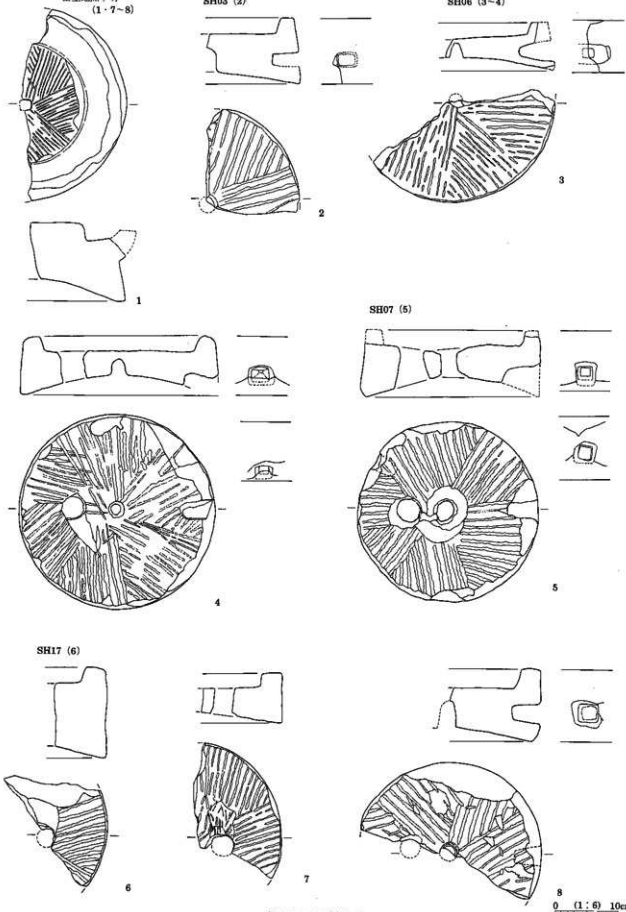
0 (1:4) 10cm

石製品

出土地点不明
(1・7~8)

SH03 (2)

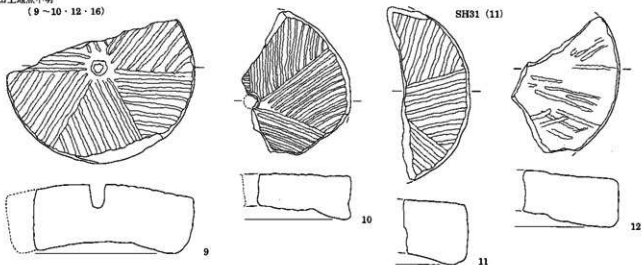
SH06 (3~4)



第80図 石製品 1

0 (1:6) 10cm

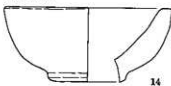
出土地点不明
(9~10·12·16)



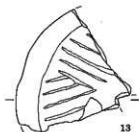
SK347 (13)



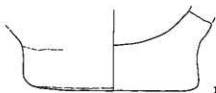
JD13 (14)



SH26 (15)

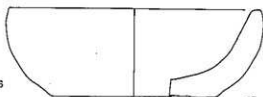


13



16

SH06 (17~22)



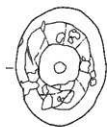
17



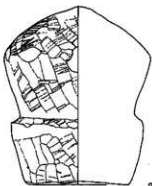
18



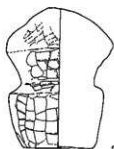
19



20

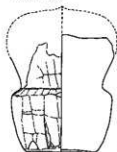


21



22

SH07 (23)



23

暗渠01 (24)

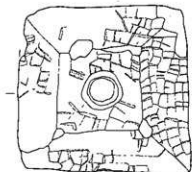
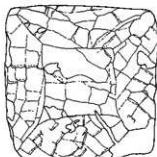


24

0 (1:6) 10cm

第81图 石製品 2

SH06 (25~27)



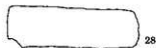
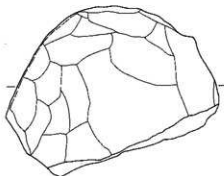
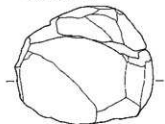
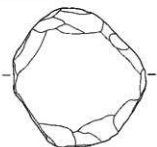
25

26

27

SM01 (29~31)

SH30 (28~30)



29

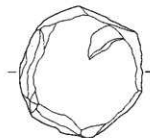
28

31

SK601 (32)



32



30

0 (1:6) 10cm

0 (1:3) 5cm

土製品 A区I面(1)

A区SD(2)

C区イモ穴SD(複乱)(3)



1

2

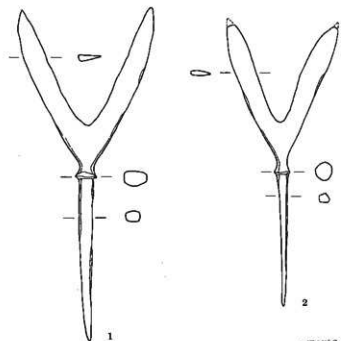
3

0 (1:3) 5cm

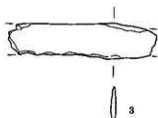
第82図 石製品3・土製品

金属制品

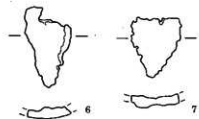
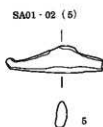
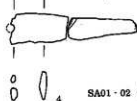
SK186 (1-2)



SD06 (3)



出土地点不明 (4·6-7)



A区2面SF (8)



C区イモ穴 (9)



0 (1:2) 5cm

A区 (11)



SK553 (12)



出土地点不明
(13·15-16·18-19)



SK1089 (14)

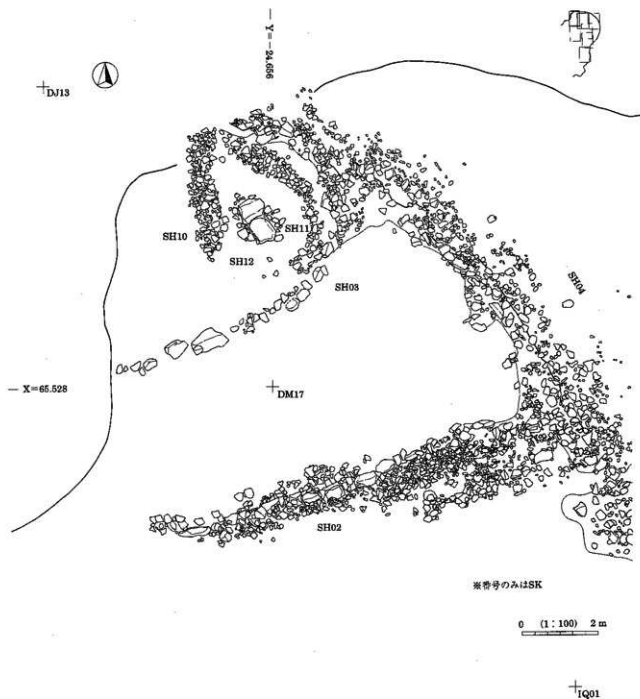


SH06 (17)

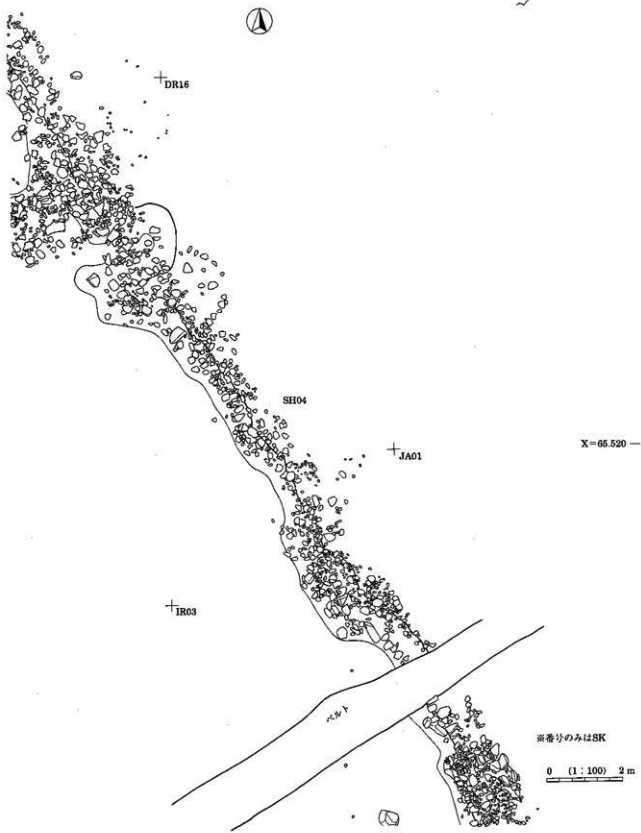


0 (1:1) 3cm

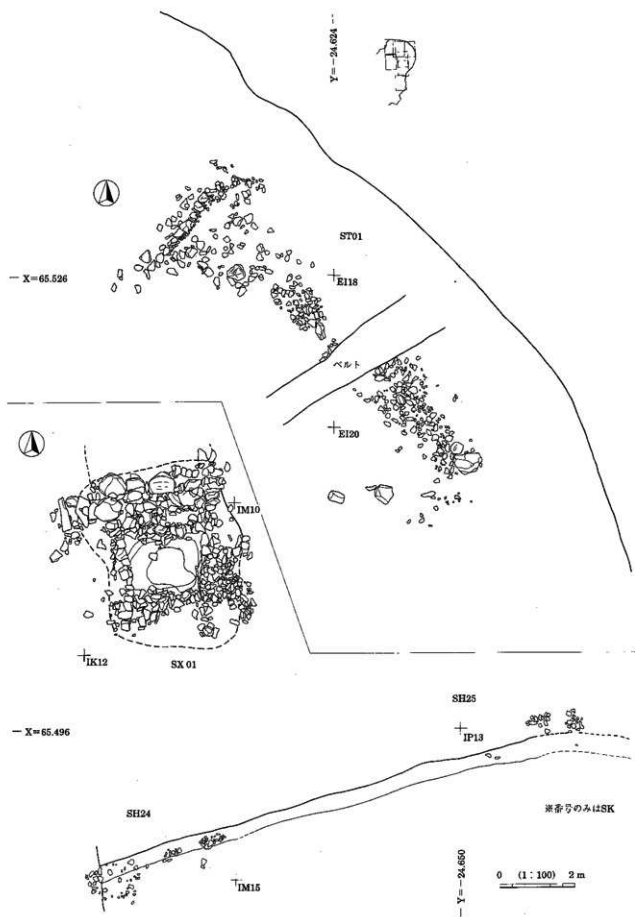
第83图 金属製品



第84図 遺構分布1 (A区I面上部)



第85図 遺構分布 2 (A区I面上部)



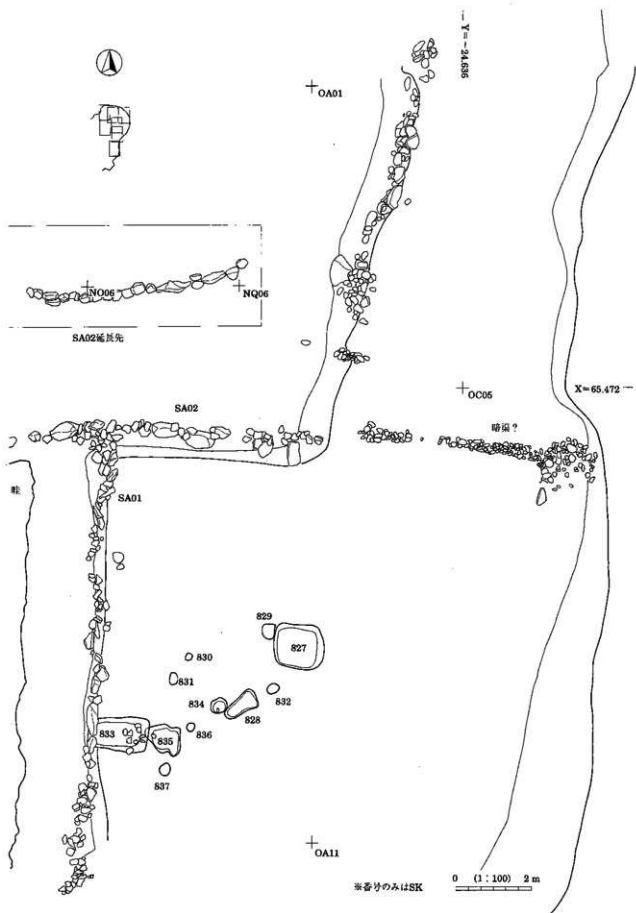
第86図 遺構分布3.4 (A区I面上部)



第87図 遺構分布5 (A区I面上部)



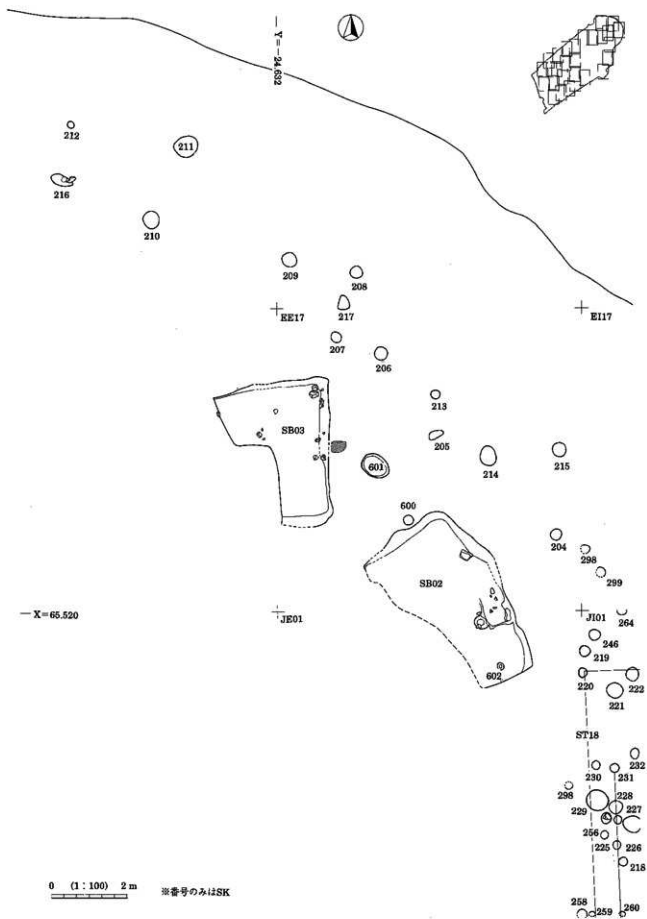
第88図 遺構分布6 (A区I面下部)



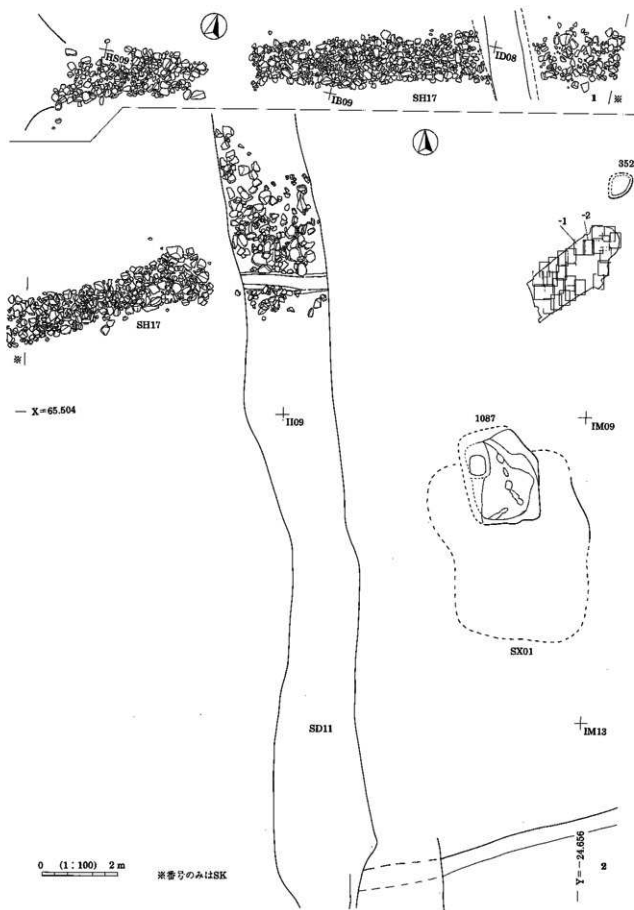
第89図 遺構分布3.4 (A区I面上部)



第90図 遺構分布1 (A区I面下部)



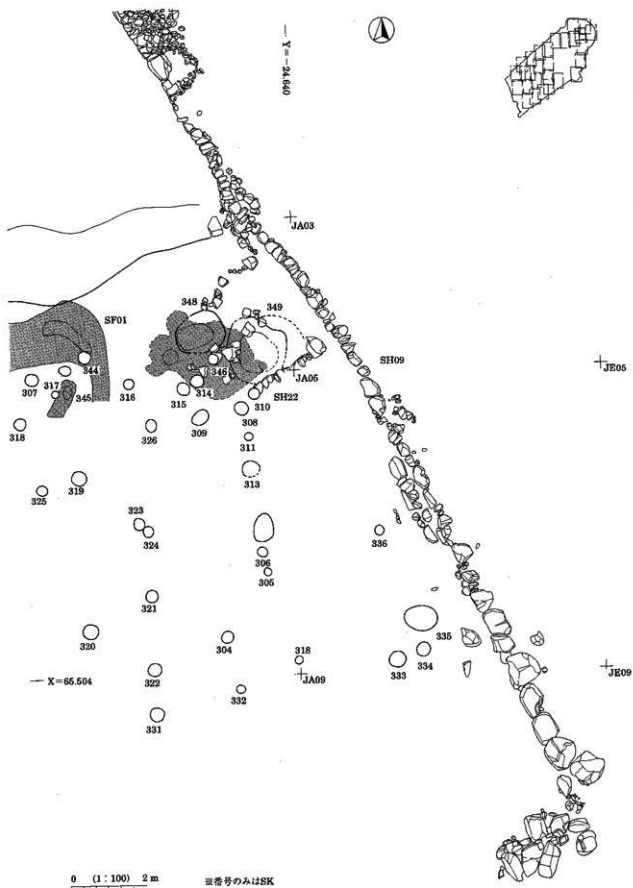
第91図 遺構分布2 (A区I面下部)



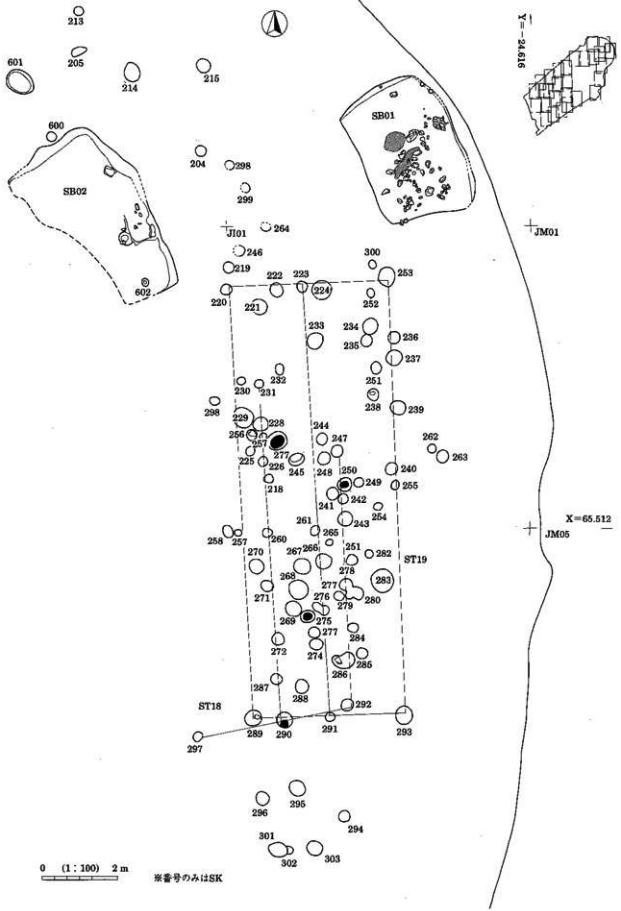
第92図 遺構分布3 (B区・A区I面下部)



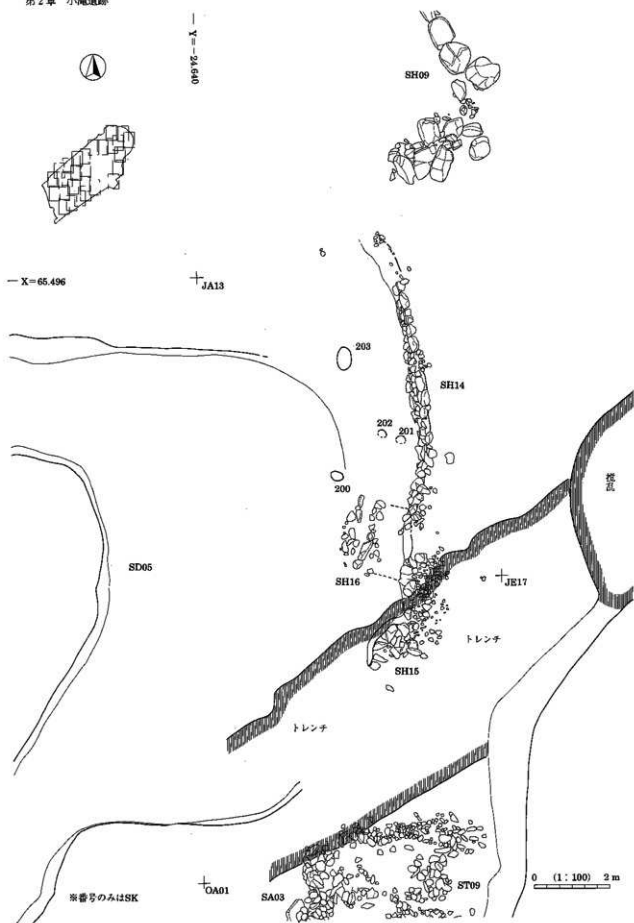
第93図 遺構分布4 (A区I面下部)



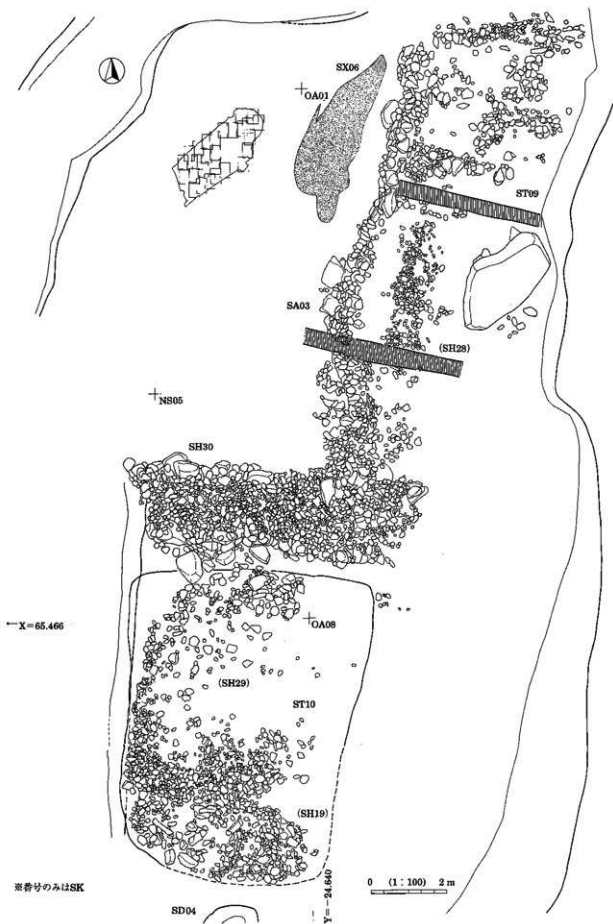
第94図 遺構分布5 (A区I面下部)



第95図 遺構分布6 (A区I面下部)

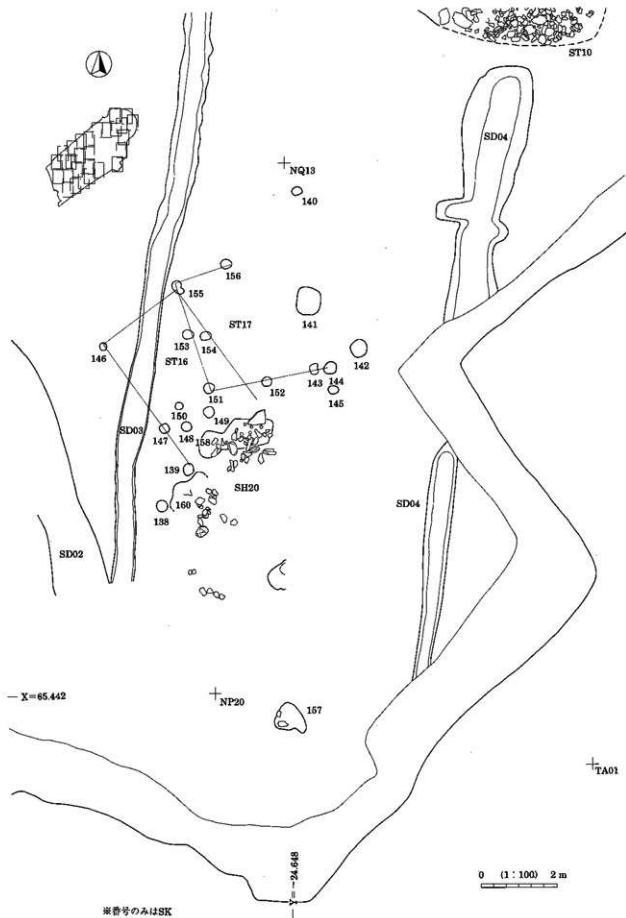


第96図 遺構分布7 (A区I面下部)



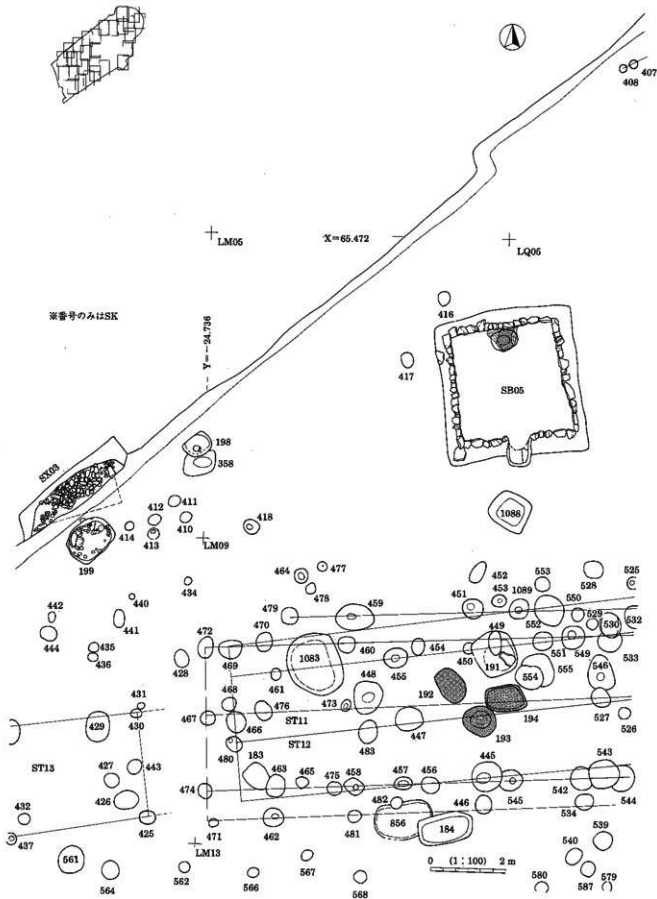
※番号のみはSK

第97図 遺構分布8 (A区I面下部)

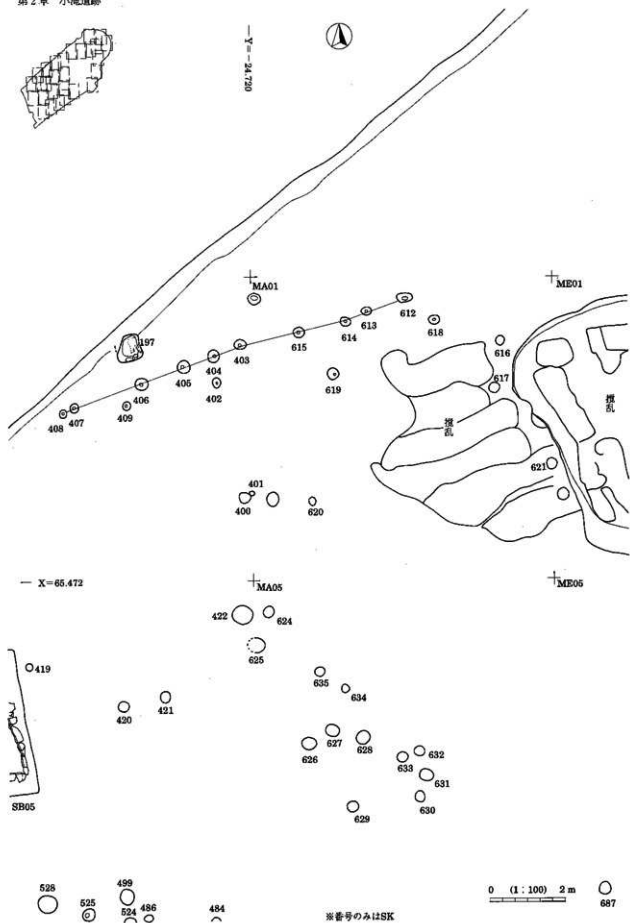


※番号のみはSK

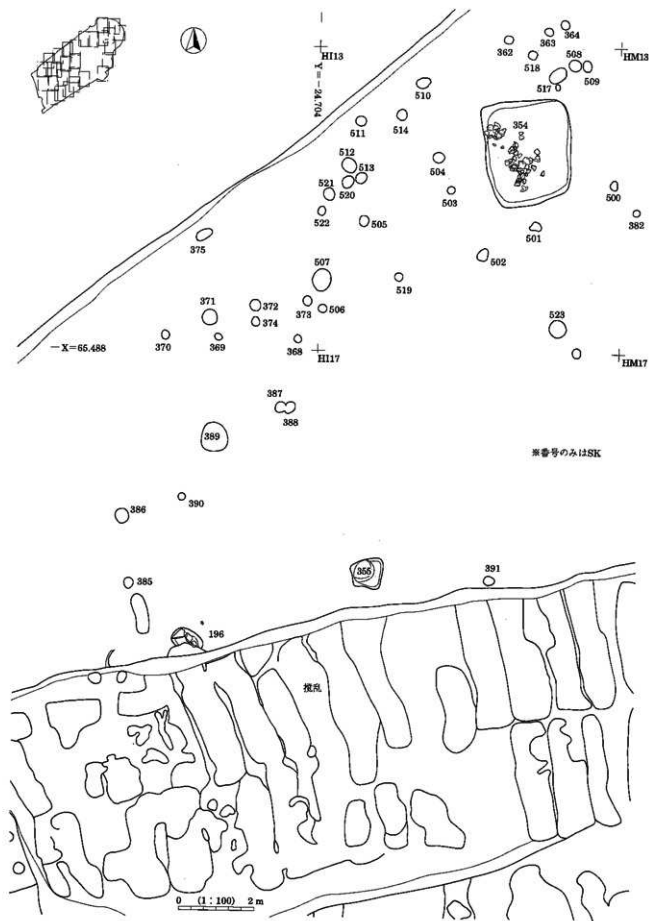
第98図 遺構分布9 (A区I面下部)



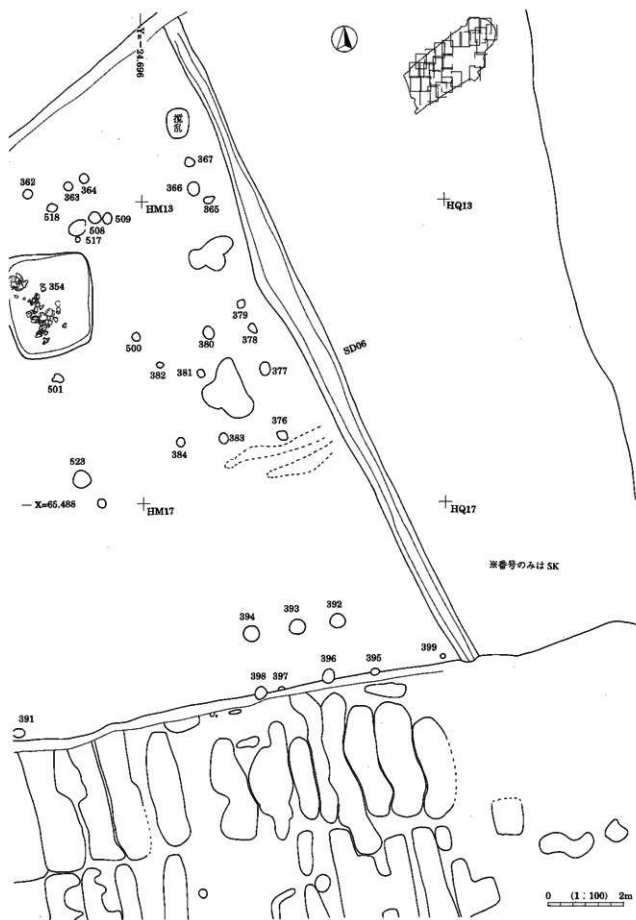
第99図 遺構分布 10 (C区)



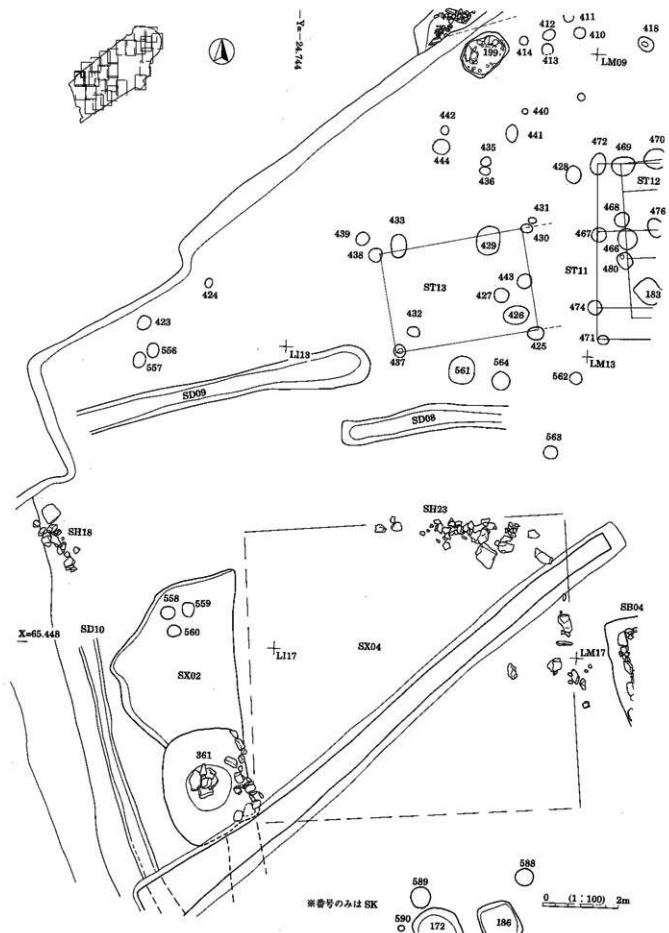
第100図 遺構分布11 (C区)



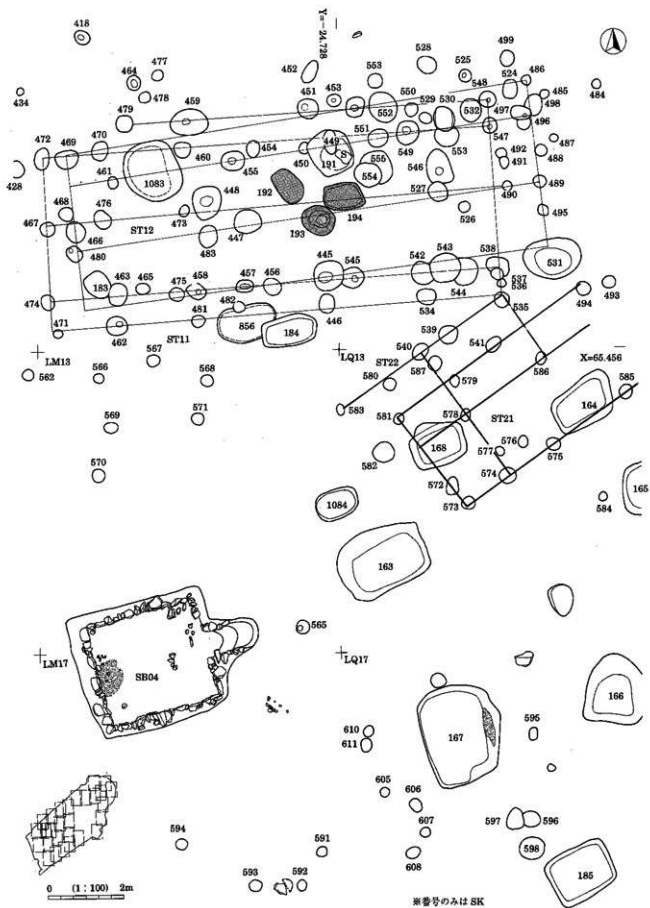
第101図 遺構分布12 (C区)



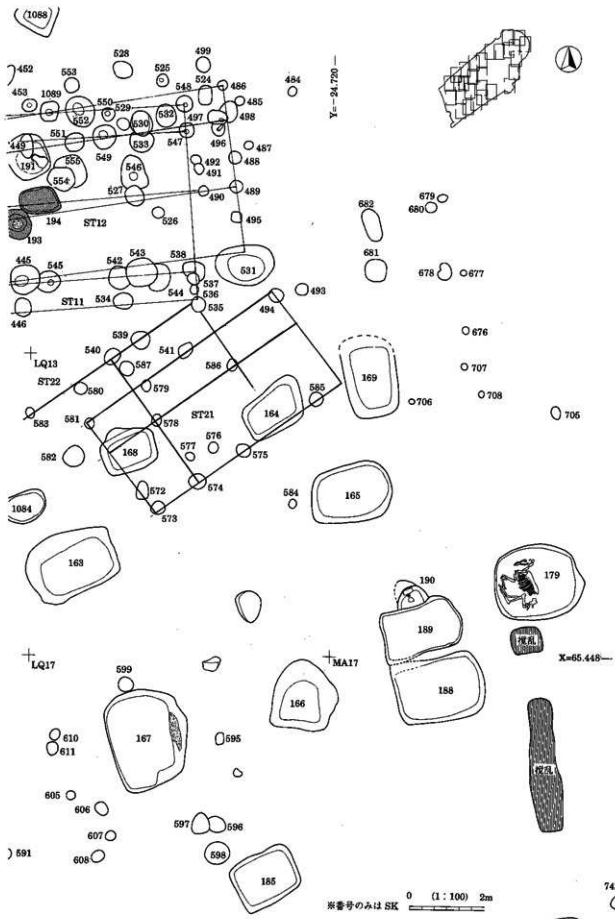
第102図 遺構分布13 B区
C区



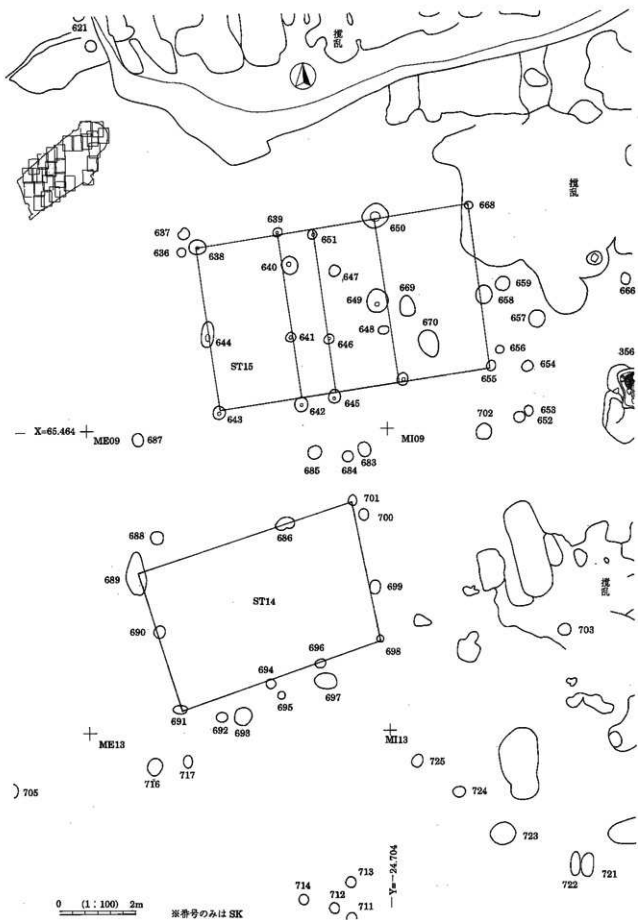
第103図 遺構分布 14 (C区)



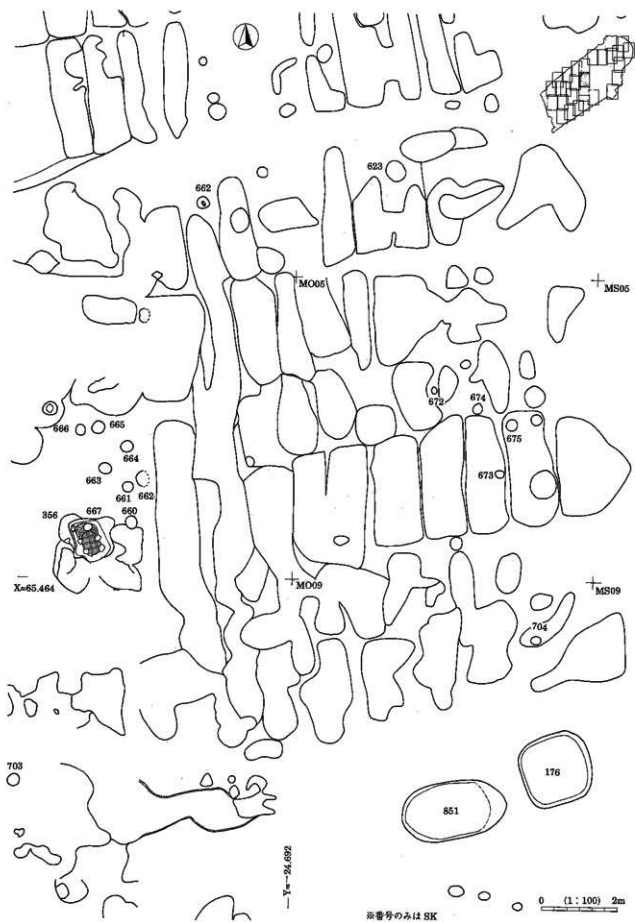
第104図 遺構分布 15 (C区)



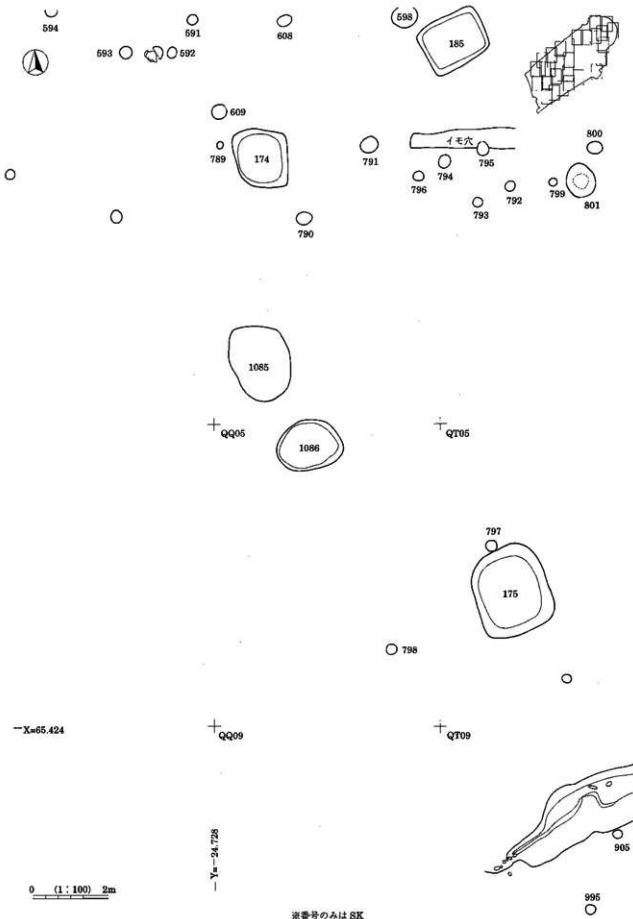
第105図 遺構分布 16 (C区)



第106図 遺構分布17 (C区)

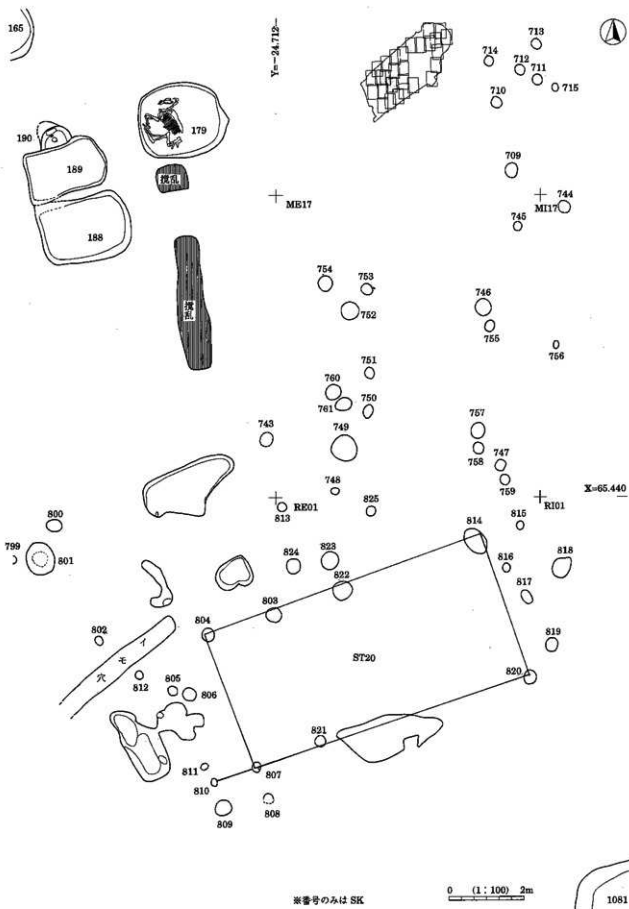


第107図 遺構分布18 (C区)

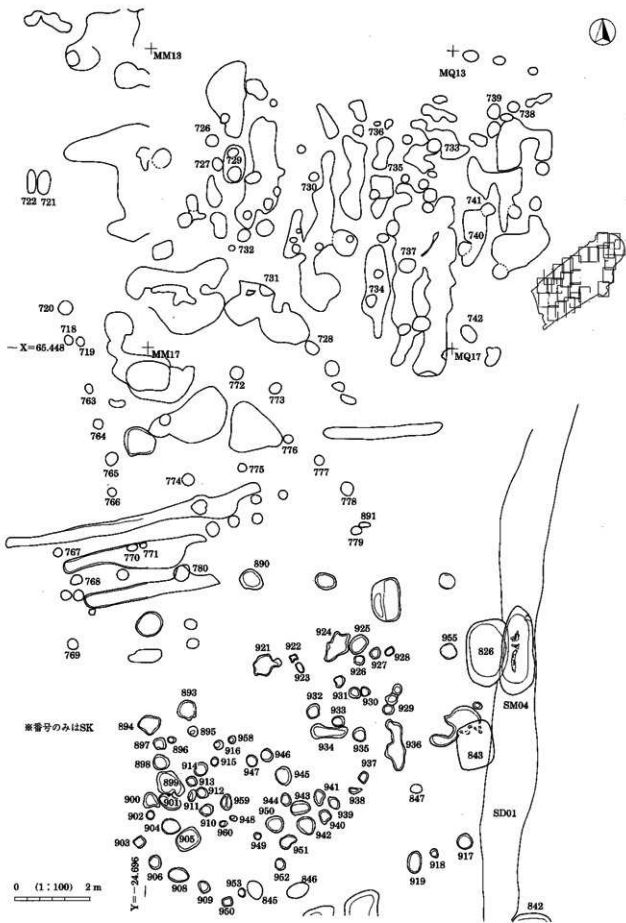


※番号のみはSK

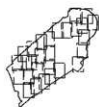
第109図 遺構分布20 (C区)



第110図 遺構分布21 (C区)

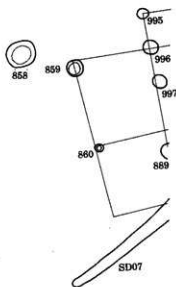


第111図 遺構分布22 (C区)



- X=65.416

- Y=24.728



+ QQ13



+ QQ17



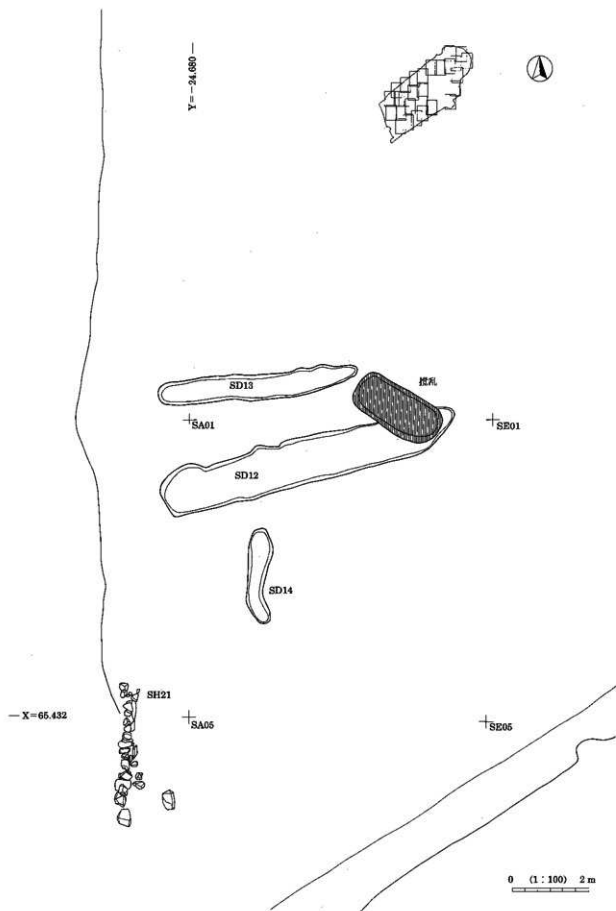
+ RA17

※番号のみはSK



0 (1:100) 2m

第112図 遺構分布23 (C区)



第116図 遺構分布27 (B区)

第3章 北之脇遺跡

第1節 遺跡と調査の概観

1. 遺跡の概要

北之脇遺跡は長野市若穂地区綿内に所在し、上信越道建設に先立つ試掘調査で発見された。城ノ峰とよばれる尾根の西麓緩斜面に立地し、尾根の反対側の山麓に前山田遺跡がある。今回の調査で弥生時代と中世の2時期が中心となる遺跡と知られ、中世では建物跡や溝跡などの遺構、弥生時代では溝跡・ピット・土器集中を検出した。居住地の利用が確認できるのは中世末の特定時期のみであり、他時代では居住地としての利用は全く確認できなかった。現在でも尾根を隔てた南側に春山集落があるものの遺跡周辺に民家は一軒もなく、本来的に居住に向かない場所であったとも考えられる。調査では冬期に北風が直接あたり、午後には日当たりが悪くなる寒い体験をしたが、こうした立地環境や千曲川が近くを流れていた関係によるものだろうか。このことを逆にいえば中世に居住遺跡が営まれるのはむしろ特殊なケースといえるかもしれない。この中世の遺構については遺跡背後の尾根にある春山城との関連も注目される。弥生時代の遺構については居住遺構とは考えられないが、周辺の春山B遺跡・長池遺跡との関係から本遺跡地は集落周囲の水田域のさらに外縁部にあたるものとみられ、弥生時代の遺跡構成を知る上で興味深い資料になった。なお、遺跡名称は年報等で「北の脇」「北ノ脇」としたが、旧公園の字名は「北之脇」となっており、ここではこの表記に従った。

2. 調査と整理の概要

(1) 調査・整理概要

ア. 調査概要

先述したように北之脇遺跡は上信越道予定地内の遺跡確認の試掘によって発見されたものである。高速道路建設にあたって発掘調査が必要と判断されたことを受け、長野県埋蔵文化財センター（当時助長野県埋蔵文化財センター）では調査面積6000㎡、調査研究員4名の体制で調査にあたるものとして1990年10月6日から着手した。調査にあたっては遺跡情報が限られていたので、遺跡の様相を探るトレンチを調査区北側に設定することから始めた。その結果、山際の緩斜面に加えて西側の水田部分の一部まで中世遺構が広がることが判明し、この範囲を面的調査することにした。また、遺跡内の地形は山際の一段高いテラス状地形、緩斜面の平地部分、低地寄りの部分から構成されるため、調査ではこの地形ごとに調査地区を細分する名称を与えてA・B・C区と仮称した。この名称は整理では本報告に収録した他遺跡に準じて、テラス状地形を「緩斜面部」、緩斜面の平地部分を「平地部」、低地寄りの地点を「低地境」の呼称に変更した。



第117図 作業風景

面的調査ではトレンチ調査結果から中世遺構を中心とする調査面1枚と想定し、地形形成過程を探る土層観察用ベルトを遺跡中央と南側に傾斜方向に設定しながら順次重機で検出面まで掘削していった。しかし、遺構検出に入った時点で低地境で検出された溝跡(SD17)は隣接した平地部で延長先が検出できない事態を生じることになり、平地部のSD17の延長先と思われる地点に小規模な補助トレンチを入れた。これにより、SD17は中世遺構検出面より下層に帰属する遺構で、遺跡地には本来2枚の遺構面が存在することが明らかになった。この低地境で異なる検出面遺構を同一検出面で露呈した原因は圃場整備で上層が削平されたか、あるいは山土の堆積が薄いことから中世遺構検出面と下層遺構面の差があまりないことが考えられた。

この下層遺構面の調査は中世の遺構面を調査後に実施することにし、まずは遺構の広がりを知るために北壁脇と中央ベルト脇でトレンチを再掘削することから始めた。その結果、下層遺構面は山際の緩斜面部下まで及ぶことが明らかになったが、下層遺構面までの掘削土は膨大になることも予想されたので下層遺構の調査は北側1/3ほどで区切って切り直し調査で対応することにした。しかし、掘削途中でさらに中世遺構面と下層遺構検出面中間の土層で部分的な土器の集中出土が認められることになり、急遽土器出土層位を2面として周囲を拡張した。この2面は出土土器から古墳時代に該当することが判明したが、他に土器・遺構は確認できなかったため土器出土地点のみを記録して掘り下げを継続した。下層遺構面は上記2面に続いて3面とし、ピット状の遺構とSD17の延長先、さらにいくつかの遺物集中を検出した。3面出土土器は一部に中世の混入もあるものの、ほぼ弥生時代の所産で占められ、上層の2面との関連からも3面は弥生時代に対比しようと捉えられた。3面の調査のなかでSD17南端は調査区外へ連続することが判明し、切り直し調査が終了した時点でSD17南端範囲を確認する調査を追加した。また、この拡張調査域は現在の道路とほぼ重複することから中世道跡の存在を確認する目的も加えて、トレンチを併設する形で進めることにした。しかし、SD17の南端と弥生中期後半の遺物集中を確認することができたものの、現道下の攪乱が著しく中世の道を確認することはできなかった。このトレンチ調査をもって遺構の精査を一段落し、土層観察用ベルトの追加掘削と土層図の作成、機材の撤収をおこなった。そして最後に調査用プレハブを撤去し、その下の低地境から低地への土層連続関係を明らかにするトレンチの土層図を作成と、トレンチで検出された遺物集中の記録作成と取り上げ、科学分析用の土壌サンプル採取を行って1991年1月11日にすべての調査を終了した。

イ. 整理概要

整理作業は調査年次の冬期に図面類・写真類の整理を行い、本格的な整理は1997年より2年計画で開始した。遺物の整理は小滝・前山田遺跡とまとめて実施し、1997年の前半に焼物の注記・接合を行い、後半に石製品・木製品の実測を行った。1998年には実測遺物のトレースと遺構整理を行い、報告書へむけて原稿の執筆と編集作業を行った。



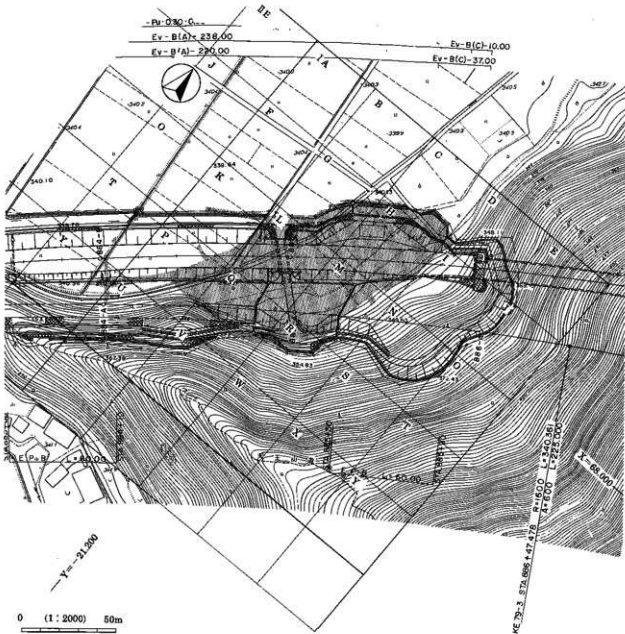
第118図 3面切り直し前



第119図 3面切り直し後

(2) 調査の方法

調査方法は基本的には小滝遺跡に準ずるので、重複する部分を省略して本遺跡に関わる点のみを触れておく。まず、測量であるが、国家座標に基づいて設定されたグリッド線を測量基準線として実施した。本遺跡のグリッド設定は国家座標のVIII系 $X=68.080$ 、 $Y=-21.280$ を北西の基準線とする200m四方の大々地区を設定し、内部は当センターでのグリッド設定に従って40m四方の大地区を 5×5 の25個に細分し、大地区内部を更に8m四方の中地区と2m四方の小地区に細分している。大地区は国家座標数値の40mの倍数となる数値を選択したもので、隣接する春山B遺跡の大地区設定値と同一である。しかし、春山B遺跡と連続する大々地区を設定すると狭い調査範囲が分割されてしまうため、大々地区の設定は本遺跡独自で行うことにした。ところが、調査当初はこの大々地区1つで納まっていたが、後に3面の拡張調査で僅かにはみ出してしまったため、新たに春山B遺跡と重複する場所に別の大々地区を追加することにな



第120図 北之脇遺跡の調査範囲とグリッド配置

った。なお、測量は上記の測量基準線に基づく簡易遣り方で測量を行い、1面の地形の測量のみ空中写真測量を実施している。3面については空中写真撮影のみを行い、空中写真測量は行わなかった。遺物の採取は検出された遺構が小規模なものが多いため、基本的に一括して取りあげているが、SX01のみは2×2mの小地区に分割して取りあげている。これ以外は従来の当センターでの調査方法に準じている。

3. 地形環境と基本土層

(1) 現地形

北之脇遺跡のある善光寺平東部周辺は善光寺平西側中央に形成された犀川扇状地に押された千曲川が盆地東縁を流れ、一方の河東山地からいくつも尾根が手の指状に突出して千曲川岸まで及ぶ。そのため、周囲を山地と尾根で区切られて前面が千曲川で閉塞される形の空間がいくつも連続し、こうした尾根で区切られた空間はそれぞれ地域的なまとまりともなっている。尾根で区切られる単位でみると本遺跡の所在地は長野市若穂川田地区に含まれることになるが、地域区分では若穂綿内地区に含まれる。これは遺跡周辺で犀川が千曲川と合流して粒度の粗い堆積物が堆積すると共に、犀川扇状地の影響も減少して千曲川が河東山地から若干離れて流れるため、千曲川沿いの綿内地区から続く自然堤防も尾根で区切られることなく連続して、保科川に区切られることによる。

遺跡地は若穂綿内地区南部の城ノ峰の西麓にある。西側には千曲川の堆積物で形成された自然堤防、あるいは中洲状の微高地と旧河道や低地が広がり、遺跡のすぐ西麓は低地である。遺跡はこの低地を望む山際の帯状の細長い崖錐地形に立地し、微視的にみると山際のテラス状の高まり、その下に一段低い平地、さらに低地へ連続していく低地脇部分から構成される。本報告ではテラス状の高まりを「緩斜面部」、平地を「平地部」、低地にかかる部分を「低地境」と表記する。なお、発掘調査の結果、遺跡地の地形は1面と2・3面ではまったく異なることが知られた。詳細は地形形成過程のところで述べるが、現在みるような崖錐地形の発達は古墳時代以後の所産であり、それ以前においては千曲川の堆積物が山際まで及ぶ比較的平坦な地形であったようだ。

(2) 基本土層

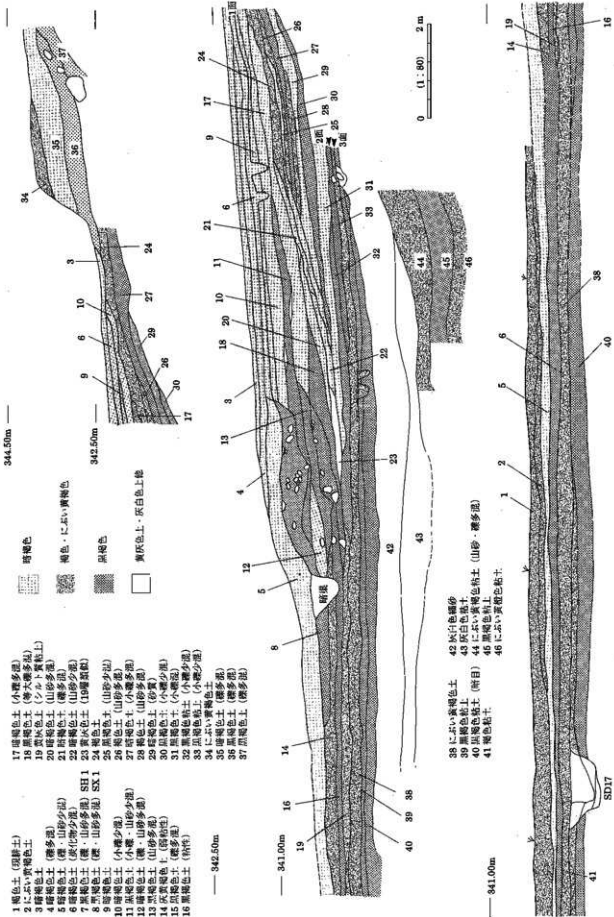
調査では調査区北壁・中央・南部の3か所で土層観察と土層図記録の作成を行ったが、本遺跡東側の崖錐地形部分は地点ごとに土層の様相が異なるため、遺跡全体に共通する基本土層としてまとめることができなかった。そこで、整理段階で比較的広範囲に土層記録を作成している調査区北壁の土層図から基本土層を把握しなおし、補足的に中央のベルトの土層図を提示することにした。なお、山手の土層についてはできるだけ細分しないでまとめ、対応関係が明らかでない類似層は同一層と断定できない限りは別番号を与えている。

- 1 a 層 褐色土層。テラス～平地部に分布し、現耕作土を含む土層。山土の堆積土とみられ、北壁では平地部側に厚く堆積し、数枚に分層できる。
- 1 b 層 暗褐色シルト層。低地部現水田土壌で、千曲川系の堆積土がベースと思われる。供給源が異なると考えて上記1 a 層と区別した。
- 2 層 ぶい黄褐色粘土層。低地部の1 b 層下に分布し、中世SD06の上面を覆う。数枚に分層できる可能性があるが、本遺跡周辺では調査前に圃場整備が行われており、この時の造成土が含まれると思われる。
- 3 層 暗褐色粘性土層。低地に分布し、SD06上面を覆う。低地の14層とは2層の下に位置する点や色調が類似するが、同一層と断定できないため、別に捉えた。

- 4層 暗褐色土層。テラス～平地部に分布する山土堆積層である。近世の伊万里Ⅳ期の皿が出土しているため、18世紀以後の所産とみられる。緩斜面部では厚いが、平地部は薄い。
- 5層 褐色～暗褐色土層。山砂・炭化物・焼土粒を含む。中世遺物包含層で遺構埋土の基調となる。
- 6層 褐色土層。粘性は弱く、山砂もあまり含まない。山際の緩斜面部分の中世遺構検出面の調査1面にあたり、SX01・SH01はこの土層を掘り込んで構築される。
- 7層 褐色～暗褐色層。シルト質で山砂を含む。緩斜面部だけに分布する。平地部の13層に対応か。
- 8層 黒褐色粘土層。テラス部分のみにあり、平地部13層との関係は不明。
- 9層 褐色～暗褐色土層。山砂や礫を含む。数枚に分層できる。平地部13層との関係は不明。
- 10層 黒褐色粘土層。山砂・礫を含み、粘性強く締まっている。先端は13層に接続するように消える。
- 11層 ぶい黄褐色～暗褐色の山砂、シルト質土層に分層できる。テラス部山際だけに分布。
- 12層 黒褐色粘土層。平地部で水平に堆積し、山際で薄い灰色粘土層をはさみ込む。13層へ連続か。
- 13層 黒褐色粘質土層。平地部に分布し、平地部中世遺構検出面となる。この土層は12層とほぼ同層高に位置するが、平地部北壁土層区では粘性土と捉えられ、しかも12層対応の粘土層は本層の下部の途中で消えるように記録される。したがって、12層そのものとは捉えられず、むしろ12層をベースとしながら、7～9層土も含めて変質した土層と思われる。厳密に対応すると断定できなかったため、別土層とした。なお、調査区北壁では平地部のほうが低い。
- 14層 黒褐色粘土層。低地2層下に分布する。3層と類似するが、同一層か断定できなかった。
- 15層 褐色砂層。低地14層下に分布。洪水砂層とみられる。
- 16層 ぶい黄褐色土層。粘性のあるシルトで上面が調査2面にあたる。山際から平地部までほぼ水平に堆積するが、低地部では対応層が不明である。
- 17層 褐色粘土層。平地部16層の下に部分的に見られる。弥生後期の遺構の掘り込みは本層上面まで確認できるが、検出は本層の下面で行った。
- 18層 黒褐色粘土層。山際から低地まで分布し、平地部～緩斜面部の3面検出面、低地脇では土器集中を上面で検出した。なお、低地部では灰色味の強い粘土層に分層されるようになり、水田として利用されている可能性がある。この水田層は面的調査を実施していない。
- 19層 褐灰色粘土層。低地の18層下に位置する。
- 20層 ぶい黄褐色砂質土層。18層下に位置し、22層と対応する可能性もあるが、断定できない。
- 21層 黒褐色粘土層。20層の下に位置する。
- 22層 灰白色砂層。中央ベルト山際のトレンチで一部のみ確認した。20層に対応する可能性もある。

以上の基本土層の区分を簡単に整理しておく。まず、本遺跡を構成する土層は大きく2グループに分けられる。ひとつは平地部から山際テラス部分上部に分布する山土の堆積層とみられるもので、褐色～黒褐色を呈して山砂や礫を多く含むものも多い。中世遺構検出面はこの土層のひとつに含まれるが、中世以後でもかなり厚く堆積が認められる。もうひとつは下層にある千曲川系の堆積土と見られるもので現地形と大きく異なって、山際までほぼ水平に堆積する。土質は粘土・シルトを基調とし、2・3面はこの土層群に含まれる。また、中央ベルト山際の現地表面下約2.5mほどのところで最下部に厚い粘土と砂層が確認されたが、この砂層は年代的には弥生中前期前半以前と捉えられるもので、春山B遺跡などでも確認されている下層の砂層に対比しうる可能性がある。

次に遺構の検出面及び土層の年代について述べる。まず、1層は現代、2・3層はSD06を覆うので中世末以後～近世（近代？）、4層は伊万里皿出土から18世紀以後とみられる。5層が中世包含層で、緩斜面部6層上面、平地部13層上面、低地境18層上面が中世遺構検出面1面にあたる。1面検出遺構出土遺物



第122図 線斜面部・平地部断面図

で最も新しい所産は唐津すり鉢・皿であり、5層は中世末～17世紀初頭と考えられる。そして、16層上面が2面の古墳時代前期土器検出層、17層上面が弥生後期遺構掘り込み面にあたる。ただし、3面の遺構検出はより検出しやすい18層上面で行った。また、弥生中前期半のSQ09は17層にかかる部分で検出し、低地境では弥生後期土器集中を18層上面で検出している。

以上の土層は断片的に作成された土層図を元に整理したものであるため、土層の対比に問題を残すところがある。最後に土層対比上の問題について触れておく。上記の土層対比で確定できなかったところは①平地部13層とテラス部の7～9・12層の関係、②平地部16層と低地部の対応土層、③3・14層の対応関係、④18層の低地部土層の対比がある。いずれも遺構検出面前後の土層であり、地形変換点付近で土層図を区切ったことから対比に問題を残すことになった。地形と遺構検出面の関係からみると、①・③は平地部1面検出土層となる黒褐色土のテラス部—平地部、平地部—低地部との対応関係、②はその下層の2面検出土層の平地部—低地部の対応関係、④はさらにその下の3面遺構検出面の平地部—低地の土層対応関係上の問題でもある。これらについて若干対応関係を認定した経過を追加説明しておく。まず、①では平地部1面検出土層となる13層は緩斜面部12層をベースとして7～9層も関連して生成された土層とした。これは調査区北壁の平地部の土層では12層と13層はほぼ同じ高さで連続するとみられた一方で、平地部東端の山手では下部が粘土、上部は若干シルト質と観察されたこと、さらに1面の遺構検出面として対比すると同一層そのものとは捉えられないことによる。一方、中央ベルトでは12層がごく限られた範囲に分布し、むしろ7・8層が13層へ連続すると観察されている。両者の所見は矛盾するが、12—13層は山土が供給源であり、水平に堆積するようにみえるのは千曲川系の堆積土が及ばなくなった直後段階に形成されたことによると考えて上記の所見とした。この点では低地で対比土層が認められない点も矛盾はない。なお、③の問題はこれに関連するもので、低地境の13層に3・14層いずれが対応するかの問題である。3層と14層はいずれも13層に類似するが、3層がSD06を覆うという所見では13層と年代的なずれを生じる。一方、14層は3層とほぼ近接した場所に位置し、しかもほぼ同標高で同じ2層の下に位置する点で同一視できそうであるが、3層は粘性のあるシルト、14層は粘土層であり、下層はそれぞれ18層と15層と異なる。このことから14層は3層と類似した色調ながら連続しないと捉えた。次に②の問題は16層がほぼ水平に堆積し、しかも土質が山砂などをあまり含まない点で千曲川系の堆積層ではないかと捉えたが、低地では対応層が確認できていないという問題である。土層標高をそのまま信じれば、低地脇が一段高く山手側に低い地形段階で堆積した土層と見られるが断定はできず、結果的に対比できる土層が不明となってしまったものである。なお、平地部16層の標高を低地脇に当てると2・3層に該当する。これらの土層が中世以後のもので水田耕作や圃場整備に関連するとするならば、低地脇では削平されている可能性も考えられる。最後に④の18層対比の問題であるが、調査当初では低地脇で上下2枚の黒褐色粘土層（基本土層でいうと18と21層）を確認し、SD17が1面の18層（検出時では20層上）で検出できたこと、さらに低地境の遺物集中は検出標高からみて上層に帰属すること、中央ベルトの18層と同じ高さで上層の黒褐色粘土層は連続することから上記の基本土層の対比に帰結した。この対比の所見からすると18層の地形は遺物集中を検出した低地脇付近が最も高く、平地部・テラス部が緩やかな窪地、西側も徐々に低くなる地形とみられることになり、トレンチ西端では相対的には平地部やテラス部よりも低くなるのが想定される。この問題は付章の科学分析結果と関連しているので注意されたい。

(3) 地形形成過程

上記の土層は対比に問題を残すところもあるが、上記の土層区分に寄りつつ地形形成過程と各時期の地

形をまとめておこう。先にみたように本遺跡を構成する土層は大きく二つに捉えられる。ひとつは山手から傾斜して堆積する褐色～黒褐色土1a、4～13層で、もうひとつは低地から連続し、水平に堆積する12・15層以下である。前者は山土の堆積や崩落土と思われ、上層ほど広範囲に確認できる。後者は千曲川系の堆積物と想定したが、下層ほど山手際まで及び、22層は細砂となるため古い段階ほど比較的流速のある流れに近い場所であったとみられる。つまり、時期をおって千曲川の影響が減少し、一方で山土の堆積増加で低地より高い場所となっていく傾向が知られる。

次に時代を当てはめてみると、弥生中期以前では千曲川の影響を直接受けやすい場所であったが、弥生中期前半～古墳時代前期にやや安定化していたようで、あまり山土の堆積も認められていない。この弥生中期前半～古墳時代の地形は土層の標高からみると低地脇が若干高くなって逆に山手側が僅かに低い地形であったと推測される。ただし、珪藻分析からは低地ではないとする所見が得られているので、相対的には微高地と見られる。この点では隣接した春山遺跡などの土層と対比しないと地形評価は難しい。

やがて、古墳時代～中世の間に山土の堆積土が増加し、低地よりも明らかに高い地形となったようだ。この山土の堆積土増加傾向は中世以後も継続したとみられ、1面以上でも厚い堆積土が認められる。この1面では巨礫を含む土坑が複数検出されたが、これらは山から崩落した巨礫を土中に埋めて片づけた遺構と捉えられるものである。逆にいえば、巨礫が転石として発生するような大規模な崩落が中世以後にあったことを示すと思われる。その崩落場所は礫片づけ遺構の分布や上層の山土堆積層の層厚分布から遺跡北東部斜面に残る崖部分ではなかったかと思われる。この崩落が起こった年代については礫片づけ遺構の切り合いと出土遺物に矛盾があって断定はできていない。子細は後述する。

4. 歴史的環境

ここでは周辺遺跡の分布と文献資料などからみた歴史的環境について触れる。ただし、同じ市内地区にある前山田遺跡とは重複する部分も多いので、ここでは隣接する保科・川田地区の様相と北之脇遺跡周辺の関連することに絞って記述する。なお、遺跡背後の城ノ峰に所在する春山城に関しては前山田遺跡のところで記述するので、そちらのほうを参照されたい。

本遺跡の周辺遺跡では遺跡西側の低地を挟んだ小微高地には春山B・長池遺跡（弥生中・後期）があり、低地には川田条里遺跡から連続する水田がある。保科川より西は自然堤防となる現町川田集落周辺に町川田遺跡（弥生中・後期、弥生末～古墳前期、平安）があり、後背低地には川田条里遺跡（弥生～近世水田）が広がる。本遺跡周辺の山手の崖地形には春山遺跡（弥生後期）と本遺跡がある。各遺跡の様相は高速道関連の調査でかなり判明してきているが、その成果は整理途中でもあるので、ここでは現状で判明している周辺の歴史的環境について時代ごとにまとめておく。

縄文時代

縄文時代の遺跡は保科の扇状地で宮崎遺跡などが知られるが、遺跡周辺では未確認である。

弥生時代

縄文時代晩期～弥生時代前期の遺跡は土坑が検出された春山B遺跡がある。点的な存在で遺跡の実態は不明である。次の弥生中期の遺跡は自然堤防の春山B遺跡・長池遺跡がある。両者は隣接しており、連続した遺跡ともみられる。春山B遺跡では玉作に関わる遺物や鉄斧・漆付着の布などが出土している。また、川田の町川田遺跡などで竪穴住居跡、川田条里遺跡では水田跡や溝跡などが検出されている。弥生後期の遺跡は中期よりさらに多くの遺跡が知られるが、自然堤防上の調査があまり行われていないこともあり、詳細は明らかにされていない。しかし、川田条里遺跡で水田遺構が確認されていることからかなりの遺跡があるものと予想される。また、城ノ峰東側の市内地区でも榎田遺跡を初めとして弥生後期の遺跡は多く

知られており、この時期にはかなり広域にわたって活動が認められるようである。この弥生後期の遺跡は千曲川沿いの大室・村北遺跡などの小自然堤防でも遺跡が知られることから、小グループ単位の集落が拡散していたとも見られる。なお、当地域の中核的な集落についてはよくわかっていない。

古墳時代

古墳時代の集落遺跡は川田地区では不明であるが、川田条里遺跡で水田跡が見つかり、古墳や祭祀遺跡は山手の扇状地となる保科、あるいは川田南側の尾根にいくつか分布する。古墳は川田地区の南・西側の枝尾根には東山古墳群・大星山古墳群、保科の扇状地には長原古墳群などが存在するが、北側の本遺跡背後の城ノ峰などの尾根では古墳が確認されていない。現時点では川田地区の南・西側の尾根に偏在する様相となるが、未発見の古墳がまだ存在している可能性も残る。しかし、春山B遺跡では古墳時代の居住遺構は確認されておらず、長池遺跡も現時点では同様である。一方の城ノ峰東側の榎田遺跡では古墳時代中・後期の大規模な集落遺跡であることが確認されたが、それ以前の古墳前期の遺構は僅かしかなく、しかも、山手の押し出し地形に古墳群が分布するものの、尾根上に立地するものは知られていない。以上の様相からすると上記の尾根上の古墳が偏在する様相は、集落遺跡の時期ごとの分布の違いとも関連しているようにも思われる。この集落遺跡の分布変化は千曲川流路の変更、地形的な安定度による可能性があるのだろうか。なお、保科の扇状地では古墳時代の祭祀遺跡として保科片山遺跡があり、両手を上げた人面の土師器が出土している。同地籍では素環頭太刀の出土も知られており、注目されている。こうした古墳の集中状況や祭祀遺跡の出現は弥生時代のような小グループが拡散（移動を繰り返して？）していたあり方は異なって、保科・川田周辺がひとつの地域的なまとまりを形成し、その地域内が統一的な世界観に基づいて意味が付されるようになったとみられ、それは政治勢力の形成とも関連しよう。

古代

古代の遺跡もあまり明らかにされていないが、自然堤防の町川田遺跡で住居跡、川田条里遺跡では水田跡が見つまっている。川田条里遺跡で水田が検出されている点から集落遺跡は多く存在するとみられる。なお、保科の扇状地山際には滑水寺があり、ここには焼失した平安期の仏像や、焼失を免れた平安時代後半の兜前立が伝えられている。平安時代には成立していたとみられる。

次に文献からみた様相を補足しておく。当地域は古代において高井郡に属したとされる。和名抄では高井郡内に徳科・小内・稲向・日野・神部の5郷があったことが記されるが、遺跡がどの郷に比定できるかは諸説ある。徳科は隣接した保科・川田周辺に対比することは異論がないようだが、徳科郷の領域を広くみて本遺跡や綿内までを含むとする説、綿内の森集落に小内神社がある点から小内郷内に含む説がある。また、現城ノ峰を境として現綿内でも西側にある春山や古屋を徳科、北側の現綿内中心部周辺を小内郷にあてる考えもある。現時点では結論を出せないが、少なくとも和名抄は平安時代前期の様相を伝えるものの、それ以前・以後では様相が異なる可能性があることは注意が必要だろう。それは考古学的にみると時代ごとに遺跡分布は変化しており、古代を通じて単一的な景観が継続していないように思われるからである。特に現在の綿内周辺では奈良時代の集落遺跡は少なく、平安時代の9世紀後半以後に遺跡が増加することが知られる。また、川田条里遺跡はその名が示す通りに条里的な遺構とみられ、その範囲は川田地区から保科川を越えた当遺跡周辺まで広がる（保科川より東を田中条里と呼ぶ場合もある）が、一方で城ノ峰より東側の綿内地区では条里が明瞭に認定されていない差異もある。郷と条里は必ずしも一致するとは限らないが、こうした条里のあり方も郷比定の上で注意する必要があるだろう。

中世

遺跡では水田跡が検出された川田条里遺跡、町川田近くの山麓で古瀬戸四耳壺が出土した地点などが知られ、それ以外は城館遺跡や寺院しかない。山城には本遺跡背後の城ノ峰に春山城、保科に霧台城、加増

城、川田に古山城がある。他には保科東山神社裏で近年古墳と共にみつかった山城や、子細不明ながら明治時代の町村誌に記載がある小出城（前山城）がある。小出城は字前山にあるとされるが、これは霜台城と同じ尾根にあたり、同一の尾根に二つの山城があることになる。霜台城のある尾根の中腹には比較的広い鞍部、さらに北側の尾根を少し下った斜面には削平地らしきものがあるが、堀切等が認められず積極的に山城と認定しにくい。また、霜台城の続きの尾根上の離れた場所に小規模な城郭遺構が見られるが、これは霜台城の一部と見られるものである。なお、長野県教育委員の城館跡分布調査では長田神社裏山に小出城を当てているが、ここは急峻な斜面を登りきると尾根上は平坦となるものの、明確な城郭施設は認めがたい。一方、居館跡は推定地があるものの、形態や場所は特定できないものが多い。居館推定地を挙げると川田の後背低地に近い地点に字古城・古城玉ノ井地籍周辺、東山神社前周辺が知られる。何れも旧公園では居館と見られる地割は不明で、館場所を断定しにくい。これ以外に保科氏の屋敷跡と伝える場所が保科にあるとされるが、宅地化が進み場所も不明となっている。なお、字「領家」地籍にも居館跡があったとされるが未確認である。

文献史料からみると、平安時代末期には保科・川田に長田御厨（保科御厨）、隣接した須坂井上周辺に芳美御厨があったとされる。芳美御厨については早々に停止されるものの、その領域を井上氏が継続的に支配していたことが知られる。保科御厨は寛治二年（1088）に伊勢神宮に寄進されたもので、永久三年（1115）外宮領となった。国司が干渉して神人を殺害する事件がおこったが、長承三年（1134）御厨と再確認されている。この保科御厨周辺では建保元年（1213）保科次郎、建武二年（1335）保科弥次明が知られ、保科氏はそのまま室町に当地を支配する武士である。本遺跡周辺はいずれの御厨に所属していたか良くわからないが、本遺跡が帰属する綿内地区は芳美御厨に含まれるとみられるので、本遺跡地も同様であろうか。なお、鎌倉時代の東鑑に保科宿の遊女長者が出てくる。保科御厨域には宿と呼ばれる町場的な場が成立していたようであるが、これは千曲川沿いの自然堤防を通る道と、須坂から群馬へ通る大笹道に接続する保科道が交差する交通の要所であったことによるとされる。また、保科川近くの自然堤防上には「領家」、保科の扇状地部には「在家」地名がある。

室町時代では諏訪大社の祭礼費負担を信濃各地の武士に割り振った記録である御礼古書と呼ばれる古文書に保科・川田郷が出てくる。両者は併記される場合が多く、そこに現れる武士には康正二年（1456）に河田光輝が出てくるものの、ほぼ保科姓（桑井と時々記載される）の武士で占められる。川田氏も保科氏の名にみえる「光」を用いており、関連する一族とみられる。本来は保科一族の支配域として一地域であったが、室町時代には保科と河田郷に分離したと考えられている。この状況は戦国時代に武田氏が侵入してくるまでは継続したようだ。

武田氏の侵入直後の保科氏の動向は不明な点が多いが、一説では武田方に従ったとされる。保科氏は永禄三年（1560）上杉景虎の関東管領就任の祝いに太刀を贈っているが、太刀を贈った武士は必ずしも上杉方の武士ばかりでないでこれは上杉氏についた傍証とはいええない。一方、武田氏侵入時には千曲川右岸の武田方に従った武士を上杉方の高梨氏が攻めているが、北に隣接する綿内要害も高梨氏に攻められていることから、やはり武田方に従った可能性は高い。このことは後の天正十年（1582）に武田方についた大室・綿内氏と共に上杉氏に荒砥城を番衆を命じられていることや、その時の軍役は大室氏と同じ七丁で綿内氏も十五丁ながら上杉氏にあまり厚遇されていないようにみえる点も関連しようか。この保科氏は天正十一年に前保科氏の遺蹟地を宛てがわれているが、「遺蹟地」の意味するところは良くわからない。なお、元亀元年（1570）に保科にいたと思われる高井郡玉井某が武田信玄から弾右衛門に任ぜられており、御館の乱終結後に武田勝頼へ所領注文を出している者に保科の玉井源左衛門がみえる。この玉井氏は良くわからないが、川田地区の居館跡の所在推定地のひとつに挙げられる字「古城玉ノ井」と何らかの関連がある

のだろうか。武田氏滅亡後は上杉氏の支配するところとなるが、この段階では保科氏は上杉氏に従ったことが知られる。先述したように天正十年に荒砥城に番衆を命じられ、屋代氏の反乱時にはその討伐に参加して、同十二年には板谷氏と共に稲荷山城の在城を命じられている。この保科氏も上杉氏の移封にしたがって転出したようである。

最後に周辺の中世の歴史的環境を考える上で参考となる中世の寺院について補足しておく。周辺の中世に遡るとされる寺は保科清水寺、万福寺、東光寺、如法寺、安楽院、蓮生寺、蓮台寺などがある。このなかで先述した真言宗の保科清水寺・蓮台寺は平安時代まで遡るもので、万福寺は清水寺の末寺にあたり天文十七年(1547)創建と伝える。東光寺は河田地区の西側の尾根にある山城(古山城)の麓にある曹洞宗の寺で天文二十三年(1554)に創建という。如法寺も曹洞宗の寺で、天文十三年(1544)に本来真言宗の寺として河田大門にあった廃寺如法寺を駒沢大和守父子・滝沢能登守が再建し、現在地へは寛永四年(1627)火災の後に移されたという。なお、如法寺は現在春山城の大城・小城の中間の鞍部西麓にある。如法寺は近世初頭に移築されるに際して現在地が選ばれた理由は明らかでないが、滝沢能登守の墓を境内に残すと伝え、共に再建に関わったと伝える駒沢大和守はこの春山城の反対側となる東麓の大柳を拠点とすると考えられている。伝承ながら如法寺の再建にかかわった武士の関連地が春山城を挟んだ西と東に存在することは興味深い。なお、古山城麓の東光寺にしろ曹洞宗の寺が戦国時代の近似時期に創建されているという伝承は多い。次に安楽院であるが、千曲川沿い中州状自然堤防の牛島にあり、創建年代は不明ながら前山田遺跡の観音寺と同じ真言宗豊山派蓮生寺の末寺とされ、観音寺同様に檀家は無い。蓮生寺は観音寺や安楽院の本寺蓮生寺とは同名ながら牛島にある別寺で、浄土宗の寺である。元久年間(1204~06)に創建され、建長年間(1249~56)中興されたが、建治(1275~78)・弘安(1278~88)年間に千曲川洪水で流出し、応永年間(1394~1427)に再建されたと伝える。現堂は昭和二十六年に老朽化で取り壊された後に西光寺観音堂を移築したものという。この寺も檀家がなく組で管理される。

以上みてきたなかでは戦国時代前後に創建されたとする伝承をもつ寺が意外と多く、山際に立地して東光寺のように集落とは全く離れた場所にあるものもみられる。こうした立地の背景はわからないが、その多くの寺が文献に名が出てこないような武士が創建にかかわったとする伝承が伝えられる点は興味深い。なお、神社では保科御厨の神明社と伝える長田神社が川田小出にある。

近世

近世遺跡は川田糸里遺跡や春山B遺跡で近世水田が調査された以外はほとんど知られていない。文献からみると、遺跡地は綿内に含まれるとみられる。この若穂綿内は江戸時代初期には一旦松代藩となるが、元和二年(1616)須坂の堀直重領となり、そのまま幕末まで須坂藩領として続く。また、町川田は北国街道沿いの宿場町として知られる。ここでは地形・土層に関連しそうな自然災害についてのみ記しておく。近世の災害では千曲川の洪水が著しく、なかでも大きなものは寛保二年(1742)の戊の清水、弘化四年(1847)の善光寺地震に伴う犀川氾濫が知られる。このなかで犀川氾濫は善光寺地震による地滑りでせき止められた犀川が決壊したもので、川田・綿内周辺でも厚さ60cmほどの泥土を堆積させたという。

なお、近代においては明治22年に市制・町村制の施行でそのまま1村をなし、昭和28年町村合併促進法で保科・川田と合わせて若穂町となったが、やがて長野市に合併された。

上記でみてきたように長野市内の千曲川右岸では千曲川岸まで突出した尾根で区切られる平地単位が地域的なまとまりとなるが、この綿内—川田地区の境は保科川が境となっている。これは沖積地へ突出する尾根が千曲川まで達しない地形的な関係によると思われるが、一方で千曲川と犀川の合流点に近いことから千曲川の流路の移動で地域区分も変化しやすい場所でもあると思われる。また、綿内地区を区切る尾根も千曲川までは達しないものの、大きな視覚的な境となっている点で地域境の認識にも微妙な影響を与

えているようだ。こうしたことが歴史的な地域区分の帰属を曖昧にする原因になっていると思われ、古代の郷比定、中世前半期の保科・芳美御厨の領域の捉え方に諸説生み出している。ここでは歴史的な地域区分の範囲や意味については明らかにしえないが、少なくとも遺跡地が綿内地区に帰属するという地域認識は近世にあったことは確かで、さらに戦国時代まで遡る可能性があることは確認しておきたい。

参考文献

- 1995 『長野縣町村誌 北信篇』郷土出版
1997 『長野市誌 第八巻 旧町村史編 旧上水内郡 旧上高井郡』長野市誌編さん室
1980 『日本城郭体系 8 長野・山梨』新人物往来社
1983 『長野県中世城郭跡 分布調査』長野県教育委員会
1962 金井喜久一郎『第二章 第二節「戦国時代の上高井」』『上高井誌』

第2節 遺構

北之脇遺跡では1面で中世以後の遺構、2面で古墳時代の遺物集中、3面で弥生時代の遺構を検出した。1面で見逃して2・3面で検出された中世遺構もあるが、基本的に各調査面は間層で隔絶されており、出土遺物がない遺構でも検出調査面と埋土の傾向が一致する場合には年代がある程度類推できる。そこで、ここでは調査面ごとに区切ることにし、以下には3面検出遺構を弥生時代、2面検出遺構を古墳時代、1面検出遺構を中世以後として個別遺構を記述する。

1. 弥生時代の遺構

3面検出遺構が該当する。3面遺構の年代は弥生中期前半～後期の土器が採取され、上層にあたる2面で古墳時代の土器が出土したことからほぼ弥生時代の所産と判断される。ただし、弥生中期前半・中期後半と特定できた遺構は遺物集中のみ、弥生後期も溝跡2条であり、それ以外のピット状遺構については上記の時間幅のなかで捉えられるものの、子細な年代は特定できていない。この3面の地形は調査域西側に広がる低地域より若干高い場所ながら、山際まで千曲川系堆積物が及ぶ平坦な地形であったことが知られ、遺物からも弥生中期前半～後期には比較的安定していたようである。本遺跡は竪穴住居跡や掘立柱建物跡も断定できたものがないこと、遺物出土量が少ないことから居住遺跡とは言えないが、その具体的な性格は明らかにできなかった。本遺跡の遺構年代は隣接する春山B遺跡・長池遺跡とほぼ重複しており、上記の遺跡の活動領域内の一部に組み入れられた場所であったと思われる。以下には溝跡、ピット群、土坑、遺物集中の順で記述する。

ア. 溝跡

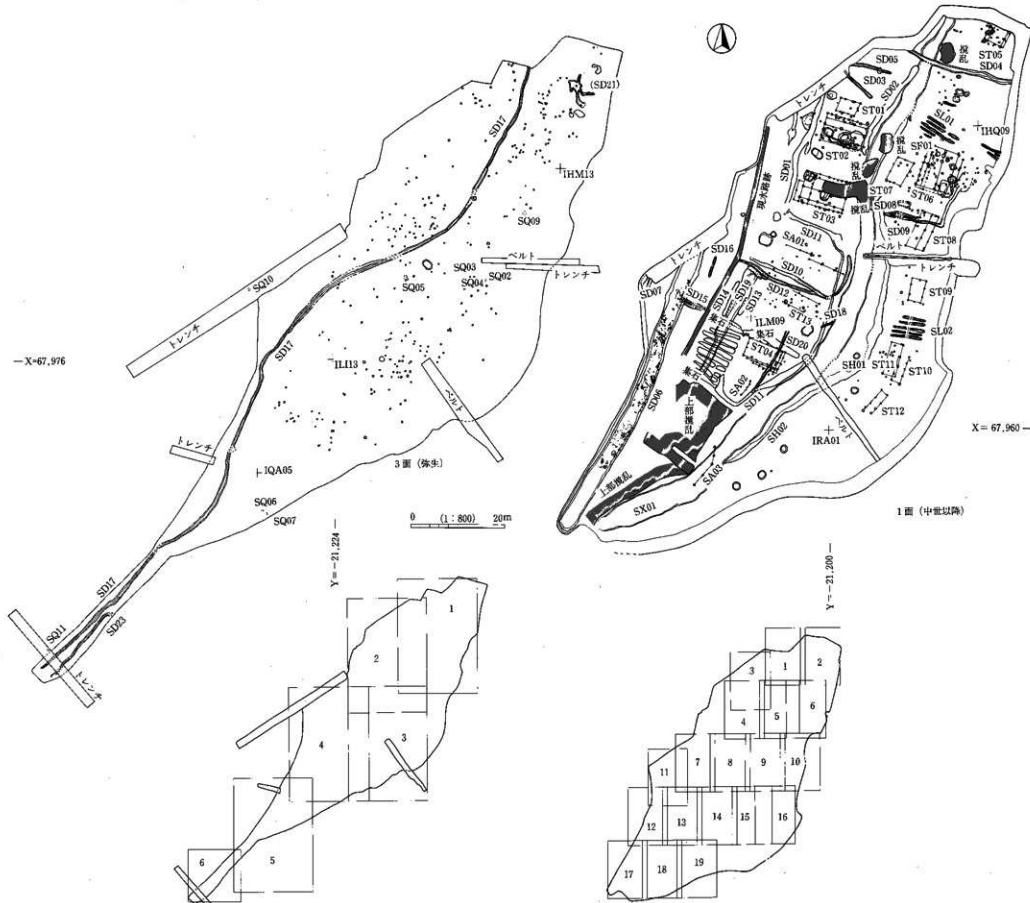
3面で検出された溝跡はSD17・23の2条がある。SD17は遺跡内を横断する長大な溝跡であり、SD23はSD17南端付近で並列するように検出された短い溝跡である。この両者は位置関係から何らかの関連があると思われる。これ以外では調査で溝跡の番号が振られた不整形なSD21・22があるが、形状から木根と判断されるものである。

SD17 I HI01～YR05 (第124図、PL16)

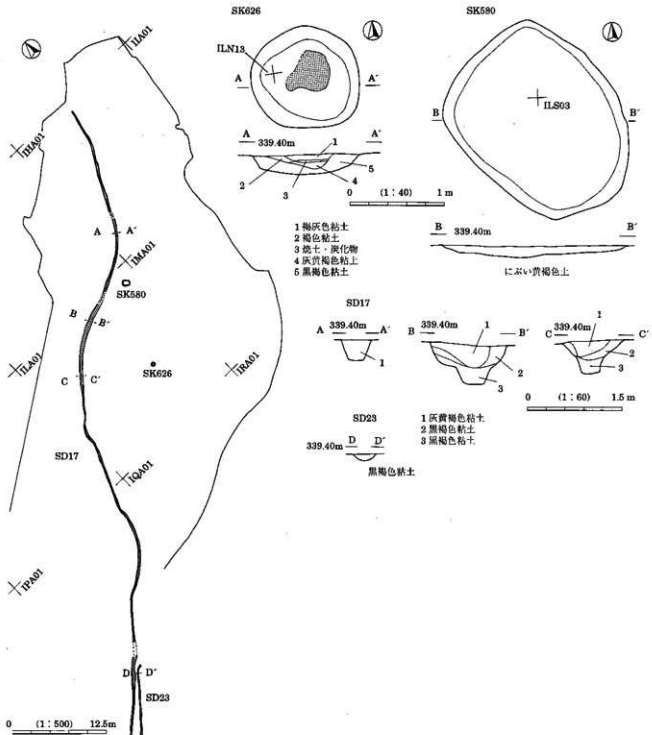
遺跡内を横断する溝跡である。北端は調査区外へ延び、南端は浅く立ち消えるまで総延長174.0mを確認した。3面で検出し、中世SD06と重複する部分はその底面で検出した。断面形は北端で幅約30cm、検出面からの深さ20cmと浅いU字形を呈するが、平地部中央では幅約1.7～1.9mで断面形は逆台形、もしくは逆台形の底面が2段に掘り込まれる形状で、深さは検出面から60cmを測る。南端は幅約30cmで断面逆台形、検出面からの深さは3cmである。底面の標高は南端で約338.7mで部分的に約338.4m、中央で約338.7m、北端で約338.9mである。全体的に北側が高く、南端へ傾斜する。その高低差は最大で約50cmである。埋土は中央部では下部に暗褐色、上部に灰黄褐色土が入り、浅くなる北端や南端ではほぼ灰黄褐色土で占められる。出土遺物は非常に僅かであり、北部で図示した弥生後期の櫛描波状文をもつ壺破片、南端近くで曲柄漆柄杓の柄の破片が出土している。地形にあわせて比較的広域に構築されていることから区画施設、あるいは水田に関連した溝跡とみられる。

SD23 I PE19～YS06 (第124図、PL16)

調査区の南端でほぼSD17と平行するように検出された溝跡である。検出できた範囲は非常に狭く、北端は浅く消え、南端はSD17とほぼ同じ場所まで連続し、長さは約18.4mである。幅は約30～40cmで断面形は逆台形で検出面からの深さは約10cmである。埋土は黒褐色粘土の単層である。出土遺物はない。本跡



第123図 北之島遺跡全体図



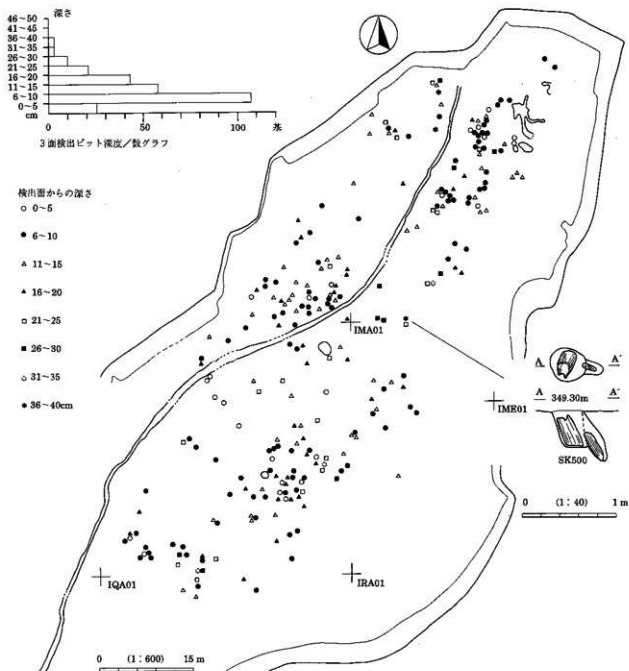
第124図 弥生時代の土坑・溝跡

はSD17とほぼ平行して位置することから関連する溝跡と思われる。ただし、調査区中央の最も広い平坦地では確認できず、ほぼ南端の山際のみに限定される。このことから区画施設、あるいは道等に付随する溝跡かもしれない。子細は不明である。

イ. ビット群 IH4~Q4 (第125図、PL15・16)

3面では平地部中央を中心にいくつかビット状の遺構が検出されたが、配列も不明瞭で構築物も認定できなかったことからまとめて記述する。検出されたビットの平面形は直径約10~30cmの円形を呈し、断面

形はU・V字状となるものが多く、検出面から底面まで5~40cmまでの深さがある。深さとピット数をグラフにすると6~10cmの浅めのものが最多となるが、5cm以下などは遺構とは考えにくく、全体的に遺構かどうか疑問視されるものも多い。しかし、SK500のように内部から栗材樹皮が出土したものもあり、すべてを遺構ではないとも断じ得ない。このピットの分布は平地部の中央部を中心として散在して認められ、低地際と山際にはあまり見られない。また、SD17を意識して分布するとは看取できないのでSD17とは異なる時期のものとも思われる。ピット群の配置の組み合わせは部分的に長方形、列状に配されるように見られるものもあるが、組み合わせると断定できたものはない。埋土はSD17・23と同様の灰黄褐色土である。出土遺物はまったく無く、SK500の栗樹皮のみがある。遺構が判然としないうものも多いが、何らかの構築物を構成するとしても居住遺構ではないと思われ、生産域に関連した施設と思われる。類例も余りないので、子細は今後の検討によりたい。



第125図 弥生時代のピット状遺構

ウ、土坑

ビットより大きめの掘り込み遺構を土坑とし、SK580・626の2基のみ認定した。しかし、SK580は埋土がやや異質であり、弥生時代の所産ではないかもしれない。また、他にSK760・761とされた土坑状遺構があるが、木根と推測したSD21に隣接して形状も類似するため遺構ではないと判断した。

SK580 I LR・S02・03 (第124図)

調査区の中央に位置する。長軸210cm、短軸162cmの楕円形を呈する。断面形は浅いくぼ地状で壁の立ち上がりは不明瞭である。検出面から底面までの深さは約12cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質土で弥生時代の遺構埋土の傾向とは異なる。弥生時代の所産ではない可能性もある。出土遺物はない。

SK626 I LM112・13 (第124図、PL16)

調査域の中央南よりに位置する。直径104～110cmの円形の平面形で、断面は浅い逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは約22cmを測る。埋土は5層に分層され、最上層に褐色粘土があり、中位に薄い焼土・炭化物層が認められる。その下には、薄い褐色粘土層、炭化物を若干含む灰黄褐色粘土、下部に黒褐色粘土が入る。出土遺物はない。内部で火を焚いたと思われるが、性格は不明である。

エ、遺物集中

調査で比較的遺物が集まって出土したと認められた地点を遺物集中と認定した。ここでは調査の所見にしたがって個別遺構を報告するが、3面では土器出土が非常に少ないため、小破片数点の出土も遺物集中とされている。また、遺物の散布という検出状態で認定した遺構であるため、範囲は曖昧で、一箇体の破片が集中する遺構もあれば、複数個体破片の集中、1個体の土器がつぶれた状態で検出されたものなどその形態は多様である。なお、SQ06はSQ07と隣接して検出された遺構であるが、SQ07では古墳時代の土師器から中世のカワラケまでが混在して出土している。そのため、SQ06も弥生時代とは言いがたいものであるが、出土した土器は弥生後期の所産であるため、一応ここに掲載することにした。

SQ02 I ME04 (第126図)

調査域中央山手にあり、SQ01、03、04と近接して位置する。20×30cmの範囲に弥生後期の壺破片少量が集中して検出された。わずかな破片であるため土器は図示しえなかった。

SQ03 I MC04 (第126図)

調査域中央SQ04に隣接して位置する。20cm四方ほどの範囲に弥生時代後期の壺破片が集中的に出土したものである。土器の出土量はわずかで図示しえなかった。

SQ04 I MC04 (第126図)

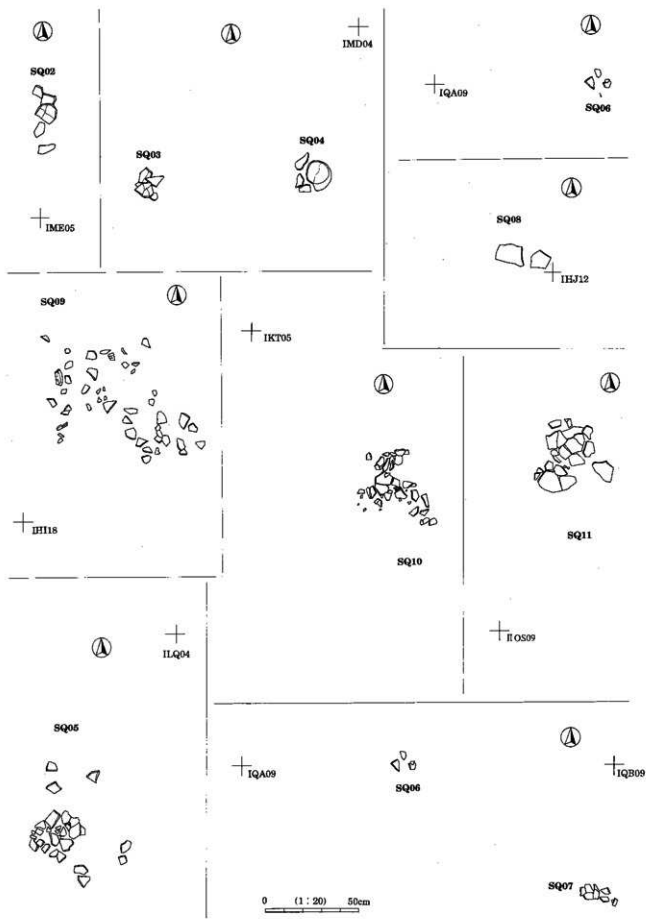
調査域中央SQ02・03に隣接するが、SQ03とは80cmしか離れていないので同一遺物集中としたほうが良いかもしれない。ほぼ20cm四方の範囲内に図示した弥生時代後期の壺底部破片が集中的に出土したものである。SQ02・03の土器とは直接接合していないが、同一個体の可能性がある。

SQ06 I QA09 (第126図)

調査域南部の山際にSQ07に隣接して位置する。ほぼ30cm四方に図示した弥生後期の鉢小破片が集中的に検出されたものであるが、出土土器は接合作業でも完形にはならなかった。隣接したSQ07では古墳時代の土器が多く採取され、しかも中世の所産も含まれることから、近接する本跡も弥生時代の遺物集中とできるか不安が残る。

SQ08 I HJ11 (第126図)

調査域の北部山側にある。図示した弥生中期の壺破片2点が重なって出土したもので、周囲には同一個体と思われる破片の出土も認められていない。



第126図 弥生・古墳時代の遺物集中

SQ09 IHI17 (第126図)

調査域のほぼ中央南よりに位置する。90×60cmほどの範囲に図示した1の土器を中心に複数器種の破片が集中して出土した。出土状態は破片が散在するもので完形、略完形品がつぶれた状態で出土したのではない。しかも、出土した土器は複数器種が認められる特長がある。土器自体は弥生中期前半の所産で、2次焼成を受けていると見られるものが多い。ただし、周囲では焼土跡等は検出されていないため、本跡のような遺物集中がどのような背景で作られたものかは明らかにしえなかった。

SQ10 IKT05 (第126図、PL16)

調査用プレハブ撤去後に追加調査したトレンチ内で検出した。40cm四方の範囲内に弥生後期の土器が集中的に検出されたが、整理時の接合作業では複数個体の甕・壺破片が含まれることが知られ、完形品になるものは見られなかった。低地境周辺で用いられた土器と思われるが、性格は不明である。

SQ11 IYR03 (第126図)

調査区南端に入れた山斜面から低地を横断するトレンチ内で検出された。検出層位は把握できなかったが、SD17南端の検出土層との連続関係から3面に対応し、地形的には低地の境にあたると思われる。出土した土器は図示した弥生中期の壺1個体が40cm四方の範囲につぶれた状態で出土した。周囲には全く土器の散布が認められず、ほぼ単独の出土である。

2. 古墳時代の遺構

古墳時代と断定しうる遺構は2面で検出されたSQ05の1基のみである。他にSQ07があるが、古墳時代の土器が主体的ながらカワラケ・内耳鍋、弥生土器の破片も含まれており、純粋に古墳時代の所産と断定できない。しかし、遺跡内で数少ない古墳時代の土器が主体的に出土した点を鑑み、可能性のある遺構として便宜的に掲載しておく。

ア. 遺物集中

SQ05 ILP04 (第126図)

調査域中央に位置する。2面で検出された唯一の遺構であり、2面の年代を決定する根拠とした。60cm四方の範囲内に古墳時代の土器破片が集中的に出土したもので、接合作業の結果では口縁部や体部の一部は欠損するが、ほぼ1個体の壺とみられた。具体的な性格は不明である。

SQ07 IQA09 (第126図)

調査城南部の山際に位置し、3面で検出された。本跡内の土器には弥生後期の土器、中世のカワラケ・内耳鍋の破片若干が混在するが、古墳時代の土器が中心となる。遺物が混在する理由は位置的に山際の岩盤に近い地点であることから1～3面間の間層が薄いこと、上面には中世SX01が重複することから土層が乱されていることによると思われる。認定に不安があるが、土器の中心が古墳時代のものであることからここで扱うことにした。ただし、出土土器は複数器種の破片からなり、いずれも完形にはならなかった。

3. 中世以後の遺構

中世以後の遺構は見逃して下層で検出されたものもあるが、基本的に調査1面で検出された。1面の地形は低地より一段高い平地部と更に一段高い緩斜面部から構成される。この地形は山土堆積によって形成されたもので、形成時期は古墳時代以後と推定された。なお、平地部南西部の低地寄り部分は水が湧きやすい場所であったのか、近代以後と思われる多数の暗渠や暗渠状の水抜き施設、畑・水田の造成痕が多く認められ、1面上部がかなり攪乱されていた。

検出された遺構は掘立柱建物跡13棟、土坑28基、溝跡19条、集石遺構1基、焼土跡8基、性格不明遺構1基、畑跡?2基などがある。このなかで中世の所産と推測された遺構は掘立柱建物跡、土坑若干、溝跡2条、性格不明遺構1基、集石遺構1基、焼土跡8基があり、近世以後の所産は土坑若干、暗渠、溝跡などがある。居住遺構は中世の所産、耕作関連遺構は近世以後の所産が多い。中世の遺構配置は低地と平地部境を区切るようにSD06、平地部と緩斜面部境周辺には帯状集石SX01を配置し、その両脇に類似した規模の建物跡が一定間隔で並列する。このSX01両脇に並列する掘立柱建物跡で平地部側のものは梁行をSX01側に見せ、緩斜面部にあるものはSX01に桁方向をみせる。遺構配置は全体的に計画性の高さを感じさせる。また、各建物の類似規模であることから居住者間に大きな差はないと思われる。

ア. 掘立柱建物跡

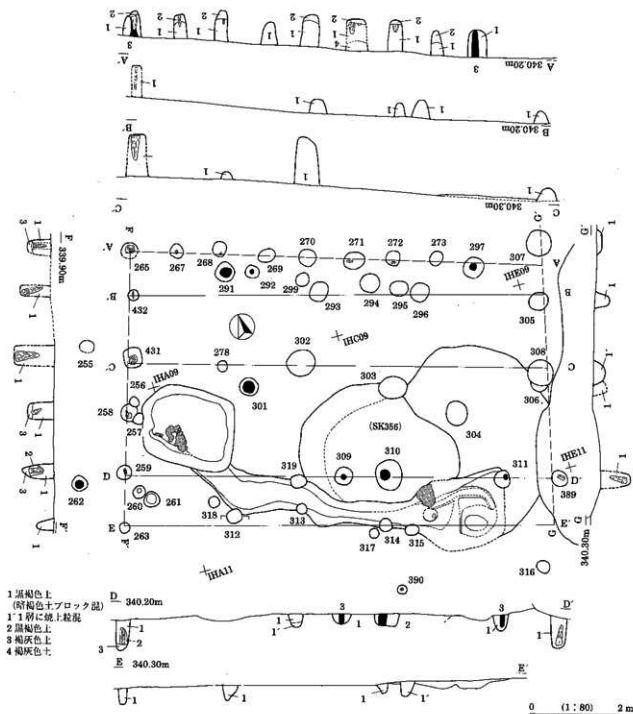
掘立柱建物跡の一部は調査時に認定されていたが、大部分は遺構番号や規模・範囲の確定は整理でおこなった。全部で13棟を認定したが、認定に不安を残すものも多い。例えば、平地部では検出面と柱穴跡埋土の色調差があったために柱穴跡が比較的明瞭に検出できたが、山際の緩斜面部は遺構埋土と検出面土層の色調が類似していたため、見逃した柱穴跡も多いとみられる。しかし、掘立柱建物跡の柱穴跡は散在的に分布せず一定間隔をおいて集中的に検出されたので、規模や構造認定に問題を残しても柱穴跡分布地点に掘立柱建物跡・櫛列跡が存在したことは間違いないと思われる。なお、建物跡分布は規則的で、異方位の建物跡の重複は認められず、建物跡の重複自体が少ない。このことから本遺跡は比較的短期に営まれたもので、建物跡も計画的に配置されているとみられる。

ST01 1HB06～HD07 (第131図、PL12)

平地部の北端に位置し、ST02と並列する。建物規模は桁行3間約4.3m、梁行2間約2.8mで棟方向はN-78°-Wである。柱配置は側柱が揃って検出されたものの、内部の柱穴跡は東より中央に一本検出されたのみであり、桁行の柱列では重複、あるいは近接して検出された柱穴跡がいくつかある。柱間寸法は桁行約1.2～1.8m、梁行は約1.3～1.5mとかなり狭い。柱穴跡は平面形が直径20～50cmの円形を呈し、検出面からの深さは30～50cm前後である。柱材が残存するものはなく、柱痕が検出されたのは2基のみである。出土物はSK283からカワラケ破片2点・内耳鍋破片3点、SK287から細線蓮弁文青磁碗1点が出土した。本跡は位置関係と棟方向の類似からST02の補助屋と思われる。ただし、ST02とは近すぎ、しかも柱間寸法も狭いことから1間×2間の2棟の建物跡が重複する可能性も残る。

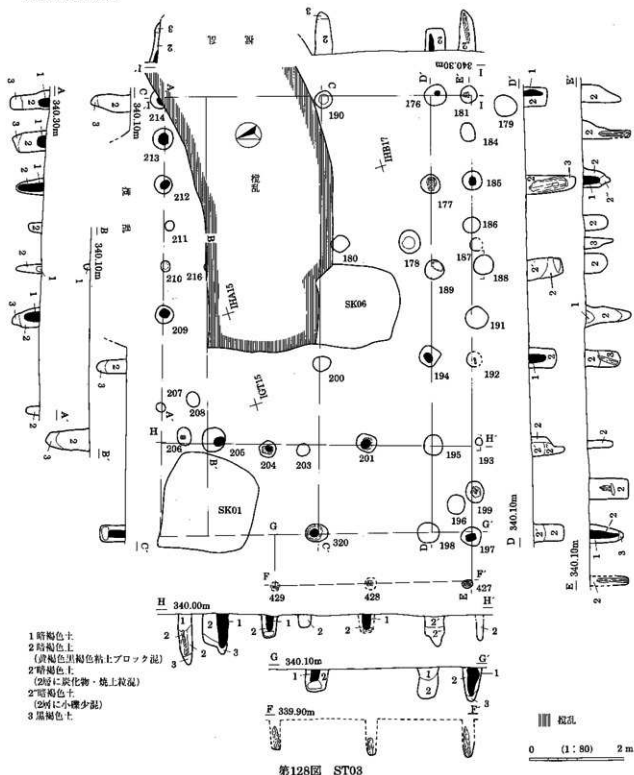
ST02 1GT09～HE08 (第127図、PL12)

平地部北端にST01と並列する。重複するSK356は、調査では本跡が切るとされたが、類似形態の土坑は近世の可能性のあるものが含まれ、切り合いを過ぎて認定した可能性が残る。誤認した場合、重複位置に検出された柱穴跡で土坑底面より浅いものは認定に問題を残すことになる。建物跡は梁行2間の両脇に庇状の施設が付属する長方形の平面形で本遺跡では通常に認められる形態である。この庇状柱列は北側桁行部分では密に配されるが、南側は散在的にしか検出されなかった。内部の柱は散在的で通りも悪く、検出された柱穴跡のなかには桁・梁と一致しない配置のものがある。本跡は建て替え、あるいは改築されている可能性もあるが、断定できなかった。なお、南側の庇状柱列内側には本跡に関連施設と思われる溝状、土坑状遺構が検出されており、庇状柱列は所謂「下屋」と呼ばれる部分に該当すると考えられた。認定した規模は桁行4(5)間約8.2m、梁行2間で両側に付属する庇状柱列を含めて約4.6mであり、棟方向はN-72°-Wである。柱の配置は側柱や庇状施設のほうが明瞭に検出され、内部の柱配置はあまり規則的ではない。桁行柱間数は断定できなかったが、柱間寸法で桁行約1.7～1.9mから類推すると5間の可能性が高い。梁行の柱間寸法は約1.6・2.3mであり、南側のほうが広い。庇状柱列の梁行間隔はそれぞれ60、100cmである。柱穴跡は平面形が円形を呈するものが多く、直径20～60cmまでみられるが、中心は30～



第127図 ST02

40cmである。検出面から底面までの深さは北側のものほど深く、庇状柱列も北側で深さ50~60cmを測る。なお、最も深い柱穴跡は中央にあるSK302の110cmである。柱穴跡内部には柱材が残存するものがいくつか認められたが、全ての柱穴跡に残存するものでもない。また、SK265のみは柱の下に石が検出されている。内部施設と思われる遺構は南東部のブロック土で充填される浅い窪み、それに隣接した南行に並行するSK25とした溝状遺構、その先端にある方形の浅い土坑SK26がある。SK25・26は焼土ブロック多数が含まれる共通点があり、相互に関連した遺構と見られる。ただし、SK26については形状からSK25と異



なるようにみえるので土坑のところでも扱った。南東部のブロック土で充填される浅い窪みは土間状施設と思われ、類似した施設はSK01を挟んで位置するST06にある。しかし、これ以外には認められないので一般的な建物跡内施設ではなく、特殊な作業用施設の可能性も残る。出土遺物は柱材、焼粘土塊、SK292から内耳銅破片、SK295から珠洲塞破片、SK297からカワラケ破片が採取された。

ST03 1GS14~HB18 (第128図、PL12・13)

平地部の中央北寄り、ST02の南約8mに位置する。中央東側は覆乱で削平され、北西端はSK01に切られる。また、本跡の柱穴と直接切り合わないが、中央部にSK06がある。平面形は梁行2間の両脇に柱間

寸法の狭い庇状柱列が付設する形態である。規模は桁行5間約8.2mで西側に1間約1.0m延長されて総長約9.2m、梁行2間約4.8mで両側に庇状柱列約1.0、0.8mが付設して合計約6.6mを測る。棟方向はN-74°-Wである。柱の配置は側柱・庇状柱列（下屋？）は比較的明瞭ながら、内部柱は掘乱で削平されて子細不明であるが、西側から2本目の梁行柱列には中間に柱が配置され、その位置は西側に張り出した部分の柱と対応する位置にある。柱間寸法は桁行約1.7~1.8m、庇状柱列は約0.9~1.1m、梁行は約2.4mである。柱穴跡は平面形が直径20~40cmの円形を呈し、検出面からの深さは浅いもので30cm前後ながら、全般的に50~100cm前後である。内部に柱痕や残存する柱が検出された柱穴跡も多くあり、柱材が残存するものでは2/3前後の割材を用いるものが多い。また、柱穴跡内で石を設置するものもいくつかある。出土遺物は柱材以外はない。

ST04 ILL11~LO15 (第129図、PL12)

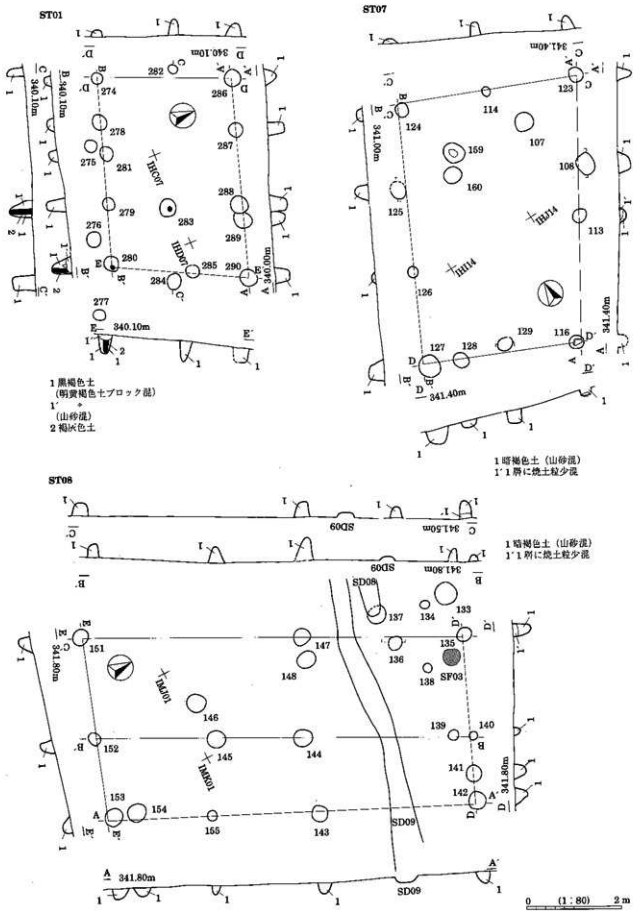
平地部中央南寄りに位置する。ST03の約30m南にあたり、北にST13、西側にSD19、南東にSA02がある。周辺は耕作関連の暗渠類が多数配され、上面に床土が載ることから柱穴跡の大部分は1面で見逃して3面で検出した。そのため、浅い柱穴跡は削平してしまった可能性がある。なお、東側に重複してSD20が検出されたが、直接切り合う柱穴跡はなく前後関係は不明である。また、北辺は暗渠に類する集石に切られる。柱穴跡は上述したように3面で検出したこと、さらに北辺が集石に切られるため部分的にしか検出できていないが、確認範囲では桁行4間約8.2m、梁行2間約3.9mで、南側に庇状柱列が付属して合計約4.9mを測る。棟方向はN-64°-Wである。北側の庇状柱列（下屋？）は相当位置に集石遺構が重複して不明であるが、南側には間隔の狭い庇状柱列が認められるのでST02・03とほぼ同様の庇状柱列を付属させる構造と思われる。また、東端にある間隔の狭い梁行柱列の存在や、南側の庇状柱列が単列ではなく複数が重複する可能性からすると本跡は改築されている可能性がある。これに比して内部の柱は検出されたものが少なく、方向もずれている。柱間寸法は桁行約1.7~2.3m、梁行は約1.8~2.1mで庇状柱列は約0.9mである。柱穴は平面形が直径10~30cmの円形で、検出面からの深さは約10~30cm前後であるが、本来の検出面から想定すると上記以上の深さとなる。本跡では多数の柱材が検出されたが、ほぼ丸木材である。出土遺物は柱材以外はない。本跡はST02・03同様に母屋とみられる。

ST05 ICQ18~CS20 (第129図、PL12)

緩斜面部の北端にあり、北側半分は調査区外へ延びる。1面で数基の柱穴跡を検出し、さらに下層の掘削途中で柱穴跡をいくつか追加検出した。本跡は半分が調査区外へ延びるため、全体の規模や構造は不明ながら、認定した規模は桁行2間で約3.8m以上、梁行2間約3.1mで庇状柱列を付設して合計4.3mを測る。ただし、庇状柱列は他の建物跡より配列間隔も広く、しかも梁行南側と北側では柱間寸法が異なっている。このことから2棟の建物跡が重複する可能性も残る。棟方向はN-27°-Eである。柱間寸法は桁行約1.8m、庇状柱列は約0.5・0.7m、梁行は約1.3・1.8mである。柱穴は平面形が円形を呈し、直径20~40cmのものが多いが、一部に1m前後の土坑状のものがある。検出面からの深さは約20cm前後である。出土遺物はSK20より青磁碗破片1点が得られている。本跡の柱配置を確定しきれていないところもあるが、遺跡内で通有にみられる庇状柱列を付設する建物跡とみられる。

ST06 IHL11~HN16 (第130図、PL13)

山際の緩斜面部中央に位置する。調査時には柱穴跡が集中的に検出されたことから建物跡の存在が想定されていたが、柱穴跡埋土が検出面と類似したため柱穴跡の検出が不十分であった。そのため調査の進展に伴って追加認定された柱穴跡も多く、具体的な規模・範囲の確定は整理で行った。柱穴跡には1面で検出されたものと、ダメ押しで検出されたもの、下面遺構検出面までの掘削途中で検出されたものがある。整理では本跡周囲が北西へ緩やかに傾斜することから、棟方向は傾斜と直交方向になると予想し、平地部



第131図 ST01・07・08

柱穴跡の配置は規則的とはいえず、柱間寸法は桁行で1.8m前後を中心として1.4～2.5mまで認められ、庇状柱列では1.2～1.8mと相対的に狭い。梁行は北辺では2.5・2.6mで庇状柱列は西側で約1.0m、東側で約1.3mを測る。柱穴跡は平面形が直径20～30cm前後の円形が多く、一部に60cmのものがある。検出面からの深さは約30cm前後が多いが、SK87のように80cmを越えるものもある。このような極端に深い柱穴跡はST02でも同様に見られる。この建物跡の範囲内では複数の焼土跡複数とSK16とした竪穴状の土坑が検出されている。焼土跡は鍛造剥片や粒状滓が採取され、鍛冶炉であることが確認された。また、SK16は本跡の北東隅にあり、掘り込みは非常に浅い平坦地に近いものであり、土間に類する施設と思われる。この土間状遺構を付設する点もST02に類似する。なお、本跡範囲内では内耳鍋を正位に埋設したSK17が検出されている。また、東側の山手には隣接して焼骨を出土したSK373があるが、本跡に直接関連するものか断定はできなかった。出土遺物はSK70から内耳鍋破片2点、SK71より内耳鍋2点、SK86より内耳鍋破片1点、SK87より青磁碗1点が出土している。本跡は遺跡内で類別をもつ庇状柱列を付属させる建物跡で、鍛冶を行ったことが特定できた。また、本跡の構造はSX01を挟んで西側に対峙するST02と類似している。

ST07 I HG14～HJ13 (第131図)

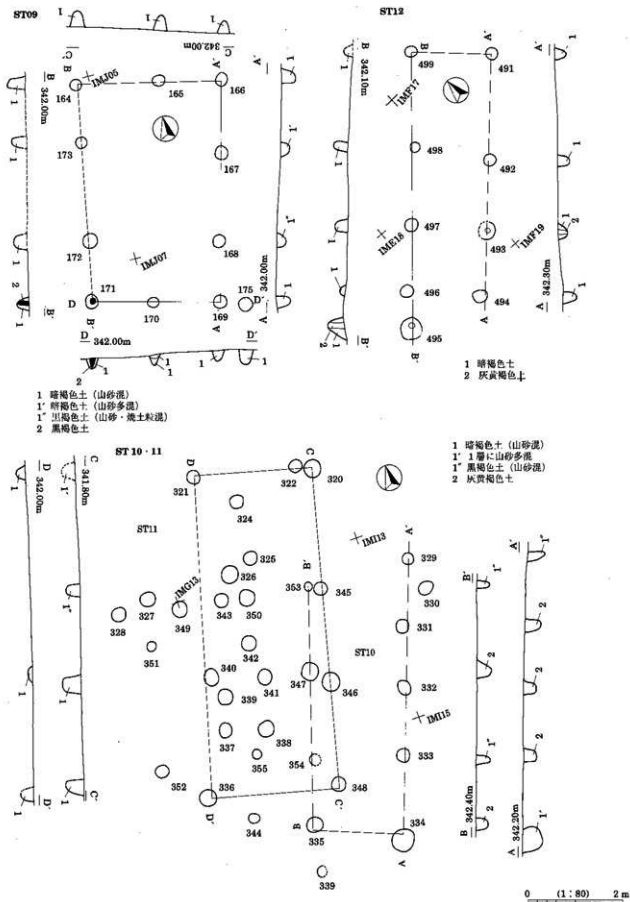
緩斜面部中央の北寄り、ST06西側に隣接して位置する。柱穴跡が長方形に配置されると看取されたことから掘立柱建物跡と認定した。平面形はかなり不整形で、規模は桁行3間約5.5m、梁行2間約3.4と3.8mを測る。棟方向は傾斜方向に直交するN-27°-Eである。柱間寸法は桁行約1.8・1.9mで、梁行は約1.6～1.9mである。柱穴は平面形が直径約20～50cmの円形を呈し、検出面からの深さは約20～40cm前後である。本跡は緩斜面上に立地するが、柱穴跡は必ずしも斜面上側のほうが深く構築されているとは限らない。出土遺物はない。本跡はST06に付属する補助屋ではないかと思われる。

ST08 I MI01～HL18 (第131図、PL13)

テラス部中央のST06南側に位置する。数基の柱穴跡が長方形に配置されると看取されたことから掘立柱建物跡と認定した。しかし、調査段階では漠然と建物跡と把握されていたのみで、建物跡を構成する柱穴跡は整理段階で確定した。SD08・09と重複しているが、重複位置に本跡の柱穴跡が検出できなかったことから本跡が切られると判断される。所々欠落する柱穴跡があるが、その規模は桁行4間で西側約8.0m、東側約7.7m、梁行は2間で北側が約3.5m、南側が約3.9mを測る。棟方向はN-27°-Eである。柱間寸法は桁行約1.4～2.3mで北端のみが狭いが、他はほぼ2m前後である。梁行は東側約1.4、西側約2.1mである。柱間が厳密には一定しておらず、しかも近接しながらも若干づれて位置する柱穴跡があることから部分的な改築、あるいは2棟の建物跡が重複する可能性も残る。柱穴跡は平面形が直径20～30cmで検出面からの深さは約30～40cm前後である。ST07同様に柱穴跡の深さはほぼ一定しており、特別斜面上側が深く掘られる傾向はない。出土遺物はない。位置的には隣接するST06に関連する建物跡の可能性はあるが、具体的な性格は明らかにできなかった。

ST09 I MI05～MJ07 (第132図)

テラス部中央、ST08の南側にある。調査時から掘立柱建物跡と認定されていたが、遺構番号は整理時に付した。小規模な側柱建物で、柱穴跡はほぼ直線的に配置されるが、全体形は歪んで台形となる。規模は桁行3間で西側が約4.6、東側が4.7mである。梁行は2間で北側が約3.0m、南側が約2.7mとなる。棟方向はN-15°-Eである。柱間寸法は桁行約1.2～2.1mであるが、桁行中央部が約2.1・1.9mと長いものの、両側は1.2m前後と狭い。梁行は北側梁行西側のみが1.7mで他は1.3m前後である。全体的に柱間寸法が狭い。柱穴跡は平面形が直径20～30cmの円形を呈し、検出面からの深さは約20～30cmである。出土遺物はない。本跡は規模的に補助屋と思われるが、ST06ともやや離れており、直接関連するか不明であ



第132図 ST09~12